

茨城県教育財団文化財調査報告第39集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書14

尾 坪 台 遺 跡

十三 塚 遺 跡

昭 和 61 年 11 月

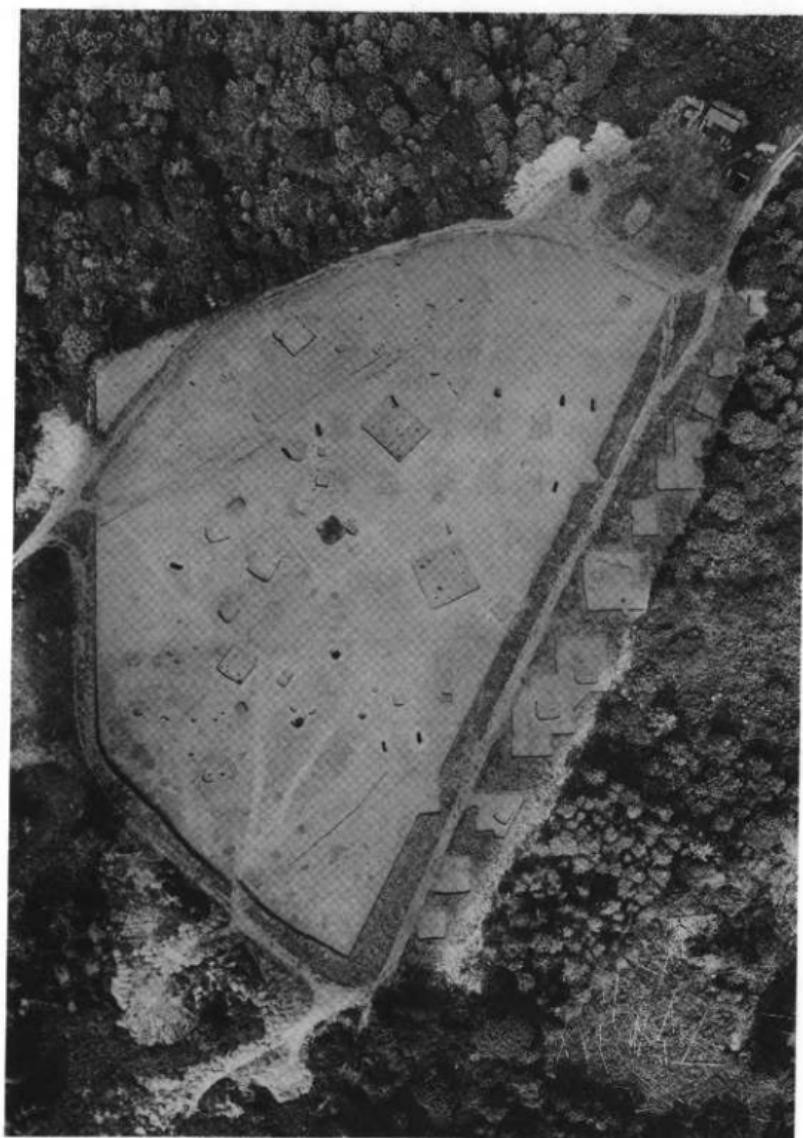
住宅・都市整備公団 つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書14

尾 坪 台 遺 跡
じょう つぼ だい いせき
十三 塚 遺 跡
じゅうさん づか いせき

昭 和 61 年 11 月

住宅・都市整備公団 つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団



遺跡全景

南京大屠殺遺址

序

竜ヶ崎市の北部台地に竜ヶ崎ニュータウンの建設が、住宅・都市整備公団によって進められておりますが、その予定地内には、多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、竜ヶ崎ニュータウン内の埋蔵文化財の記録保存をするため、住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び、昭和52年以降発掘調査を実施してまいりました。

昭和59年度に、尾坪台遺跡・十三塚遺跡の調査を行い、貴重な成果を上げることができました。昭和61年度に遺物や記録類の整理を実施し、報告書を刊行するはこびとなりました。本書が学術的な資料としてはもとより、教育・文化の向上の一環として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である住宅・都市整備公団からいただいた御協力に対し、厚く感謝申し上げます。また、茨城県教育委員会、竜ヶ崎市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただいたことに、衷心より謝意を表します。

昭和61年11月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 川又友三郎

例　　言

- 1 本書は、住宅・都市整備公団の委託により、財團法人茨城県教育財団が、昭和59年度に実施した竜ヶ崎市に所在する尾坪台遺跡・十三塚遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 尾坪台遺跡・十三塚遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理事長	竹内泰男	～昭和61年3月
	川又友三郎	昭和61年4月～
副理事長	川又友三郎	～昭和61年3月
	磯田勇	昭和61年4月～
常務理事	綿引一夫	～昭和60年3月
	萩原藤之助	～昭和61年3月
	滑川貞雄	昭和61年4月～
事務局長	小林洋	～昭和60年3月
	堀井昭生	昭和60年4月～
調査課長	青木義夫	昭和59年4月～
班長	市毛洋一	～昭和60年3月
〃	北畠健	昭和60年4月～
企画係長	田所多佳男	昭和60年4月～
主任調査員	加藤雅美	～昭和61年3月
〃	山本静男	昭和61年4月～
管理主事	鈴木三郎	～昭和60年3月
〃	海老沢一夫	～昭和60年3月
班	大曾根徹	～昭和61年3月
〃	山崎初雄	昭和60年4月～
〃	大部章	昭和61年4月～
調査班長	安藤幸重	昭和59年度
主任調査員	中村幸雄	昭和59年度尾坪台遺跡調査、昭和61年度尾坪台・十三塚
〃	中根節男	昭和59年度尾坪台遺跡調査　遺跡整理・執筆
二班調査員	佐藤正好	昭和59年度十三塚遺跡調査
三班調査員	根本康弘	昭和59年度十三塚遺跡調査
整理班長	加藤雅美	昭和61年度

- 3 本書は、発掘担当者の協力を得て、中村幸雄が執筆・編集を担当した。
- 4 本書に使用した記号等については、第4章第1節2の記載方法の項を参照されたい。

目 次

序	
例 言	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	2
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査方法	11
第1節 調査区設定	11
第2節 遺構確認	11
第3節 遺構調査	13
第4章 遺構と遺物	14
第1節 道路の概要と遺構・遺物の記載方法	14
1 遺跡の概要	14
2 遺構・遺物の記載方法	14
第2節 繩文時代・弥生時代の遺構と遺物	20
1 土坑（縄文時代）	21
2 包含層・その他の出土土器	23
第3節 古墳時代の遺構と遺物	35
1 穫穴住居跡	35
第4節 その他の遺構と遺物	99
1 十三塚について	99
2 上坑について	108
3 滝について	120
4 人工遺物について	127
第5章 まとめ	132
1 穫穴住居跡について	132
2 遺物と遺構から見た住居跡の時期について	135
3 塚について	136
終 章 むすび	138

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺地形図	5
第2図	尾坪台・十三塚遺跡周辺地形及び周辺遺跡位置図	8
第3図	竜ヶ崎市内 一塚分布図	10
第4図	大調査区・小調査区呼称方法図	11
第5図	トレンチ配置と塚の位置図	12
第6図	遺構実測図の作成方法と掲載方法	16
第7図	各部位の名称と法量表現のための名称	16
第8図	尾坪台・十三塚遺跡遺構分布図	20
第9図	縄文時代の土坑	22
第10図	縄文式・弥生式土器片拓影図(1)	27
第11図	縄文式・弥生式土器片拓影図(2)	28
第12図	縄文式・弥生式土器片拓影図(3)	29
第13図	縄文式・弥生式土器片拓影図(4)	30
第14図	縄文式・弥生式土器片拓影図(5)	31
第15図	縄文式・弥生式土器片拓影図(6)	32
第16図	第7・27・51号土坑出土遺物実測図	33
第17図	第7号塚表面採集遺物実測図	34
第18図	第1号住居跡実測図	36
第19図	第1号住居跡出土遺物位置図・遺物接合関係図	37
第20図	第1号住居跡出土遺物実測図(1)	38
第21図	第1号住居跡出土遺物実測図(2)	39
第22図	第1号住居跡出土遺物実測図(3)	40
第23図	第1号住居跡出土遺物実測図(4)	41
第24図	第2号住居跡実測図	46
第25図	第2号住居跡出土遺物位置図・遺物接合関係図	47
第26図	第2号住居跡出土遺物実測図(1)	48
第27図	第2号住居跡出土遺物実測図(2)	49
第28図	第2号住居跡出土遺物実測図(3)	50
第29図	第3号住居跡実測図	54
第30図	第3号住居跡出土遺物実測図	55

第31図 第4号住居跡実測図	56
第32図 第4号住居跡出土遺物位置図・遺物接合関係図	57
第33図 第4号住居跡出土遺物実測図	58
第34図 第5号住居跡実測図	60
第35図 第6号住居跡実測図	62
第36図 第6号住居跡出土遺物実測図	63
第37図 第7号住居跡実測図	64
第38図 第7号住居跡出土遺物実測図	65
第39図 第8号住居跡実測図	66
第40図 第8号住居跡出土遺物位置図・遺物接合関係図	67
第41図 第8号住居跡出土遺物実測図(1)	68
第42図 第8号住居跡出土遺物実測図(2)	69
第43図 第9号住居跡実測図	71
第44図 第10号住居跡実測図	73
第45図 第10号住居跡出土遺物位置図・遺物接合関係図	74
第46図 第10号住居跡出土遺物実測図(1)	75
第47図 第10号住居跡出土遺物実測図(2)	76
第48図 第11号住居跡実測図	80
第49図 第11号住居跡出土遺物拓影図	81
第50図 第12号住居跡実測図	81
第51図 第12号住居跡出土遺物実測図	82
第52図 第13号住居跡実測図	84
第53図 第13号住居跡出土遺物実測図	85
第54図 第14号住居跡実測図	87
第55図 第14号住居跡出土遺物実測図	89
第56図 第15号住居跡実測図	92
第57図 第16号住居跡実測図	93
第58図 第16号住居跡出土遺物実測図	94
第59図 第17号住居跡実測図	95
第60図 第17号住居跡出土遺物実測図	96
第61図 第18号住居跡実測図	97
第62図 十三塚遺跡・塚発掘位置図	101

第63図	十三塚遺跡第1号・2号・3号塚上層断面図	102
第64図	十三塚遺跡第4号・5号・6号塚上層断面図	103
第65図	十三塚遺跡第7号塚平面・上層断面図	104
第66図	第7号塚位置図と地蔵尊実測図	105
第67図	十三塚遺跡第8号・9号・10号塚土層断面図	106
第68図	十三塚遺跡第11号・12号・13号塚土層断面図	107
第69図	土坑実測図(1)	109
第70図	土坑実測図(2)	110
第71図	土坑実測図(3)	111
第72図	土坑実測図(4)	112
第73図	土坑実測図(5)	113
第74図	土坑実測図(6)	114
第75図	土坑実測図(7)	115
第76図	土坑実測図(8)	116
第77図	土坑実測図(9)	117
第78図	溝と現況地形図の関係	121
第79図	第1号溝実測図	122
第80図	第2号溝実測図	123
第81図	第3号溝実測図	125
第82図	第4号・5号溝実測図	126
第83図	球状土錐実測図	129
第84図	石器実測図(1)	130
第85図	石器実測図(2)	131
第86図	住居跡の方向図・炉跡種類別割合図	134

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

住宅・都市整備公団は、竜ヶ崎市の北部台地上に竜ヶ崎ニュータウンの建設を進めている。これは、首都圏における膨大な住宅団地の需要に応じて、住宅用地を大量に供給すると共に、健全な市街地の形成を図り、さらに、地域内に就業の場を設けることにより、居住者の地元定着を意図しているものである。竜ヶ崎ニュータウンの建設は、住宅用地の供給だけではなく、竜ヶ崎市の調和ある発展も併せて目指しているのである。

この竜ヶ崎ニュータウン建設計画は、当初日本住宅公団によって計画され、「竜ヶ崎牛久都市計画事業」として昭和46年1月に市街地開発事業に関する都市計画が決定した。その事業名を「北竜台及び龍ヶ岡特定土地地区画整備事業」と称した。その後、昭和51年4月に設立された宅地開発公団は、昭和56年10月1日付けをもって日本住宅公団と統合し、新たに「住宅・都市整備公団」として発足した。これに伴い、従来の契約によって生じた権利・義務は、そのまま新公団に継承されて今日に至っている。

開発面積は、北竜台地区が326.6ha、龍ヶ岡地区が344.9haの合計671.5haである。その現況は、北竜台地区においては山林原野が約70%、耕地が約24%である。龍ヶ岡地区においては山林原野が約50%、耕地が約40%である。

茨城県教育委員会は、昭和45年に実施した埋蔵文化財の分布調査に基づき、開発地域内に所在する22遺跡について文化財保護の立場から必要な措置を講ずるため、地元竜ヶ崎市教育委員会と協議を重ねた。その後、昭和51年7月に再度実施した分布調査によって7遺跡、昭和55年5月に2遺跡、昭和56年5月には工業団地予定地内で2遺跡、昭和57年10月に1遺跡を各々追加した。⁽¹⁾県教育委員会は、これら36遺跡について関係機関と再度協議を行った。その結果、31遺跡については現状保存が困難なため、記録保存の措置を講ずることとした。

茨城県教育財団は、昭和52年4月「北竜台及び龍ヶ岡特定土地地区画整備事業の施行に係る埋蔵文化財発掘調査」の業務委託契約を当時の宅地開発公団と締結し、竜ヶ崎ニュータウン建設計画区域内の埋蔵文化財発掘調査を継続して実施して来た。

昭和59年度の発掘調査遺跡は、尾坪台遺跡・十三塚遺跡・星代B遺跡II次区・南三島遺跡5区同3区であった。南三島遺跡3区を除く4遺跡については、当該年度内に調査を終了した。

なお、発掘調査は茨城県教育財団本部調査課調査第2班が担当した。

注(1) 遺跡の略号はR1からR33までであるがR6がR6A・R6Bに、R28がR28とR28A・R28Bに枝分かれし各々を1遺跡と数えて36遺跡とした。

第2節 調査経過

尾坪台遺跡・十三塚遺跡は、南三島遺跡5区・屋代B遺跡とともに昭和59年度に発掘調査が行われた。尾坪台・十三塚遺跡の調査経過の概要は次のとおりである。

尾坪台遺跡

- 4月 11日から発掘調査の諸準備にとりかかり、12日に作業を開始した。まず、調査遺跡への進入路の整備を実施し、17日に搬入式を執り行った。翌日、倉庫が建てられ機材・器具が搬入された。その後、遺跡の発掘調査前全景写真を撮影し、遺構確認のために幅2mのトレンチを設定して調査を開始した。
- 5月 遺跡内にトレンチを東西に5本、南北に4本、旧阿波街道といわれる小道（この小道を境界にして八代町地内の尾坪台遺跡、貝原塙町地内の十三塚遺跡に分かれる）に沿って1本を設定した。トレンチの総延長は、約662mであった。表土は20~30cmほどであり、表土中には縄文式土器片少量と古墳時代の土器片多量が含まれていた。22日までに全てのトレンチ発掘が終了し、遺跡内全域にわたって遺構が散在していることが確認された。翌日、トレンチ発掘後の全景写真撮影を行った後、さっそく重機による表土除去を開始した。
- 6月 11日には重機による表土除去が終了し、統いて遺跡内に基本杭を設定した後遺構確認を実施し、12日から住居跡・土坑等の調査を進めた。
- 7月 住居跡からは弥生時代から古墳時代中期にかけての土器・土器片等、土坑からは縄文時代から古墳時代にかけての土器片等が出土した。並行調査を進めていた十三塚遺跡の第5号塚の調査中、塚の下に尾坪台遺跡と同時期の土器片を出土する住居跡が検出されて、尾坪台遺跡にある住居跡群の一部が十三塚遺跡内にも延びていることが判明した。下旬には住居跡の15軒と土坑59基、溝5条の調査が終了に近づいた。
- 8月 8日には遺構調査の全てが終了し、調査終了後の遺跡全景写真を撮影した。9日は航空写真を撮影し、その後、土坑等の危険箇所の埋戻しを行う一方、発掘調査機材・器具を南三島遺跡5区に移動し、全ての調査を終了した。

十三塚遺跡

調査に先立って5月1日に、7号塚上に安置されていた地蔵尊の供養を、竜ヶ崎市教育委員会、教育財団、作業員で行った。また、初旬から中旬にかけて、茨城県建設コンサルタントによって塚の墳丘測量を進めた。現地の倉庫や調査の機材・器具は、隣接して調査を行っている尾坪台遺跡と一緒に使用した。

- 5 月 28日に基本杭を打ち、遺跡の清掃をした。その後、発掘前の遺跡全景写真を撮影し、31日から1・2号塚の調査を開始した。土層観察用のベルトを十文字に残してローム層の上面まで掘り込んだ。
- 6 月 4日から3～6・8・9号塚の調査を1・2号塚と同じ手法で開始した。塚の調査中3号塚下、4号塚と5号塚の間付近、6号塚下に各々住居跡らしい黒褐色土の堆積土が見られたので、周辺の排土と表土除去を行った。また、10～13号塚の調査も進めた。下旬頃、土層観察のために残した十文字のベルトについて詳しい観察、土層の実測と写真撮影を順次行い調査を終了した。28日に地蔵尊の安置されていた7号塚の調査に着手した。この間に、事務所において地蔵尊の実測を行った。
- 7 月 初旬に住居跡3軒の調査を進めた。10日に7号塚の調査が終了し、中旬には住居跡の調査がほぼ終了した。川又副理事長が19日に尾坪台・十三塚遺跡の視察に訪れた。24日に13基の塚と3軒の住居跡の全景写真を撮影して調査を終了した。30日に作業員を尾代B遺跡にもどした。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

尾坪台遺跡は、茨城県竜ヶ崎市八代町字尾坪台3,523番地ほかに所在する。

十三塚遺跡は、茨城県竜ヶ崎市貝原塚町字十三塚206番地に所在する。この二つの遺跡は旧阿波街道といわれる小道を境界にして北側は貝原塚町、南側は八代町に分かれている。

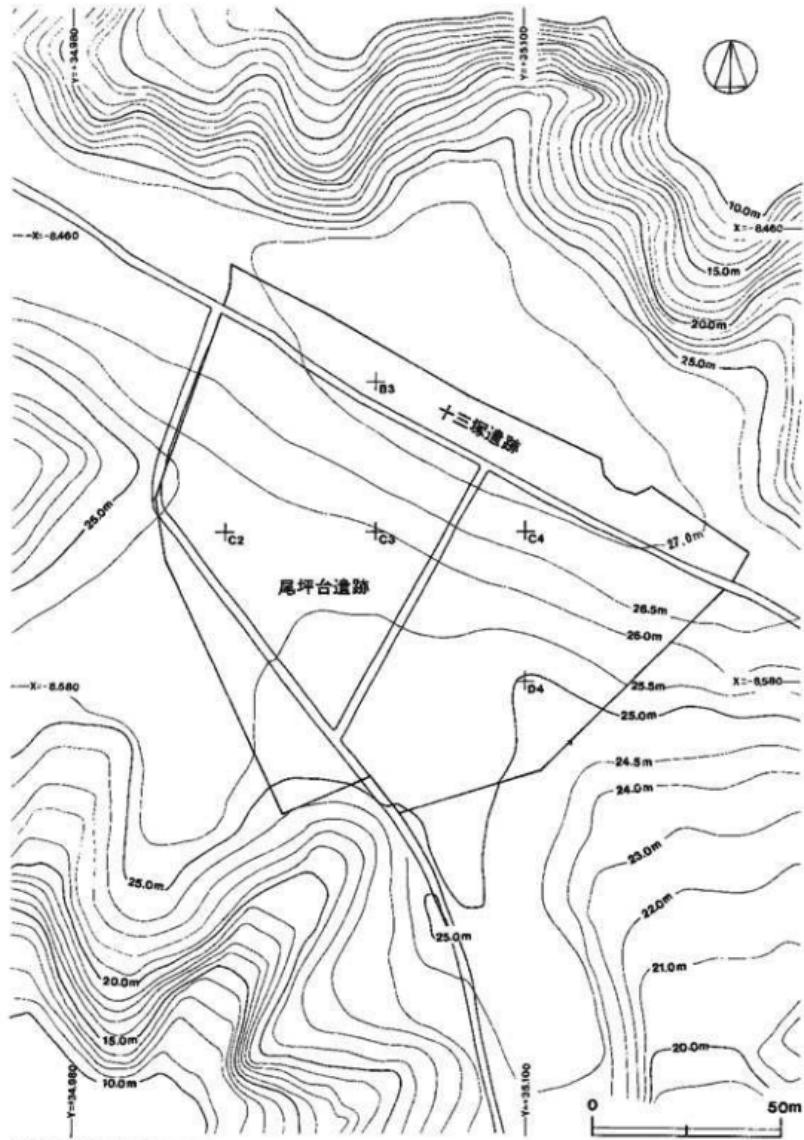
竜ヶ崎市は茨城県の南部に位置し、東は稻敷郡江戸崎町・同郡新利根村、南は同郡河内村・北相馬郡利根町、西は取手市・北相馬郡藤代町・筑波郡伊奈町、北は稲敷郡墓崎町・牛久市に接している。東西約12km、南北約9km、面積約75km²を占め、人口は48,945人（昭和61年1月現在）である。市街地は小貝川によって形成された自然堤防上に営まれており、国鉄常磐線佐貫駅から東へ延びる関東鉄道竜ヶ崎線の終点である竜ヶ崎駅付近から東へ約2kmにわたって細長く広がっている。近年、周囲の水田埋め立てや道路建設に伴い、市街地が徐々に広まりつつある。

竜ヶ崎市は、周辺の取手市・藤代町・牛久市等とともに東京の通勤圏内にある。朝夕の通勤・通学時間の常磐線上り電車は、東京方面へ出かける多くの人が利用するために激しい混雑を見せている。また、かつては土浦市の商業圈に含まれていたが、千葉県の常磐線沿いの諸都市の商業圏の拡大に伴い、千葉県側との結び付きが強まりつつある。

竜ヶ崎市の北側の台地は稲敷台地の南端にあたり、至るところに浸食谷が刻まれて複雑な地形を呈している。市域は、南部（市街地の東から西北西にかけて）の低地と北部（市街地の東北東から北西にかけて）の台地とに大別できる。前者は、鬼怒川と小貝川によって形成された標高3~6mの沖積地であり、水田に利用されている。後者は、前述した標高20~27mの稲敷台地の南端であり、平地林・畑に利用されている。両者の境界は、比高15~20mの急崖となっている。

尾坪台・十三塚遺跡は、竜ヶ崎市街地の北東約4kmの長峰町に北面する台地上に所在する。この台地の北側は、長峰町と半田町の間から入っている浸食谷が台地に沿って西方の貝原塚町方面へ延びて急崖を、南側は、長峰町と八代町の間から入っている浸食谷が貝原塚町方面へ樹枝状に浸食して比較的ゆるやかな斜面を造っている。遺跡は、長峰町と貝原塚町の間を細長く東西に延びている台地の中央よりやや長峰町寄りにある。その標高は、旧阿波街道をはさんで北側に位置する十三塚遺跡で約27m、南側に位置する尾坪台遺跡の南端部で約25mである。この南北間の距離は約150mで、ゆるやかに南側に傾斜している。

現在の長峰町の集落は、遺跡のある台地の南西側裾部に東西に長く、また、八代町の集落は、南側の浸食谷を越えた東西に細長く延びる台地の南側裾部に、そして、貝原塚町の集落は、遺跡から続く北西台地の竜ヶ崎・木原街道沿いに形成されている。



第1図 遺跡周辺地形図

第2節 歴史的環境

茨城県南部、とりわけ霞ヶ浦沿岸や利根川下流域は数多くの遺跡があることで知られ、中でも陸平貝塚・上高津貝塚・花輪貝塚等は特に著名である。⁽¹⁾

竜ヶ崎市を含んだ稻敷郡全域の原始・古代遺跡を「茨城県遺跡地図」に求めると、縄文時代159遺跡、弥生時代22遺跡、古墳時代198遺跡を数えることができる。その中には、昭和57年2月に国指定史跡となった縄文時代後・晚期の広畠貝塚（桜川村）を始めとし、縄文時代前期の興津貝塚（美浦村）、中～晚期の小山台貝塚（茎崎町）、後・晚期の椎塚貝塚（江戸崎町）、晚期の法堂遺跡（美浦村）、弥生時代の殿内遺跡、古墳時代前期の原古墳群、尾島祭祀遺跡（桜川村）、後期の木原古古墳（美浦村）等が良く知られている遺跡である。

竜ヶ崎市においては、竜ヶ崎ニュータウン建設に伴う発掘調査が数多く行われ、地域的に遺跡の時代的変遷を追うことが可能となってきた。若柴台地の北縁部の緩斜面には、先土器時代の舟底形石器を出土した沖餅遺跡、別所台地の南側には縄文時代早・前期の遺物を出土した廻り地B遺跡⁽²⁾、その北東には中期に編年された打越C遺跡がある。また、中期の遺跡には、沖餅遺跡の北西に隣接し、袋状土坑を伴う馬蹄形集落の赤松遺跡、大羽谷津の台地南縁部に地点貝塚を伴う環状集落の廻り地A遺跡があり、南三島遺跡においても、地点貝塚を伴う中期から後期にかけての集落跡が調査されている。また、弥生時代の遺構・遺物が検出された遺跡は、外八代遺跡・屋代A遺跡・屋代B遺跡が上げられる。古墳時代になると前期の遺構を検出した大羽谷津遺跡・成沢遺跡・沖餅遺跡・松葉遺跡、中期の平台遺跡がある。外八代遺跡や屋代A遺跡からも古墳時代や奈良・平安時代の遺構が検出されている。

室町・戦国時代の城館跡としては、鷲馬城跡、外八代遺跡、屋代城跡、貝原塚城跡などが見られる。

さらに、戦国時代から江戸時代の築造と考えられている塚が25基確認されている。そのうち調査が終了しているものは、十三塚ともいわれる駒馬町の仲根台1号塚、3号塚、4号塚、貝原塚町の稻荷塚1号塚、虫塚ともいわれる薄倉町の薄倉古墳、稻荷塚ともいわれる大塚町の稲荷峯古墳、そして今回調査された貝原塚町の十三塚遺跡がある。これらの塚は、いずれもその性格や築造年代を示す遺物等の出土がない。塚上には石塔や石碑などが置かれていることや、古くからの伝承を残していること、また、町境の道路に面していることなどいくつかの共通点がうかがえるが、その築造の時期や目的については明確に解明されず、今後、関連分野（民俗・文書等）の研究が待たれる。

このように、竜ヶ崎市には原始・古代から各時代にわたって多くの遺跡が点在しており、原始・古代から現代にいたるまで人々の生活をうるおす地味豊かな土壤があり、嘗々と生活を営んでき

たことをうかがい知ることができるのである。

参考文献

- (1) LIIJIMA, AND C.SASAKI, 「OKADAIRA SHELL MOUNDS AT HITACHI」(「TOKYO DAIGAKU SCIENCE DEPARTMENT」MEMOIR VOL 1 PART 1) TOKYODAIGAKU 明治16年
- (2) 国指定史跡。土浦市上高津所在。
小宮 孟「土浦市上高津貝塚産出魚貝類の同定と考察」(「第四紀研究」VOL 19) 昭和55年
- (3) 青田 格・甲野 勇「花輪台式文化」(「绳文式文化編年図集」) 昭和24年
- (4) 茨城県遺跡地図。茨城県教育委員会 昭和52年3月
- (5) 龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書3 「沖餅遺跡」茨城県教育財團 昭和55年
- (6) 龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書5 「前清水遺跡・大羽谷津遺跡・打越A遺跡・打越C遺跡・廻り地B遺跡」茨城県教育財團 昭和56年
- (7) 龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書4 「赤松遺跡」茨城県教育財團 昭和55年
- (8) 龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書7 「廻り地A遺跡」茨城県教育財團 昭和57年
- (9) 龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11 「南三島遺跡6・7区」茨城県教育財團 昭和60年
- (10) 龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書2 「外八代遺跡」茨城県教育財團 昭和55年
- (11) 年報1, 茨城県教育財團 昭和56年度



第2図 尾坪台・十三塚遺跡周辺地形及び周辺遺跡位置図

尾坪台・十三塚遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	時代	古墳	文書	出土器	その他の施設	香川遺跡名		縦幅	横幅	先史層	縦文	横文	出生地	古墳その他
								R28-A	R28-B							
R.1	長峰城跡	城	古	○				○		○	○					
R.2	長峰古墳群	古墳	古	○				●	●	○	○					●
R.3	十三塚遺跡	塚	古	○				●	●	○	○					●
R.4	尾坪台遺跡	塚	古	○				●	●	○	○					●
R.5	外八代遺跡	墓地跡・城跡	古	○				●	●	○	○					●
R.6-A	尾代A遺跡	城跡	古	○				●	●	○	○					●
R.6-B	尾代B遺跡	城跡	古	○				●	●	○	○					●
R.7	新宿家古墳群	古	古	○				○	○	○	○					●
R.8	林三日向遺跡	墓地跡	古	○				●	●	○	○					○
R.9	シダノジ遺跡	墓地	古	○				●	●	○	○					○
R.10	町田塚跡	墓地	古	○				○	○	○	○					○
R.11	今がみ塚	墓地	古	○				●	●	○	○					○
R.12	高井戸下塚跡	城跡	古	○				●	●	○	○					○
R.13	賀治水遺跡	墓地跡・城跡	古	○				●	●	○	○					○
R.14	森上遺跡	墓地	古	○				●	●	○	○					○
R.15	町田遺跡	墓地	古	○				●	●	○	○					○
R.16	行部内遺跡	墓地跡	古	○				●	●	○	○					○
R.17	大切谷遺跡	墓地	古	○				●	●	○	○					○
R.18	越り地A遺跡	墓地	古	○				●	●	○	○					○
R.19	平台遺跡	墓地	古	○				●	●	○	○					○
R.20	坂根遺跡	墓地	古	○				●	●	○	○					○
R.21	松葉遺跡	墓地跡	古	○				●	●	○	○					○
R.22	淡申塚遺跡	墓地	古	○				●	●	○	○					○
R.23	洋野遺跡	墓地	古	○				●	●	○	○					○
R.24	市松遺跡	墓地	古	○				●	●	○	○					○
R.25	打越A遺跡	墓地	古	○				●	●	○	○					○
R.26	打越C遺跡	墓地	古	○				●	●	○	○					○
R.27	ウツブタ遺跡	墓地	古	○				●	●	○	○					○
R.28	仲根白塚群	墓地跡(1, 2号)	古	○				●	●	○	○					●

●印は発掘調査を実施した遺跡等である。



第3図 鬼ヶ崎市内一塚分布図

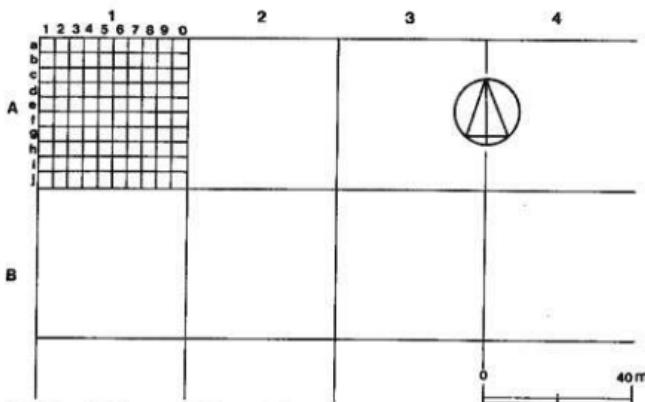
番号	塚名	番号	塚名	番号	塚名
1	仲根台1号塚	10	馬頭観音塚	19	稲荷塚2号塚
2	仲根台3号塚	11	表札場(塚)	20	松原塚(仮称)
3	仲根台4号塚	12	桔梗塚(鏡塚)	21	境塚(仮称)
4	大塚	13	弓塚	22	十三塚
5	十三仏	14	鹿島山(塚)	23	稻荷塚
6	般若塚	15	お談稻荷	24	薄倉古墳(虫塚)
7	喧嘩塚	16	金塚群	25	稻荷峰古墳(稻荷塚)
8	念佛塚	17	お大かん塚(大日塚)		
9	庚申塚	18	稻荷塚1号塚		

第3章 調査方法

第1節 調査区設定

尾坪台遺跡の調査対象面積は、11,013m²である。十三塚遺跡の調査は、1,355m²内にある十三基の塚である。

これらの遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系X座標-8,460m・Y座標+34,980mの交点を基準点として、40m四方の大調査区を設定した。さらに、大調査区を4m四方の小調査区に分割した。すなわち、40m四方の大調査区内に4m四方の小調査区を100個設定したわけである。



第4図 大調査区・小調査区呼称方法図

大調査区は南へ大文字のアルファベットで「A」、「B」、「C」……、東へ「1」、「2」、「3」……とし、A1区・B2区とした。小調査区は南へ小文字のアルファベットで「a」、「b」、「c」……、「i」、「j」とし、東へ「1」、「2」、「3」……、「9」、「0」と表した。各小調査区の名称は、大調査区と小調査区を合わせて「A1 a1」、「B2 b2」のように表記し、この調査区をグリッドと呼称した。

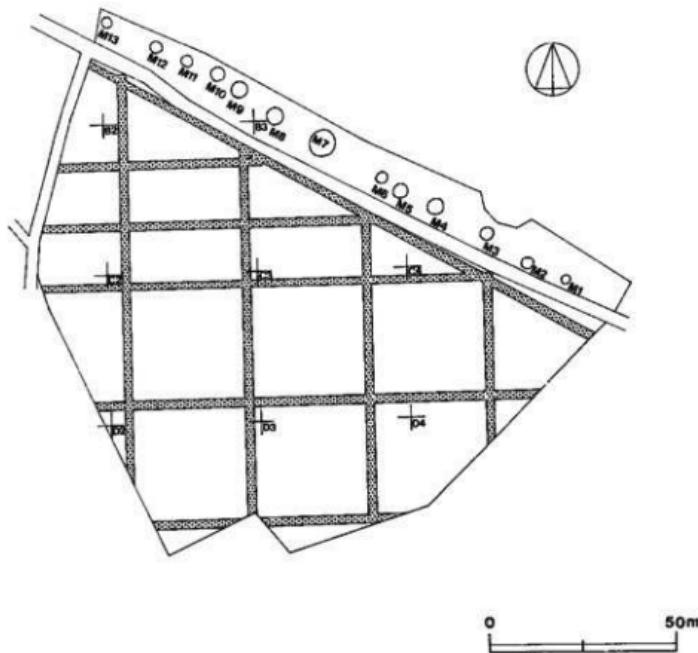
第2節 遺構確認

尾坪台遺跡の遺構確認は、調査面積の約10%を幅2mのトレンチで試掘を実施した。トレンチの方向は大調査区に沿う方向で、東西にトレンチ5本、南北にトレンチ4本、旧阿波街道沿いに

1 本設定して遺構・遺物の確認調査を行った。

試掘の結果、住居跡・土坑・溝と思われる落ち込みが検出され、それとともに少量の土器片も採取された。落ち込みの分布状況から、場所によって遺構の密集度合いには差が認められるものの、ほぼ全域に遺構が分布していると判断された。遺構確認面までの深さは約30cm、西側の一部で約60cmであった。また、現況は一部の畠を除いてほとんど様におおわれており、深さを考慮した上で重機による調査範囲全域の表土除去を実施し、その後遺構の確認調査を行った。

十三塚遺跡は、指定された1,355m²内の篠等を刈り払い、清掃を行って塚の位置や形状の確認を行った。その結果、塚らしい盛り上がりを示すもの12か所、明らかな土饅頭形をした塚1基が確認された。それらを東から西へ順に1号塚～13号塚と呼称することとした。



第5図 トレンチ配置と塚の位置図

第3節 遺構調査

住居跡の調査は、長径方向とそれに直交する方向で土層観察用ベルトを設け、1～4区に分割して掘り込む四分割法で実施した。土坑の調査は、長軸で二分して掘り込む二分割法で調査した。溝は、長さに応じて適宜数か所に溝と直交するような土層観察用のベルトを残して掘り込んだ。塚は、長径方向とそれに直交する方向で土層観察用ベルトを残し、グリッドごとに掘り込んだ。

土層については、色調・含有物・粘性・しまり等を総合的に観察して分類の基準とした。遺物の取り上げについては、住居跡、土坑の各区名・遺物番号・出土位置・レベル等を遺物台帳や図面に記録して収納した。溝、塚の場合は、区名に代わってグリッド名を用い、他は住居跡、土坑と同様とした。

遺構の観察では、床の状態・壁の立ち上がり具合・壁溝・炉の状態・柱穴等に特に注意を払って調査した。平面実測については、座標北を基準にした水糸方眼地張測量を行った。土層断面・遺構断面の実測は、標高を測って水糸を水平にセットし、その水糸を基準として実測した。炉跡についても住居跡、土坑の方法に準じた。

記録の過程は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→平面写真撮影→断面図作成→平面図作成を基本とした。図面や写真等に記録できない事項に関しては遺構カードに記録し、さらに、毎日の発掘調査日誌に整理した。

第4章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

1 遺跡の概要

尾坪台遺跡・十三塚遺跡で調査した遺構は次のとおりである。

住居跡 18軒

古墳時代 尾坪台遺跡 15軒 十三塚遺跡 3軒

土坑 59基

縄文時代 9基
時期不明 50基

尾坪台遺跡

溝 5条

いずれも時期不明 尾坪台遺跡

塚 13基

13基 十三塚遺跡

これらの遺構の分布状況は、一定の方向性を認めることができる。住居跡は、調査範囲の北西部に大型のもの、南東部の谷に近い部分と十三塚遺跡間に中・小型のものが見られる。土坑の一部には、狩猟用の落し穴と考えられる深いものが、旧阿波街道を中心にして遺跡内の外縁部をとり囲むように半円を描いて配置されている。溝は1条を除いて同一方向を向いている。塚は道路に沿って13基が並んでいる。というように、各々について方向性、まとまりをみいだすことができる。

遺物は、遺物収納箱に22箱分である。その内容は、縄文式土器片約286点、弥生式土器と破片約349点、土師式土器とその破片約6,970点、土製品、石製品である。他に、江戸時代の製作と思われる石製の地蔵尊1基である。

2 遺構・遺物の記載方法

本書では、遺構・遺物の記載方法を下記の要領で統一した。

(1) 使用記号

遺構	名 称	住居跡	土 坑	溝	塚	ピット	擾 亂
	記 号	S I	S K	S D	M	P	K

(2) 造構に伴う施設等の表示



= 廃 跡



= 焼 土

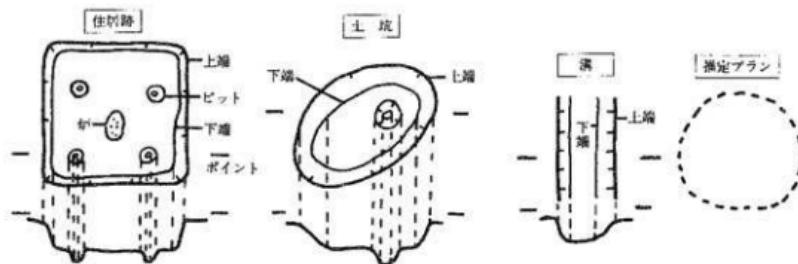
(3) 土層の分類

尾坪台遺跡の基本的層序は、I層が極暗褐色土の表上及び耕作土、II層が暗褐色土から褐色土への漸移層、III層が褐色土のローム層である。造構はII層下部及びIII層上面で確認されている。造構確認面までの深さは約30cm内外の厚さであるが、遺跡内の西部の一部が約60cmを測る所もあった。なお、尾坪台・十三塚遺跡の住居跡・土坑・溝・塚の土層及び土器の色調は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著日本色研事業株式会社発行)を使用し、その後、整理の段階で土層を次のように分類記号化して実測図中にその記号を記載した。

記号	土色名	色相 明度/彩度	記号	含 有 物
A	極暗赤褐色	Hue 2.5YR ½ ½	1 2 3 4 5 6	ローム粒子 例 ロームブロック 少量 → L1, 焼土粒子 中量 → L1 焼土ブロック 多量 → L1 炭化粒子 粘土
B	明赤褐色	Hue 2.5YR ½ ¾ ¾		ローム粒子少量、ロームブロック少量
C	赤褐色	Hue 2.5YR ½ ½		ローム粒子少量、ロームブロック少量、焼土粒子少量
D	にじ赤褐色	Hue 2.5YR ¾		ローム粒子少量、ロームブロック少量、炭化粒子少量
E	明赤褐色	Hue 2.5YR ¾ ¾		ローム粒子少量、ロームブロック少量、焼土粒子少量
F	明赤褐色	Hue 5YR ¾ ¾		ローム粒子少々量、ロームブロック少量、焼土粒子少量
G	黒色	Hue 7.5YR ¾	7	ローム粒子少量、焼土粒子少量
H	黒褐色	Hue 7.5YR ¾ ¾	8	ローム粒子少量、焼土粒子少々量、焼土ブロック少量
I	極暗褐色	Hue 7.5YR ¾	9	ローム粒子少量、焼土粒子少々量、焼土ブロック少量、炭化粒子少量
J	暗褐色	Hue 7.5YR ¾ ¾	10	ローム粒子少々量、ロームブロック少量、焼土粒子少々量
L	褐色	Hue 7.5YR ¾ ¾	11	ローム粒子少量、焼土粒子少々量、炭化粒子少量
M	にじ褐色	Hue 7.5YR ¾ ¾	12	ローム粒子少量、炭化粒子少々量
N	明褐色	Hue 7.5YR ¾ ¾	13	ローム粒子少量、焼土粒子少々量、焼土ブロック少量、炭化粒子少々量
O	橙色	Hue 7.5YR ¾ ¾	14	ローム粒子少量、焼土粒子少々量、炭化粒子少々量
			15	ローム粒子少々量、炭化粒子少々量
			16	ローム粒子少量、焼土粒子中量、焼土ブロック少量
			17	ローム粒子少量、焼土粒子多量、炭化粒子少々量
			18	ローム粒子中量、ロームブロック少量
			19	ローム粒子中量、焼土粒子少々量
			20	ローム粒子多量、ロームブロック少量
			21	ローム粒子多量、ロームブロック中量
			22	ローム粒子多量、ロームブロック少量、炭化粒子少々量
			23	ローム粒子多量、焼土粒子少々量
			24	ローム粒子多量、焼土粒子少々量、炭化粒子少々量
			25	ローム粒子多量、焼土ブロック少量
			26	ロームブロック少量、焼土粒子多量
			27	焼土粒子少々量、焼土ブロック少量
			28	焼土粒子少々量、焼土ブロック多量
			29	焼土粒子少々量、炭化粒子少々量
			30	焼土粒子中量、焼土ブロック少量
			31	焼土粒子多量、焼土ブロック少量
			32	焼土粒子多量、焼土ブロック中量
			33	焼土粒子多量、焼土ブロック少量、炭化粒子少々量
			34	焼土粒子多量、炭化粒子少々量
			35	焼土ブロック少量、炭化粒子少々量
			K	混乱

(4) 遺構実測図の作成方法と掲載方法

本書における遺構実測図の作成方法は、次のとおりである。

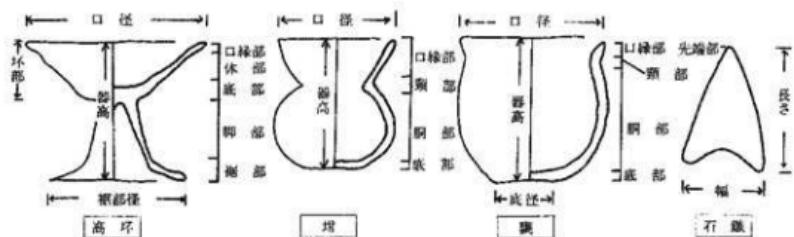


第6図 遺構実測図の作成方法と掲載方法

- 各遺構は、原則として縮尺 $\frac{1}{50}$ の原図を、かは縮尺 $\frac{1}{50}$ の原図をそれぞれトレースして版組みし、それをさらに $\frac{1}{2}$ に縮小して掲載した。
- 溝は、縮尺 $\frac{1}{50}$ の原図をトレースして版組みし、それをその規模に応じて $\frac{1}{50}$ ・ $\frac{1}{2}$ に縮小して掲載した。
- 水系の標高は、同一図中で同一標高の場合に限って一つの記載で表し、それ以外は個々に表示した。単位はmである。

(5) 遺物実測図の作成方法と掲載方法

各部位の名称と法量表現のための名称



第7図 各部位の名称と法量表現のための名称

- 土器の実測は、原則として中心線の左側に外面、右側に内面と断面を図示した。
- 土器拓影図は、右側に断面を図示した。表裏双方の拓影を掲載する場合には、断面を中央に配し、左側を外面、右側を内面とした。

・遺物は原則として実測図をトレースしたものを $\frac{1}{2}$ に縮小して掲載した。しかし、種類や大きさの差異により、それ以外の縮尺を使用した場合もある。

(6) 一覧表について

〈住居跡一覧表〉

住居跡番号	位置	長軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	壁高(cm)	床面	ピット数	炉	覆土	備考

- ・住居跡番号は、調査時に付した番号をそのまま使用し、十三塚遺跡の塚下のもののSI1～SI3を尾坪台遺跡番号の後にSI6～SI18というように通し番号を付して整理した。
- ・位置は、遺構が最も広い面積を占める小調査区（グリッド）名で表わした。
- ・長軸方向は、座標北と長軸のなす角度（N-X°-E, N-X°-W）で示した。
- ・規模は、平面形の上端面の計測値である。
- ・壁高は残存壁高の計測値で表した。
- ・床面は、次のとおり分類して表記した。

~~~~~ 平坦。~~~~~ 直線。~~~~~ 凹凸。~~~~~ ゆるい起伏。

- ・ピット数は、その住居跡に伴うものと考えられるピット数を記した。
- ・炉は、炉の種類を表し、炉をもたないものは空欄とした。
- ・覆土は、堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」、人為的埋戻しの場合は「人為」とした。
- ・備考は、重複関係・室外柱穴・壁溝有・焼失家屋などを記した。

〈土坑一覧表〉

| 土坑番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規 模<br>長径×短径(m) | 深さ(cm) | 壁面底面 | 覆土形態 | 出土遺物 | 備 考 | 掲図番号 |
|------|----|------|-----|-----------------|--------|------|------|------|-----|------|
|      |    |      |     |                 |        |      |      |      |     |      |

- ・土坑番号は、調査時に付した番号をそのまま使用した。
- ・位置は、遺構が最も広い面積を占める小調査区（グリッド）名で表した。
- ・長径方向は、座標北と長径のなす角度（N-X°-E, N-X°-W）で示した。
- ・平面形は、現存している形態の上端面で判断し、円形・梢円形の場合は下記の分類基準を設けて表示した。
- ・円形（長径：短径=1.1：1未満のもの）、梢円形（長径：短径=1.1：1以上のもの）また、形の整わないものは、不整○○形と表示した。

- ・規模の欄の長径×短径は、平面形の上端面の計測値である。
- ・深さは、確認面から坑底の最も深い部分までの計測値である（坑内のピットは除く）。
- ・壁面は、底面からの立ち上がり状態によって次のとおり分類表記した。
  - およそ80°～90°の立ち上がり—垂直。
  - およそ60°未満の立ち上がり—ゆるやか。
- ・底面は、皿状以外は住居跡一覧表の床面の項に準じた。
- ・土坑の形態は、分類の基準を次のとおりにした。

#### 平面形

I—円形。II—橢円形。III—方形。IV—不整形（不整円形・不整橢円形など）。

#### 断面形

A—鍋状。B—皿状。C—V字状。D—袋状。

#### 規模（長径の長さ）

1—1m未満。2—1m以上2m未満。3—2m以上3m未満。4—3m以上。

#### 深さ

a—50cm未満。b—50cm以上100cm未満。c—100cm以上。

以上のものを組み合わせて、形態を「IAzb」のように表記した。

（例 IAzb……平面形が円形で、断面は鍋状を呈し、規模は1m以上2m未満で、深さが50cm以上100cm未満の土坑であることを示している。）

・掲図番号は、土坑実測図が掲載してある番号である。

・上記以外の項目については、住居跡一覧表の記載方法に準じた。

#### 〈出土土器観察表〉　・縄文式・弥生式土器など

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | 器形の特徴及び文様 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|----|----|--------|-----------|----------|----|
|    |    |        |           |          |    |

#### 〈出土土器観察表〉　・土師式土器など

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | 器形の特徴 | 手法の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|----|----|--------|-------|-------|----------|----|
|    |    |        |       |       |          |    |

・器種は、高環形土器というように……形土器と表記した。

・法量は、A—口径、B—器高、C—底径、D—脚部高、E—裾部径、F—坏部高、G—胴部高を示し、単位はcmである。なお、現存値は〔 〕復元推定値は( )を付して表記した。

・器形の特徴及び文様は、弥生式土器の場合最初に器形を述べ、次に文様と手法について述べ

た。土師器の場合は、この欄を器形の特徴と手法の特徴との二つの欄に分けて解説した。

・胎土・焼成・色調は、上段に胎土、中段に焼成の具合、下段に色調を表記した。

・備考は、土器の完存率や土器の型式等を表記した。

〈球状土錘一覧表〉

| 番号 | 名称 | 出土地点 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 孔径(cm) | 重さ(g) | 備考 |
|----|----|------|--------|-------|--------|-------|----|
|    |    |      |        |       |        |       |    |

〈石器・石製品一覧表〉

| 番号 | 名称 | 出土地点 | 大きさ(cm) |      | 重量(g) | 石質 |
|----|----|------|---------|------|-------|----|
|    |    |      | 長さ      | 幅 厚さ |       |    |
|    |    |      |         |      |       |    |

・番号は、遺物の個有番号である。

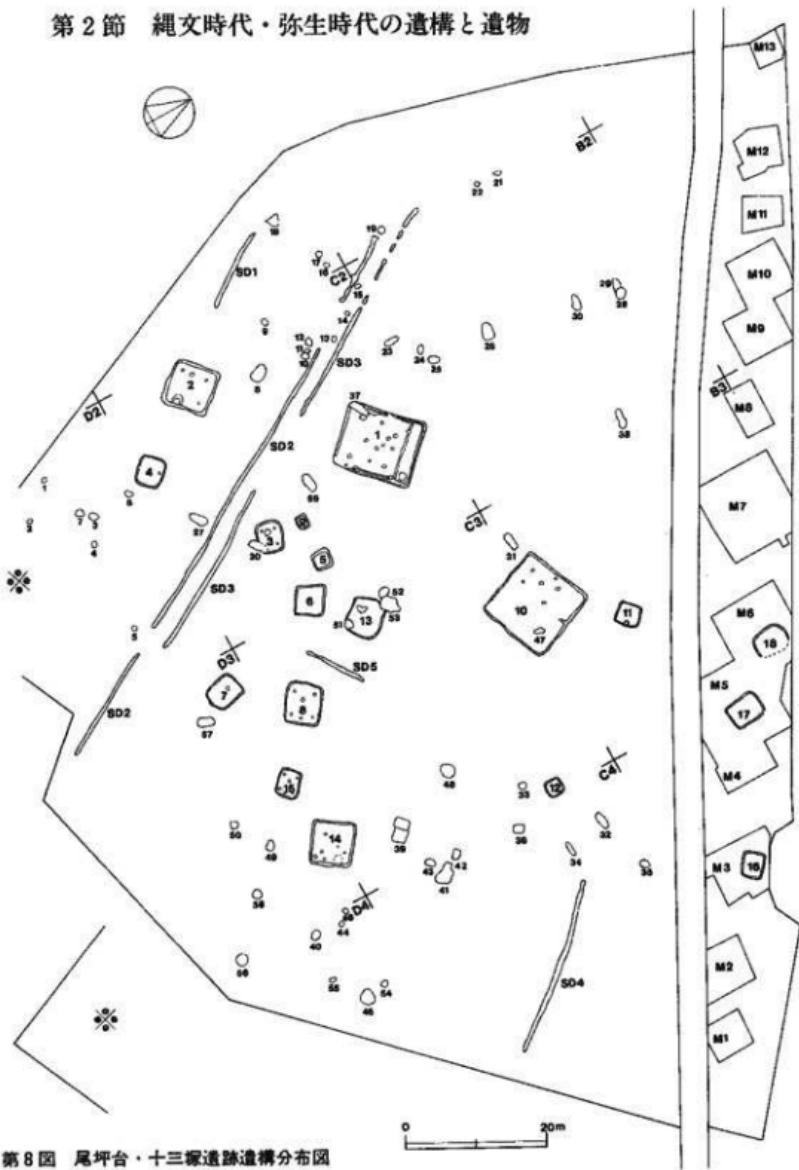
・出土地点は、出土した遺構名、遺構以外から出土したものについては小調査区名(グリッド)を記した。

・大きさの欄の長さ・幅・厚さは、それぞれ最大長・最大幅・最大厚の計測値である。また、重量の欄の( )内数値は、欠損土製品・石器・石製品の残存値である。

・石質の欄は、その石器を作る母岩の岩石名を表記した。

・上記以外の項目については、出土土器観察表の記載方法に準じた。

## 第2節 繩文時代・弥生時代の遺構と遺物



第8図 尾坪台・十三塚遺跡遺構分布図

## 1 土坑（縄文時代）

当遺跡において調査した土坑は59基である。十三塚遺跡ではなく、尾坪台道路のほぼ全域に分布（第8回）している。それらの造構については一覧表と実測図にして掲載した。また、土坑の時期を決定できるような遺物の出土は全くなかったが、周辺から覆土中へ流れ込んだと思われる遺物についても資料の重要性を考えて拓影図と実測図を載せておいた。ただ、造構の形態から時期の類推できる縄文時代と思われる9基の土坑について平面形状・断面形状・覆土の堆積状況・遺物包含状況・配列について解説を試み、それらについて考察を行った。

9基の土坑とはSK 20・29・30・32・34・37・38・57・59号のことである。

平面形はいずれも横円形を呈するが長径が短径の約1.99～2.79倍を測る長横円形である。長径は225cm～307cm、短径は92cm～131cmである。

断面形は底部が尖るか、平坦であるが狭いものでV字形を呈して111cm～221cmを測る。

覆土の堆積状況を見るとどの造構も自然堆積の様相を示している。

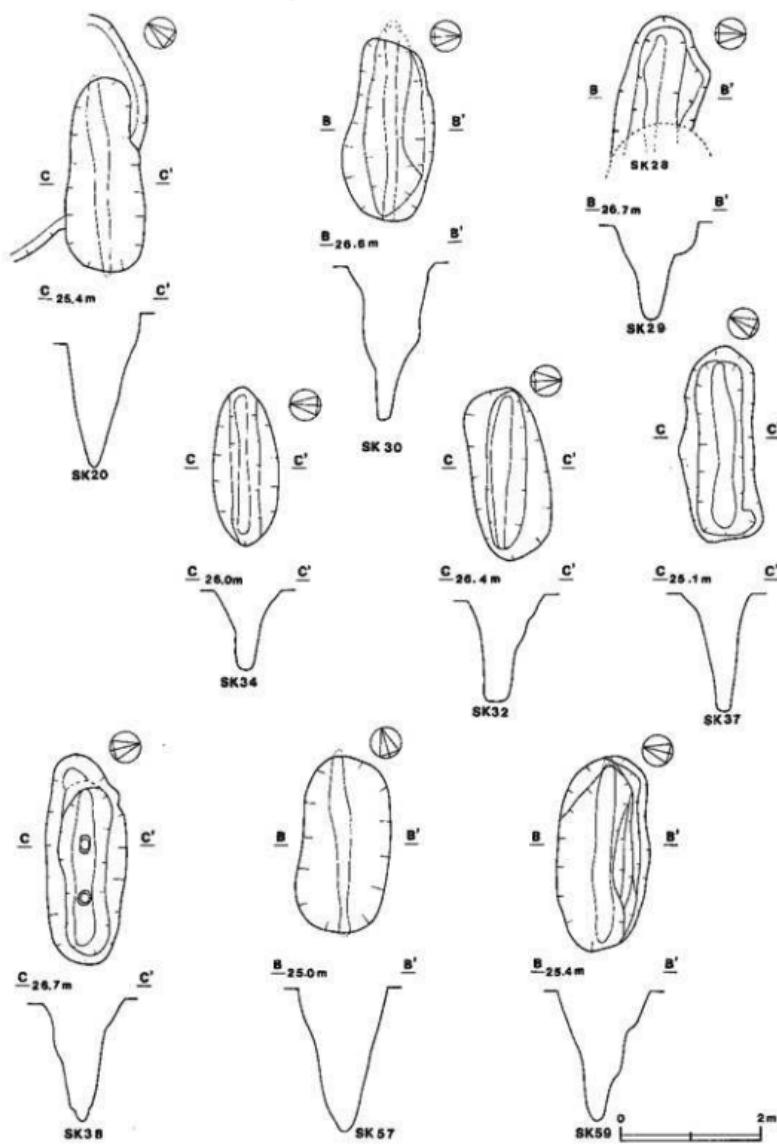
遺物はいずれも覆土上層からの出土で周囲からの流れ込みによるものと考えているが、SK20が土師式土器片1点、SK 32が前期と思われる縄文式土器片1点、SK 59が弥生式土器片2点・土師式土器片3点だけというように非常に少ない。他の造構からの出土は皆無である。

これら9基の土坑の長径方向と等高線を比較して見ると土坑の長径方向と等高線はほぼ同一方向に向いている。土坑は、旧阿波街道を中心にして遺跡内の外縁部を半円形に配列されている。その外側には谷津がせまっている。

以上のことから、先学の研究を総合するとその構築年代は縄文時代ということが出来る。いずれにしてもSI1の床下からSK 37が、SI3の床下からSK 20が検出されたことを考慮すると古墳時代中期以降のものではない。また、その機能については、狩猟の為の「落し穴」説や戦いの際の防御施設としての「落し穴」説、或いは特殊な造構説等を散見するが、当遺跡の立地を考慮に入れると、近接する谷津に対する配慮と平坦部をひかえる縁辺部に巡らした動物捕獲用の「落し穴」的用途を推量するのが妥当と思われる。

さらに、調査中に底部を掘る際、これらの土坑の構造上人間が体を斜めにし、棒の先に付けた掘り用具でなければ掘れない程狭く、この土坑に落ちた動物はV字形の底にとどかない中間部に体がはさまり、足は宙に浮いた状態になって逃げ出すことが不可能になったと思われる。また、小動物であっても底まで落ちてしまうと、狭い穴の中では殆んど逃上がれなかつたのではないかと思われる程深く、また、傾斜が急であり、さらに、底部近くの端部ではオーバーハングしているものもあり(SK 20・30・38・57・59)、意図的に出られないよう構造を配慮しているよううかがえるのである。

その他、縄文時代・弥生時代と思われる造構はなかった。



第9図 繩文時代の土坑

## 2 包含層・その他の出土土器

遺構に伴わない土器片も多数出土している。それらの多くは尾坪台遺跡・十三塚遺跡の遺物包含層からの出土であるが、他に、両遺跡の表土から採集したものや、塚・溝の調査中に出土したものなどが含まれている。その内容は、縄文式上器片286点、弥生式土器片349点である。これらの中には縄文時代早期・前期・中期・後期に位置づけられるものや、弥生時代・古墳時代のものまで多岐にわたっている。以下にそれらを表にして解説した。なお、表中で次のような略号を使用した。口縁部片一口、頭部片一頭、胴部片一胴、底部片一底とし、時期を早・前・中・後として「期」を略し、不明なものは空欄とした。型式のわかるものは型式名を入れた。

遺物觀察表 1 縄文式土器解説表(第10~13回)

| 番号 | 時<br>期<br>式 | 部位 | 出<br>土<br>点 | 文様・その他の特徴                          | 番号 | 時<br>期<br>式 | 部位 | 出<br>土<br>点 | 文様・その他の特徴                |
|----|-------------|----|-------------|------------------------------------|----|-------------|----|-------------|--------------------------|
| 1  | 早           | 口  | SK 45       | 内面は概ねの条痕文。外面は条痕を施した後沈練。口付部直下にキザミ目。 | 19 | 前・黒浜        | 口  | 表 接         | 織維を多量に含む。格子状の沈板文。磨滅が激しい。 |
|    |             |    |             |                                    | 20 | 前・黒浜        | 口  | A 2 区       | 織維を含む。無文帯と縦文。            |
| 2  | 早           | 口  | 表 接         | 沈練を追らしている。                         | 21 | 前・黒浜        | 口  | A 2 区       | 織維を含む。縦線と縦文。             |
| 3  | 早・三戸        | 胴  | 表 接         | 沈練による文様。                           | 22 | 前・黒浜        | 口  | S 1 3       | 織維を含む。半截竹管による刺突文。        |
| 4  | 早・三戸        | 胴  | 表 接         | 沈練による文様。                           | 23 | 前・黒浜        | 口  | S 1 3       | 織維を含む。刺突文。               |
| 5  | 早・茅山        | 胴  | A 2 区       | 織維を微氣含む。磨滅。                        | 24 | 前・黒浜        | 口  | 口           | 口沿部に浅い溝。縦文。              |
| 6  | 早・茅山        | 胴  | S 1 1 6     | 織維を含む。沈練。                          | 25 | 前           | 口  | 表 接         | 無文。大きな刺突文。               |
| 7  | 早           | 胴  | 表 接         | 無文。2本の沈練を返らす。                      | 26 | 前           | 口  | 表 接         | 横位の沈練。その下に深い刺突文。         |
| 8  | 早           | 胴  | SK 59       | 竹管による沈練文。爪形文。                      | 27 | 前・黒浜        | 胴  | S 1 3       | 織維を含む。不鮮明な縦文。            |
| 9  | 早           | 胴  | 表 接         | 無文。                                | 28 | 前・黒浜        | 胴  | 表 接         | 織維を含む。縦文。                |
| 10 | 早           | 胴  | 表 接         | 織維を含む。内・外側とも条痕文。                   | 29 | 前・黒浜        | 胴  | B 1 a?      | 織維を多量に含む。縦文。             |
| 11 | 早           | 胴  | SK 1        | 織維を含む。内・外側とも貝殻条痕文。                 | 30 | 前・黒浜        | 胴  | M 2         | 織維を含む。上部に貝殻痕文。下部に縦文。     |
| 12 | 早           | 胴  | 表 接         | 織維を含む。幅広い貝殻条痕文。                    | 31 | 前・黒浜        | 胴  | B 2 b 2     | 織維を含む。大粒の縦文。             |
| 13 | 早           | 胴  | M 1         | 織維を含む。内・外側とも条痕文。                   | 32 | 前・黒浜        | 胴  | S 1 8       | 織維を含む。粗縦縦文。斜行縦文。         |
| 14 | 早           | 胴  | 表 接         | 織維を含む。条痕文。磨滅が激しい。                  | 33 | 前・黒浜        | 胴  | S 1 4       | 織維を含む。縦文。                |
| 15 | 早           | 胴  | M 3         | 織維を含む。条痕文。                         | 34 | 前・黒浜        | 胴  | M 1 2       | 織維を含む。縦文。                |
| 16 | 早           | 胴  | 表 接         | 織維を含む。条痕文。                         | 35 | 前・黒浜        | 胴  | B 1 a 8     | 織維を含む。爪形文。               |
| 17 | 早           | 胴  | 表 接         | 織維を含む。条痕文。                         | 36 | 前・黒浜        | 胴  | 表 接         | 織維を含む。縦文。                |
| 18 | 前・関山        | 口  | 表 接         | 織維を含む。口縁部に刃頭突起を有す。竹管による縦・横の文様を施す。  | 37 | 前・黒浜        | 胴  | B 2 a 2     | 織維を含む。縦文。                |
|    |             |    |             |                                    | 38 | 前・黒浜        | 胴  | B 2 b 7     | 織維を含む。縦文。                |
|    |             |    |             |                                    | 39 | 前・黒浜        | 胴  | S 1 8       | 織維を含む。粗縦縦文。              |
|    |             |    |             |                                    | 40 | 前・黒浜        | 胴  | S 1 8       | 織維を含む。粗縦縦文。              |

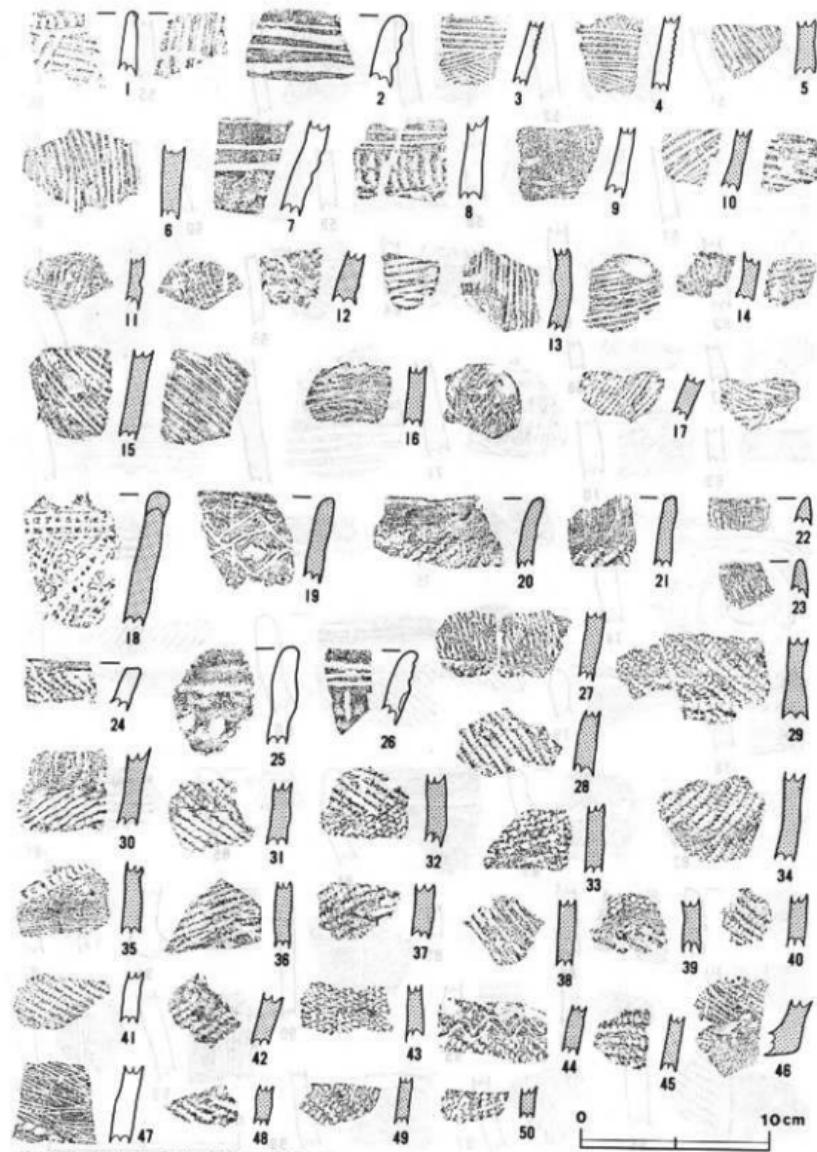
| 番号 | 時<br>期<br>式 | 部位 | 出<br>土<br>点 | 文様、その他の特徴                 | 番号  | 時<br>期<br>式 | 部位 | 出<br>土<br>点 | 文様、その他の特徴               |
|----|-------------|----|-------------|---------------------------|-----|-------------|----|-------------|-------------------------|
| 41 | 前・黒浜        | 胴  | B1 g?       | 縦文。                       | 81  | 中・輪形        | 口  | 表 採         | 沈線で長袖円文区画をし、その中に縦文を施す。  |
| 42 | 前・黒浜        | 胴  | B 2 区       | 織様を含む。縦文。                 | 82  | 中・輪形        | 口  | D 4 2       | 縦文。                     |
| 43 | 前・黒浜        | 胴  | S1 8        | 織様を含む。組縦横文。               | 83  | 中           | 口  | D 4 3       | 無文帯と縦文。                 |
| 44 | 前・黒浜        | 胴  | S1 3        | 織様を含む。コンバス文。              | 84  | 中           | 口  | S1 7        | 無文。沈線を巡らし、縦に柔線を引いている。   |
| 45 | 前・黒浜        | 胴  | S1 3        | 織様を含む。縦文。                 | 85  | 中           | 口  | 表 採         | 縦文。                     |
| 46 | 前・黒浜        | 底  | 表 採         | 織様を含む。縦文。                 | 86  | 中           | 口  | M 3         | 無文。横位の沈線。厚い。            |
| 47 | 前・黒浜        | 胴  | 表 採         | 沈線文。側文。                   | 87  | 中           | 口  | SI 2        | うちそぎ状の口脣部。縦文。爪形文。       |
| 48 | 前・黒浜        | 胴  | B 2 a2      | 織様を含む。縦文。細片。              | 88  | 中・玉置ヶ台      | 胴  | 表 採         | 縦文。爪形文。                 |
| 49 | 前           | 胴  | SK 1        | 織様を含む。縦文。                 | 89  | 中・玉置ヶ台      | 胴  | D 2 4 o     | 三角形のえぐりが入り、刺突が見える。      |
| 50 | 前・黒浜        | 胴  | B 2 b2      | 織様を含む。縦文。細片。              | 90  | 中・玉置ヶ台      | 胴  | SI 10       | 沈線文。                    |
| 51 | 前・黒浜        | 胴  | 表 採         | 沈線。縦文。                    | 91  | 中・玉置ヶ台      | 底  | SI 4        | 沈線。                     |
| 52 | 前           | 胴  | M 3         | 縦文。                       | 92  | 中           | 胴  | D 2 4 o     | 沈線。                     |
| 53 | 前・黒浜        | 胴  | M 3         | 織様を含む。無文。                 | 93  | 中・玉置ヶ台      | 胴  | B 1 2 o     | 沈線文。                    |
| 54 | 前・黒浜        | 腹  | M 1         | 小型土器。沈線を引き。その間に刺突文。       | 94  | 中           | 胴  | SI 1        | 沈線文。細片。                 |
| 55 | 前・黒浜        | 胴  | B 2 b2      | 織様を含む。磨滅が激しい。             | 95  | 中・玉置ヶ台      | 胴  | SI 4        | 刺突文。爪形文。                |
| 56 | 前・黒浜        | 胴  | 表 採         | 沈線による文様。                  | 96  | 中・輪形        | 胴  | C 2 1 i     | 微降起線で区画し、磨消と縦文を施す。      |
| 57 | 前・浮島        | 胴  | 表 採         | 条線文。                      | 97  | 中           | 胴  | D 2 4 a     | 無節縞文。                   |
| 58 | 前・浮島        | 胴  | 表 採         | 無文。                       | 98  | 中・輪形        | 胴  | M 3         | 沈線区画し、縦文を施す。            |
| 59 | 前・浮島        | 胴  | 表 採         | 無文。                       | 99  | 中           | 胴  | 表 採         | 無縞文。                    |
| 60 | 前・浮島        | 胴  | 表 採         | 条線文。上部に刺突文。               | 100 | 中           | 胴  | SK 40       | 沈線。磨滅が激しい。              |
| 61 | 前・浮島        | 胴  | 表 採         | 連続三角刺突文。                  | 101 | 中           | 胴  | SK 45       | 縦文。應手。                  |
| 62 | 前・浮島        | 胴  | 表 採         | 波状貝殻文。                    | 102 | 中           | 胴  | SI 1        | 縦文。                     |
| 63 | 前・浮島        | 胴  | 表 採         | 波状貝殻文。                    | 103 | 中           | 胴  | SK 4        | 縦文。磨消、磨滅している。           |
| 64 | 前・浮島        | 胴  | B 2 b2      | 波状貝殻文。                    | 104 | 中           | 胴  | SK 40       | 縦文。                     |
| 65 | 前・浮島        | 胴  | 表 採         | 波状貝殻文。                    | 105 | 中           | 胴  | SK 20       | 縦文。                     |
| 66 | 前・浮島        | 胴  | 表 採         | 貝殻縞文。                     | 106 | 中           | 胴  | SI 4        | 無節縞文。                   |
| 67 | 前・浮島        | 胴  | 表 採         | 半截竹管による波状沈線。刺突文も見られる。     | 107 | 中           | 胴  | C 2 a3      | 縦文。                     |
| 68 | 前           | 胴  | 表 採         | 亂雜な沈線。細片。                 | 108 | 中           | 胴  | SK 4        | 縦文。                     |
| 69 | 前           | 胴  | B 2 a2      | 無文。                       | 109 | 中           | 胴  | SK 6        | 無節縞文。                   |
| 70 | 前           | 胴  | 表 採         | 条線文。                      | 110 | 中           | 胴  | SK 4        | 縦文。                     |
| 71 | 前           | 胴  | M 3         | 沈線文。弱突穴。                  | 111 | 中           | 胴  | SK 4        | 縦文。                     |
| 72 | 前           | 胴  | M 3         | 織様を含む。波状・横位の沈線。           | 112 | 中           | 胴  | SI 1        | 縦文。                     |
| 73 | 前           | 胴  | SK 32       | 半截竹管による沈線文。               | 113 | 中           | 胴  | SK 4        | 溝巻文。                    |
| 74 | 中・玉置ヶ台      | 口  | C 1 1 o     | 波状口縫。口縫部に貼り付け有。沈線による溝急文。  | 114 | 後・縫之内       | 口  | M 3         | 波状口縫。縦文地文に棒状施文具で沈線を巡らす。 |
| 75 | 中・玉置ヶ台      | 口  | SI 1        | 縫位のあやくり文と縦文。              | 115 | 後・縫之内       | 口  | SI 6        | 口縫部無文帯、2本の沈線。           |
| 76 | 中・玉置ヶ台      | 口  | 表 採         | 縫位の沈線。竹管による縫位の沈線を施す。      | 116 | 後・縫之内       | 口  | M 3         | 縦文地文に棒状施文具による沈線。        |
| 77 | 中・玉置ヶ台      | 口  | SI 1        | 口縫部にキザミ目を有し、数條の横位の沈線を巡らす。 | 117 | 後・縫之内       | 胴  | M 8         | 縦文。                     |
| 78 | 中・玉置ヶ台      | 口  | C 2 1 i     | 縦文。沈線。                    | 118 | 後・縫之内       | 口  | M 3         | 縫位の菱形痕有。                |
| 79 | 中・阿萬台       | 口  | 表 採         | 押し引き文を巡らす。                | 119 | 後・縫之内       | 口  | M 7         | 縦文。口脣部尖る。               |
| 80 | 中・輪形        | 口  | 表 採         | 沈線を巡らし、以下縦文。              | 120 | 後・縫之内       | 口  | M 3         | 口脣部内そぎ状。無文帯の            |

| 番号  | 時<br>期<br>式 | 部位    | 出<br>土<br>点 | 文様・その他の特徴                                      | 2. 弥生式土器解説表(第13~15回) |             |        |             |                                 |
|-----|-------------|-------|-------------|------------------------------------------------|----------------------|-------------|--------|-------------|---------------------------------|
|     |             |       |             |                                                | 番号                   | 時<br>期<br>式 | 部<br>位 | 出<br>土<br>点 | 文様・その他の特徴                       |
|     |             |       |             | 下に沈線。その下縞文。                                    |                      |             |        |             |                                 |
| 121 | 後・東之内       | 口     | M 3         | 縞線を含む。縞線文。                                     | 156                  | 弥 生         | 口      | S1 3        | 貼付縞文。頭部に2条の刺突文。R.Lの縞文。口唇部にキザミ目。 |
| 122 | 後・東之内       | 口     | S1 16       | 波状口縞。口唇部に1条の沈線を追加し、口縞部直下に2条の沈線。瓶に竹管文を斜めに付けている。 | 157                  | 弥 生         | 口      | S1 3        | R.Lの縞文。口唇部に縞文風体の押正文。底有り。        |
| 123 | 後・東之内       | 口 表 接 |             | 無縞開文。                                          | 158                  | 弥 生         | 口      | S1 18       | 4条の沈線を引く。口唇部に斜めのキザミ目。           |
| 124 | 後・東之内       | 口     | M 7         | 縞文地文に横位の沈線。                                    | 159                  | 弥 生         | 口      | S1 8        | 縞文。利突文。                         |
| 125 | 後・東之内       | 口     | D4 b2       | 口縞部に段を有す。沈線で文様を施す。                             | 160                  | 弥 生         | 口      | S1 15       | 口唇部にキザミ目。無文帯と刺突文。               |
| 126 | 後・安行        | 口     | SI 3        | 肩状把手。孔有り。縞文。                                   | 161                  | 弥 生         | 口      | S1 3        | 口唇部に縞文原体の押正文。底有り。               |
| 127 | 後           | 口     | M 3         | 無文帯と縞文の境に沈線。                                   | 162                  | 弥 生         | 口      | S1 18       | 口唇部にキザミ目。沈線の一部が見える。             |
| 128 | 後           | 口     | M 3         | 無文帯。境に沈線。                                      | 163                  | 弥 生         | 口      | SI 11       | 貼付縞文。縞文。                        |
| 129 | 後・東之内       | 刷     | M 3         | 縞文地文に沈線文様。磨滅が激しい。                              | 164                  | 弥 生         | 口      | SI 14       | 口唇部無文帯。境に利突文。貼付縞文。段を有する。        |
| 130 | 後・東之内       | 刷     | M 3         | 縞文地文に沈線文様。磨滅が激しい。                              | 165                  | 弥 生         | 口      | SI 7        | 口唇部に縞文原体の押正文。頭部無文帯。             |
| 131 | 後・東之内       | 刷     | M 3         | 縞文地文に沈線文。                                      | 166                  | 弥 生         | 口 表 接  |             | 付加条施文。利突文を運らす。                  |
| 132 | 後・東之内       | 刷     | M 3         | 縞文地文に竹管文を垂下。                                   | 167                  | 弥 生         | 口      | SI 3        | 貼付縞文。縞文。                        |
| 133 | 後・東之内       | 刷     | M 3         | 縞文地文に蛇行沈線。                                     | 168                  | 弥 生         | 刷      | SI 3        | 羽状縞文。磨滅している。                    |
| 134 | 後・東之内       | 刷     | M 3         | 縞文地文に沈線文。                                      | 169                  | 弥 生         | 刷      | SI 15       | 縞文。                             |
| 135 | 後・東之内       | 刷     | M 3         | 縞文。                                            | 170                  | 弥 生         | 刷      | SI 8        | 縞文。                             |
| 136 | 後・東之内       | 刷     | M 7         | 縞文。                                            | 171                  | 弥 生         | 刷      | SI 9        | 内面にヘラナデ痕有。外側縞文。済手。炭化物付着。        |
| 137 | 後・東之内       | 刷     | M 3         | 縞文。                                            | 172                  | 弥 生         | 刷      | SI 1        | 二種類の縞文原体を施す。                    |
| 138 | 後・東之内       | 刷     | M 3         | 条縞文。                                           | 173                  | 弥 生         | 刷      | SI 4        | 無文帯と縞文。炭化物付着。                   |
| 139 | 後・東之内       | 刷     | M 3         | 沈線。                                            | 174                  | 弥 生         | 刷      | SI 18       | 無文帯と縞文。                         |
| 140 | 後・東之内       | 刷     | M 5         | 条縞文。                                           | 175                  | 弥 生         | 刷      | SI 7        | 縞文。                             |
| 141 | 後・東之内       | 刷     | D4 b2       | 縞文。4本の沈線。                                      | 176                  | 弥 生         | 刷      | SI 8        | 縞文。                             |
| 142 | 後・東之内       | 刷     | M 3         | 縞文地文に沈線を引く。                                    | 177                  | 弥 生         | 刷      | SI 8        | 縞文。                             |
| 143 | 後・東之内       | 刷     | D4 a2       | 縞文。1本の沈線。                                      | 178                  | 弥 生         | 刷      | SI 6        | 無文帯と縞文。                         |
| 144 | 後・東之内       | 刷     | M 3         | 縞文地文に沈線区画し、その間を磨消している。                         | 179                  | 弥 生         | 刷      | SI 6        | 縞かい縞文。炭化物付着。                    |
| 145 | 後・東之内       | 刷     | D4 b2       | 縞文地文に半截竹管で沈線。                                  | 180                  | 弥 生         | 刷      | SK 1        | 羽状縞文。                           |
| 146 | 後・東之内       | 刷     | M 7         | 縞文。                                            | 181                  | 弥 生         | 刷      | SI 8        | 縞文。炭化物付着。                       |
| 147 | 後           | 刷     | D4 a1       | 縞文。                                            | 182                  | 弥 生         | 刷      | SI 7        | 無文帯。縞文。                         |
| 148 | 後・東之内       | 刷     | M 7         | 縞文。                                            | 183                  | 弥 生         | 刷      |             | 表 接 無文帯と羽状縞文。                   |
| 149 | 後           | 刷     | D4 b2       | 縞文。                                            | 184                  | 弥 生         | 刷      | SI 7        | 無文帯。縞文。                         |
| 150 | 後           | 刷     | S1 4        | 縞文。                                            | 185                  | 弥 生         | 刷      | SI 3        | 縞文。磨滅している。                      |
| 151 | 後・加賀B       | 刷     | C2 17       | 貼付縞文を施し、瘤を棒状施文具で押している。横位に沈線。                   | 186                  | 弥 生         | 刷      | 表 接         | 付加条縞文。                          |
| 152 | 後           | 刷     | 表 接         | 粘結あやくり文。                                       | 187                  | 弥 生         | 刷      | SI 3        | 無文帯。縞文。横位の沈線。                   |
| 153 | 後           | 刷     | SK 40       | 貼付縞文。縞文地文に沈線。                                  |                      |             |        |             |                                 |
| 154 | 後           | 刷     | 表 接         | 縞文。沈線。                                         |                      |             |        |             |                                 |
| 155 | 後           | 刷     | B2 41       | 沈線。瘤片。                                         |                      |             |        |             |                                 |
|     |             |       |             |                                                |                      |             |        |             |                                 |

| 番号  | 時<br>期<br>式 | 部<br>位 | 出<br>土<br>点 | 文様・その他の特徴                |
|-----|-------------|--------|-------------|--------------------------|
| 188 | 弥 生         | 頭      | SI 3        | 無文帶。繩文。                  |
| 189 | 弥 生         | 胸      | 表 接         | 無文帶と羽状繩文。                |
| 190 | 弥 生         | 胸      | SI 15       | 繩文。                      |
| 191 | 弥 生         | 胸      | SI 3        | 羽状繩文。                    |
| 192 | 弥 生         | 胸      | SI 10       | 繩文。                      |
| 193 | 弥 生         | 胸      | SI 8        | 繩文。                      |
| 194 | 弥 生         | 胸      | SI 16       | 付加条繩文。                   |
| 195 | 弥 生         | 胸      | SI 15       | 付加条繩文。                   |
| 196 | 弥 生         | 胸      | SI 15       | 付加条繩文。                   |
| 197 | 弥 生         | 胸      | 表 接         | 付加条繩文。炭化物付着。             |
| 198 | 弥 生         | 胸      | SI 8        | 繩文。                      |
| 199 | 弥 生         | 胸      | SI 3        | 小鮮明な繩文。                  |
| 200 | 弥 生         | 胸      | SI 15       | 無文帶。繩文。                  |
| 201 | 弥 生         | 胸      | SI 15       | 繩文。                      |
| 202 | 弥 生         | 胸      | SI 8        | 肩位の横描文。繩文。               |
| 203 | 弥 生         | 胸      | SI 16       | 付加条繩文。                   |
| 204 | 弥 生         | 胸      | SI 8        | 肩位に7單位の横描文。              |
| 205 | 弥 生         | 胸      | SI 7        | 羽状繩文。                    |
| 206 | 弥 生         | 胸      | M 5         | 繩文。                      |
| 207 | 弥 生         | 胸      | SI 6        | 繩文。縞片。                   |
| 208 | 弥 生         | 右部     | SI 7        | 繩文。                      |
| 209 | 弥 生         | 胸      | SI 15       | 繩文。                      |
| 210 | 弥 生         | 頭      | SI 6        | 無文帶。繩文。                  |
| 211 | 弥 生         | 胸      | SI 6        | 二段折返し口縫。多条横描文。繩文を施す。     |
| 212 | 弥 生         | 口      | SI 3        | 無文帶下に繩文原体による刺突有り。磨滅している。 |
| 213 | 弥 生         | 頭      | SI 3        | 骨管状施文具による刺突文。            |
| 214 | 弥 生         | 胸      | M 7         | 繩文。磨滅が激しい。               |
| 215 | 弥 生         | 底      | SD 4        | 平底。磨滅が激しい。               |

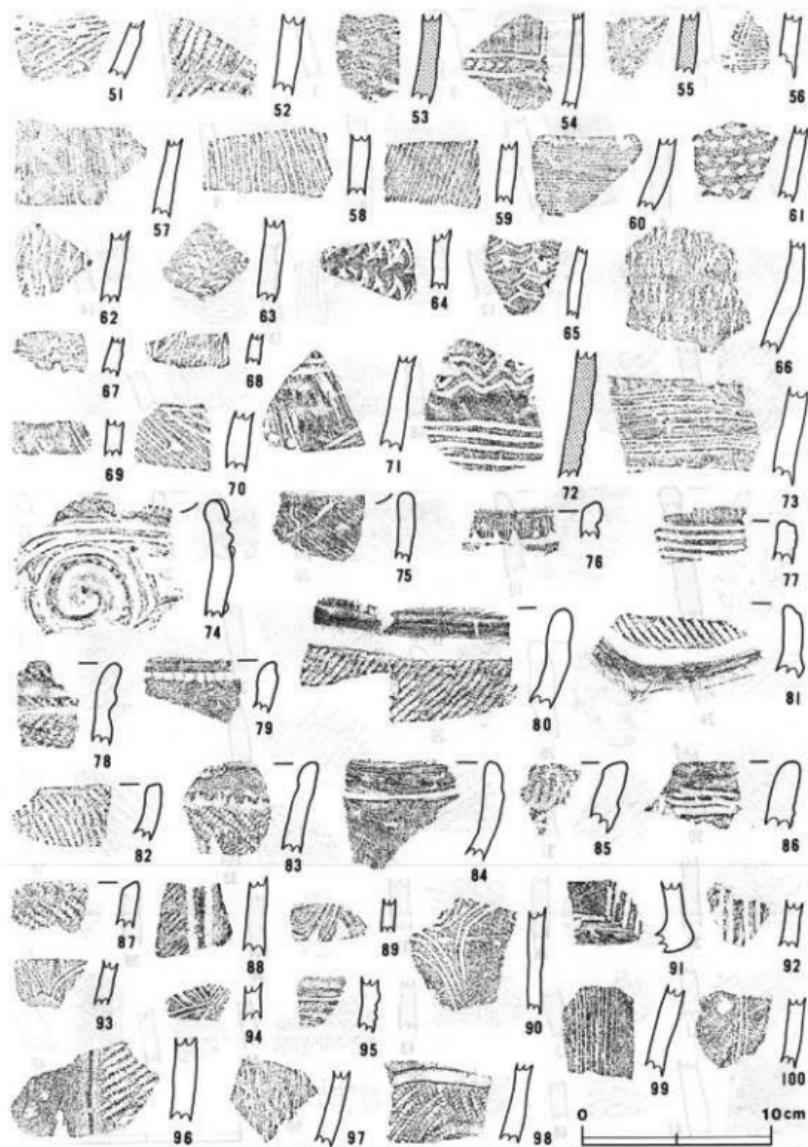
### 3. 土師式土器解説表(第15図)

| 番号  | 時<br>期<br>式 | 部<br>位 | 出<br>土<br>点 | 文様・その他の特徴            |
|-----|-------------|--------|-------------|----------------------|
| 216 | 古 墳         | 頭      | SK 40       | 埴輪片。刷毛目。             |
| 217 | 古 墳         | 頭      | SK 40       | 埴輪片。刷毛目。突帯が見られる。     |
| 218 | 古 墳         | 頭      | 表 接         | 埴輪片。刷毛目。横帯状の貼付が見られる。 |

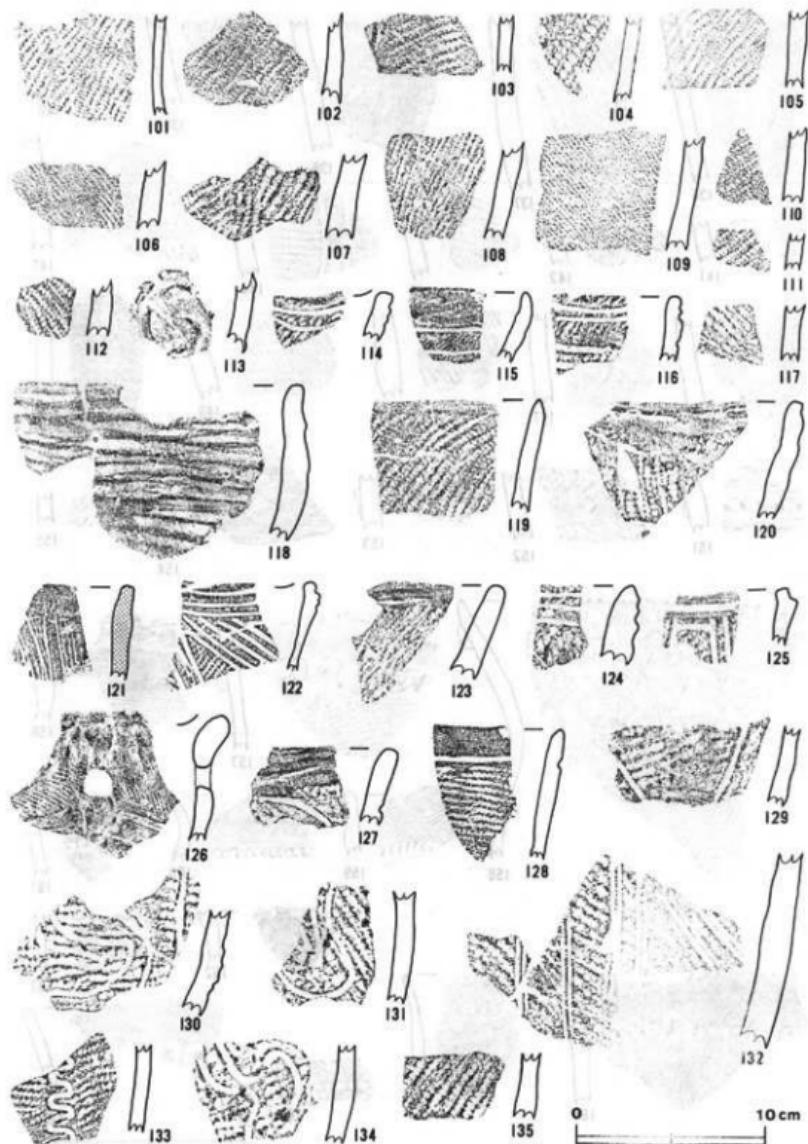


第10圖 繩文式・弦生式土器片拓影圖(1)

1回復狀器物為主者・方文觀・苗竹編

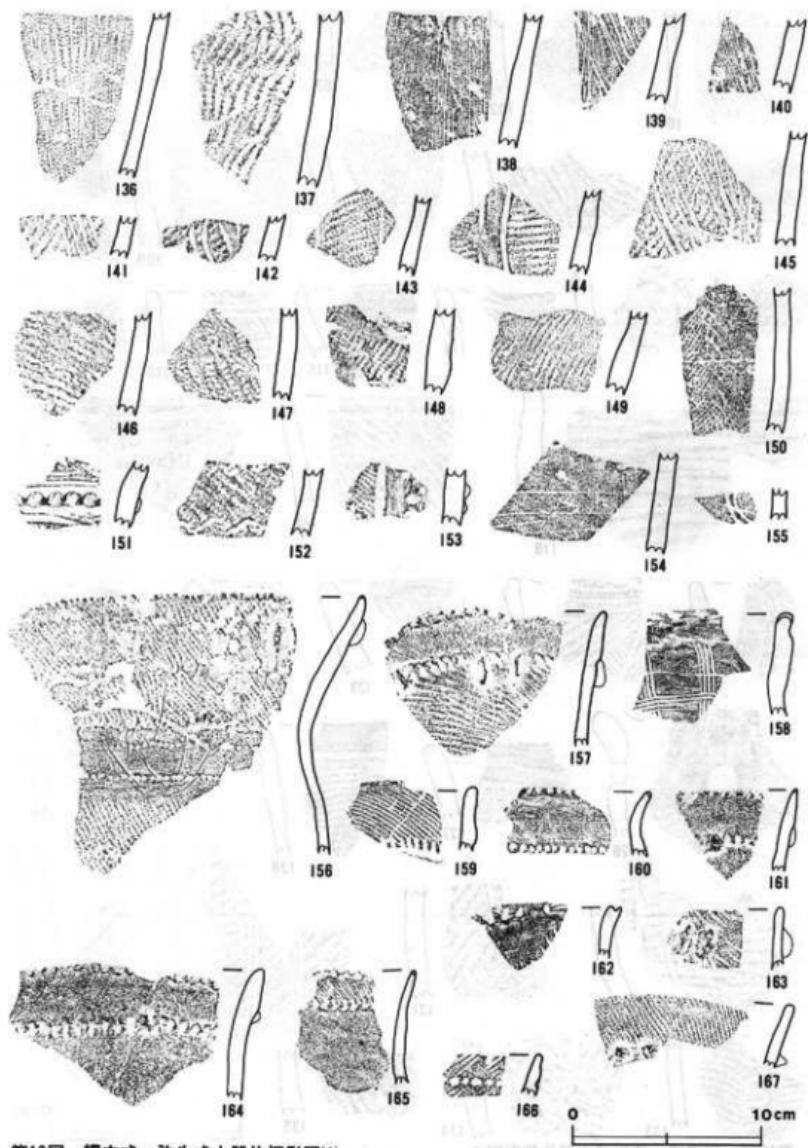


第11図 繩文式・弥生式土器片拓影図(2)

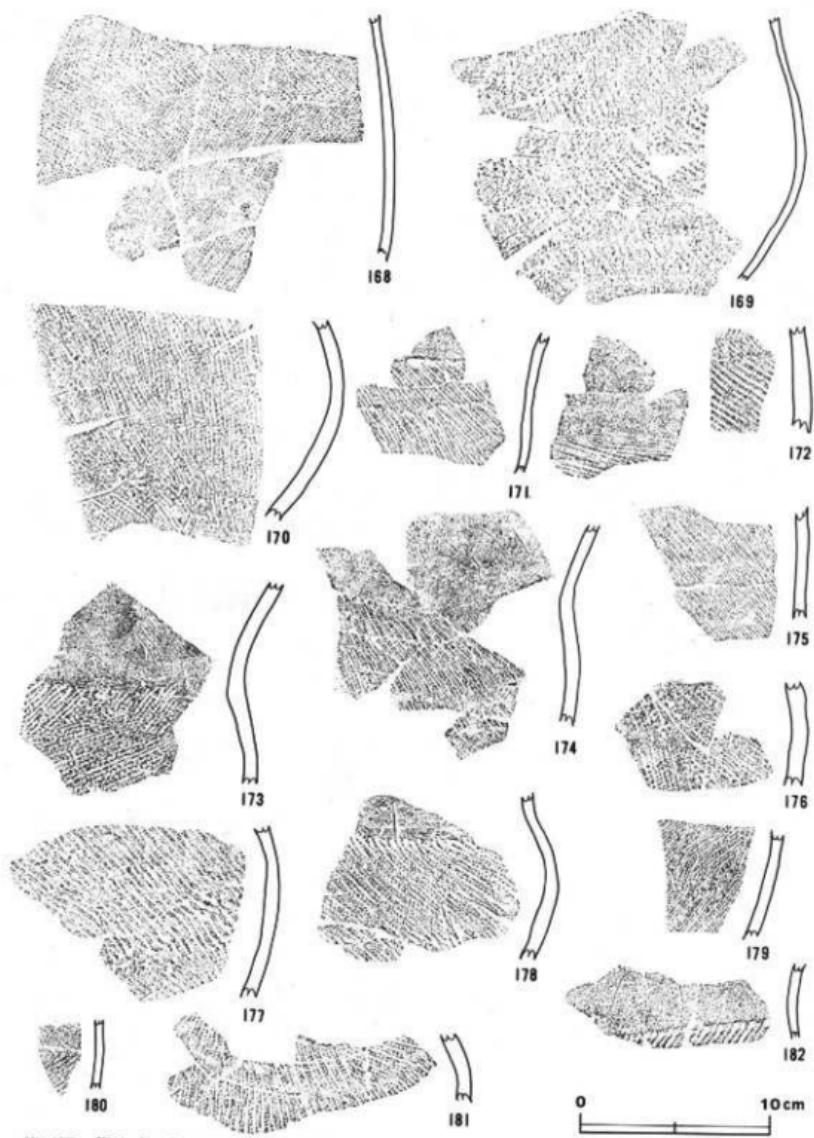


第12図 縄文式・弥生式土器片拓影図(3)

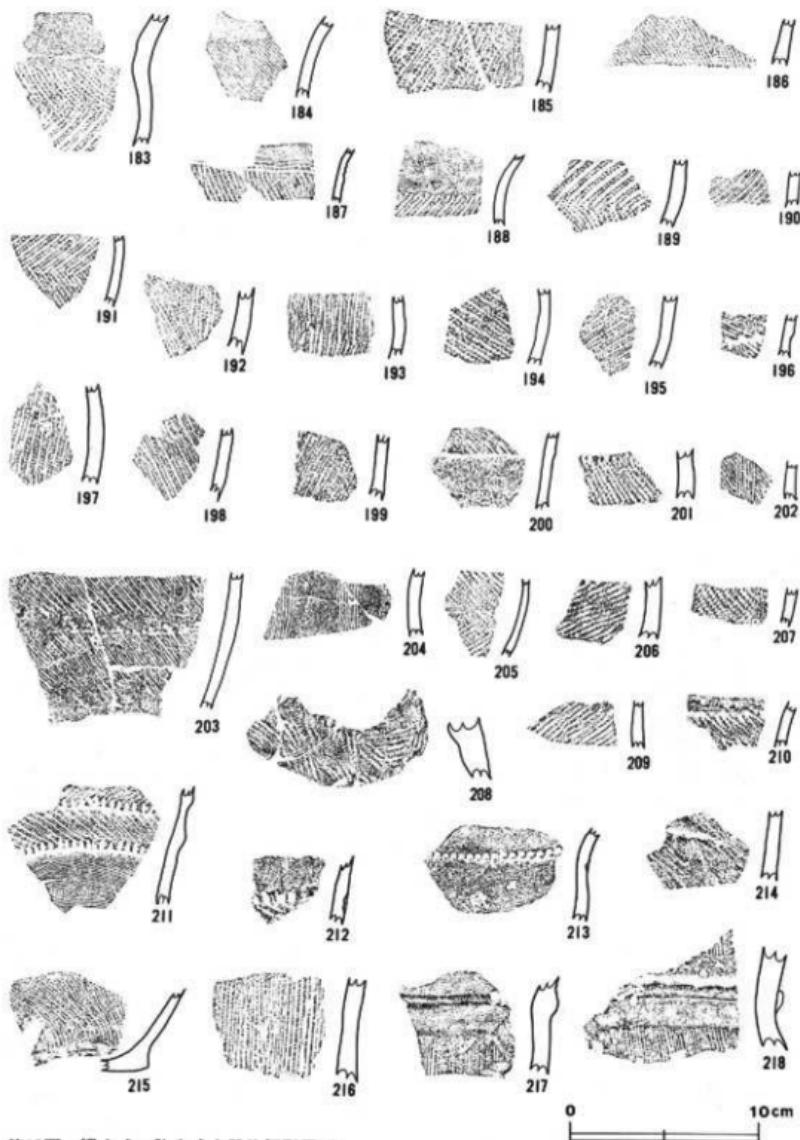
日本遺跡大系土器史研究 第二編 第三章



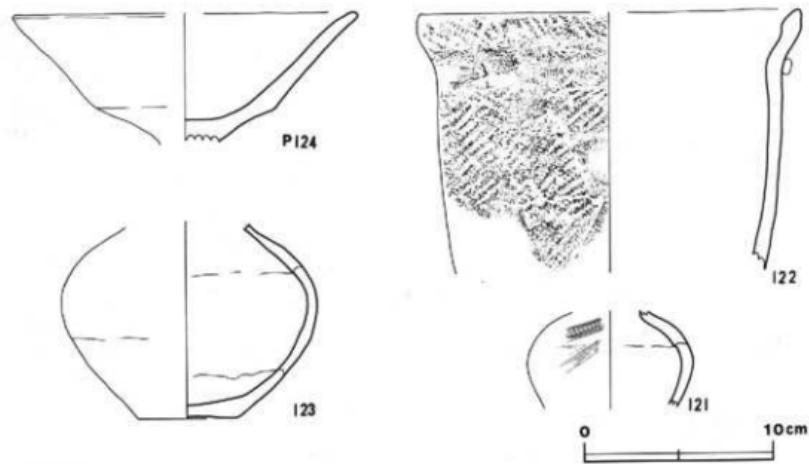
第13図 繩文式・弥生式土器片拓影図(4)



第14図 構文式・弥生式土器片拓影図(5)



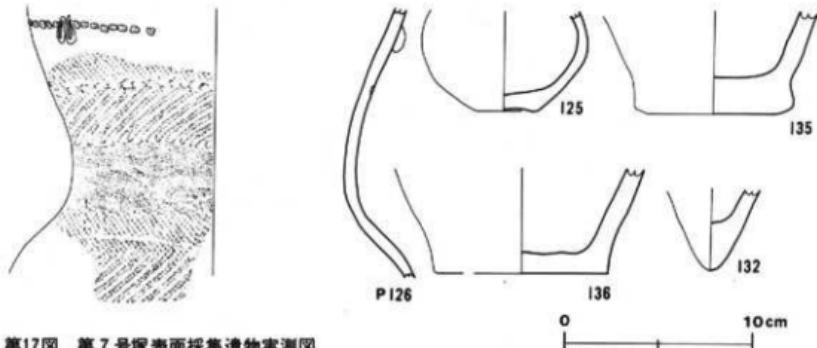
第15図 繩文式・弥生式土器片拓影図(6)



第16図 第7・27・51号土坑出土遺物実測図

出土土器観察表(第16図)

| 番号   | 器種             | 法量(cm)             | 器形の特徴及び文様                                                                                                                                                  | 粘土・色調・焼成                   | 備考           |
|------|----------------|--------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------|--------------|
| P122 | 深鉢形土器<br>縦文式土器 | A 20.2<br>B [13.8] | 脇部から口縁部にかけての破片である。器厚はほぼ一定し、脇部がやや内側気味に外傾して立ち上がる。頸部でややくびれてから開いて口縁部にいたり、口縁端部ではほぼ垂直に立つ。器面は荒れているが、外面は頸部の無文帯を除いて全面に織文が施されている。内面はヘラによる整形がなされている。頸部につまみ状の小突起が見られる。 | 砂粒・石英・長石・雲母・スコリア<br>赤褐色・普通 | 20%<br>五輪ヶ島式 |
| P121 | 壺形土器<br>土師器    | G [5.1]            | 脇部は球状を呈し、中位に最大径を有す。内面横ナデ。外面ハケ目整形後、横ナデ調整。                                                                                                                   | 砂粒<br>明褐色・普通               | 30%          |
| P123 | 壺形土器<br>土師器    | B [10.2]<br>C 5.2  | 脇部は底部から内側して立ち上がり、上位に最大径を有し、さらに内側して球状を作る。底部は平底である。                                                                                                          | 砂粒・スコリア<br>・石英<br>淡黄褐色・普通  | 90%          |
| P124 | 高环形土器<br>土師器   | A 18.4<br>F [7.0]  | 环体部は接合部から直線的に外傾して開く。底部下位の外面に棱を有する。                                                                                                                         | 砂粒<br>赤褐色・普通               | 50%          |



第17図 第7号塚表面採集遺物実測図

出土土器観察表(第17図)

| 番号   | 器種            | 法量(cm)           | 器形の特徴及び大きさ                                                                                                     | 粘土・色調・焼成                                     | 備考                            |     |
|------|---------------|------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------|-------------------------------|-----|
| P136 | 壺形土器<br>弥生式土器 | B(5.6)<br>C(9.2) | 底部は平底で大きく、安定感がある。剥離は底部から器厚を一定に保ち、直線的に外側して立ち上がっている。内・外面ともへラナデによる整形がなされている。                                      | 砂粒・石英・スコリア<br>によい褐色<br>普通                    | 7%                            |     |
| P126 | 壺形土器<br>弥生式土器 | B(13.3)          | 口縁部の破片である。器厚を一定に保ち、底部から外反して開く。器外面の頭部は無文様にし、他を付加条溝文を羽状に施し、口縁部に列点文を2本めぐらし。さらに、2個1単位の縦を2か所(推定7か所)付けている。内面はヘラナデ整形。 | 砂粒・スコリア・<br>石英<br>褐色<br>普通                   | 25%                           |     |
| P132 | 尖底土器<br>縦文式土器 | B(4.4)           | V字形に尖る底部で、磨滅している。無文。                                                                                           | 砂粒・青母<br>明赤褐色<br>普通                          | 7%                            |     |
| 番号   | 器種            | 法量(cm)           | 器形の特徴                                                                                                          | 手法の特徴                                        | 粘土・色調・焼成                      |     |
| P135 | 器種不明<br>土師器   | B(5.4)<br>C 8.5  | 底部は極端に厚く、安定感がある。底面外縁部はやや立ち上がっている。剥離は器厚が一定せず、厚い所と薄い所がある。底部から直線的に開いて立ち上がる。                                       | 底部、胴部内面はへラナデ整形。<br>底部、胴部外面はへラナデ整形後、研磨を施している。 | 砂粒・石英・長石<br>によい褐色<br>普通       | 10% |
| P125 | 器種不明<br>土師器   | B(5.3)<br>C 3.2  | 胴部は底部から外傾気味に立ち上がり、中位に最大径を有し、内側しながら球状を呈する。裏面は中央部がやや凹む平底である。                                                     | 胴部、底部内・外面ともへラナデ整形。                           | 砂粒・スコリア・<br>石英<br>によい褐色<br>普通 | 40% |

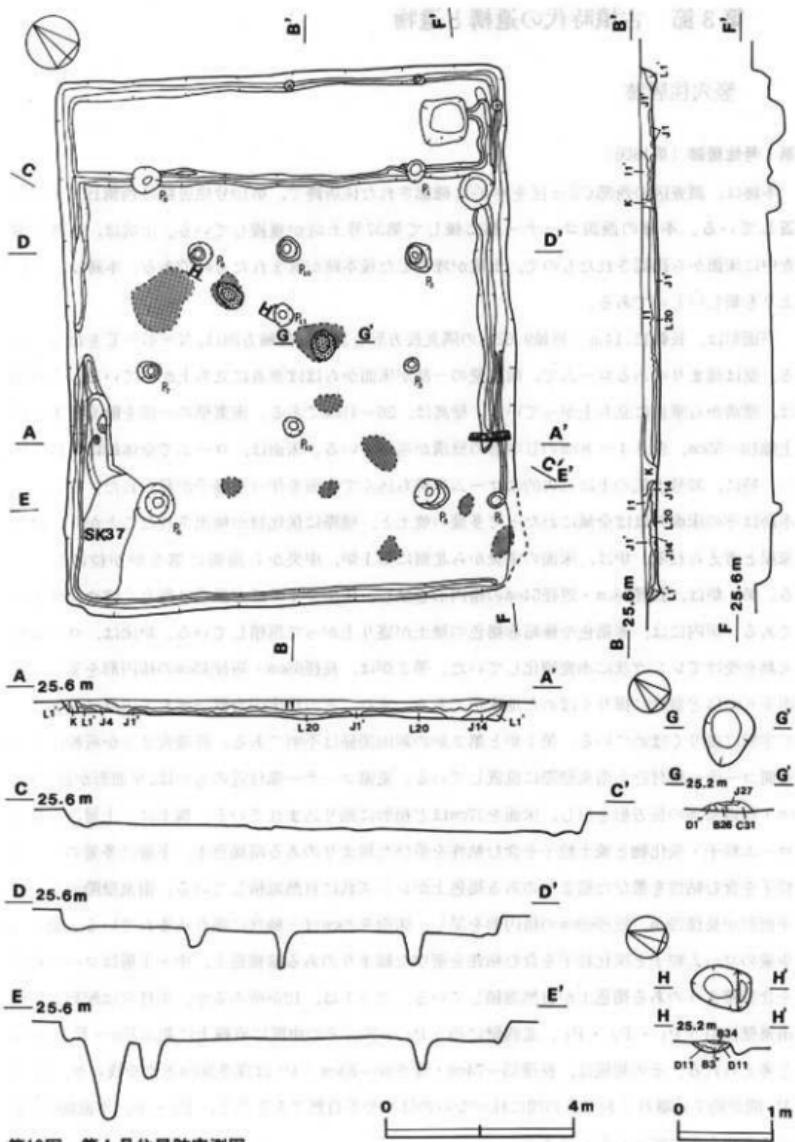
## 第3節 古墳時代の遺構と遺物

### 1 竪穴住居跡

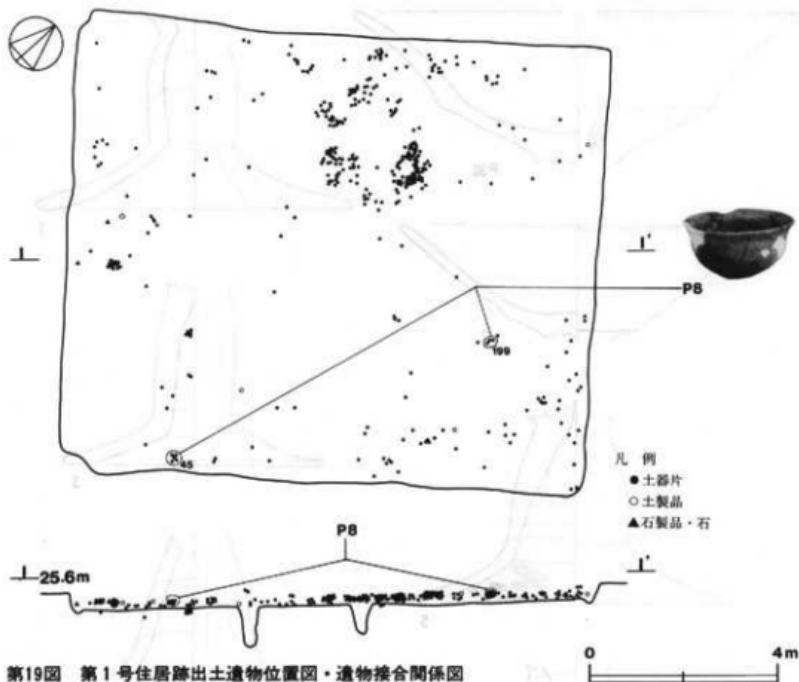
#### 第1号住居跡（第18図）

本跡は、調査区の西部C2・C7区を中心に確認された住居跡で、第10号住居跡の西側19.4mに位置している。本跡の西側コーナー部に接して第37号土坑が重複している。土坑は、本跡の調査中に床面から確認されたもので、土坑が埋没した後本跡が營まれたものである。本跡は、土坑よりも新しいものである。

平面形は、長軸11.14m・短軸9.62mの隅丸長方形を呈し、長軸方向は、N-47°Eを指している。壁は綺まりのあるロームで、南東壁の一部が床面からほぼ垂直に立ち上がっている。その他は、梁溝から垂直に立ち上がっている。壁高は、26~41cmである。南東壁の一部を除く壁下には、上幅16~55cm、深さ4~8cmのU字形の壁溝が巡っている。床面は、ロームで全体的に平坦で硬い。特に、37号土坑の上は二次的にロームを持ち込んで床面を作った様子が見られた。さらに、本跡はその床面のほぼ全域にわたって多量の焼土と、壁際に炭化材が検出されたことから、焼失家屋と考えられる。炉は、床面の中央から北側に第1炉、中央から南側に第2炉が位置している。第1炉は、長径68cm・短径54cmの楕円形を呈し、床面を4cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には、赤褐色や極暗赤褐色の焼土が盛り上がって堆積している。炉床は、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤変硬化していた。第2炉は、長径65cm・短径43cmの楕円形を呈し、床面を6cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。また、その炉床の南側一部を半円形に5cmほどU字形に掘りくぼめている。第1炉と第2炉の新旧関係は不明である。貯蔵穴は2か所検出され、東側コーナー部付近と南東壁際に位置している。東側コーナー部付近のものは、平面形が長辺105cm・短辺85cmの長方形を呈し、床面を37cmほど箱形に掘り込まれている。覆土は、上層に少量のローム粒子・炭化物と焼土粒子を含む粘性を帯びた綺まりのある暗褐色土、下層に多量のローム粒子を含む粘性を帯びた綺まりのある褐色土がレンズ状に自然堆積している。南東壁際のものは、平面形が長径79cm、短径69cmの楕円形を呈し、床面を29cmほど鍋状に掘り込まれている。覆土は、少量のローム粒子と炭化粒子を含む粘性を帯びた綺まりのある暗褐色土、中・下層はローム粒子を含む綺まりのある褐色土が自然堆積している。ピットは、12か所あるが、主柱穴は配列と規模南東壁に沿うP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>、北西壁に沿うP<sub>6</sub>~P<sub>8</sub>、その間に直線上に並ぶP<sub>10</sub>~P<sub>12</sub>の9本と考えられる。その規模は、長径35~74cm・深さ60~83cm（P<sub>7</sub>は深さ36cmとやや浅いが、P<sub>6</sub>とP<sub>8</sub>間が約7m離れておりその間に柱がないのはやや不自然であると、P<sub>6</sub>~P<sub>8</sub>が直線的に並ぶことから主柱穴とした）である。



第18図 第1号居住跡実測図



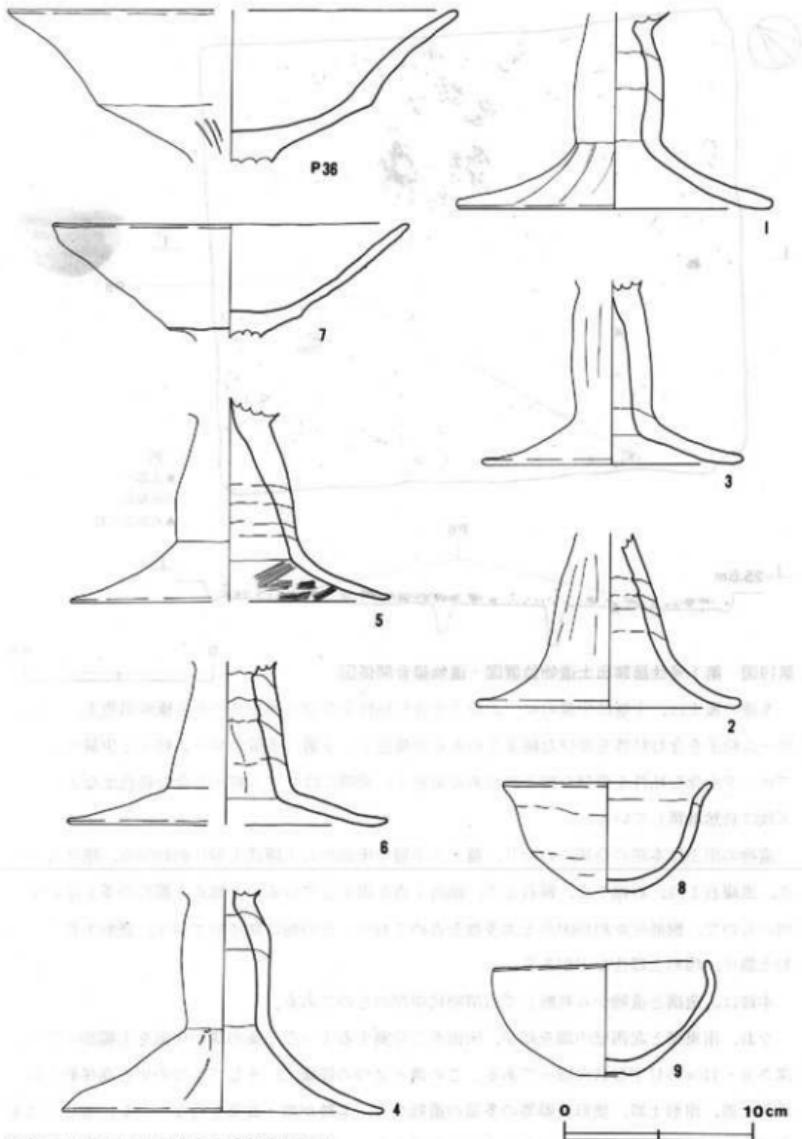
第19図 第1号住居跡出土遺物位置図・遺物接合関係図

本跡の覆土は、上層に少量のローム粒子を含む粘性を帯びた締まりのある極暗褐色土、中層にローム粒子を含む粘性を帯びた締まりのある暗褐色土、下層に多量のローム粒子と少量のロームブロックを含む粘性を帯びた締まりのある褐色土、壁際にはローム粒子を含む褐色土などがレンズ状に自然堆積している。

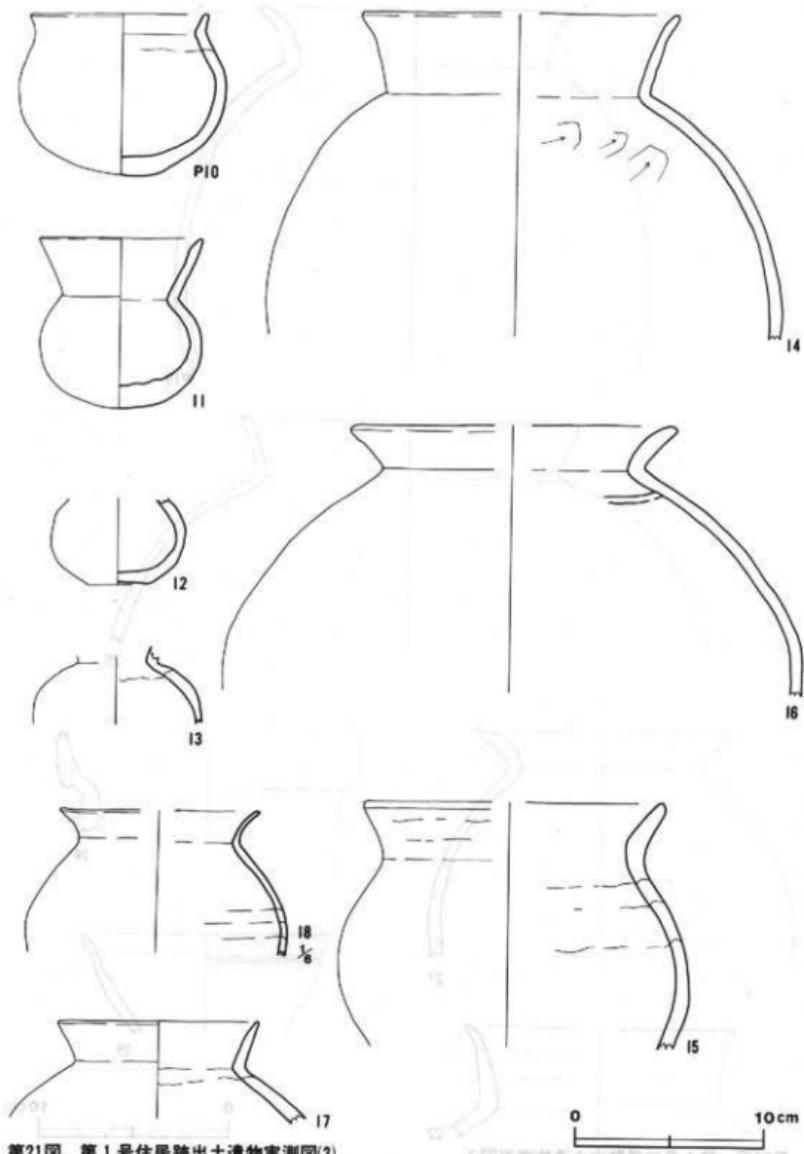
遺物の出土は本跡の全域にわたり、覆土の下層や床面から土師式土器片約1900点、球状土錘9点、黒曜石1点、石鏃1点、軽石2点、砥石1点が出土している。土師式土器片の多くは器種不明のもので、胴部片が約1500点と大多数を占めており、その他に高環形土器片、彫形土器片、埴形土器片、塊形土器片などがある。

本跡は、遺構と遺物から判断して古墳時代中期のものである。

なお、南東壁と北西壁の間を結び、床面を二分割するような一条の溝が床面を上幅20~25cm、深さ8~11cmのU字形状に掘ってある。この溝と2つの貯蔵穴、そして2つの炉と高環形土器、埴形土器、埴形土器、彫形土器等の多量の遺物から、本跡が増・改築を行なったか、もしくは集会所的な特殊なものであろうと考えることができる。

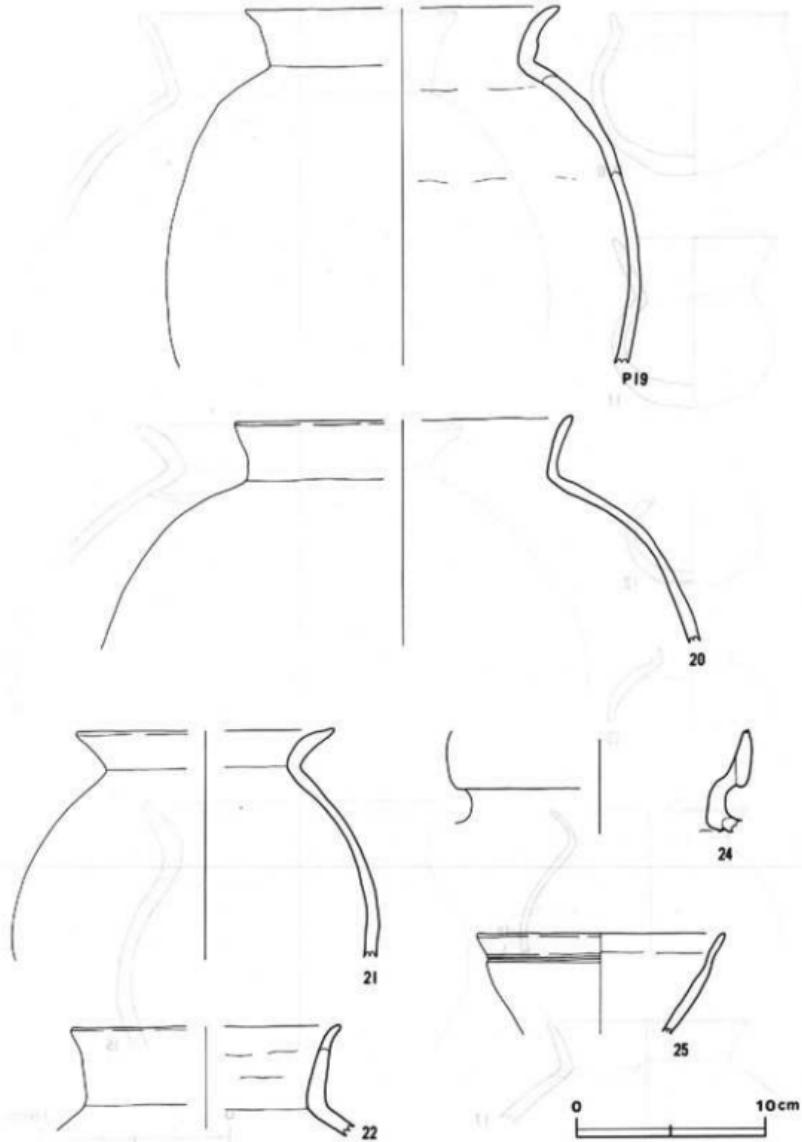


第20図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



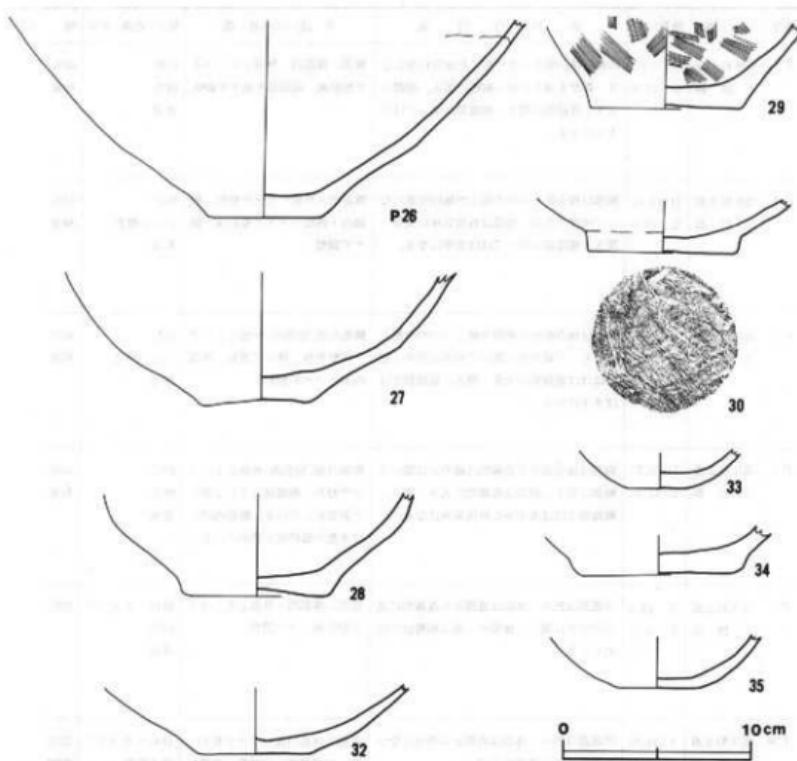
第21図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

（西田地主）出土遺物実測図(2)



第22図 第1号住居跡出土遺物実測図(3)

本図は実測図で、出発點を原点として示す。



第23図 第1号住居跡出土遺物実測図(4)

出土土器観察表(第20~23図)

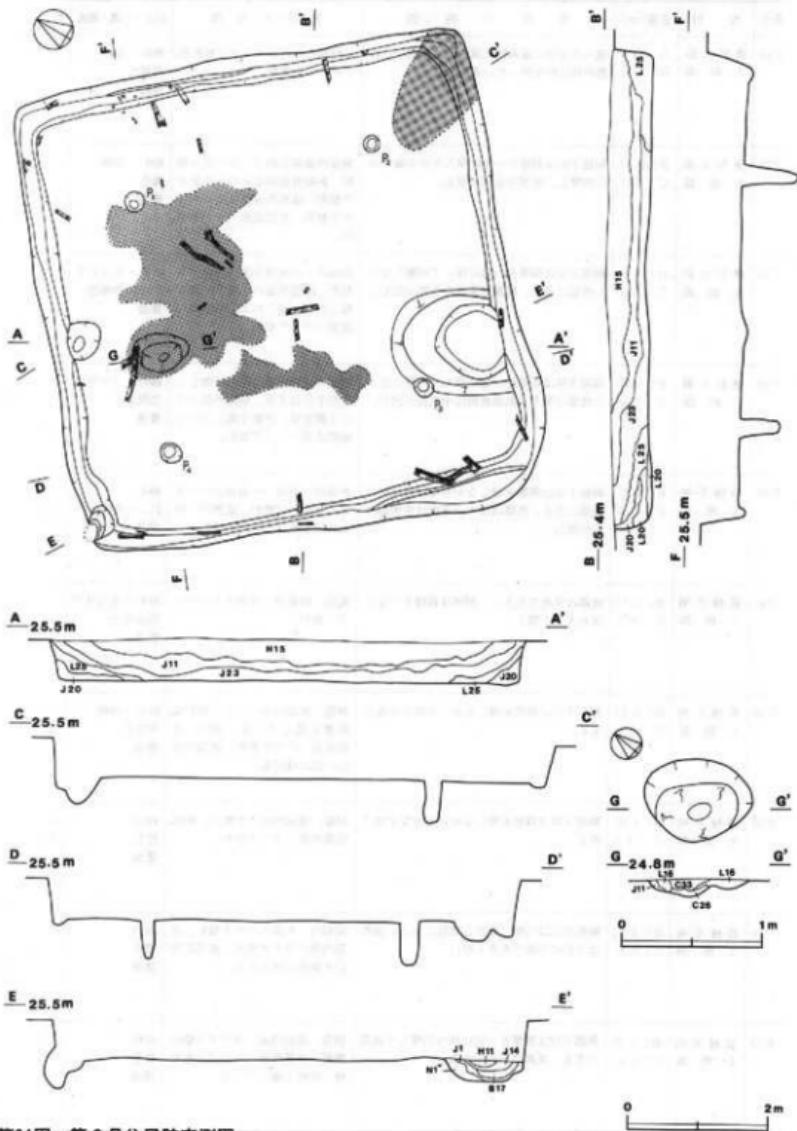
| 番号  | 器種             | 法量(cm)            | 器形の特徴                                                       | 手法の特徴                                                                 | 胎土・色調・地成            | 備考        |
|-----|----------------|-------------------|-------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|---------------------|-----------|
| P 1 | 高環形土器<br>土 鍋 器 | D[10.4]<br>E 16.6 | 脚部はやや膨みのある円柱状で裾部に至る。裾部は緩やかに開き、裾端部に至ってはほぼ水平になる。              | 脚部外側、裾部内・外側ともヘラナデ整形。裾端部はナデ整形。裾部外側に中心から外に向う3本の沈継が認められる。脚部内面に輪積痕が認められる。 | 砂粒<br>橙色<br>普通      | 60%<br>和泉 |
| P 2 | 高環形土器<br>土 鍋 器 | D[ 9.3]<br>E 14.3 | 脚部は接合部からやや膨らみをもって緩やかに開いて裾部に至る。裾部は外反気味に開き端部にやや歪みがあるかほぼ水平になる。 | 脚部、裾部外側ともヘラナデ整形後、ナデ調整。裾部内面へラナデ整形。脚部内面に多数の輪積痕が認められる。                   | 砂粒・スコリア<br>赤色<br>普通 | 50%<br>和泉 |

| 番号   | 器種             | 法量(cm)                   | 器形の特徴                                                                       | 手法の特徴                                                       | 胎土・色調・地紋              | 備考        |
|------|----------------|--------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|-----------------------|-----------|
| P 3  | 高环形土器<br>土 席 器 | D [9.8]<br>E 14.0        | 脚部は後合部からやや膨んだ後円柱状にな<br>り、器厚を減じながら底部に至る。底部は<br>大きく直線的に開き、底部に至ってほぼ<br>水平になる。  | 脚部、底部内・外面ともヘラナ<br>デ整形後、底部を横ナナ調整。                            | 砂粒<br>普通              | 40%<br>和泉 |
| P 4  | 高环形土器<br>土 席 器 | D [11.6]<br>E 17.0       | 脚部は後合部からやや膨んだ後円柱状にな<br>り、底部に至る。底部は外反気味に大きく<br>開き、底部に至ってほぼ水平になる。             | 底部内・外面へラナナ整形。底<br>部内・外面へラナナ整形後、横<br>ナナ調整。                   | 砂粒<br>普通              | 55%<br>和泉 |
| P 5  | 高环形土器<br>上 席 器 | D [10.9]<br>E 17.0       | 脚部は後合部から器厚を減じつつやや膨ら<br>みをもって底やかに開いて底部に至る。底<br>部はほぼ直線的に大きく開き、底部では<br>水平になる。  | 底部外曲、底部内・外面ともヘラ<br>ナナ整形後、横ナナ調整。底部<br>内面へラナナ整形。              | 砂粒<br>普通              | 40%<br>和泉 |
| P 6  | 高环形土器<br>土 席 器 | D [8.7]<br>E (17.0)      | 脚部は後合部から直線的に緩やかに開いて<br>底部に至る。底部は直線的に大きく開き、<br>底部では水平から外反気味になる。              | 底部外曲、底部内・外面ともヘラ<br>ナナ整形後、横ナナ調整。底部<br>内面には多数の輪滑道が認められる。      | 砂粒<br>普通              | 50%<br>和泉 |
| P 7  | 高环形土器<br>上 席 器 | A 19.0<br>E (6.2)        | 环底部は凹み、体部は底部から直線的に逆<br>八の字状に開く。体部の一部に剥離痕が認<br>められる。                         | 底部、体部内・外面ともヘラナ<br>ナ整形後、ナナ調整。                                | 砂粒・スコリア<br>褐色<br>普通   | 30%<br>和泉 |
| P 36 | 高环形土器<br>土 席 器 | A (24.0)<br>E (8.0)      | 环底部は凹み、体部は底部から外反しながら<br>大きくなざく逆八の字状に開く。                                     | 底部、体部内面へラナナ整形<br>後、口縁部横ナナ整形。底部・<br>体部外側斜方向へのラナナ整形。          | 砂粒・スコリア<br>明示褐色<br>普通 | 25%<br>和泉 |
| P 8  | 塊形土器           | A 11.0<br>B 5.8<br>C 2.5 | 底部は小さく、中央部がやや凹む。器厚を<br>一定に保ち、内寄しながら立ち上がり、口<br>縁部で外傾する。底部、頂部の内面の剥離<br>痕が著しい。 | 底板、脚部、口縁部内・外面と<br>もヘラナナ整形後、口縁部をナ<br>ナ整形。底部外側に輪滑道が認<br>められる。 | 砂粒<br>明示褐色<br>普通      | 90%       |
| P 9  | 塊形土器           | A 7.1<br>B 5.9<br>C 2.8  | 底部は小さく、中央部が凹む。底部は底盤<br>から器厚を減じながら半球状を呈する。口<br>縁部で強く内寄する。脚部上位に剥離痕が<br>認められる。 | 底部、脚部、口縁部内・外面と<br>もヘラナナ整形後、口縁部をナ<br>ナ調整。                    | 砂粒<br>明示褐色<br>普通      | 80%       |

| 番号  | 器種          | 法算(cm)                     | 器形の特徴                                                                                                          | 手法の特徴                                                                                                | 粘土・色調・施灰                     | 備考          |
|-----|-------------|----------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------|-------------|
| P10 | 堆形土器<br>土師器 | A(9.4)<br>B(8.4)           | 底部は丸底で不安定。肩部は底部からやや<br>器厚を減しながら球状の肩部を作っている。<br>口縁部は小さく、底部から外傾している。                                             | 底部、肩部、口縁部内・外側とも<br>もヘラナデ整形。口部はナデ<br>調整。肩部内面に輪摺痕が認め<br>られる。                                           | 砂粒・砂礫<br>赤色<br>普通            | 80%         |
| P11 | 堆形土器<br>土師器 | A(8.2)<br>B(9.1)<br>G(6.0) | 口部は一定の器厚を保ち頸部から直腹の<br>ように字状に開く。肩部は球状を呈し、最<br>大径を肩部中位にもち、器厚を増しながら<br>丸底の底面に至る。底部は凹凸があり不<br>定である。底部内面に剥離痕が認められる。 | 口縁部内・外側、肩部上位とも<br>外腹面ナデ整形。肩部、底部内<br>・外側ヘラナデ整形。                                                       | 砂粒<br>にふい赤褐色<br>普通           | 100%<br>和泉I |
| P12 | 堆形土器<br>土師器 | C(3.2)<br>G(4.6)           | 肩部は球状を呈し、最大径を肩部中位にも<br>ち、器厚を一定に保ちながら平底の底部に<br>至る。底部は中央部がやや凹む。                                                  | 肩部、底部内・外側ともヘラナ<br>デ整形。                                                                               | 細砂・スコリア<br>・砂粒<br>明赤褐色<br>普通 | 30%         |
| P13 | 堆形土器<br>土師器 | G(3.6)                     | 残存している口縁部は頸部からくの字状に<br>開く。肩部は球状を呈すと思われる。                                                                       | 口縁部内・外側ヘラナデ整形。肩<br>部内・外側ヘラナデ整形。肩部<br>内面の一帯にナデ調整が見られ<br>る。また、輪摺痕が認められる。                               | 細砂<br>にふい褐色<br>普通            | 10%<br>和泉   |
| P14 | 堆形土器<br>土師器 | A(16.0)<br>B(17.3)         | 底部から一定の器厚を保ちながらくの字<br>状に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁<br>部に歪みがある。肩部は一定の器厚を保ち、<br>球形を呈する。肩部中位に最大径をもつ。                       | 口縁部内・外側ヘラナデ整形。肩<br>部内面ヘラナデ整形。肩部外側<br>ヘラナデ整形後、ナデ調整。                                                   | 砂粒<br>褐色<br>普通               | 30%<br>和泉   |
| P15 | 堆形土器<br>土師器 | A(16.1)<br>B(13.0)         | 口縁部は頸部で器厚を増し、次第に器厚を<br>減しながらくの字状に外傾して口部に至<br>る。肩部は器厚を一定に保ちて球形を呈<br>する。肩部中位に最大径を有する。                            | 口縁部内・外側ヘラナデ整形。肩<br>部内面ヘラナデ整形。肩部外側<br>は磨滅が激しく不明瞭な所が多い。<br>一部に横ナデ調整が見られ<br>る。口縁部外側と肩部内面に輪<br>摺痕が認められる。 | 砂粒<br>赤色<br>普通               | 30%<br>和泉   |
| P16 | 堆形土器<br>土師器 | A(17.5)<br>B(15.3)         | 口縁部は頸部から器厚をやや増してくの字<br>状に外反する。肩部は一定の器厚を保ち、<br>頸部から内傾して中位に至る。ほぼ球形を<br>呈するものと思われる。                               | 口縁部内・外側ヘラナデ整形<br>後、横ナデ調整。肩部内・外側<br>横方向のヘラナデ整形。                                                       | 砂粒・スコリア<br>褐色<br>普通          | 10%<br>和泉I  |

| 番号  | 器種          | 法量(cm)             | 基部の特徴                                                                                  | 手法の特徴                                                                           | 地土・色調・地成                      | 備考         |
|-----|-------------|--------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------|------------|
| P17 | 變形土器<br>土師器 | A(10.6)<br>B(5.1)  | 口縁部は頂部から器厚を減しながら直線的にくの字状に聞く。胴部は一定の器厚を保ちながら内側している。                                      | 口縁部内・外側横ナナテ整形。胴部内・外側ヘラナナテ整形。頂部内面に輪積痕が認められる。                                     | 砂粒・砂礫<br>明赤褐色<br>普通           | 10%<br>和泉I |
| P18 | 變形土器<br>土師器 | A(21.0)<br>B(15.0) | 口縁部は胴部から器厚を一定に保ちながらゆるやかに外反して聞く。胴部は一定の器厚を保ち、口縁部から内側して中位に至る。ほぼ球状を呈するものと思われる。             | 口縁部内・外側ヘラナナテ整形後、横ナナテ調整。胴部内・外側方向のヘラナナテ整形。胴部内面に輪積痕が認められる。                         | 砂粒・スコリア・<br>砂礫<br>に上い褐色<br>普通 | 20%<br>和泉  |
| P19 | 變形土器<br>土師器 | A(16.7)<br>B(19.0) | 口縁部は胴部上位から器厚を増し、胴部からくの字状に緩やかに外反して聞く。胴部は頂部から内側して球状を呈する。胴部中位に最大性を有し、さらに内側して底部に至るものと思われる。 | 口縁部内・外側ヘラナナテ整形後、横ナナテ調整。胴部内・外側ヘラナナテ整形後、内・外側に斜面を施したらしくその一部が見られる。胴部内面上位に輪積痕が認められる。 | 砂粒<br>青色<br>普通                | 20%<br>和泉  |
| P20 | 變形土器<br>土師器 | A(18.0)<br>B(12.0) | 口縁部に頂部からやや器厚を増しながらくの字状に聞く。胴部は口縁より器厚を減じたまま中位へ向かう。ほぼ球状を呈するものと思われる。全体に磨滅が激しい。             | 口縁部内・外側ヘラナナテ整形後、横ナナテ調整。胴部内・外側方向のヘラナナテ整形。                                        | 砂粒<br>に上い褐色<br>普通             | 10%<br>和泉  |
| P21 | 變形土器<br>上師器 | A(13.8)<br>B(12.1) | 口縁部は胴部から器厚を増して外反しながらくの字状に聞く。胴部は器厚を一定に保ちながら胴部から内側して中位に至る。ほぼ球状を呈するものと思われる。               | 口縁部内・外側ヘラナナテ整形後、横ナナテ調整。胴部内面横方向のヘラナナテ整形。胴部外側斜方向のヘラナナテ整形。                         | 砂粒・砂礫<br>橙色<br>普通             | 10%<br>和泉  |
| P22 | 變形土器<br>土師器 | A(14.4)<br>B(5.4)  | 口縁部は頂部で器厚を増し、次第に減しながらゆるやかに外傾して口縁部に至り、さらに口縁部で外反する。胴部は内側するものと思われる。                       | 口縁部内・外側ヘラナナテ整形後、横ナナテ調整。胴部内・外側斜方向のヘラナナテ整形。口縁部内面に輪積痕が認められる。                       | 砂粒<br>橙色<br>普通                | 5%         |
| P24 | 變形土器<br>上師器 | B(4.9)             | 胴部で器厚を増し、外傾した後垂直に立ち上がる。折邊し口縁である。                                                       | 頭部、口縁部外側横ナナテ整形。<br>胴部、口縁部内面斜面が直しく整形手法は不明。                                       | 砂粒<br>橙色<br>普通                | 3%         |

| 番号  | 器種          | 法量(cm)             | 器形の特徴                                       | 手法の特徴                                                    | 胎土・色調・地成・備考             |           |
|-----|-------------|--------------------|---------------------------------------------|----------------------------------------------------------|-------------------------|-----------|
| P25 | 埴形土器<br>土師器 | A 13.2<br>B( 5.3)  | 逆八の字状に直線的に開き、口縁部と口縁部の端に段を作っている。             | 口縁部内・外側へラナデ整形後、ナデによる調整。                                  | 砂粒・砂粒<br>明褐色<br>普通      | 30%       |
| P26 | 埴形土器<br>土師器 | B(10.4)<br>C 6.0   | 胴部下位は器厚を一定に保ちながら底やから底部に至る。                  | 胴部内横方向のヘラケズリ整形。胴部外斜方向のヘラケズリ整形。底部内面横方向のヘラナデ整形。底部底面へラナデ整形。 | 砂粒・砂粒<br>褐色<br>普通       | 10%       |
| P27 | 埴形土器<br>土師器 | B( 7.1)<br>C 6.2   | 胴部下位は器厚を一定に保って内凹しながら底部に至る。底部底面は中央部が凹む。      | 胴部内・外斜方向のヘラナデ整形。胴部外底の一帯に絞りを施した痕が見られる。底部内・底面へラナデ整形。       | 砂粒・スコリア<br>にぼい赤褐色<br>普通 | 10%       |
| P28 | 埴形土器<br>土師器 | B( 5.4)<br>C 6.0   | 胴部下位は器厚を一定に保ち、内凹しながら底部に至る。底部底面は中央部が凹む。      | 胴部・底部内面は剥離が激しく整形手法は不明。胴部外底一帯に絞り調整後、研磨を施している。底部底面へラナデ整形。  | 砂粒・スコリア<br>赤褐色<br>普通    | 10%       |
| P29 | 器種不明<br>土師器 | B( 4.2)<br>C 8.0   | 胴部下位は器厚を増しながらほぼ直線的に底部に至る。底面は厚く、底面は中央部がやや凹む。 | 胴部内・外斜方向のヘラ工具によるナデ整形。底部内・外斜面T工具によるナデ整形。                  | 砂粒<br>にぼい褐色<br>普通       | 5%<br>和泉  |
| P30 | 器種不明<br>土師器 | B( 2.7)<br>C 8.0   | 底部は底平で大きい。胴部は器厚を一定に保ち大きく圓く。                 | 底部、胴部内・外側ともヘラケズリ整形。                                      | 砂粒・スコリア<br>明褐色<br>普通    | 5%        |
| P32 | 器種不明<br>土師器 | B( 3.5)<br>C 6.0   | 胴部下位は器厚を増しながら平底に至る。                         | 胴部、底部内面へラナデ整形後、研磨を施している。胴部、底部底面へラナデ整形。胴部内面の一部に焼付着。       | 砂粒・砂粒<br>明褐色<br>普通      | 10%       |
| P33 | 器種不明<br>土師器 | B( 1.9)<br>C 3.3   | 胴部下位は器厚を増しながら平底に至る。                         | 胴部、底部内面ナナデ整形。胴部、底部外側へラナデ整形。                              | 砂粒<br>褐色<br>普通          | 10%<br>和泉 |
| P34 | 器種不明<br>土師器 | B( 2.1)<br>C( 9.2) | 胴部下位は内凹しながら底部に至る。底部は平底で大きく厚い。               | 胴部・外側へラナデ整形。底部内面へラナデ整形。底部底面に木葉痕が見られる。                    | 砂粒<br>褐色<br>普通          | 5%        |
| P35 | 器種不明<br>土師器 | B( 2.7)<br>C( 4.4) | 胴部下位は器厚を一定に保ち内凹して底部に至る。底部は平底である。            | 胴部、底部内面へラケズリ整形。胴部、底部外側へラケズリ整形後、研磨を施している。                 | 砂粒<br>褐色<br>普通          | 7%        |

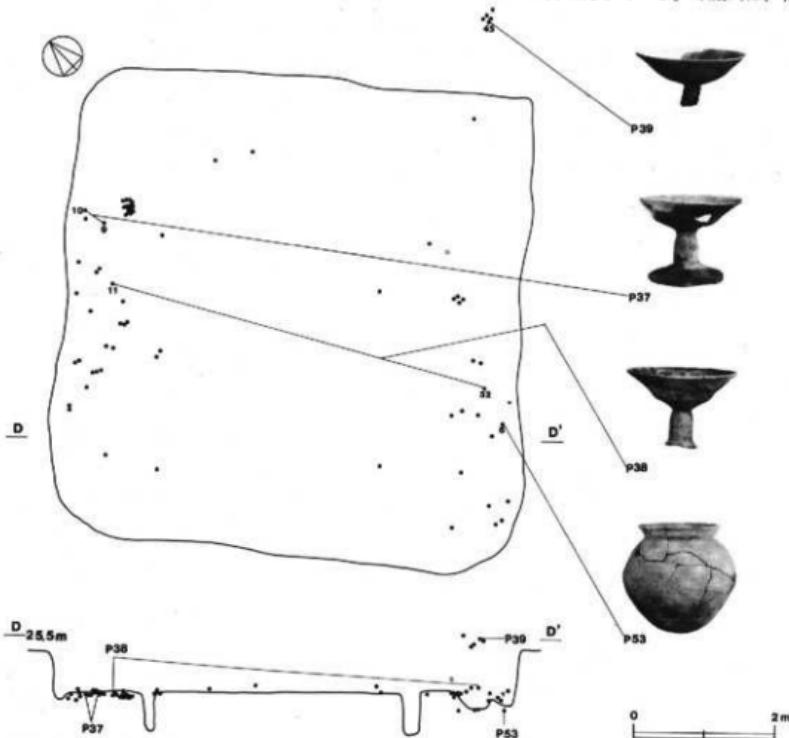


第24図 第2号住居跡実測図

## 第2号住居跡（第24図）

本跡は、調査区の西部C2g2区を中心に確認された住居跡で、第1号住居跡の南西側20.5mに位置している。

平面形は、長軸6.84m・短軸6.6mの隅丸方形を呈し、長軸方向は、N-50°-Eを指している。壁は、締まりのあるロームで、壁溝からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は、50~73cmである。壁下には、上幅15~29cm、深さ11~15cmのU字形の壁溝が南西壁の南コーナー付近で一部床面を通るが全周している。床面は、ロームで全体的に平坦で硬く、特に中央部は、よく踏みしめられている。さらに、床面のほぼ全域にわたって多量の焼土と炭化材が検出されたことから、本跡は焼失家屋と考えられる。炉は、床面の中央から北西側に位置し、長径77cm・短径59cmの楕円形を呈し、床面を11cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には、多量の赤褐色の締まった焼土が堆積している。炉床は、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。貯蔵穴は、南



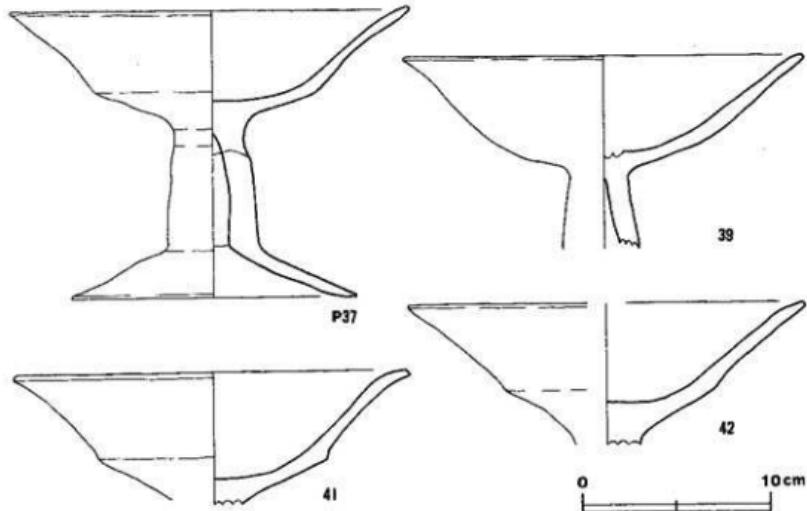
第25図 第2号住居跡出土遺物位置図・遺物接合関係図

側壁際と北西側壁際の2か所に検出されている。前者は、平面形が直径109cmの円形で、床面を皿状に34cmほど掘り込んでいる。また、二次的に掘り上げたロームをその周間に盛って周堤状に築いている。後者は、平面形が直径53cmのはば円形で、床面を擂鉢状に36cmほど掘り込んでいる。いずれの覆土も、ローム粒子を多量に含んだ褐色土が堆積している。ピットは5か所あるが、主柱穴は配列と規模からP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本と考えられ、規模は、長径26～35cm・短径22～30cm・深さ56～78cmである。

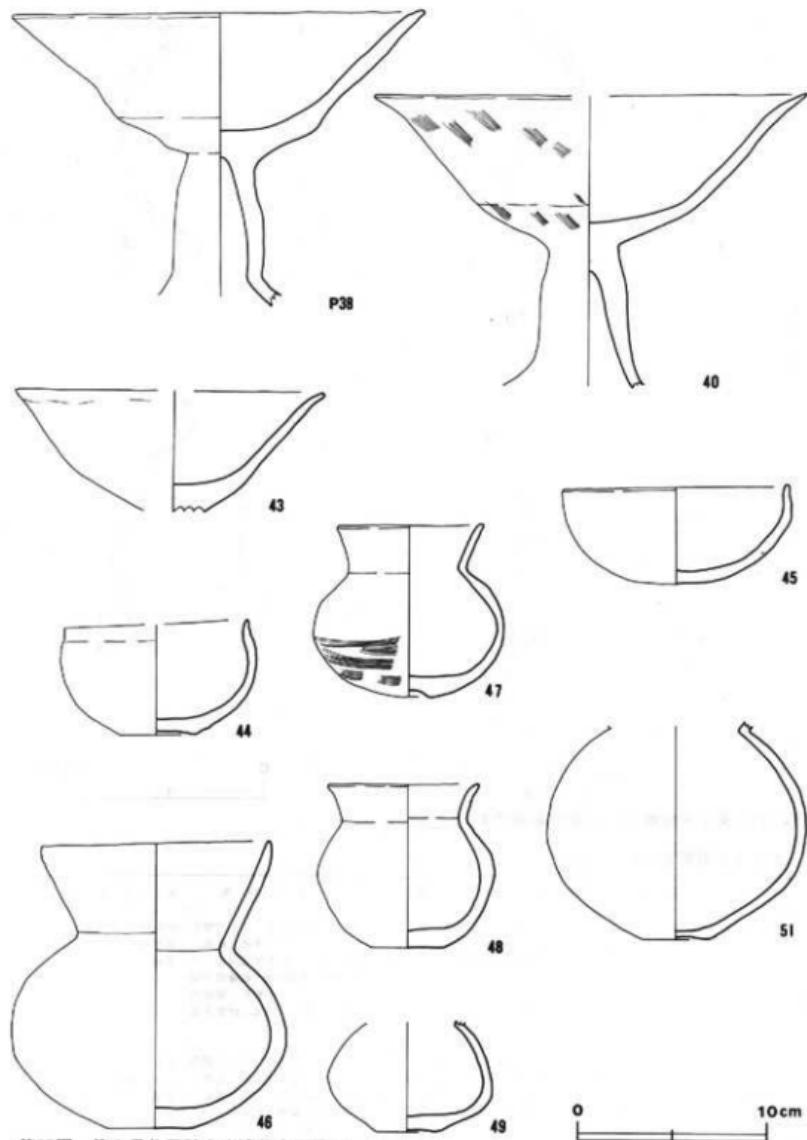
本跡の覆土は、上層に少量のローム粒子・炭化粒子・炭化物を含む粘性を帯びた締まりのある極暗褐色土、中層に少量のローム粒子と焼土粒子を含む粘性を帯びた締まりのある暗褐色土、下層に多量のローム粒子と少量の焼土粒子を含む粘性を帯びた締まりのある暗褐色土、壁付近に多量のローム粒子と焼土粒子・ロームブロックを含む粘性を帯びた締まりのある褐色土が自然堆積している。

遺物は、住居跡の全域から縄文式土器片3点の他、土師式土器片約400点、球状土錐2点、砾石片2点、磨石片1点、双孔円板1点が出土している。縄文式土器片は、周間から流れ込んだものと思われ、覆土上層から出土している。本跡に伴う土師式土器片は、南側と北側の覆土の下層や床面から比較的集中して出土している。

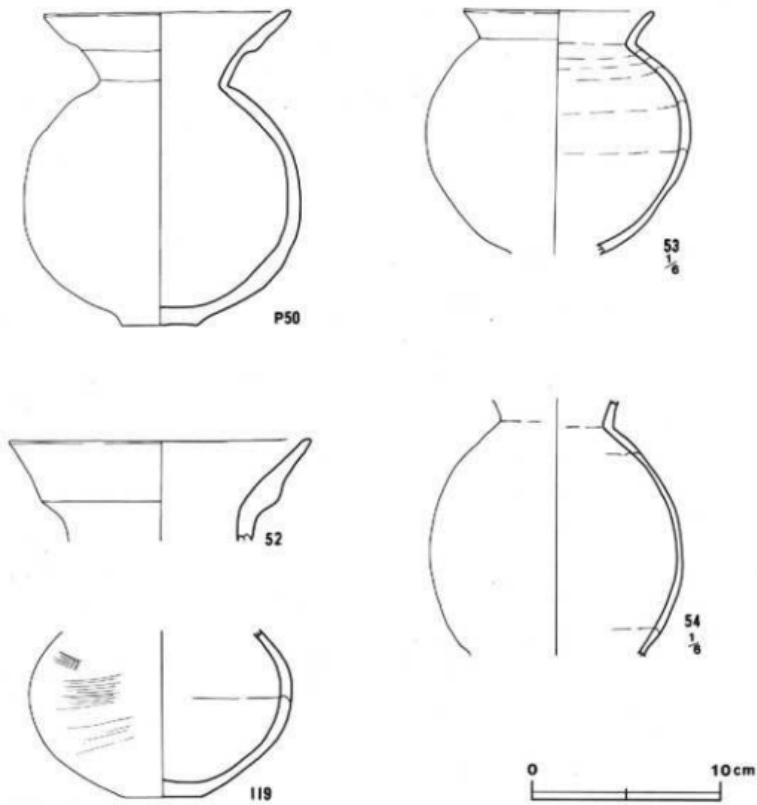
本跡は、出土遺物と遺構の形態・規模から判断して古墳時代中期のものと考えられる。



第26図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第27図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)



第28図 第2号住居跡出土遺物実測図(3)

出土土器観察表(第26~28回)

| 番号  | 器種           | 法量(cm)                              | 器形の特徴                                                                  | 手法の特徴                                                                                        | 粘土・色調・焼成             | 備考               |
|-----|--------------|-------------------------------------|------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------|------------------|
| P37 | 高环形土器<br>土師器 | A 21.3<br>B 15.9<br>D 9.0<br>E 15.2 | 环底部は凹み、体部は外輪気味に開く。脚部は接合部からやや膨んだ後円柱状になって根部に至る。根部は直線的に大きく聞く。             | 环底部、体部内面へラナデ整形後、横ナナデ調整。体部、底部、脚部、幅部の外表面方向へのラナデ整形。脚部内面に輪積痕が認められ、ヘラナデ整形。幅部内面横ナナデ整形。全体に研磨を施している。 | 砂粒・スコリア<br>黄褐色<br>普通 | 95%<br>和泉1<br>背通 |
| P38 | 高环形土器<br>土師器 | A 21.8<br>D 7.5<br>F 7.5            | 环底部は凹み、体部は直線的に聞く。底部と体部に不鮮明な縫が認められる。脚部は接合部からやや膨んだ後円柱状になって根部を接しながら根部に至る。 | 环底部、体部内面へラナデ調整後、研磨を施している。底部、体部、脚部外表面へラナデ整形。脚部内面に輪積痕が認められ、ヘラナデ整形。                             | 砂粒<br>において褐色<br>普通   | 70%<br>和泉1       |

| 番号  | 器種               | 法量(cm)                      | 解形の特徴                                                                                   | 手法の特徴                                                                             | 粘土・色調・焼成                  | 備考        |
|-----|------------------|-----------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|---------------------------|-----------|
| P39 | 高环形土器<br>土 鍋 器   | A(21.4)<br>D( 4.3)<br>F 6.0 | 环底部と体部が一体となって底部から縦や<br>かに外傾して開き、口縁部でさらにやや開<br>く。脚部は直線的に聞くと思われる。                         | 环底部、体部内面とも横方<br>向のヘラナデ整形後、口部を横<br>ナデ調整。脚部内・外曲棍方向<br>のヘラナデ整形。全面に木を施<br>している。       | 砂粒・スコリア<br>小色<br>普通       | 50%<br>和泉 |
| P40 | 高环形土器<br>土 鍋 器   | A(23.0)<br>D( 7.2)<br>F 8.2 | 环底部は凹み、体部は底部から直線的に逆<br>八の字状に開き、口縁部でさらに外側へ開<br>く。脚部は接合部からやや膨らみ、器厚を減<br>じながら円柱状になって底部に至る。 | 环底部、体部内面へナラナデ整形<br>後、ナデ調整。底部、体部、脚部、<br>外部面ハケ目洗のヘラ状工具に<br>よるナデ整形。脚部内面へナラ<br>ナデ整形。  | 砂粒<br>によい橙色<br>普通         | 50%       |
| P41 | 高环形土器<br>土 鍋 器   | A(21.1)<br>F( 7.0)          | 环底部は凹み、体部は底部から外反しながら<br>逆八の字状に開き、口縁部でさらに外反<br>する。底部と体部の境に筋をもつ。                          | 环底部、体部内面横方向のヘラ<br>ナデ整形。底部、体部外曲棍方<br>向のヘラナデ整形。口部を横ナ<br>デ調整。全面に研磨を施してい<br>る。        | 砂粒・スコリア<br>明赤褐色<br>普通     | 50%       |
| P42 | 高环形土器<br>土 鍋 器   | A(21.2)<br>F( 7.5)          | 环底部は平坦で、体部は底部から器厚を一<br>定に保ちながら直線的に逆八の字状に大き<br>く聞く。底部と体部の境に不鮮明な筋をも<br>つ。                 | 环底部、体部内面とも横方向の<br>ヘラナデ整形後、研磨を施してい<br>る。底部、体部外曲棍方向の<br>ヘラナデ整形。体部外側の一帯<br>に研磨が見られる。 | 砂粒・スコリア<br>によい橙色<br>普通    | 20%       |
| P43 | 高环形土器<br>土 鍋 器   | A( 6.5)<br>F( 6.4)          | 环底部は平出で、体部は底部から器厚を減<br>じながらほぼ直線的に逆八の字状に開き、<br>口縁部でさらに外反する。                              | 环底部、体部内面とも横ナデ整<br>形。底部、体部外面とも密着が<br>ほしいがヘラナデ整形後、ナデ<br>調整。底部、体部内面とも焼付<br>層。        | 砂粒・スコリア<br>委母<br>橙色<br>普通 | 30%       |
| P44 | 堆 形 上 鍋<br>土 鍋 器 | A( 9.7)<br>B 5.9<br>C 3.9   | 底部は平底で底面の中央部がやや凹む。脚<br>部は底部から一定の器厚を保ちながら半球<br>状を作って口縁部に至る。口縁部はほぼ垂直<br>に立つ。              | 底部、脚部、口縁部内・外面と<br>もヘラナデ整形後、全面に研磨<br>を施している。脚部内面に剥離<br>痕が認められる。                    | 砂粒<br>によい橙色<br>普通         | 100%      |
| P45 | 堆 形 上 鍋<br>土 鍋 器 | A 12.0<br>B 5.1             | 底部は丸底で、器厚をほぼ一定に保ちながら<br>半球状の脚部を作り、さらに、脚部を減<br>じながらほぼ垂直に立ち上がって口縁部に<br>至る。                | 底部、体部、口縁部内・外面と<br>もヘラナデ整形後、全面に研磨<br>を施している。体部内面に剥離<br>痕が見られる。                     | 砂粒<br>明赤褐色<br>普通          | 95%       |

| 番号   | 器種          | 法蓋(cm)                               | 器形の特徴                                                                               | 手作の特徴                                                                                        | 粘土・色調・焼成            | 備考         |
|------|-------------|--------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------|------------|
| P46  | 堆形土器<br>土師器 | A 12.1<br>B 15.15<br>C 4.6<br>G 10.4 | 口縁部は一定の器厚を保ち肩部から直線的ににくの字状に開く。肩部は球状を呈し、底盤を胴部中位にもち、さらに内側しながら平底の底部に至る。底部は器厚が厚いが小さい。    | 口縁部内曲斜方向のヘラナデ整形。口縁部外曲斜方向のヘラナデ整形。肩部内、外曲ヘラナデ整形後、胴部内面を早く全面に研磨を施している。胴部内面に輪積痕が見られる。              | 砂粒<br>明赤褐色<br>普通    | 100%<br>和泉 |
| P47  | 堆形土器<br>土師器 | A 7.8<br>B 9.1<br>C 6.6              | 口縁部は一定の器厚を保ち肩部から直線的ににくの字状に開く。肩部は、球状を呈し、底盤を胴部中位にもち、さらに内側しながら丸底の底部に至る。底部正面の中央部が側面に凹む。 | 口縁部内・外張ヘラナデ整形後、横ナデ調整。肩部内面ヘラナデ整形。胴部外面ハケ口次の工具ナデ整形。底部付近に凹凸が見られる。                                | 砂粒<br>にふい橙色<br>普通   | 98%        |
| P48  | 袋形土器<br>上師器 | A 8.3<br>B 8.7<br>C 3.8              | 口縁部は肩部からゆるやかに外傾して開き、口縁部に張ってきらに開く。肩部は球状を呈し、底盤を胴部中位にもち、内側しながら平底の底部に至る。                | 肩部、底部内・底面ヘラナデ整形。口縁部内・外張ヘラナデ整形後、横ナデ調整。                                                        | 砂粒<br>灰褐色<br>普通     | 60%<br>和泉  |
| P49  | 堆形土器<br>土師器 | B( 5.8)<br>C 3.4                     | 肩部は球状を呈し、最大径を胴部下位にもち、器厚を一定に保ちながら内側して平底の底部に至る。底部正面は中央部がわずかに凹む。                       | 肩部内面ナデ整形、肩部外面底盤ヘラナデ整形。                                                                       | 砂粒<br>にふい橙色<br>普通   | 80%<br>和泉  |
| P119 | 堆形土器<br>土師器 | B( 8.9)<br>C 4.0                     | 肩部は球状を呈し、最大径を胴部中位にもち、さらに内側しながら平底の底部に至る。                                             | 肩部内・外張ヘラナデ整形後、肩部外面に研磨を施している。底盤ヘラナデ整形。肩部下位から中位にかけて捺行等。                                        | 砂粒<br>褐色<br>普通      | 70%<br>和泉  |
| P50  | 壺形土器<br>上師器 | A 13.2<br>B 16.6<br>C 4.0            | 口縁部は肩部からくの字状を呈して外反気味に大きく開く複合口である。肩部はほぼ球状を呈し、中位に最大径を有する。底盤は小さい平底である。                 | 口縁部内面横ナデ整形後、研磨を施している。口縁部外張ヘラナデ整形後、複合口横ナデ調整。肩部外曲斜方向のヘラナデ整形後、胴部上・中位に粗筋の筋が見られる。様が胴部中・下位に付着している。 | 砂粒・砂礫<br>明赤褐色<br>普通 | 100%       |
| P51  | 堆形土器<br>土師器 | C 3.6<br>G(11.3)                     | 肩部は球状を呈し、最大径を胴部中位にもち、器厚を一定に保ちながら内側して底盤に至る。底部正面は中央部がやや凹み。小さい。                        | 肩部、底部内・外張ヘラナデ整形。肩部上位に研磨を施した部分が認められる。胴部中位から底部にかけて剥離が著しい。                                      | 砂粒・砂礫<br>褐色<br>普通   | 70%        |

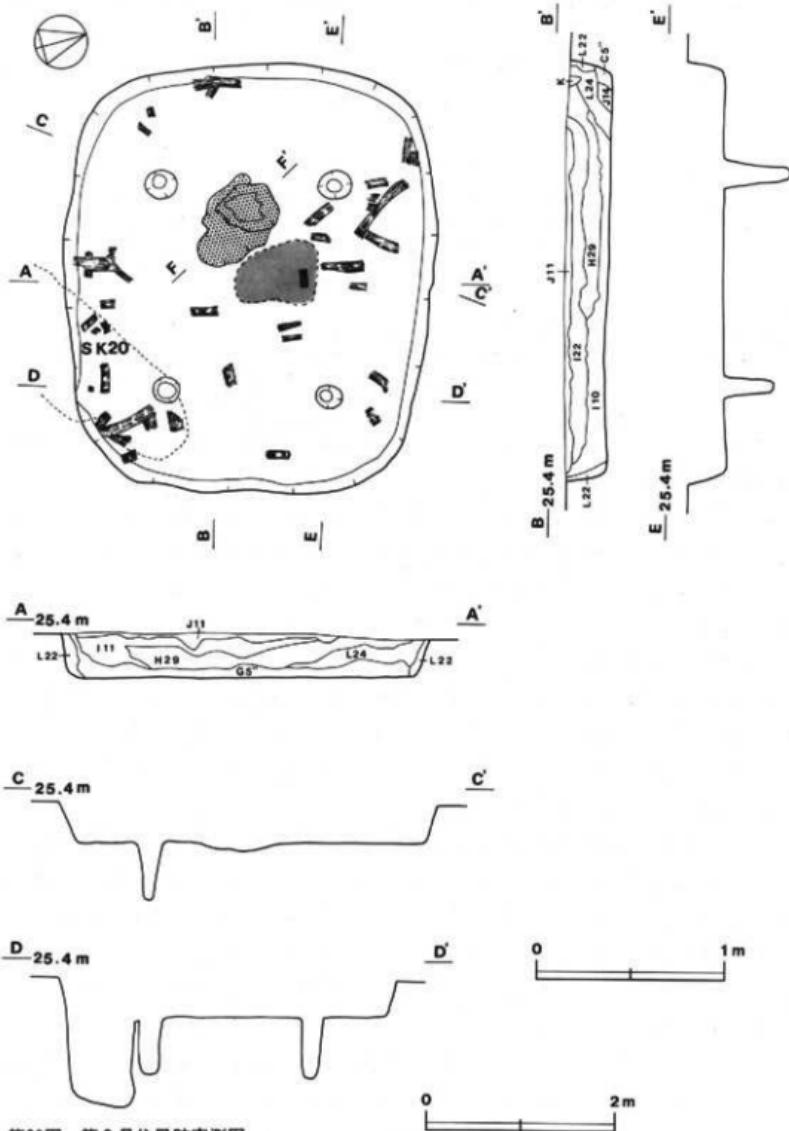
| 番号  | 器種         | 法量(cm)             | 器形の特徴                                                                            | 手法の特徴                                                                                  | 胎土・色調・焼成                   | 備考        |
|-----|------------|--------------------|----------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------|-----------|
| P52 | 壺形土器<br>土器 | A 16.0<br>B(5.3)   | 縁部の一部と口縁部だけであるが、頸部が<br>ほぼ垂直に立ち上がりそこから直線的に大<br>きく開いている。腹部と口縁部の境に施を<br>もつ。         | 口縁部、腹部内・外側とも輪ナ<br>デ整形。口縁部と頸部の境に段<br>を有している。                                            | 砂粒<br>にふい褐色<br>普通          | 20%       |
| P53 | 壺形土器<br>土器 | A 20.2<br>B(25.8)  | 口縁部は頸部からやや直線的に立ち上がり<br>さらに口縁部で外に向く。腹部はほぼ球状<br>を呈し、頸部中位に最大径をもった後、内<br>側しながら底部へ至る。 | 口縁部内・外側横ナデ整形。制<br>御部内・外面斜位のヘラナデ整形<br>さらに頸部上位から底位に研磨が<br>施されている。制御内面に多数<br>の輪積痕が認められる。  | 砂粒・砂塊・苔<br>母<br>明赤褐色<br>普通 | 80%       |
| P54 | 壺形土器<br>土器 | A(13.4)<br>B(27.0) | 口縁部は頸部から直線的に外へ開く。腹部<br>は瓶長の球状を呈し、最大径を腹部中位に<br>もち、後内側しながら底部へ平ら。器厚は<br>一定していない。    | 口縁部内・外側ヘラナデ整形後、<br>外側を横ナデ調整。制御内・外<br>面ヘラナデ整形後、ヘラによる<br>研磨が施されている。制御内・<br>外側に輪積痕が認められる。 | 砂粒・苔母<br>にふい褐色<br>普通       | 70%<br>和風 |

### 第3号住居跡（第29図）

本跡は、調査区の中央部 C2g 区を中心に確認された住居跡で、第1号住居跡の南側9.1mに位置している。本跡の南壁と第20号土坑が重複している。重複している南壁の部分は接している両側壁とは違い、ローム粒子を含む自然堆積を示すものであり、時間的差異を示している。また、土坑の調査結果から、その形態が縄文時代前期の落し穴と判明したことによって、本跡は第20号土坑より新しい遺構である。

平面形は、長軸4.57m・短軸3.86mの隅丸長方形を呈し、長軸方向は、N-71°-Wを指している。壁は、桶まりのあるロームで、床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は、35~45cmである。床面は、ロームで東壁付近にやや凹凸があるが、その他は平坦でよく踏みしめられている。北西と南東側の床面上に多量の炭化材が検出されたことから、本跡は焼失家屋と考えられる。炉は、床面の中央から西側に位置し、長径107cm・短径70cmの不整橢円形を呈し、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には、暗赤褐色の焼土ブロックを含む焼けた焼土が多量に堆積している。炉床は、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。また、炉に接する北東側に多量の焼土が堆積しており、これは炉内からかき出されたものと思われる。ピットは4か所あり、配列と規模からいずれも主柱穴と考えられる。規模は、長径26~35cm・短径25~30cm・深さ63~68cmである。

本跡の覆土は、上層に極少量のローム粒子と焼土粒子を含む暗褐色土と極暗褐色土、中層に極少量の焼土粒子と炭化粒子を含む柔かい黒褐色土、下層に極少量のローム粒子・焼土粒子・ロームブロックと焼土ブロックを含む粘性の有る極暗褐色土が、いずれもレンズ状に自然堆積してい

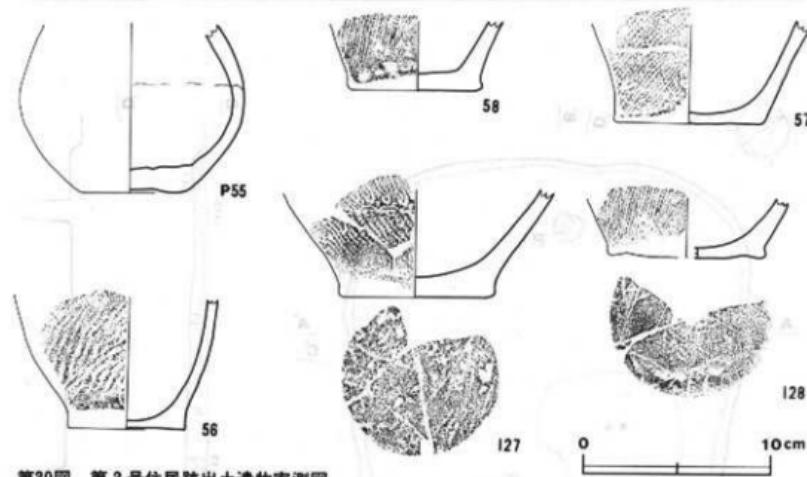


第29図 第3号住居跡実測図

る。

遺物は、覆土中から縄文式土器片9点、弥生式土器片約170点、土師式土器片220点、球状土錐2点、浮子1点が出土している。縄文式土器片は、周囲から流れ込んだものと思われ覆土上層から出土している。

本跡は、比較的多量の弥生式土器片と土師式土器片が覆土の下層や床直面上から混じって出土しているが、遺物と遺構の規模や形態などが周囲の住居跡(SI-4・6・7)と類似しており、古墳時代中期のものと考えられる。

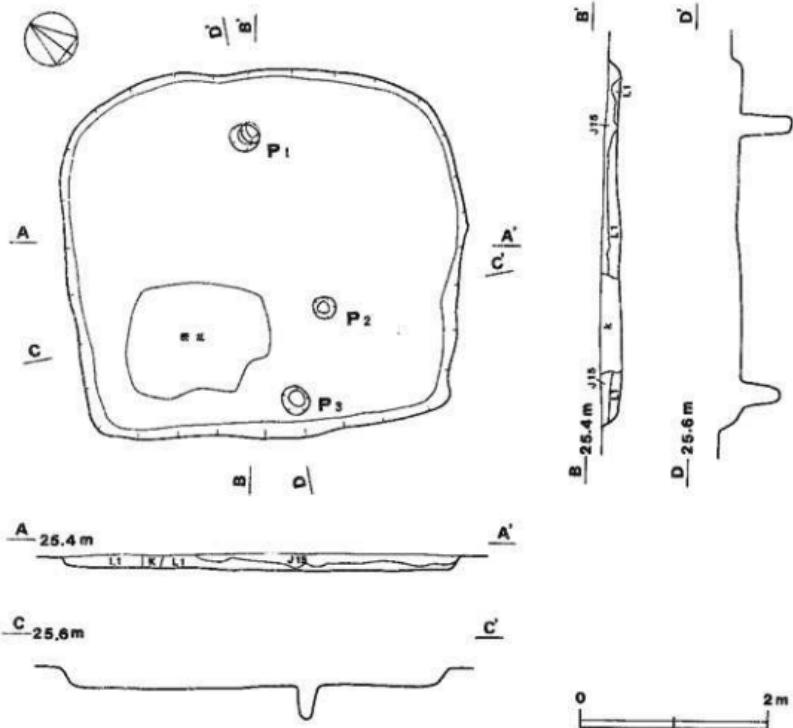


第30図 第3号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表(第30図)

| 番号   | 器種            | 法量(cm)          | 器形の特徴及び縄文様                                                                        | 地土・色調・地成                | 備考  |
|------|---------------|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-------------------------|-----|
| P56  | 縦形土器<br>弥生式土器 | B(7.0)<br>C 6.2 | 平底の底面は中央部がやや凹む。胴部は底部から器厚を一定に保って内側へ立ち上がる。胴部外面には細かい縄文を施し、内面はヘラケズリによる整形をしている。        | 砂粒<br>褐色<br>普通          | 15% |
| P57  | 縦形土器<br>弥生式土器 | B(5.2)<br>C 8.0 | 底部は平底で剥離が見られる。胴部は底部から器厚を一定に保って直線的に中位部に向かって立ち上がる。胴部外面には付加条縄文を施している。内面はヘラナガ整形をしている。 | 砂粒<br>にほい褐色<br>普通       | 15% |
| P58  | 縦形土器<br>弥生式土器 | B(3.7)<br>C 6.4 | 底部は平底で厚く、安定感がある。胴部は底部から器厚を減しながら直線的に開いている。外面には付加条縄文を施している。内面はヘラナガ整形をしている。          | 砂粒・砂糖・青<br>母にほい褐色<br>普通 | 15% |
| P127 | 縦形土器<br>弥生式土器 | B(5.6)<br>C 8.3 | 底部は平底で厚く、底面に木葉痕が見られる。胴部は底部からやや内側気味に大きく開いて立ち上がっている。外面は磨滅しているが縄文が施してある。内面は剥離が激しい。   | 長石<br>明赤褐色<br>普通        | 10% |

| 番号   | 器種            | 法量(cm)           | 器形の特徴及び文様                                                                             | 粘土・色調・焼成              | 備考  |
|------|---------------|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------|-----|
| P126 | 壺形土器<br>外生式土器 | B(3.0)<br>C(8.4) | 底部は平窓で、底面には木炭痕が見られる。洞部は底部からやや内寄気味に立ち上がっている。外底には付加条溝文が施されている。内面はナガ堅形している。              | 砂質・石英<br>に多い赤褐色<br>普通 | 7%  |
| P53  | 堆形土器<br>上・下部  | C(5.2)<br>C(8.9) | 肩部は球状を呈し、器厚を一定に保って平窓部。底部内外ともヘラナ<br>底の底部に至る。底部は厚く大きい。また、子母形。柄部、底部内面は剥離<br>痕跡の中央部がやや凹む。 | 砂粒<br>に多い黄褐色<br>普通    | 60% |



第31図 第4号住居跡実測図

#### 第4号住居跡（第31図）

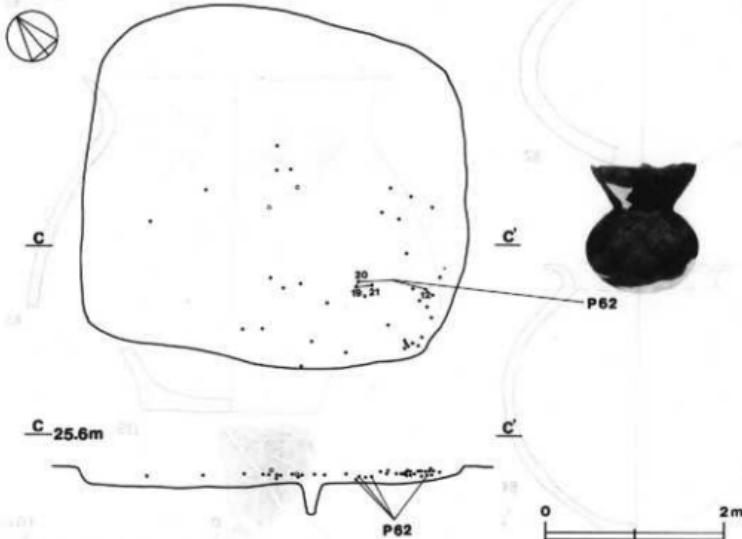
本跡は、調査区の南西部C2 j3区を中心に確認された住居跡で、第2号住居跡の南東側7.8mに位置している。

平面形は、長軸4.35m・短軸3.7mの隅丸長方形を呈し、長軸方向は、N-45°-Wを指している。壁は、北壁の南側半分中央部・北側部の3分の2が縮まりのあるロームで、床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は、12~18cmである。南側部分の約3分の1の壁は、後世の擾乱を受けて不明である。床面は、本跡の中央から西側の約4分の1が擾乱を受けて不明であるが、その他は縮まりのあるロームでゆるやかな起伏を示している。ピットは3か所あり、いずれも主柱穴と考えられる。規模は、長径23~31cm・短径20~30cm、深さは36~53cm（P<sub>1</sub>-53cm・P<sub>2</sub>-36cm・P<sub>3</sub>-42cm）である。

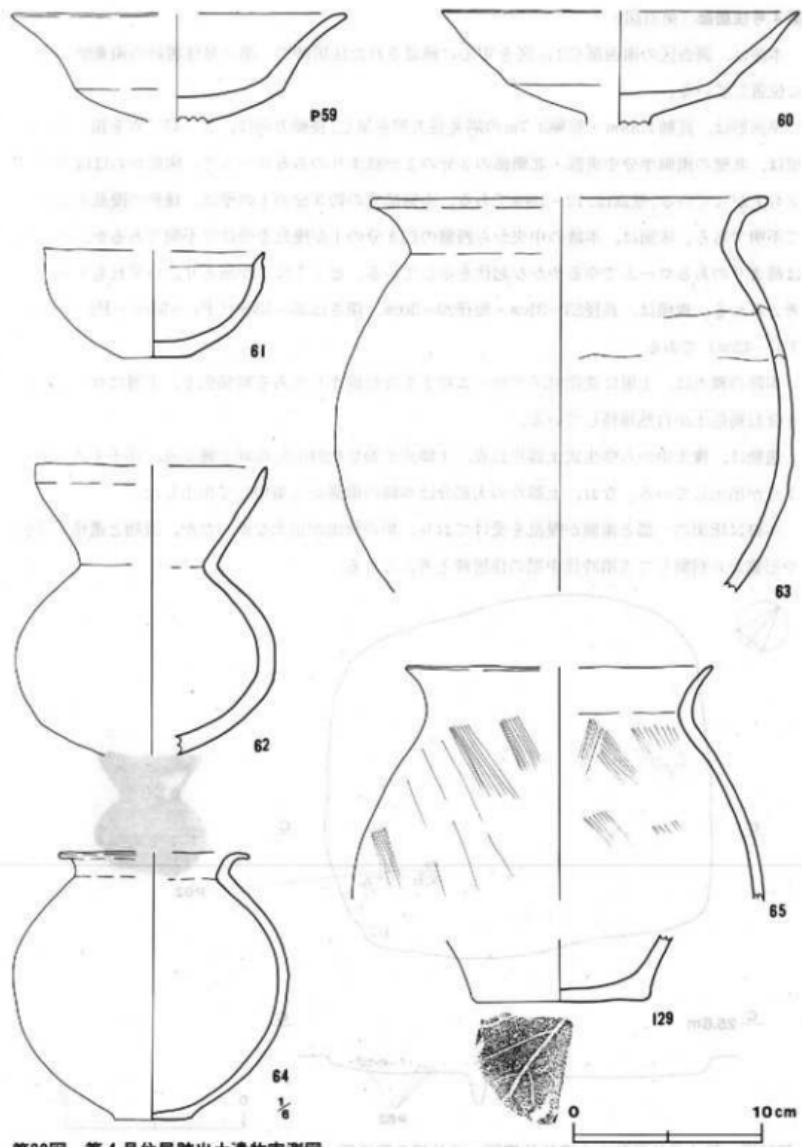
本跡の覆土は、上層に炭化粒子とローム粒子を含む縮まりのある暗褐色土、下層にローム粒子を含む褐色土が自然堆積している。

遺物は、覆土中から弥生式土器片11点、土師式土器片約340点、球状土錘2点、浮子1点、磨石1点が出土している。なお、土器片の大部分は本跡の南側から集中して出土した。

本跡は床面の一部と南側が擾乱を受けており、炉の検出が出来なかったが、遺物と遺構の規模や形態から判断して古墳時代中期の住居跡と考えられる。



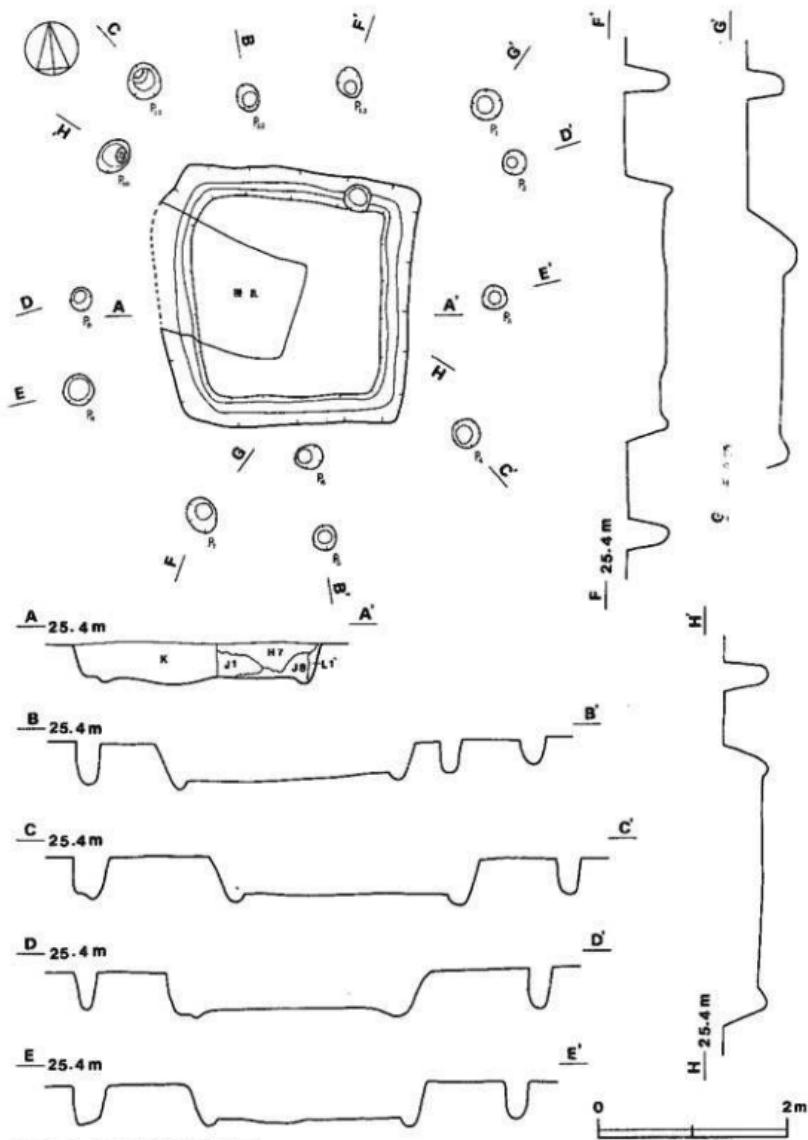
第32図 第4号住居跡出土遺物位置図・遺物接合関係図



第33図 第4号住居跡出土遺物実測図 国立科学博物館、国費分担出土調査会所蔵

出土土器観察表（第33回）

| 番号   | 器種            | 法量(cm)                        | 器形の特徴及び文様                                                                                  | 胎土・色調・焼成                                                                 | 備考                    |            |
|------|---------------|-------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------|-----------------------|------------|
| P129 | 壺形土器<br>弥生式土器 | B(3.3)<br>C(9.4)              | 底部は平底で大きく、安定感がある。表面に木葉模が見られる。肩部は底部から直線的に開いて立ち上がっている。外表面は磨滅して小鉢明だが、縁文が施してある。内面はヘラナデ整形をしている。 | 砂粒・石英<br>にふい青粉色<br>普通                                                    | 3%                    |            |
| P59  | 高环形土器<br>土師器  | A(17.8)<br>F(5.7)             | 平底部は凹み、体部は底部から器厚を減じながら外反して開く。底部と体部の境に棱をもつ。                                                 | 近部、体部内・外面ともヘラナデ整形。ロゼット模ナデ整形後、全面に研磨を施している。                                | 砂粒<br>赤色<br>普通        | 20%<br>和泉  |
| P60  | 高环形土器<br>土師器  | A(19.0)<br>F(6.0)             | 底部はほぼ平坦で、体部は底部から器厚を減じながら直線的に追八字状に開く。底部と体部の境に棱をもつ。底部、体部内面の剥離が著しい。                           | 底部内面の整形手法は不明。底部外表面へラナデ整形。肩部・外表面へラナデ整形後、ナデ調整。                             | 砂粒・スコリア<br>褐色<br>普通   | 15%<br>和泉I |
| P61  | 壺形土器<br>上部器   | A(11.8)<br>B 5.7<br>C 3.6     | 底部は平底で小さい。底部から一定の器厚を保ちながら内側して壺状の肩部を作る。口縁部に立ってはほぼ直面になる。口縁部で外傾する。                            | 底部、肩部、口縁部内・外表面ともヘラナデ整形。                                                  | 砂粒・スコリア<br>赤色<br>普通   | 70%        |
| P62  | 壺形土器<br>土師器   | A 12.31<br>B(15.5)<br>G(10.2) | 口頂部は肩部より器厚が薄く、肩部で直線的に外傾してくの字状を呈する。口縁部に立ってはほぼ直面になる。肩部は壺状を呈し、最大径を肩部中位にもち内壁しながら丸底の底部に至る。      | 口縁部内・外表面へラナデ整形。<br>ロゼット模ナデ整形。肩部内・外表面へラナデ整形後、肩部内面と底部を強く部分に朱を施している。        | 砂粒・スコリア<br>明赤褐色<br>普通 | 70%        |
| P63  | 壺形土器<br>土師器   | A 20.2<br>B(21.0)             | 口縁部は肩部から器厚を増しながら外傾して開き、口縁部で水平になる。肩部は壺状を呈し、肩部中位に最大径を有する。肩部から肩部にかけて器厚が増す。                    | 口縁部内・外表面へラナデ整形後、横ナデによる調整。肩部内・外表面へラナデ整形後、外面上部へ研磨を施している。                   | 砂粒・スコリア<br>橙色<br>普通   | 20%        |
| P64  | 壺形土器<br>土師器   | A 20.4<br>B 28.1<br>C 8.0     | 口縁部は肩部から器厚を増しながら直線的に外傾して開き、口縁部で水平になる。肩部はほぼ壺状を呈し、肩部中位に最大径をもち、内壁しながら平坦な底部に至る。                | 口縁部内・外表面へラナデ整形後、ナデによる調整。肩部内面はヘラケズリ焼形。肩部外表面はヘラケズリ整形後、研磨が施されている。底部はヘラナデ整形。 | 砂粒・青母<br>明赤褐色<br>普通   | 30%<br>和泉  |
| P65  | 壺形土器<br>上部器   | A(16.4)<br>B(12.4)            | 口縁部は肩部から器厚を減じながらの字状に開く。肩部は器厚を一定に保ちながら内側して中位に至る。                                            | 口縁部内・外表面ナデ整形。肩部内・外斜面方向のヘラケズリ整形。                                          | 砂粒<br>橙色<br>普通        | 10%<br>和泉  |



第34図 第5号住居跡実測図

#### 第5号住居跡（第34図）

本跡は、調査区の中央部C2<sub>19</sub>区を中心に確認された住居跡で、第1号住居跡の南東側11.9mに位置している。

平面形は、一辺2.7mの隅丸方形を呈し、長軸方向は、N-9°-Eを指している。西壁の擾乱を受けている所と南壁は、締まりのあるロームが壁溝からほぼ垂直に立ち上がっている。東壁と北壁は、締まりのあるロームが壁溝から外傾して立ち上がっている。壁高は、30-39cmである。床面は、中央部から西壁までの擾乱を受けている所は軟らかいが、他はロームで、全体的に平坦で硬い。壁溝は、上幅28-38cm、深さ7-10cmのU字形を呈し、壁下を全周している。ピットは、壁外に13か所検出され、本跡をとりまくように配列されている。その規模は、長径25-40cm・短径23-40cm、深さ25-47cmである。本跡の床面に柱穴がないことと、付近の住居跡（SI-9・11・12）との類似性を考慮すると、本跡に伴う柱穴であると考えられる。

本跡の覆土は、上層に極少量のローム粒子とロームブロックを含む粘性を帯びた締まりのある黒褐色土、中層に少量のローム粒子を含む粘性を帯びた締まりのある暗褐色土、下層に少量のローム粒子、極少量のロームブロックと焼土粒子を含む粘性を帯びた締まりのある暗褐色土が自然堆積している。

遺物は、覆土中から弥生式土器片11点、覆土中と床面から土師式土器片約80点が出土している。

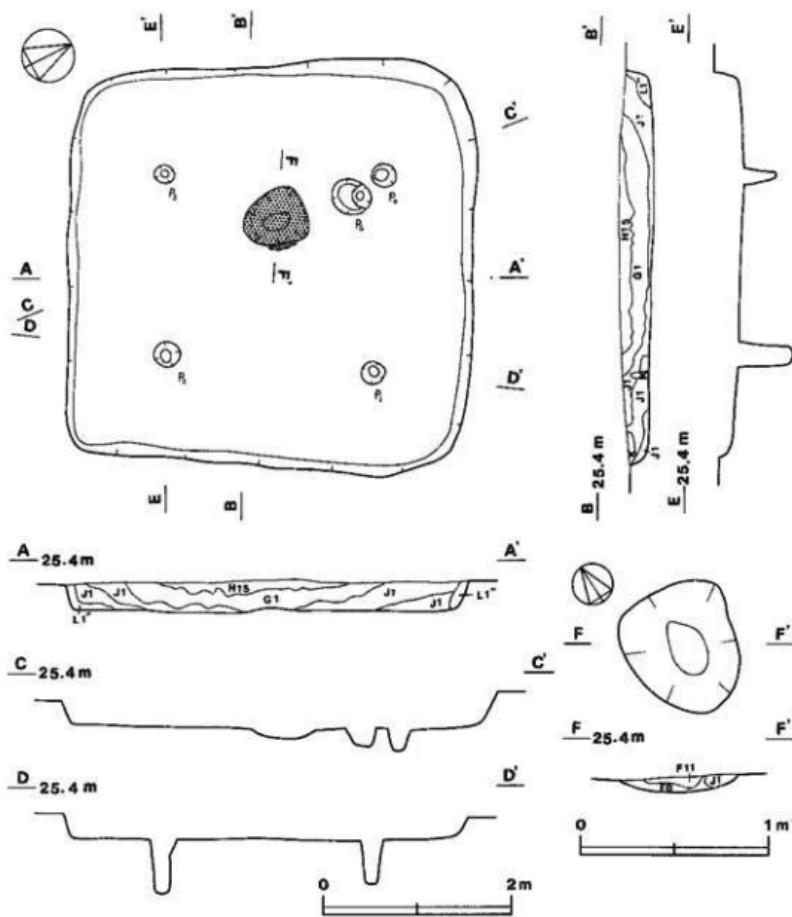
本跡は、出土遺物から判断して古墳時代中期のものと考えられる。

#### 第6号住居跡（第35図）

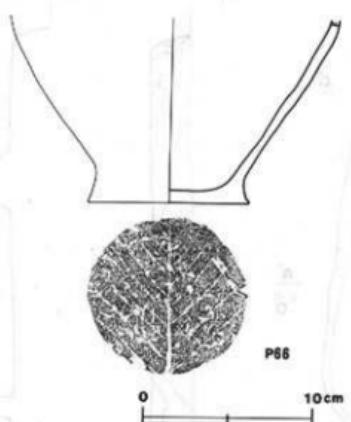
本跡は、調査区の中央部C2<sub>20</sub>区を中心に確認された住居跡で、第5号住居跡の南東側1.8mに位置している。

平面形は、長軸4.32m・短軸4.23mの隅丸方形を呈し、長軸方向は、N-31°-Eを指している。壁は締まりのあるロームで、北側コーナー部付近が床面から外傾して立ち上がっている。その他は、床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は、12-33cmである。床面はロームで、炉の周囲がやや低くなっているほかは、全体的に平坦で硬い。特に炉の周囲は、よく踏みしめられている。炉は、床面の中央からやや北西側に位置し、長径69cm・短径57cmの不整橢円形を呈し、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には、少量の暗赤褐色の締まった焼土が堆積している。炉床は、西部で四凸を示し、その付近のロームが火熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。ピットは5か所あるが、主柱穴は配列から考えてP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本と考えられる。P<sub>5</sub>もP<sub>4</sub>と係りをもつた支柱穴と思われる。その規模をP<sub>1</sub>からP<sub>5</sub>の順に列記すると、平面形は円形で径は25cm・25cm・18cm・23cm・29cm、深さは48cm・58cm・34cm・24cm・23cmである。

本跡の覆土は、上層に少量のローム粒子と炭化粒子を含む粘性を帯びた締まりのある黒褐色土、



第35図 第6号住居跡実測図



第36図 第6号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表(第36図)

| 番号  | 器種            | 法量(cm)           | 器形の特徴及び文様                                                                                     | 粘土・色調・焼成           | 備考  |
|-----|---------------|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------|-----|
| P66 | 壺形土器<br>弥生式土器 | B(10.9)<br>C 9.4 | 底部は平底で大きい。鮮明な木葉柄が残っている。胴部は底部から薄い器厚を一定に保ち、中位に向かってほど直線的に立ち上がる。胴部外面には附加条縞文を施している。内面はヘラナテ整形をしている。 | 砂粒・青緑<br>明褐色<br>普通 | 25% |
|     |               |                  |                                                                                               |                    |     |

第7号住居跡(第37図)

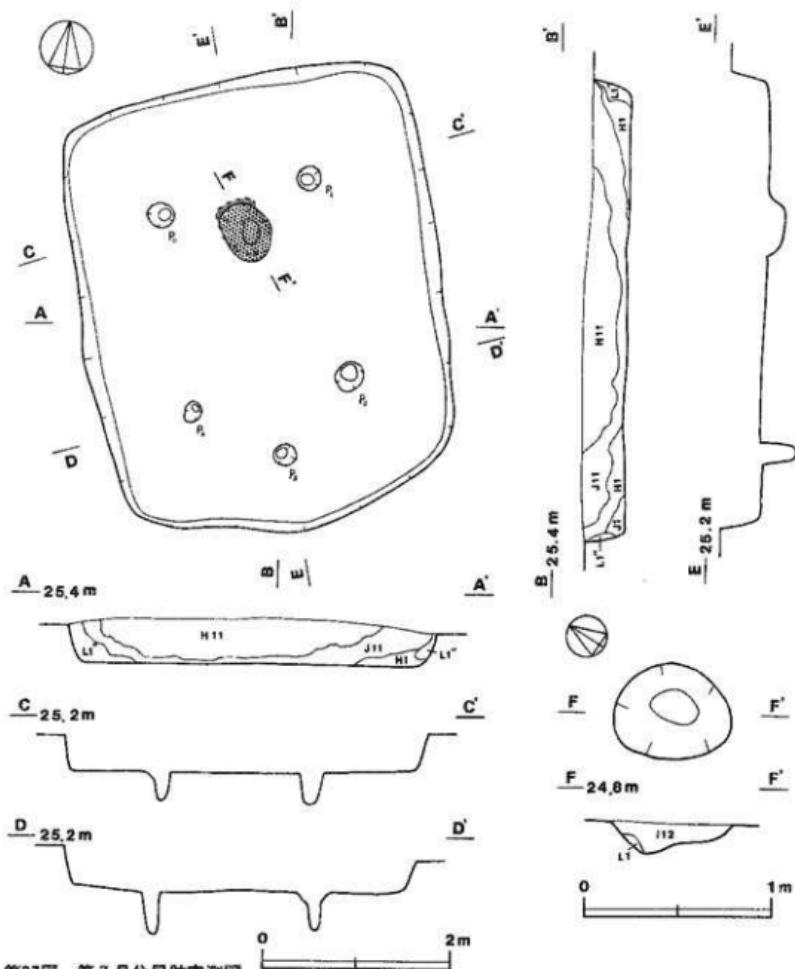
本跡は、調査区の南部D3az区を中心に確認された住居跡で、第6号住居跡の南側14.9mに位置している。

平面形は、長軸4.84m・短軸3.92mの南壁がやや張り出す隅丸長方形を呈し、長軸方向は、N-19°Wを指している。壁は、いずれも縮まりのあるロームで、床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は、32~41cmである。床面は、ロームで全体的に平坦で硬いが、特に5本のピットに囲まれた内側は、よく踏みしめられている。炉は、床面の中央から北側に位置し、長径65cm・短径50cmの楕円形を呈し、床面を18cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には、少量の焼土粒子・焼土ブロックとローム粒子を含む極暗褐色土が堆積している。炉床は、やや凸凹を示しており、凸部のロームが火熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。ピットは5か所あり、配

中層にローム粒子を少量含む粘性を帯びた柔かい黒色土、下層にローム粒子を少量含む粘性を帯びた縮まりのある暗褐色土が自然堆積している。

遺物は、覆土の中・下層や床面直上から弥生式土器片13点、土師式土器片約80点が出土している。

本跡は、弥生式土器片と土師式土器片が混じって出土しているが、遺物や遺構の規模と形態などが周囲の住居跡(SI-3・4・7・17)と類似していることから、古墳時代中期の住居跡と考えられる。



第37図 第7号住居跡実測図

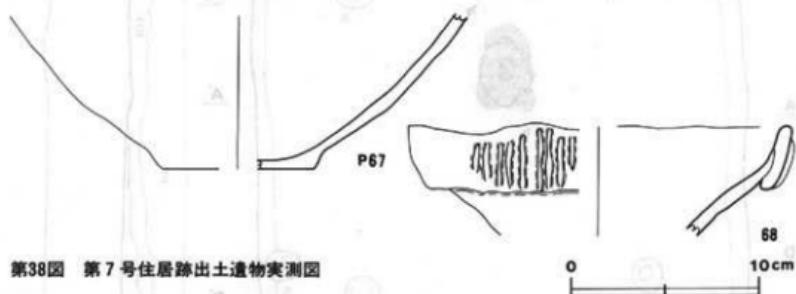
列と規模からいずれも主柱穴である。その規模は、長径25~33cm・短径18~30cm、深さ30~47cmである。

本跡の覆土は、上層に少量のローム粒子と焼土粒子を含む粘性を帯びた縮まりのある黒褐色土、中層に少量のローム粒子と焼土粒子を含む粘性を帯びた縮まりのある暗褐色土、下層に少量のローム粒子を含む粘性を帯びた縮まりのある黒褐色土、壁際に多量のローム粒子を含む縮まりのあ

る褐色土などが自然堆積している。

遺物は、弥生式土器片34点、土師式土器片約15点、メノウ質の石核1点が出土している。これらの遺物は、覆土の中・下層や床面直上から出土している。

本跡は、弥生式土器片と土師式土器片が混じって出土しており、弥生時代の平面形を示す住居跡であるが、遺物や周囲の住居跡（SI-3・6・8・10・17・18）との類似性を考慮して、一応その廃絶期を古墳時代中期の住居跡とした。



第38図 第7号住居跡出土遺物実測図

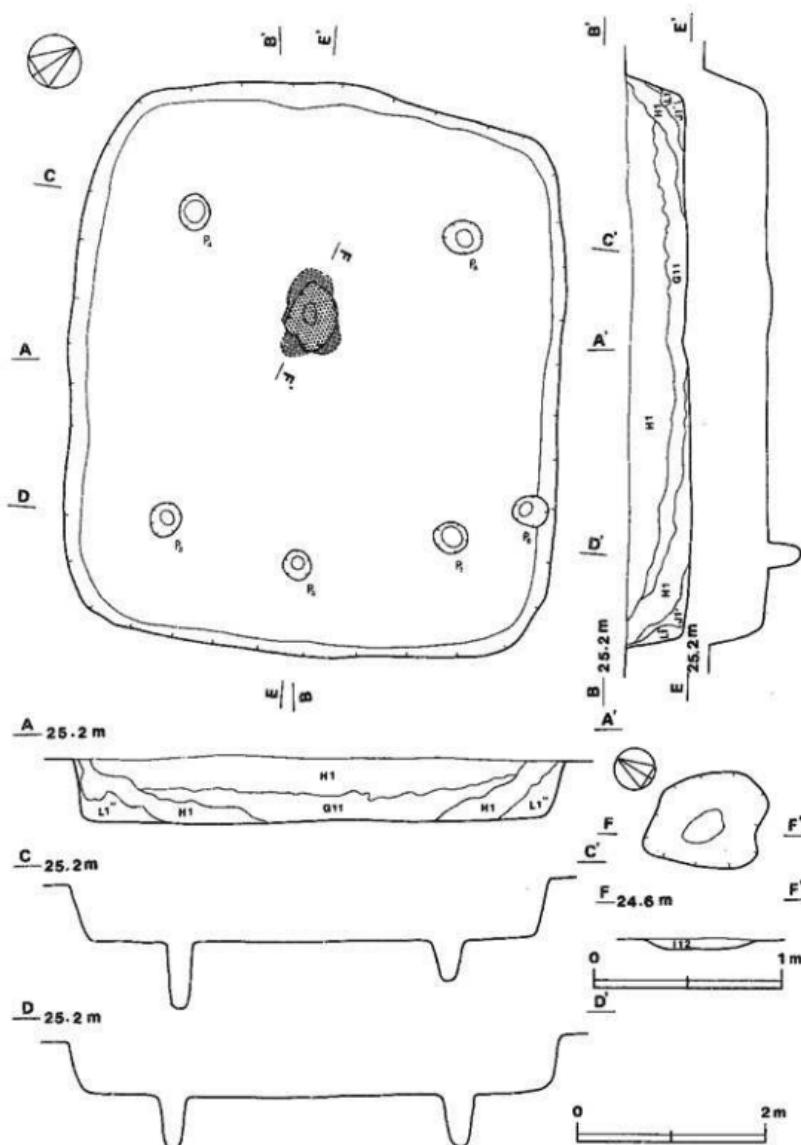
#### 出土土器観察表(第38図)

| 番号  | 器種            | 法量(cm)             | 器形の特徴及び文様                                                                                                                                      | 黏土・色調・焼成            | 備考 |
|-----|---------------|--------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------|----|
| P68 | 腹形土器<br>弥生式土器 | A(20.4)<br>B( 5.8) | 腹部から口縁部にかけての破片である。口縁部は厚さを一定に保って大きく開いている。口縁部は折り返し口縁である。胴部内・外面に朱を施している。口縁部に9本1単位とした輻方向の棒状浮紋を3か所(推定7か所)付けて区切り。その間は磨滅して不明であるが細かい縦文を施している。内面は剥離が多い。 | 砂粒<br>橙色<br>普通      | 5% |
| P67 | 腹形土器<br>土師器   | B( 8.1)<br>C( 8.0) | 胴部は厚さを一定に保ち、内側して底部に至る。底部は平坦な平底である。胴部内面には剥離が多い。                                                                                                 | 砂粒・スコリア<br>橙色<br>普通 | 5% |

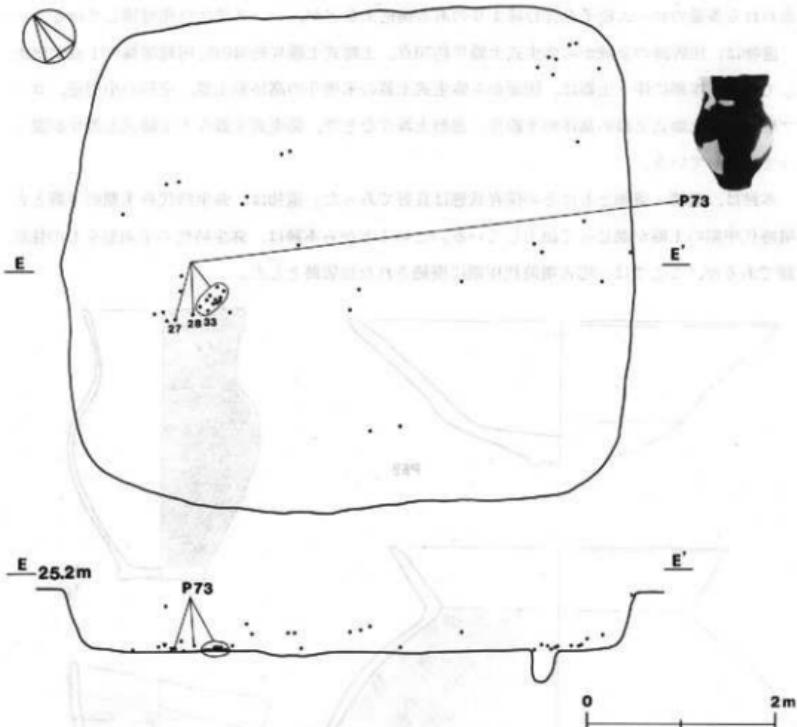
#### 第8号住居跡(第39図)

本跡は、調査区の南部C3-13区を中心に確認された住居跡で、第7号住居跡の北東側5.3mに位置している。

平面形は、長軸6.09m・短軸5.25mの隅丸長方形を呈し、長軸方向は、N-51°Wを指してい



第39図 第8号住居跡実測図



第40図 第8号住居跡出土遺物位置図・遺物接合関係図

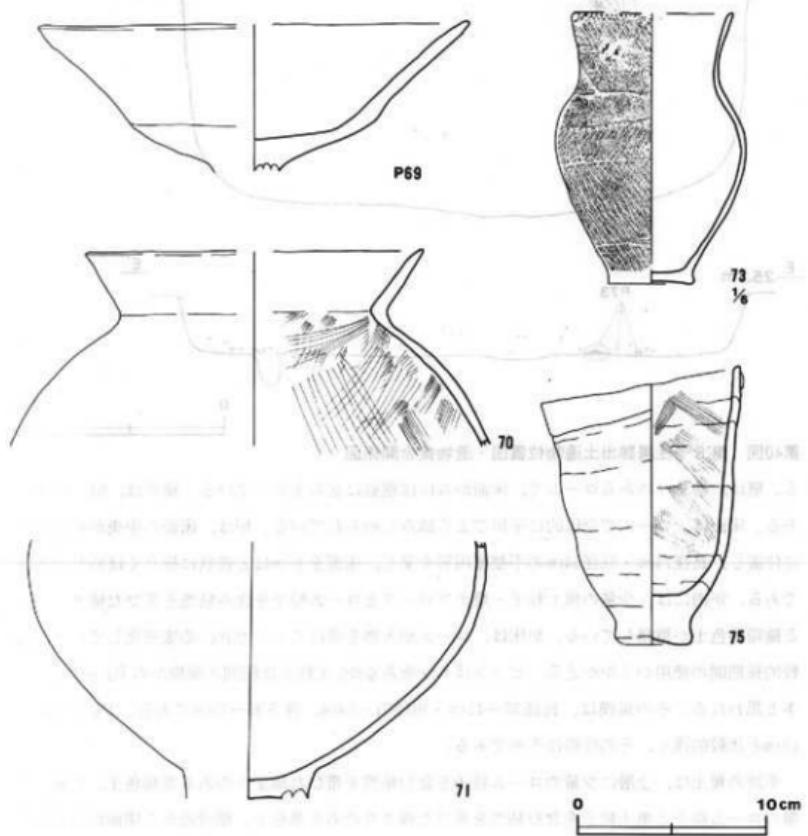
る。壁は、締まりのあるロームで、床面からほぼ垂直に立ち上っている。壁高は、51~61cmである。床面は、ロームで全体的に平坦でよく踏みしめられている。炉は、床面の中央から北西側に位置し、長径74cm・短径54cmの不整橢円形を呈し、床面を8cmほど皿状に掘りくぼめた地床である。炉内には、少量の焼土粒子・焼土ブロックとローム粒子を含み粘性を帯びた締まりのある極暗褐色土が堆積している。炉床は、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤変硬化しており、比較的長期間の使用がうかがえる。ピットは6か所あるが、主柱穴は配列と規模からP<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>の5本と思われる。その規模は、長径35~41cm・短径31~34cm、深さ35~70cmである。P<sub>6</sub>の深さは13cmと比較的浅く、その性格は不明である。

本跡の覆土は、上層に少量のローム粒子を含む粘性を帯びた締まりのある黒褐色土、下層に少量のローム粒子と焼土粒子を含む粘性を帯びた締まりのある黒色土、壁付近から床面向かって流れ込んだと考えられる少量のローム粒子を含む締まりのある黒褐色土と、壁際の壁の崩落土と

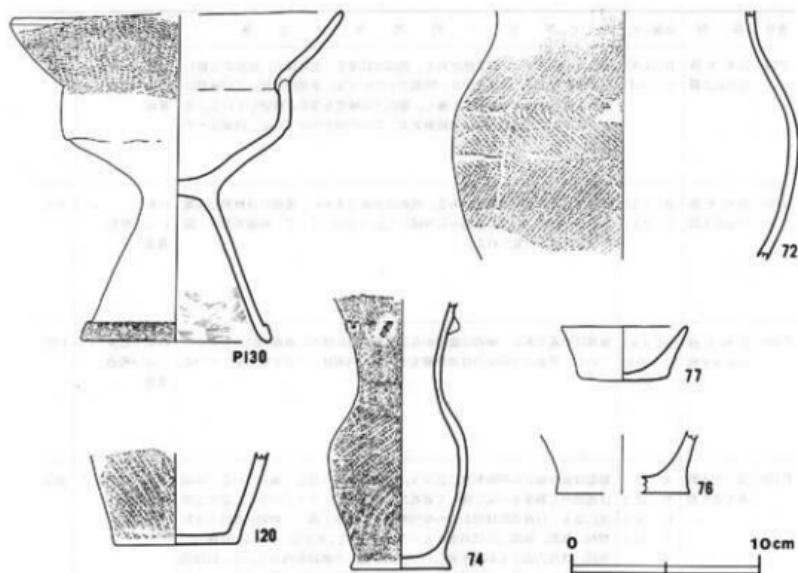
思われる多量のローム粒子を含む締まりのある褐色土などが、レンズ状に自然堆積している。

遺物は、住居跡の全域から弥生式土器片約70点、土師式土器片約340点、円筒埴輪片1点が出土している。本跡に伴う土器は、床面から弥生式土器の朱塗りの高環形土器、完形の小型壺、コップ形土器、土師式土器の高環形土器片、壺形土器片などで、弥生式土器片と土師式土器片が混じって出土している。

本跡は、遺構・遺物ともにその保存状態は良好であった。遺物は、弥生時代終末期の土器と古墳時代中期の土器が混じて出土している。このことから本跡は、弥生時代の平面形をもつ住居跡であるが、ここでは一応古墳時代中期に廃絶された住居跡とした。



第41図 第8号住居跡出土遺物実測図(1) (出典: 石川県立考古博物館「古墳時代の石川」)



第42図 第8号住居跡出土遺物実測図(2)

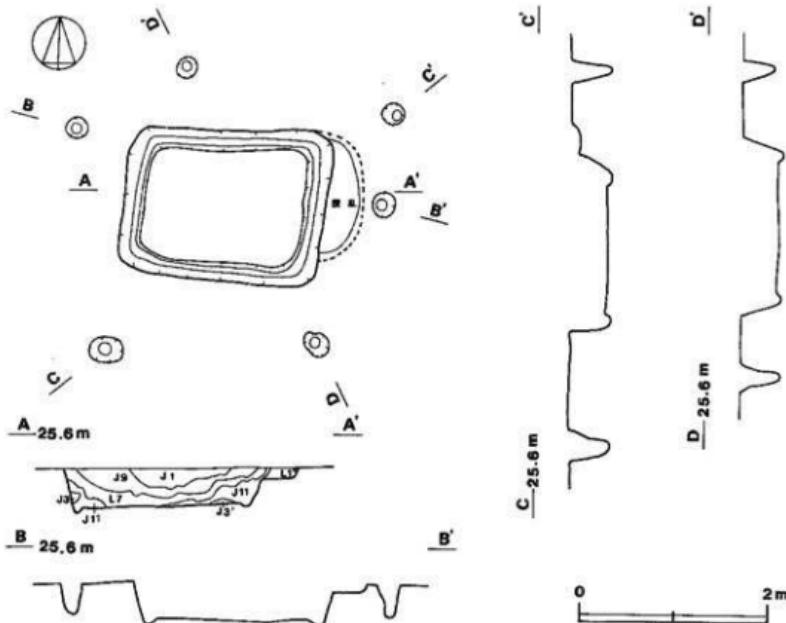
出土土器観察表（第41・42図）

| 番号  | 器種            | 法量(cm)                    | 器形の特徴及び文様                                                                                                                                                                             | 胎土・色調・焼成             | 備考  |
|-----|---------------|---------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------|-----|
| P72 | 壺形土器<br>外生式土器 | B(13.2)                   | 胴部中位から頸部にかけての破片である。頸部は薄い器厚を一定に保って内脣し、頸部でくびれている。外面には付加条溝文を羽状に施している。頸部は無文帶である。内面はヘラナデ整形。                                                                                                | 砂粒・雲母<br>に少い橙色<br>普通 | 10% |
| P73 | 壺形土器<br>外生式土器 | A 17.0<br>B 28.7<br>C 9.0 | 底部は平底で中央部がやや凹み、木葉痕が見られる。胴部は器厚を一定に保って底部から膨み、胴部上位に最大径を有して内脣する。頸部でくびれてから直線的に開いて口唇部に至る。外面は頸部に無文帶を有する他は全体に付加条溝文を施している。口縁部には2個1単位の瘤を6か所(推定10か所)付けている。口唇部にはヘラ状工具による押圧したキザミ目をめぐらしている。内面はナデ整形。 | 砂粒<br>橙色<br>普通       | 80% |

| 番号   | 器種             | 法量(cm)                              | 器形の特徴及び文様                                                                                                                                                                                                                                  | 胎土・色調・焼成              | 備考  |
|------|----------------|-------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------|-----|
| P74  | 煮形土器<br>外生式土器  | B(14.4)<br>C(5.4)                   | 底部は平底で厚く、安定感がある。胴部は器厚を一定に保ち、底部から膨む形で内側しながら立ち上がり、腹部でくびれた後、直線的に開いて口縁部に至る。外縁には付加条溝文を施し、腹部と口縁部を帯状に磨削している。さらに磨削した口縁部下端に連續刻文と5コの瘤を付けている。内面はナデ整形。                                                                                                 | 砂粒<br>にぼい褐色<br>普通     | 95% |
| P76  | 煮形土器<br>外生式土器  | B(3.1)<br>C(7.0)                    | 胴部下段から底部の破片である。底部は平底で大きい。底面には鮮明な木葉模が見られる。胴部は底部から外傾して立ち上がっている。胴部外縁の一部に付加条溝文が見られる。                                                                                                                                                           | 砂粒<br>にぼい褐色<br>普通     | 5%  |
| P120 | 煮形土器<br>外生式土器  | B(4.8)<br>C(6.6)                    | 底部は平底である。胴部は底部から器厚を一定に保ち、直線的に立ち上がっている。外縁には斜めの付加条溝文を施し、内面はヘラナナテ整形をしている。                                                                                                                                                                     | 砂粒・石英<br>にぼい褐色<br>普通  | 10% |
| P130 | 高环形上器<br>外生式土器 | A 17.7<br>B 17.3<br>D 8.0<br>E 10.1 | 脚部は結合部から円錐形状に広がり、脚端部を折り返して曲っている。体部は底部から器厚を一定に保って直線的に開きながら立ち上がり、上位では膨らむ。蓋になる。口縁部は底部からやや内寄り形成に大きく開く。底部内面はハケ月彫形。体部、脚部、底部外縁ともヘラミガキをし、朱を施している。口縁部、底部、底部内面とも銅鏡が激しいが、朱を施した痕跡が残っている。口縁部、脚部の折り返し部には脚目状捺文を施し、脚部折り返し部の上端にはキザミ目をめぐらし、口縁部には脚目状捺文を施している。 | 砂粒・スコリア<br>浅黄褐色<br>普通 | 85% |

| 番号  | 器種              | 法量(cm)             | 器形の特徴                                                       | 手法の特徴                                                                | 胎土・色調・焼成               | 備考  |
|-----|-----------------|--------------------|-------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------|------------------------|-----|
| P69 | 高环形上器<br>土 鍋 形  | A(23.0)<br>F(7.8)  | 環底部は平坦で、体部は器厚をほぼ一定に保ちながら直線的に逆八の字状に開く。底部と体部の境に不明瞭な模様をもつ。     | 底部、体部の内・外縁ともヘラナナテ整形後、口縁部を箆ナナテ調整。体部内面に研磨を施している。                       | 砂粒・スコリア<br>褐色<br>普通    | 30% |
| P70 | 煮形土器<br>土 鍋 形   | A(18.0)<br>B(10.0) | 口縁部は底部からやや器厚を増して直線的にくの字状に開く。胴部は器厚を一定に保ち、底部から球状に膨む。薄手の土器である。 | 口縁部内面横ナナテ整形、口縁部外縁ヘラナナテ整形後、箆ナナテ調整。底部内面ハケ月彫形、底部外縁ヘラケズリ整形後、上位に研磨を施している。 | 砂粒・スコリア<br>にぼい褐色<br>普通 | 20% |
| P71 | 台付環形上器<br>土 鍋 形 | B(13.6)            | 脚部は器厚を一定に保ち、ほぼ球状を呈するものと思われる。脚部中位に最大径を有し、内傾して台部に至る。          | 脚部内・外縁ヘラナナテ整形。台部外縁ヘラナナテ整形。                                           | 砂粒・スコリア<br>褐色<br>普通    | 30% |

| 番号  | 器種               | 法量(cm)                    | 器形の特徴                                                                                                 | 手法の特徴                                            | 施土・色調・地成            | 備考   |
|-----|------------------|---------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------|---------------------|------|
| P75 | 鉢形土器<br>土器       | A 10.6<br>D 13.8<br>C 4.0 | 口縁部は歪み、また、不平らで波を打つ。<br>胴部は器厚を一定に保ち、コップ状にやや<br>直線的に底部に傾く。底部は小さく斜い。<br>また底部正面中央部が凹む。不安定で難な<br>作りの土器である。 | 口縁部、体部内面斜・横方向の<br>ヘラケズリ整形。体部・底部外<br>面底方向へのラナデ整形。 | 砂粒・スコリア<br>褐色<br>普通 | 100% |
| P77 | 小形鉢形土<br>器<br>土器 | A 6.7<br>B 2.9<br>C 4.7   | 底部は丸底を帯びた平底で、胴部は底部か<br>ら器厚を減じながら逐步の字状に立ち上が<br>っている。口縁部は丸味をもっている。                                      | 底部、胴部、口縁部内・外面と<br>もナデによる整形。                      | 砂粒・素面<br>橙色<br>普通   | 70%  |



第43図 第9号住居跡実測図

#### 第9号住居跡（第43図）

本跡は、調査区の中央部C2号区を中心に確認された住居跡で、第1号住居跡の南側7.2mに位置している。

平面形は、長軸2.13m・短軸1.6mの隅丸長方形を呈し、長軸方向は、N-90°-Eを指している。壁は、東壁を除いて締まりのあるロームで、壁溝からほぼ垂直に立ち上がっている。東壁は上部

で擾乱を受けているが、残っている下部は締まりのあるロームで、壁溝から外傾して立ち上がっている。壁高は、東壁を除いて27~38cmである。壁溝は、上幅14~18cm、深さ6~10cmのU字形を呈し、壁下を全周している。ピットは、壁外に6か所検出され、本跡をとりまくように配列されている。その規模は、長径22~35cm・短径20~25cm、深さ30~41cmである。本跡の床面に柱穴のないことと、付近の住居跡（SI-5・11・12）との類似性を考慮して、本跡に伴う柱穴であると考えられる。

本跡の覆土は、上層に極少量のローム粒子・ロームブロックと炭化粒子を含む粘性を帯びた締まりのある暗褐色土、下層にローム粒子・ロームブロックと焼土粒子を含む粘性を帯びた締まりのある黒褐色土と暗褐色土が自然堆積している。

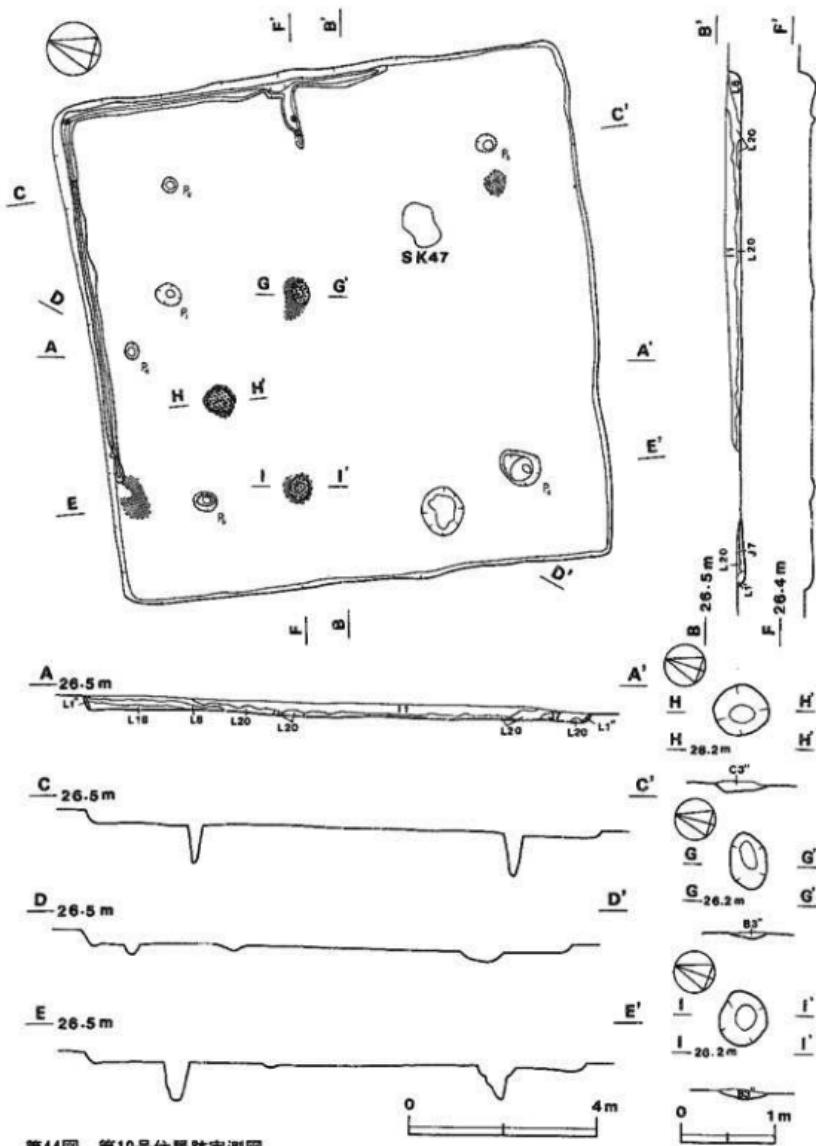
遺物は、覆土中と床面から土師式土器片約50点が出土している。本跡に伴う主な土師式土器片は、床面の北西部から出土している。

本跡は、出土遺物から判断して古墳時代の中期のものと考えられる。

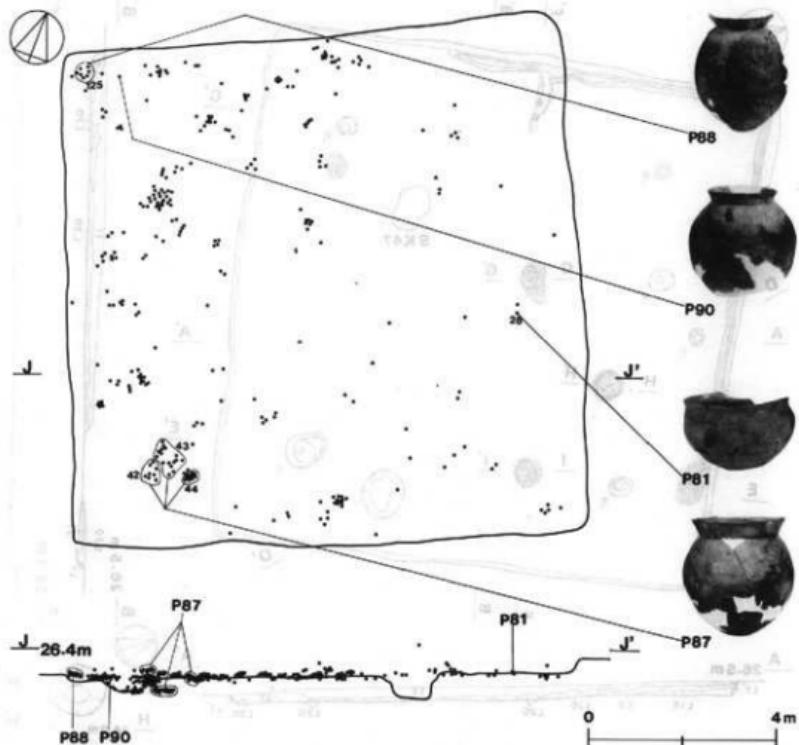
#### 第10号住居跡（第44図）

本跡は、調査区の中央部B3+4区を中心に確認された住居跡で、第1号住居跡の東側19.7mに位置している。本跡の中央から南東側の床面に本跡と重複して第47号土坑が掘り込まれている。本跡と土坑の新旧の関係は、土層の観察から判断できず、また、土坑から遺物も出土しなかったため不明である。

平面形は、長軸11.14m・短軸10.9mの隅丸方形を呈し、長軸方向は、N-23°Wを指している。壁は、締まりのあるロームで、東・北壁の約半分は壁溝から外傾して立ち上がっている。その他の壁は、床面から外傾気味に立ち上がっている。壁高は、14~38cmである。特に、東と北の壁が接するコーナー部の一部が最も高く38cmほどある。壁下には、上幅19~28cm、深さ8~10cmのU字形を呈した壁溝が、東壁下中央付近の北側から続いて北壁下の東側へ3分の2ほど掘られている。床面はロームで、団面に表わせない小さい凹凸が各所に認められるが、全体としては平坦でよく踏みしめられている。また、北壁側から南壁側にかけて10cmほど傾斜している。Psに接して北東向きに柱状の炭化材が床面上に横たわり、その下のロームが火熱を受けてレンガ状に赤変硬化していた。さらに、西壁側には、多量の炭化材が検出されている。これらのことから、本跡は焼失家屋と考えられる。炉は、床面の中央から北東側に第1炉、中央から北北西側に第2炉、中央から北西に第3炉が位置している。第1炉は、長径55cm・短径48cmの不整楕円形を呈し、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめた地床である。炉内には、多量の赤褐色の縮まった焼土が充満している。炉床は、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。第2炉は、長径50cm・短径34cmの楕円形を呈し、床面を6cmほど皿状に掘りくぼめた地床である。炉内には、多量の



第44図 第10号住居跡実測図



第45図 第10号住居跡出土遺物位置図・遺物接合関係図

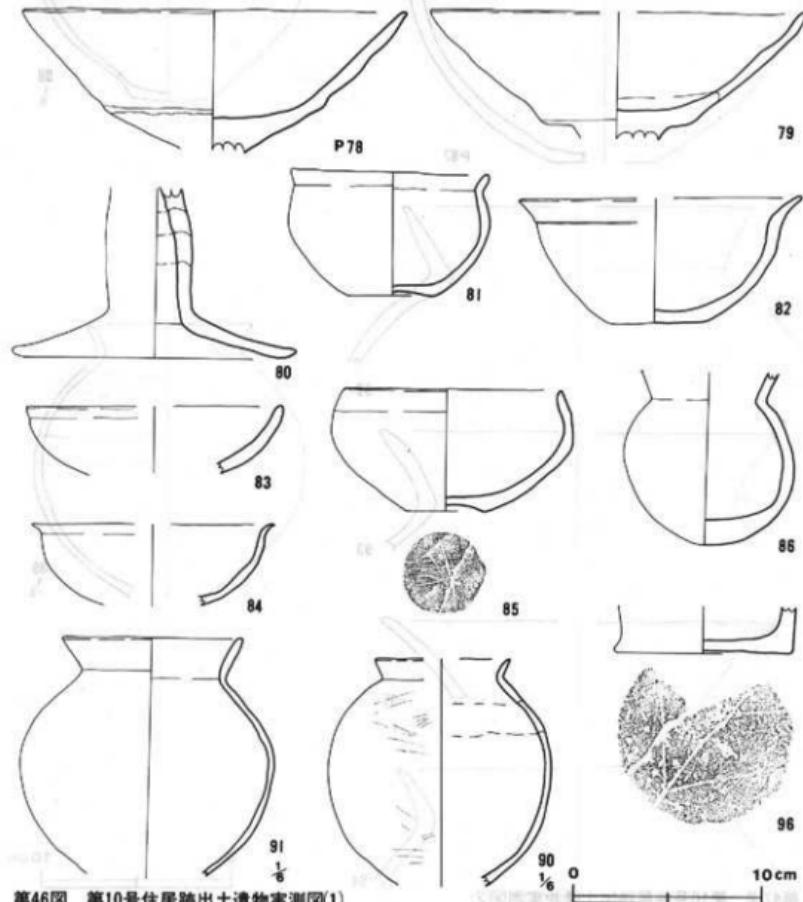
暗赤褐色の縮まつた焼土が堆積している。炉床は、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。第3炉は、長径55cm・短径45cmの楕円形を呈し、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめた凹凸のある地床炉である。炉内には、多量の暗赤褐色の縮まつた焼土が充満している。炉床は、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。貯藏穴は、床面の中央から南西側、西壁近くに位置している。平面形は、長径103cm・短径89cmの楕円形を呈し、床面を25cmほど丸底の鍋状に掘りくぼめている。ピットは6か所あるが、主柱穴は配列と規模からP<sub>1</sub>とP<sub>6</sub>を除く4本である。規模は、P<sub>2</sub>からP<sub>5</sub>の順に列記すると平面の長径が43cm・37cm・81cm・48cm (P<sub>1</sub> - 52cm・P<sub>6</sub> - 25cm)、深さが92cm・75cm・71cm・80cm (P<sub>1</sub> - 74cm・P<sub>6</sub> - 20cm) である。

本跡の覆土は、上層に少量のローム粒子を含む粘性を帯びたやや縮まりのある極暗褐色土、下層に多量のローム粒子と少量のロームブロックを含む粘性を帯びた縮まりのある褐色土、壁付近

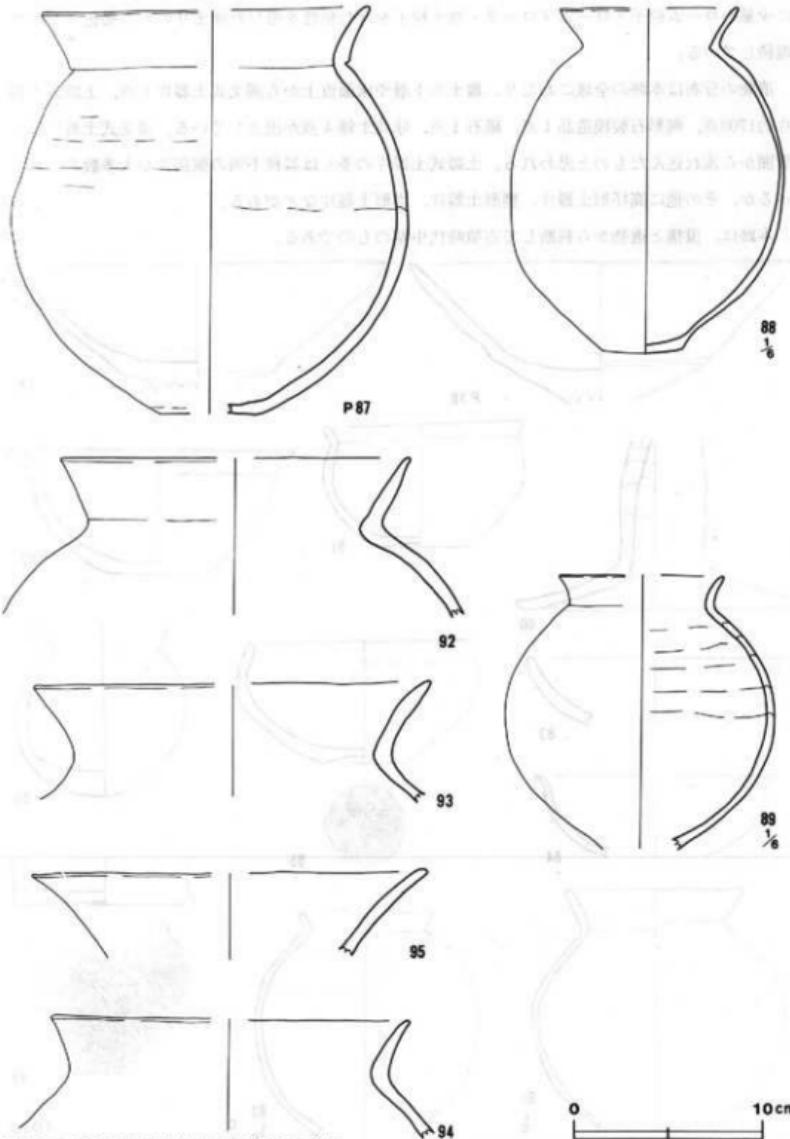
に少量のローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を含む粘性を帯びた締まりのある褐色土が自然堆積している。

遺物の分布は本跡の全域にわたり、覆土の下層や床面直上から縄文式土器片2点、土師式土器片約1700点、剝形石製模造品1点、砥石1点、球状土錘4点が出土している。縄文式土器片は、周囲から流れ込んだものと思われる。土師式土器片の多くは器種不明の胴部片が大多数を占めているが、その他に高環形土器片、變形土器片、増形土器片などがある。

本跡は、遺構と遺物から判断して古墳時代中期のものである。



第46図 第10号住居跡出土遺物実測図(1)



第47図 第10号住居跡出土遺物実測図(2)

出土土器観察表(第46・47図)

| 番号  | 器種            | 法量(cm)                    | 器形の特徴及び文様                                                                                                  | 粘土・色調・焼成                                      | 備考                    |           |
|-----|---------------|---------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|-----------------------|-----------|
| P96 | 筒形土器<br>茎生式上器 | B[2.5]<br>C 9.5           | 底部は平底で大きく、安定感がある。床面に木葉痕が見られる。肩部は底部からほんの少しだけ立ち上がるものと思われる。外面は磨擦しており不鮮明であるが、細かい網文を施している。内面は剥離が激しく、整形方法は不明である。 | 砂粒・スコリア<br>明赤褐色<br>普通                         | 10%                   |           |
| P78 | 高环形土器<br>土器   | A 20.4<br>F[7.4]          | 环底部は平坦で、体部は底部からほぼ直線的に逆八の字状に開く。底部と体部の境に棱をもつ。                                                                | 环底部、体部の内・外側ともへラナデ整形後、口唇部を横ナデ調整。体部外側に剥離を施している。 | 砂粒・スコリア<br>黄褐色<br>普通  | 50%<br>和泉 |
| P79 | 高环形土器<br>土器   | A(20.0)<br>F[6.7]         | 环底部は平坦で、体部は底部からやや内寄り側に逆八の字状に開く。底部と体部の境に棱をもつ。                                                               | 环底部、体部の内・外側ともへラナデ整形後、口唇部を横ナデ調整。体部内面に剥離を施している。 | 砂粒<br>浅黄褐色<br>普通      | 30%       |
| P80 | 高环形土器<br>土器   | D[9.0]<br>E 15.0          | 脚部は複合脚からやや膨らんだ後、円柱状になって握部に至る。脚部は外反気味に大きく開き、握部に当って水平からやや反り上がり気味になる。                                         | 脚部内・外側へラナデ調整。脚部内・外側へラナデ整形後、横ナデ調整。             | 砂粒・スコリア<br>浅黄褐色<br>普通 | 50%<br>和泉 |
| P81 | 筒形土器<br>土器    | A 10.5<br>B 6.7<br>C 4.6  | 底部は平底で、脚部は底部から基部を同じながら内寄して半球状を呈し、基部を増して脚部でくの字形に外反して口縁部に至る。底部は円錐。                                           | 底部、脚部、口縁部の内・外側ともへラナデ整形後、口縁部内・外側横ナデ調整。         | 砂粒・沙粒<br>浅黄褐色<br>普通   | 90%       |
| P82 | 筒形土器<br>上器    | A(15.1)<br>B 6.6<br>C 5.0 | 底部は平底で、脚部は底部から一定の基部を保ち、内寄して立ち上がって半球状を呈する。口縁部は脚部からくの字形に外反して開き、基部も薄くなる。                                      | 底部、脚部内・外側ともへラナデ整形後、ナデによる調整。脚部外側に剥離を施している。     | 砂粒<br>明赤褐色<br>普通      | 40%       |
| P83 | 筒形土器<br>上器    | A(12.6)<br>B[3.6]         | 脚部は基部を一定に保ち、半球状を呈し、口縁部をやや外傾する。                                                                             | 脚部内・外側へラナデ整形、口縁部横ナデ整形。脚部内面は剥離が激しい。            | 砂粒・沙粒<br>橙色<br>普通     | 20%       |
| P84 | 筒形土器<br>上器    | A(12.8)<br>B[4.3]         | 脚部は一定の基部を保ち、内寄してゆるやかに立ち上がり、基部を減じながら脚部から外反して口縁部に至る。薄手の筒である。                                                 | 脚部内・外側へラナデ整形、口縁部横ナデ整形。                        | 砂粒<br>橙色<br>普通        | 20%       |

| 番号  | 器種          | 法量(cm)                     | 器形の特徴                                                                     | 手法の特徴                                                                      | 胎土・色調・施成                      | 備考         |
|-----|-------------|----------------------------|---------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|-------------------------------|------------|
| P85 | 丸形土器<br>上脚器 | A(11.5)<br>B 6.5<br>C 4.2  | 底部は平底でやや凹む。底部から一定の器厚を保ち、内側して立ち上がり半球状の腹部を作っている。口縁部は器厚を減じてほぼ垂直になる。          | 底部、胴部、口縁部の内・外面ともにヘラナデ整形後、底部底面を除く全体に研磨を施している。底面はヘラ状工具で「月」状の沈線を引いている。        | 砂粒<br>橙色<br>普通                | 70%        |
| P86 | 壺形土器<br>上脚器 | B(9.2)<br>G 7.6            | 底部は丸味を帯び、内面は円凸を呈している。底部の器厚が最大で、器厚を減じながら球状の腹部を作り、くの字状に外反して口縁部に至る。          | 底部内・外面へラナデ整形、口縁部内・外面横ナナデ整形。                                                | 砂粒<br>にふい褐色<br>普通             | 70%        |
| P87 | 壺形土器<br>上脚器 | A 7.5<br>B 21.7<br>C( 5.2) | 口縁部は腹部から急に肥厚し、外反して立ち上がり口縁部でさらに外へ開く。底部はほぼ球形を呈し、胴部中位に最大径をもち、内側しながら平底な底部に至る。 | 口縁部内・外回横ナナデ整形、胴部内・外面斜料のヘラケズリ整形、底部へラケズリ整形、底部内面に輪積痕が認められる。                   | 砂粒・スコリア<br>・雲母<br>にふい褐色<br>普通 | 80%<br>和泉  |
| P88 | 壺形土器<br>上脚器 | A(19.0)<br>B 36.3<br>C 8.6 | 口縁部は胴部からくの字状に直進的に開く。底部は細長の球状を呈し、胴部中位に最大径をもち、内側しながら底部に至る。底部はやや丸味をもった平底である。 | 口縁部内・外面へラナデ整形後、横ナナデ調整。胴部内面横方向のヘラケズリ整形。底部外面は斜方向のヘラケズリ整形後、胴部上位を横ナナデ調整。       | 砂粒・砂糖<br>にふい褐色<br>普通          | 60%        |
| P89 | 壺形土器<br>土脚器 | A 17.4<br>B(29.0)          | 口縁部は底部からほぼ直進的に立ち上がり、口縁部で外に開く。底部はほぼ球状を呈し、胴部中位に最大径をもち、内側しながら底部に至る。          | 口縁部内・外面横ナナデ整形、胴部内・外斜方向のヘラナナデ整形、底部内面に輪積痕が認められる。                             | 砂粒<br>橙色<br>普通                | 80%<br>和泉Ⅰ |
| P90 | 壺形土器<br>土脚器 | A 14.4<br>B(24.0)          | 口縁部は底部からくの字状に開く。底部はほぼ球状を呈し、胴部中位に最大径をもち、器厚を増しながら内側して底部に至る。                 | 口縁部内・外面横ナナデ整形、胴部内・外斜方向のヘラケズリ整形後、外面に研磨を施している。底部内面に輪積痕が認められる。底部外斜下位に剥離が見られる。 | 砂粒<br>橙色<br>普通                | 70%<br>和泉  |

| 番号  | 器種          | 法量(cm)             | 器形の特徴                                                                      | 手法の特徴                                                                       | 胎土・色調・焼成              | 備考        |
|-----|-------------|--------------------|----------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|-----------------------|-----------|
| P93 | 甕形土器<br>土師器 | A 19.0<br>B(25.1)  | 口縁部は底部からくの字状に開く。肩部には球状を呈し、腹部中位に最大径をもつ。                                     | 口縁部内面横方向のヘラナデ整形後、横ナデ調整。口縁部・腹部外表面斜方向のヘラナデ整形後、ナデ調整。肩部内面に剝離が認められる。肩部上位外面上に焼付着。 | 砂粒・スコリア<br>明赤褐色<br>普通 | 60%<br>和泉 |
| P92 | 甕形土器<br>土師器 | A(18.6)<br>B( 8.3) | 口縁部は底部から器厚を減じながらくの字状に開き、口縁部でやや尖る。肩部は球状を呈すると思われる。                           | 口縁部内・外両側ナデ整形。肩部内面へラナデ、外側新方向のヘラナデ整形。口縁部外面上に焼付着。                              | 砂粒<br>浅黄褐色<br>普通      | 10%       |
| P93 | 甕形土器<br>土師器 | A(21.0)<br>B( 6.1) | 口縁部は底部からくの字状に外反して開く。肩部は底部から器厚を減じながらくの字状に開き、口縁部でやや尖り気味になる。肩部は球状を呈するものと思われる。 | 口縁部内・外両側ナデ整形。肩部内面横方向のヘラナデ整形、肩部外側へラナデ整形。                                     | 砂粒・砂礫<br>に赤褐色<br>普通   | 10%       |
| P94 | 甕形土器<br>土師器 | A(19.1)<br>B( 6.9) | 口縁部は底部から器厚を減じながらくの字状に開き、口縁部でやや尖り気味になる。肩部は球状を呈するものと思われる。                    | 口縁部内・外両側ナデ整形。肩部内面へラナデ整形。肩部外側新方向のヘラナデ整形。内・外側とも薄層が著しい。                        | 砂粒・スコリア<br>明褐色<br>普通  | 10%       |
| P95 | 高坪形土器       | A 21.0<br>F( 4.5)  | 全体部は器厚を一定に保ちながらやや外反気味に大きく開く。                                               | 環体部内・外両側ナデ整形。口縁部に剝離が認められる。                                                  | 砂粒<br>に赤褐色<br>普通      | 20%       |

#### 第11号住居跡（第48図）

本跡は、調査区の北部B3 ha区を中心に確認された住居跡で、第10号住居跡の北東側4.9mに位置している。

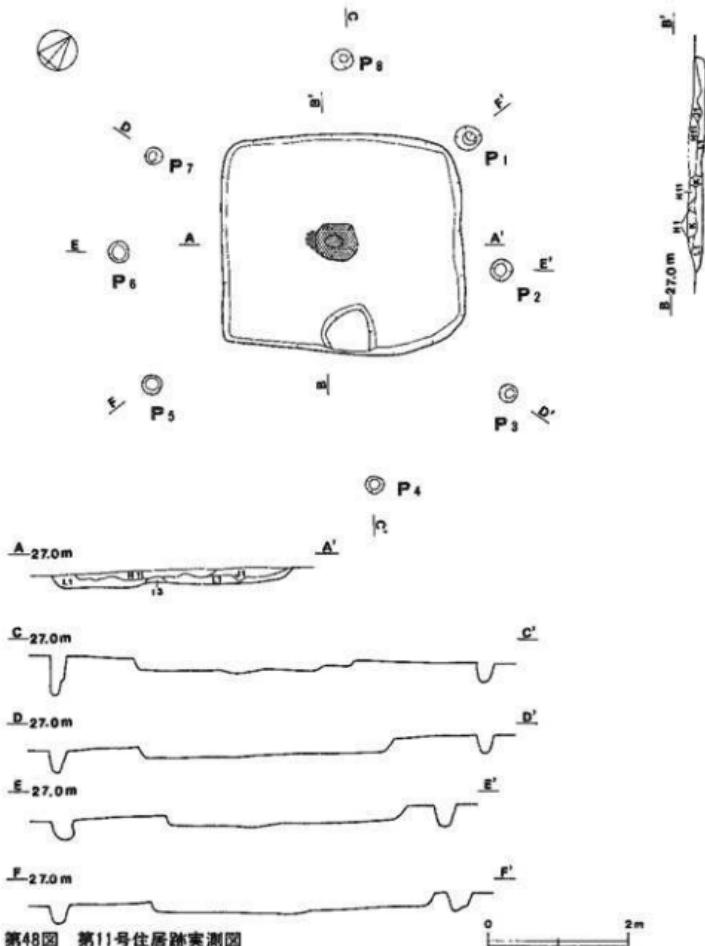
平面形は、長軸3.42m・短軸3.1mの隅丸長方形を呈し、長軸方向は、N-46°-Eを指している。壁は、締まりのあるロームで、北東・南東・南西壁は、床面から外傾して立ち上がっており、北西壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は、8~16cmである。床面は、ロームで全体的にゆるい起伏を示していて硬い。特に、炉の周囲はよく踏みしめられている。また、南東壁の中央部に接して、床面から13cmほど高く半円形状に掘り残している部分がある。この部分の断面を観察すると二次堆積のものではない。さらに、その上面はよく踏みしめられていた。炉は、床面の中央部に位置し、長径52cm・短径50cmの不整円形を呈し、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には、少量の赤褐色を呈する縮まった焼土が盛り上がって堆積している。炉床は、ロームに火熱を受けたようすがほとんど見られず軟らかく、短期間の使用であったと考えられる。ピットは、壁外に8か所検出され、本跡をとりまくように配列されている。規模は、長径24~38cm・短径20~30cm、深さ23~30cm (P8は55cm) である。本跡の床面に柱穴がないことと、付近の住居跡 (SI-5・9・12) との類似性から判断して、本跡に伴う柱穴であると考え

られる。

本跡の覆土は、上層に少量のローム粒子と焼土粒子を含む粘性を帯びた締まりのある黒褐色土と暗褐色土、下層に多量のローム粒子を含む粘性を帯びた締まりのある褐色土が自然堆積している。

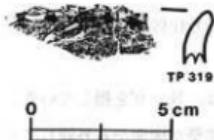
遺物は、覆土中から土師式土器の口縁部片が3点出土している。

本跡は、周辺の遺構の規模と形態から堆察し古墳時代中期のものと考えられる。



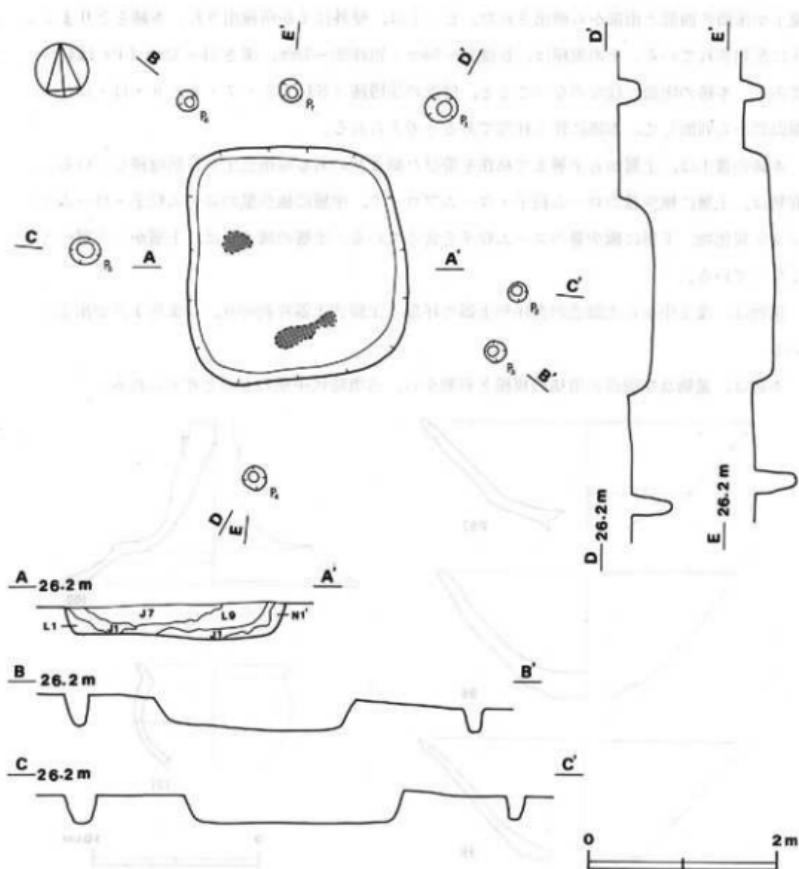
第48図 第11号住居跡実測図

出土土器解説 (第49図)



第49図 第11号住居跡出土遺物拓影図

土師器で外傾した口縁部片2片が接合した小片である。口縁部内面横ナデ整形、外面ナデ整形。口唇部内・外面から棒状工具を押し当てて波状をつくる。弥生時代末期～古墳時代前期か。



第50図 第12号住居跡実測図

### 第12号住居跡（第50図）

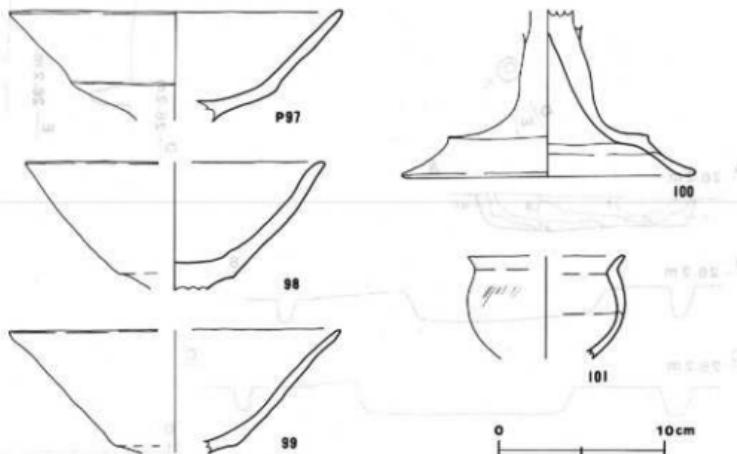
本跡は、調査区の東部 C3.oo 区を中心に確認された住居跡で、第10号住居跡の南東側19.1mに位置している。

平面形は、長軸2.45m・短軸2.33mの隅丸方形を呈し、長軸方向は、N - 0°を指している。壁は、締まりのあるロームで、東・南壁が床面からほぼ垂直に、西・北壁が床面から外傾してそれぞれ立ち上がっている。壁高は、21-33cmである。床面はロームで、全体的に壁付近から中央部に向かって約5cmほど低くなり、ゆるい起伏を示している。炉は検出できず、少量のまとまった焼土が床面の西部と南部から検出された。ピットは、壁外に7か所検出され、本跡をとりまくよう配列されている。その規模は、長径21-34cm・短径20-32cm、深さ24-33cm (P<sub>4</sub>は44cm) である。本跡の床面に柱穴のないことと、付近の住居跡 (SI - 5・7・8・9・11・13) との類似性から判断して、本跡に伴う柱穴であると考えられる。

本跡の覆土は、上層から下層まで粘性を帯びた締まりのある暗褐色土が自然堆積している。含有物は、上層に極少量のローム粒子・ロームブロック、中層に極少量のローム粒子・ロームブロック・炭化物、下層に極少量のローム粒子を含んでいる。土層の締まりは、上層から下層へと強くなっている。

遺物は、覆土中から土師式の高環形土器の壊部と土師式土器片約80点、石皿片1点が出土している。

本跡は、遺物及び周辺の遺構の規模と形態から、古墳時代中期のものと考えられる。



第51図 第12号住居跡出土遺物実測図

西日本考古学研究会編集部

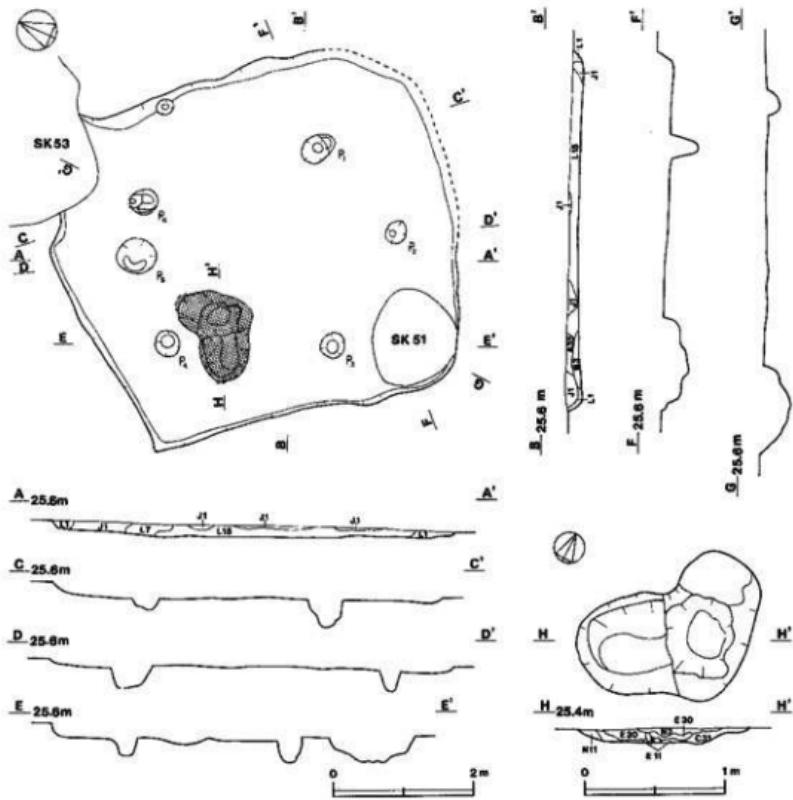
出土土器観察表（第51回）

| 番号   | 器種             | 法量(cm)            | 器形の特徴                                                     | 手法の特徴                                                      | 粘土・色調・焼成                         | 備考       |
|------|----------------|-------------------|-----------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------|----------------------------------|----------|
| P97  | 高环形土器<br>上 部 器 | A(20.0)<br>F(6.5) | 底部は凹み、体部は底部から器厚を一定に保って直線的に逆八の字状に大きく開く。底部と体部の境に棱をもつ。       | 环底部、体部内：外面ともへラナデ整形。口押部横ナデ整形。底部内面に剥離が見られる。底部、体部外側が研磨されている。  | 砂粒・スコリア 50%<br>赤褐色<br>普通         |          |
| P98  | 高环形土器<br>土 鍋 器 | A(18.0)<br>F(7.7) | 底部は小さく平らである。体部は底部から器厚をほぼ一定に保ち、内壁気球に逆八の字状に開く。底部と体部の境に棱をもつ。 | 底部、体部内・外面ともへラナデ整形。口押部横ナデ整形。底部、体部内・外面に剥離が多く見られる。            | 砂粒・スコリア 45%                      | 褐色<br>普通 |
| P99  | 高环形土器<br>上 部 器 | A(20.0)<br>F(7.5) | 底部は凹み、体部は底部から器厚をほぼ一定に保ち、直線的に逆八の字状に大きく開き、口縁部でやや外反する。       | 底部、体部内・外面ともへラナデ整形。底部内面に剥離が認められる。                           | 砂粒・スコリア 15%<br>・青母<br>明赤褐色<br>普通 |          |
| P100 | 高环形土器<br>上 部 器 | D(10.0)<br>F 17.6 | 脚部は接合部からやや膨らみ、器厚を減じながら円柱状になり、底部で再び大きく開く。底部と縁部の境に棱をもつ。     | 脚部、底部内・外面とも継・斜方向のへラナデ整形後、底部内・外面横ナデ調整。脚部と底部の接合部に接合痕跡が認められる。 | 砂粒<br>明褐色<br>普通                  | 50%      |
| P101 | 塊形土器<br>土 鍋 器  | A(9.4)<br>B(6.2)  | 口縁部は底部から外反して大きく開き、口縁部はやや尖る。底部は預部から器厚を減じながら内厚して半球状を呈する。    | 口縁部内・外面横ナデ整形。底部内面へラナデ整形。                                   | 砂粒・青母<br>に青い褐色<br>普通             | 30%      |

第13号住居跡（第52回）

本跡は、調査区の中央部C3区を中心に確認された住居跡で、第1号住居跡の南東側16.5mに位置している。北コーナー部に本跡と第53号土坑が重複している。第53号土坑は上層の観察から判断して、本跡の廃絶後掘られたものである。また、南コーナー部に第51号土坑が重複している。第51号土坑は、土層の観察から判断して、本跡の廃絶後掘られたものである。二つの土坑とも、本跡より新しい。

平面形は、長軸5.59m・短軸4.85mの隅丸長方形を呈し、長軸方向は、N-45°Wを指している。擾乱を受けていない各壁は、締まりのあるロームで、床面から外傾して立ち上がっている。南西壁の破線部分は擾乱を受けている。壁高は、7~21cmである。床面はロームで、全体的に凸しており硬い。特に、炉の周囲と6本の柱穴の内側は、よく踏みしめられている。炉は、床面の中央から西側に位置し、長径130cm・短径70cmの不整楕円形を呈し、床面を9cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には、多量の明赤褐色の締まった焼土が堆積している。炉床は四



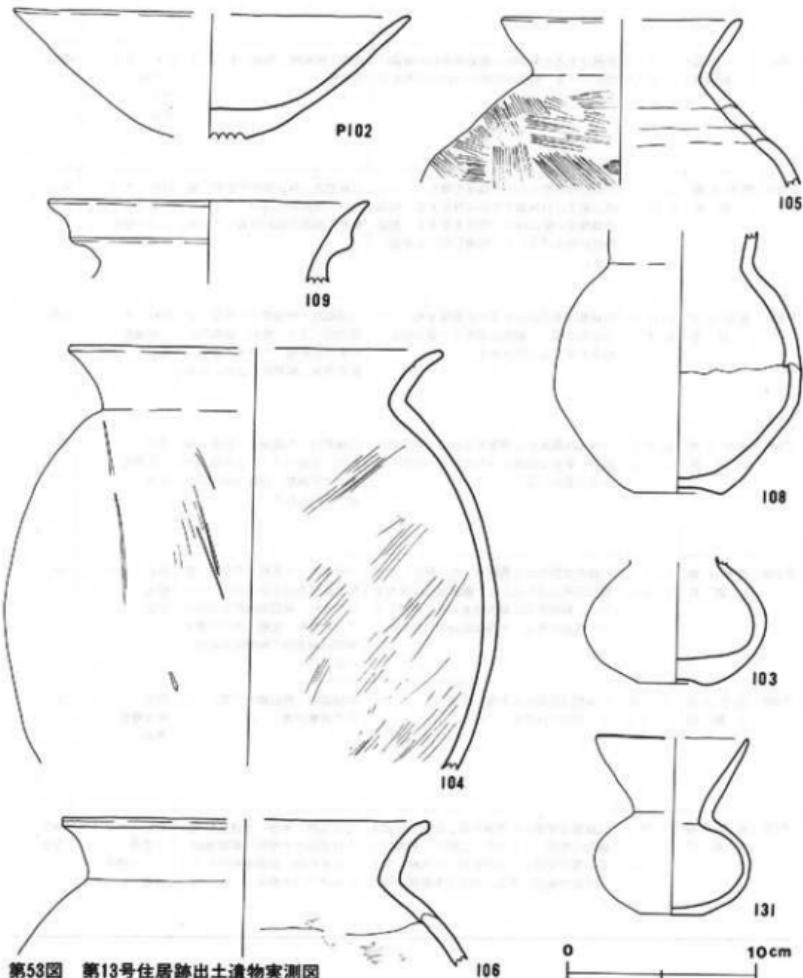
第52図 第13号住居跡実測図

凸を示し、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。ピットは6か所あるが、柱穴の配列とそれらの内側がよく踏みしめられている様子からPsを除く5本が主柱穴であると思われる。規模は、長径34~49cm、深さ17~38cmである。

本跡の覆土は、床面までローム粒子と黒色土の混じった締まりのある褐色土の層で、その上面に部分的に締まりのある暗褐色土が堆積している。

遺物は、住居跡の覆土と床面の全域から土師式土器片が約1200点、黒曜石1点、凹石1点、双孔円板1点、剣形石製模造品1点、球状土鍤1点が出土している。土師式土器片は、高環形土器片が約30点、腰形土器片とその他器種不明の口縁部片が約40点、胴部片が約1,010点、底部片が13点などである。

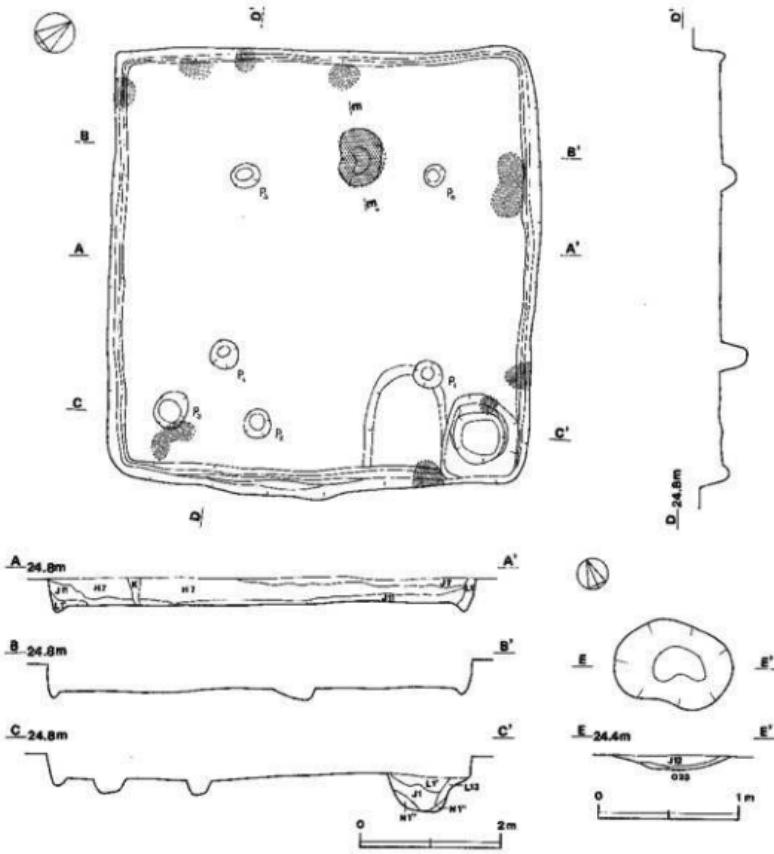
本跡は、出土遺物と遺構から古墳時代中期のものである。



第53図 第13号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表(第53回)

| 番号   | 器種    | 法量(cm)                                   | 器形の特徴                                                                            | 手法の特徴                                                                                     | 断上・色調・焼成                    | 備考        |
|------|-------|------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------|-----------|
| P102 | 高环形土器 | A(21.0)<br>上. 高さ<br>B(6.6)<br>底          | 环部は平底で、底面は底部から器厚を保ち一定に保ち、直線的に大きく通入の字状に開く。                                        | 底部、内部・外面部ハナナテ整形成。口唇部はテナテ整形成。全体に削りを施している。                                                  | 砂粒<br>明褐色<br>普通             | 35%       |
| P103 | 堆形土器  | C(4.0)<br>上. 高さ<br>D(6.6)<br>底           | 底部は平底であるが、底面中央部が側面に西んでいる。側部はややくぼれた球状を呈する。                                        | 底部、頭部内・外面部ともヘナナテ整形成。                                                                      | 砂粒・スコリア<br>・茶色<br>褐色<br>普通  | 80%       |
| P104 | 腹形土器  | A(19.8)<br>上. 高さ<br>B(12.0)<br>底         | 口縁部は底部からやや厚唇を増してくの字状に開き、口縁部はさらにも外反する。側部は器厚を一定に保ち、球状を呈する。側面中位に最大径をもち、内窓しながら底面に下る。 | 口縁部内・外面部ハナナテ整形成。側部内・外面部方向のヘナナテ整形成。底部に窓が付着している。                                            | 砂粒・スコリア<br>・灰青<br>明褐色<br>普通 | 30%       |
| P105 | 腹形土器  | A(12.8)<br>上. 高さ<br>B(8.7)<br>底          | 口縁部は直角からわずかに器厚を増してくの字状に開く。側部は器厚を一定に保ち、球状を呈すると思われる。                               | 口縁部内・外面部ハナナテ整形成。側部内面ハナナテ整形成。底部外側ハケナテ整形成。底部内面に輪郭痕が認められる。                                   | 砂粒・スコリア<br>・明褐色<br>普通       | 30%       |
| P106 | 腹形土器  | A(19.5)<br>上. 高さ<br>B(7.3)<br>底          | 口縁部は底部から器厚を増してくの字状に開く。側部は器厚を一定に保ち、球状を呈すると思われる。                                   | 口縁部内・外面部ハナナテ整形成。側部内・外面部ハナナテ整形成。外面部ハナナテ調整。底部内面に輪郭痕が認められる。                                  | 砂粒<br>明褐色<br>普通             | 10%       |
| P108 | 腹形土器  | B(14.0)<br>七<br>脚<br>C(4.6)<br>底         | 口縁部は底部から器厚を一定に保ち、やや外反気味に立ち上がる。側部はほぼ球形を呈し、側部中位に最大径をもち、内窓しながら底面に下る。底部は底面中央部が凹む。    | 口縁部内・外面部ハナナテ整形成。側部内面腰方向と斜方向のヘナナテ整形成。側部外面部方向のヘナナテ整形成。底部ハナナテ整形成。底部ハナナテ整形成。底部内面中位に輪郭痕が認められる。 | 砂粒・スコリア<br>・褐色<br>普通        | 40%       |
| P109 | 茎付土器  | A(17.0)<br>上. 高さ<br>B(4.2)<br>底          | 口縁部は底部から外反して立ち上がり正在する。外側に段を有している。                                                | 口縁部内・外面部ハナナテ整形成。内面に剥離が著しい。                                                                | 砂粒<br>半赤褐色<br>普通            | 20%       |
| P131 | 堆形土器  | A(8.1)<br>上. 高さ<br>B(9.4)<br>C(3.2)<br>底 | 口縁部は底部から器厚を減しながらほぼ直線的に外傾してくの字状に開く。側部は一定の器厚を保ち、球状を呈して内窓しながら底面に下る。最大径は側部中位にちつ。     | 口縁部内・外面部ハケナテ整形成。口縁部内・外面部ハナナテ整形成。底部外側ハケナテ整形成。底部ハナナテ整形成。底部中位から上位にかけてヘタ剥き。                   | 砂粒・スコリア<br>・灰青<br>明褐色<br>普通 | 95%<br>玉葉 |



第54図 第14号住居跡実測図

#### 第14号住居跡（第54図）

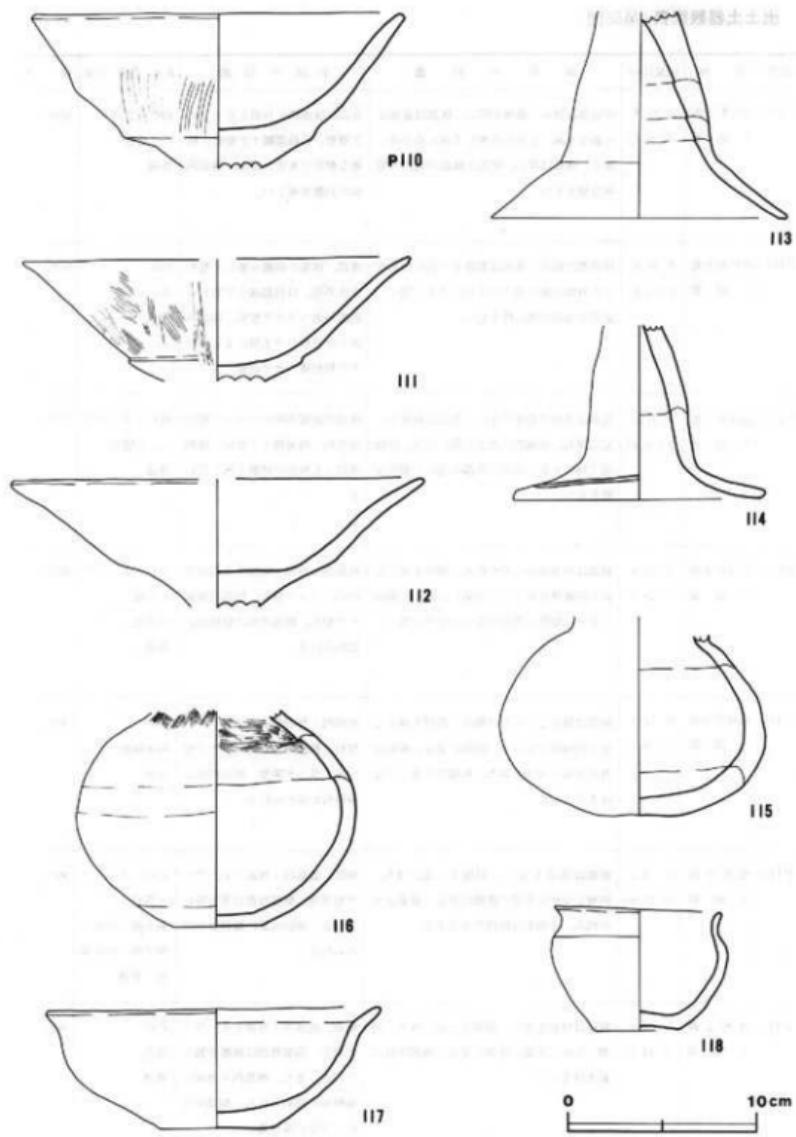
本跡は、調査区の南部D3a8区を中心に確認された住居跡で、第10号住居跡の南南東35.4mに位置している。

平面形は、長軸6.33m・短軸6.07mの隅丸方形を呈し、長軸方向は、N-54°-Wを指している。壁は、締まりのあるロームで、壁溝からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は、18-41cmである。壁溝は、上幅14-25cm、深さ7-12cmのU字形をしており、南東側の一部で床面上を通るが、他は壁下を周回している。床面はロームで、中央部が圓面に表われない小さい凹凸を示しているが、全体的に平坦で硬い。また、南東壁付近の床面に10cmほど舌状に高くロームが二次的に盛られ、よく踏みしめられていることから、出入口の施設と考えられる。さらに、床面のほぼ全域にわたって多量の焼土が検出されたことから、本跡は焼失家屋と考えられる。炉は、床面の中央から北西に位置し、長径82cm・短径55cmの不整橢円形を呈し、床面を12cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には、少量の焼土粒子・焼土ブロックとローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。炉床は、ロームが熱を受けて白変硬化しているだけで、その使用は短期間であったと思われる。貯蔵穴は、東コーナー部に位置し、平面形が100cmの不整円形で、床面を深鍋状に52cmほど掘り込んでいる。覆土は、上層にローム粒子を含む締まりのある褐色土、中層に少量のローム粒子を含む締まりのある暗褐色土、下層に多量のローム粒子を含む締まりのある明褐色土が自然堆積している。ピットは6か所あるが、主柱穴は配列と規模からP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>～P<sub>6</sub>の4本である。その規模は、順に長径41cm・44cm・44cm・35cm、深さ39cm・41cm・20cm・42cmである。P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は、それぞれ長径43cm・54cm、深さ22cm・24cmであり、その性格は不明である。

本跡の覆土は、上層に少量のローム粒子とロームブロックを含む粘性を帯びた締まりのある黒褐色土、下層に少量のローム粒子と焼土粒子を含む粘性を帯びた締まりのある暗褐色土、壁際に少量のローム粒子を含む粘性を帯びた締まりのある褐色土が、レンズ状に自然堆積している。

遺物は、約160点の土師式土器片が覆土の下層と東側の床面上から集中して出土している。土器片は、高壺形土器片、壺形土器片、甕形土器片、その他器種不明の口縁部片29点、胴部片117点などである。

本跡は、出土遺物と遺構から古墳時代中期のものである。



第55図 第14号住居跡出土遺物実測図

## 出土土器観察表(第55回)

| 番号   | 器種    | 法規(or)                   | 器形の特徴                                                            | 手法の特徴                                                            | 施上・色調・成形                                   | 備考  |
|------|-------|--------------------------|------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------|-----|
| P110 | 高环形土器 | A 19.8<br>土. 鋼 等 F(8.1)  | 环底部は凹み、基盤が厚い。体部は近部から基盤を減じながら内側して逆八の字状に開く。体部は深い。底部と体部の境に不鮮明な棱をもつ。 | 底部、体部内・外側ともヘラナテ整形。口部部後ナテ整形。底部外側はヘラナテ整形である。底部、腹部内側の剥離が激しい。        | 砂粒・苔母<br>明赤褐色                              | 50% |
| P111 | 高环形土器 | A 20.6<br>土. 鋼 等 F(6.4)  | 环底部は凹み。体部は基盤を一定に保ちながら外側矢張り逆八の字状に大きく開く。底部と体部の境に棱をもつ。              | 底部、体部の剥離が激しく整形手法不明。口部部後ナテ整形。底部外側ハケ目状ヘラ工具によるヘラナテ整形後、ナテ開拓。         | 砂粒<br>赤色<br>普通                             | 50% |
| P112 | 高环形土器 | A(21.0)<br>土. 鋼 等 F(6.8) | 底部は平頂で基盤が厚い。体部は基盤を一定に保ちながら外側矢張り逆八の字状に大きく開く。底部と体部の境に不鮮明な棱をもつ。     | 底部外側方向のヘラナテ整形。底部内・外側はヘラナテ整形。底部とも外側に剥離を残していく。                     | 砂粒・スカリア<br>にぶい赤色<br>普通                     | 25% |
| P113 | 高环形土器 | E 15.8<br>土. 鋼 等 G(10.9) | 脚部は結合部からやや細み、基盤を減じながら圓錐状を呈して、次第に広がって底部に至る。基盤は直線的な八の字状に開く。        | 脚部内・外側、底部外側は丸打ナテ整形。底部内面はナテ整形。脚部内面に剥離痕が認められる。                     | 砂粒・スカリア<br>・苔母<br>明褐色<br>普通                | 45% |
| P114 | 高环形土器 | E 13.4<br>土. 鋼 等 G(9.2)  | 脚部は結合部からやや細み、基盤を減じながら円柱状になって、底部に至る。基盤はやや凹み、平面形は橢円形を呈する。          | 脚部内・外側方向のヘラナテ整形。底部内面に剥離痕が認められる。                                  | 砂粒<br>明赤褐色<br>普通                           | 40% |
| P115 | 堆形土器  | C 4.2<br>土. 鋼 等 G(10.6)  | 脚部は球状を呈し、基盤を一定に保ち、内側しながら平底の底盤に坐る。底盤はやや凹み、平面形は橢円形を呈する。            | 脚部、底盤内・外側ともヘラナテ整形後、脚部外側に朱を施している。底盤内面に剥離痕が認められる。                  | 砂粒・スカリア<br>・苔母<br>軸上部一赤色<br>脚下部一暗赤褐色<br>普通 | 80% |
| P116 | 堆形土器  | C 4.6<br>土. 鋼 等 G(14.1)  | 脚部は球状を呈し、基盤を一定に保ち、内側ながら平底の底盤に坐る。底盤中位に最大径をもつ。                     | 脚部、底盤内・外側ともヘラナテ整形。脚部外側に朱を施している。また、脚部内・外側に剥離痕が認められる。脚部外側中・下位に剥離痕。 | 砂粒<br>褐色<br>普通                             | 80% |

| 番号   | 基種   | 法差(cm)                   | 基形の特徴                                                           | 手法の特徴                                          | 粘土・色調・焼成          | 備考                  |
|------|------|--------------------------|-----------------------------------------------------------------|------------------------------------------------|-------------------|---------------------|
| P117 | 丸形土器 | A 17.7<br>B 6.3<br>C 5.3 | 底部は平底で、胴部は先端から器厚をはば一定に保ち、内側しながら立ち上がる。口部は底部から大きくなる字状に開く。         | 底部、胴部、口輪部内・外面ともヘラナデ整形後、口輪部横子子調整。胴部内面に刺繡が認められる。 | 砂粒・石英・雲母・鉄・錫・スコリア | 80%                 |
| P118 | 腹形土器 | A 8.8<br>B 6.6<br>C 4.4  | 口輪部は底部から器厚を減じながら外反する。底部は珠状を呈するが歪みがある。底面は中央部が凹み、また、歪みがあって不安定である。 | 口輪部内・外面横ナデ整形。胴部、底部内・外面ともヘラナデ整形。胴部上位に刺繡が認められる。  | 砂粒・スコリア           | 100%<br>にぶい褐色<br>普通 |

### 第15号住居跡（第56図）

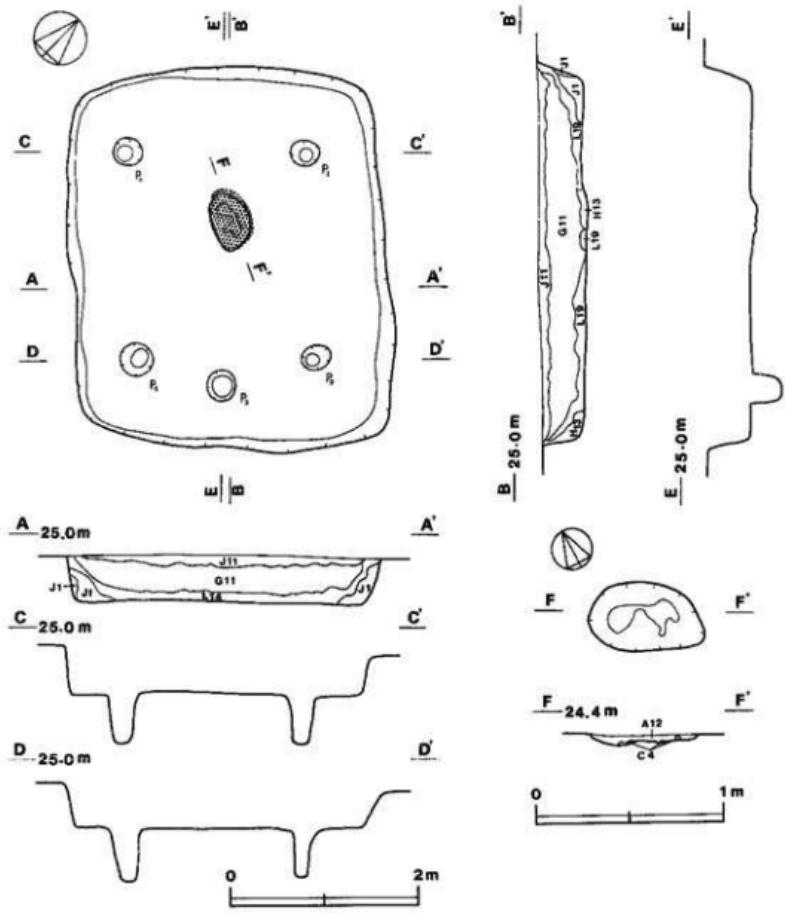
本跡は、調査区の南部D3-a6区を中心に確認された住居跡で、第8号住居跡の南東部4.8mに位置している。

平面形は、長軸4.01m・短軸3.37mの隅丸長方形を呈し、長軸方向は、N-43°-Wを指している。壁は、締まりのあるロームで、床面から垂直に立ち上がっている。壁高は、31-51cmである。床面はロームで、炉の周囲がやや高くなるほか、全体的に平坦で硬い。特に炉の北側がよく踏みしめられている。かは、床面の中央から北西側に位置し、長径62cm・短径38cmの楕円形を呈し、床面を10cmほど直状に掘りくぼめた地床である。炉内には、少量の焼土粒子・焼土ブロックとローム粒子を含む締まった極暗赤褐色土が堆積している。地床は、ロームが火熱を受けてレンガ状になつていて硬く、また、凹凸を呈している。ピットは5か所あり、規模と配列から考えていずれも主柱穴である。規模は、長径30-32cm・短径25-30cm、深さ51-56cmである。P<sub>3</sub>は直径32-33cmの円形で深さ33cmである。

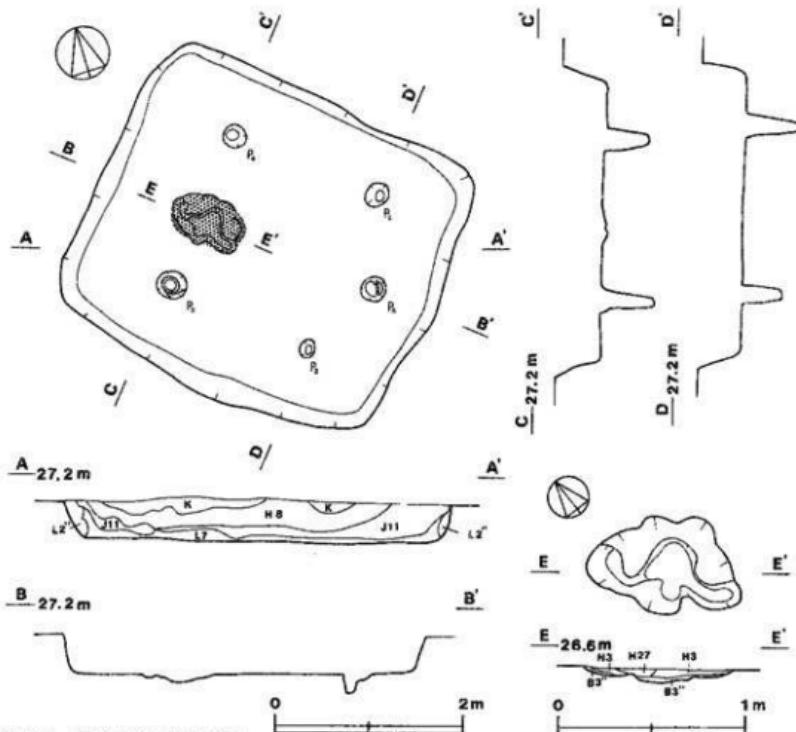
本跡の覆土は、上層に少量のローム粒子と焼土粒子を含む粘性を帯びた締まりのある暗褐色土、中層に少量のローム粒子と焼土粒子を含む粘性を帯びた締まりのある黒色土、下層に少量のローム粒子・焼土粒子と炭化粒子を含む粘性を帯びた締まりのある褐色土、壁際で少量のローム粒子を含む粘性を帯びた締まりのある褐色土が、レンズ状に自然堆積している。

遺物は、覆土の中層から弥生式土器の胴部片60点、土師式土器の胴部片37点、底部片1点、刺形石製模造品1点が出土している。

本跡は、遺構の規模や形態は弥生時代の住居跡の平面形を示し、弥生時代の住居跡の可能性も高いが、遺物や周辺の遺構との類似性を考慮して、一応その廃絶期を古墳時代中期のものとした。



第56図 第15号住居跡実測図



第57図 第16号住居跡実測図

#### 第16号住居跡（第57図）（十三塚遺跡第1号住居跡）

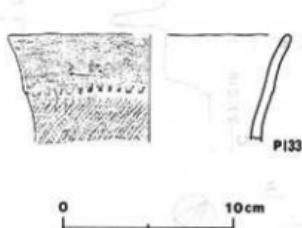
本跡は、第3号塚の調査中に、調査区の東部[B4 16区]を中心に確認された住居跡で、第10号住居跡の東北東41.5mに位置している。

平面形は、長軸3.85m・短軸3.4mの南東壁がやや張り出した隅丸長方形を呈し、長軸方向は、N-49°-Wを指している。壁は、締まりのあるロームで、北東のコーナー近くの一部が床面から垂直に立ち上がっているが、他は床面から外傾して立ち上がっている。壁高は、37~50cmである。床面はロームで、全体的に平坦で硬い。炉は、床面の北西部に位置し、長径75cm・短径50cmで、長軸方向はN-42°-Wを指す不定形を呈し、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には、少量の焼土粒子と焼土ブロックを含む暗赤褐色土が堆積している。炉床は、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤変硬化し、激しい凹凸を示している。ピットは5か所あり、主柱穴は

規模と配列からP5を除く4本である。その規模は、長径22~31cm・短径16~29cm、深さ41~58cmである。P5の平面形は、直径25cmの円形を呈し、深さ20cmである。これは、出入口の施設に関するものなのか不明であるが、補助的な支柱穴であると考えられる。

本跡の覆土は、上層に少量のローム粒子・ロームブロックと焼土粒子を含む締まりのある黒褐色土、中層に少量のローム粒子と焼土粒子を含む締まりのある暗褐色土、下層に少量のローム粒子とロームブロックを含む締まりのある褐色土、壁際に壁の崩落土であるロームブロックがレンズ状に自然堆積している。

遺物は、北側コーナー付近の床面と北東壁寄りの覆土中から弥生式土器片約50点と球状土錐1



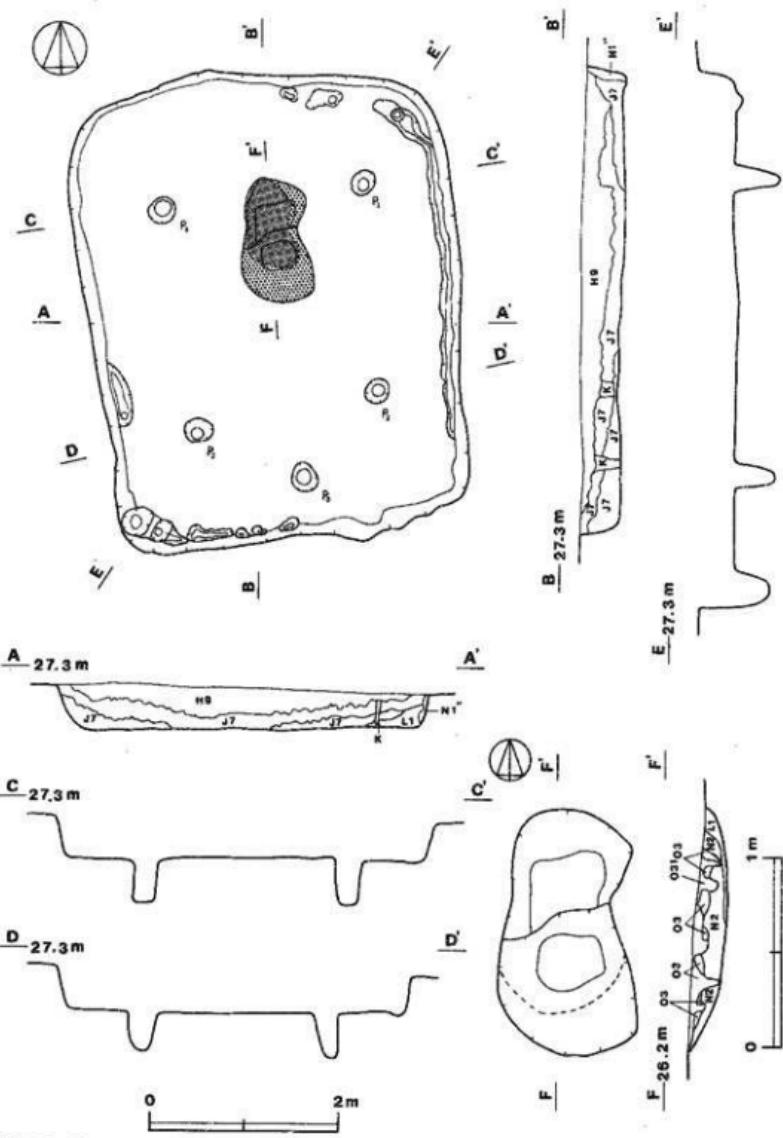
点がまばらに出土している。これらは、本跡に伴う遺物とは考えにくくいずれも周辺から流れ込んだものと思われる。また、炉内の覆土下層中からコバルトブルーのガラスの小玉1点が出土している。

本跡は、弥生時代の住居跡の平面形を示し、弥生期の住居跡の可能性もあるが、周囲の遺構等から判断して、一応その廃絶期を古墳時代中期のものとした。

第58図 第16号住居跡出土遺物実測図

#### 出土土器観察表(第58図)

| 番号   | 器種            | 法量(cm)            | 器形の特徴及び文様                                                                                                                                     | 胎土・色調・焼成              | 備考  |
|------|---------------|-------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------|-----|
| P133 | 壺形土器<br>弥生式土器 | A(16.7)<br>B(6.3) | 胴部から口縁部にかけての被片である。胴部から口縁部にかけて器厚を一定に保って外側で開いている。胴部外面は付加条溝文を施し、口縁部内・外面、胴部内面はヘラ状工具による整形をしている。さらに、口唇部には溝文を、胴部と口縁部の境には連続刻文をめぐらしている。外面の一帯に斑が付着している。 | 砂粒・石英<br>に富む赤褐色<br>普通 | 10% |



第59図 第17号住居跡実測図

### 第17号住居跡（第59図）（十三塚遺跡第2号住居跡）

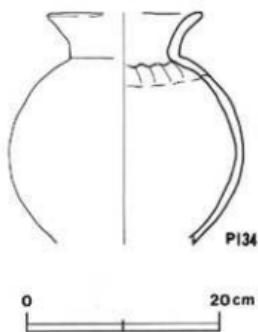
本跡は、第4・5号塚の調査中に、調査区のB4 n 区を中心に確認された住居跡で、第10号住居跡の北東25.9mに位置している。

平面形は、長軸4.95m・短軸4.0mの隅丸長方形を呈し、長軸方向は、N-6°-Wを指している。壁は、締まりのあるロームで、東壁は壁溝からほぼ垂直に立ち上がっている。他は、床面から外傾して立ち上がっている。壁高は、34~47cmである。東壁下の壁溝は、上幅18~19cm、深さ4~6cmのU字形をしている。また、これと同規模程度の壁溝と思われる掘り込みが、西壁下の中央部寄りの南側一部と南壁下の西側寄りの一部に見られる。床面は、締まりのあるロームで、全体的に平坦で硬いが、北から南に向って5cmほど低くなっている。炉は、床面の中央から北側に位置し、長径105cm・短径66cmの両側がややふくらむ不整構円形を呈し、床面を9cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には、赤褐色と暗赤褐色をした多量の焼土が堆積している。炉床は、ロームが火熱を受けてレンガ状になっていて硬く、また、激しい凹凸を示している。ピットは5か所あるが、主柱穴は規模と配列からP<sub>5</sub>を除く4本である。その規模は、長径26~34cm・短径24~28cm、深さ46~54cmである。P<sub>5</sub>の平面形は、長径30cm・短径26cmの構円形を呈し、深さ29cmである。これは、入口の施設に関するものなのか不明であるが、補助的な支柱穴であると考えられる。

本跡の覆土は、上層に少量のローム粒子・ロームブロックと炭化粒子を含む締まりのある黒褐色土、中・下層に少量のローム粒子とロームブロックを含む粘性を帯びた締まりのある暗褐色土、壁際に多量のローム粒子を含む締まりのある褐色土がレンズ状に自然堆積している。

遺物は、覆土上層から弥生式土器片約10点、土師式土器片約10点が出土した。これらは、覆土中からの出土であり、本跡に伴うものとは考えにくく、いずれも周辺から流れ込んだ土器片であると思われる。

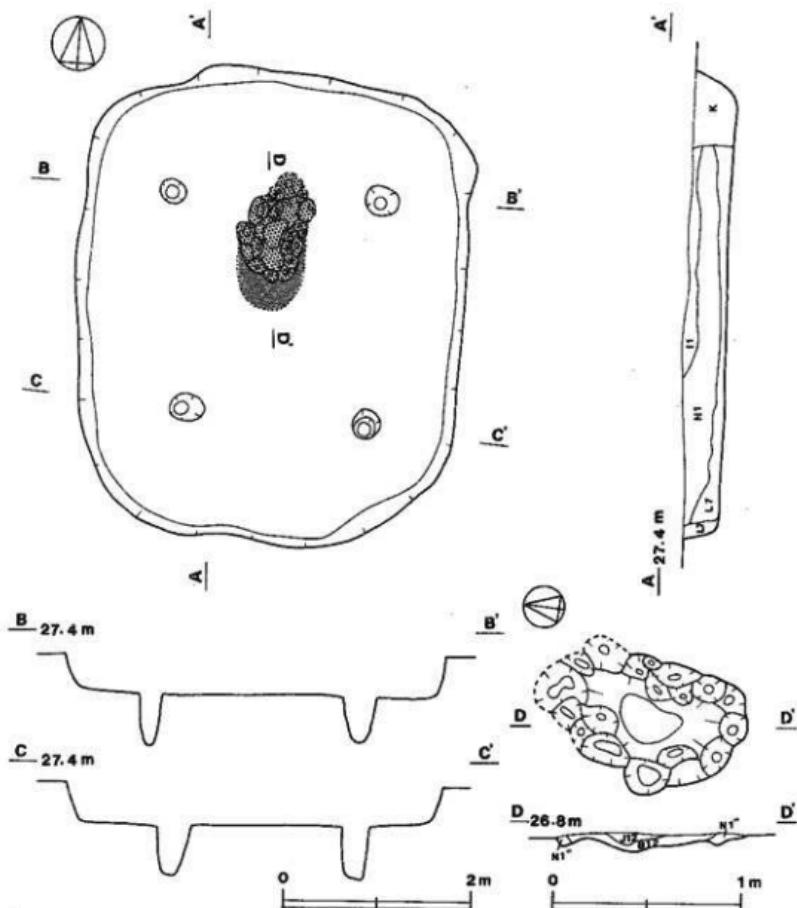
本跡は、弥生時代の住居跡の平面形を示し、弥生期の住居跡の可能性もあるが周辺の遺構との類似性を考慮して、一応ここではその廢絶期を古墳時代中期のものとした。



第60図 第17号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表(第60図)

| 番号   | 器種   | 法量(cm)             | 器形の特徴                                                       | 手法の特徴                            | 基土・色調・焼成                    | 備考  |
|------|------|--------------------|-------------------------------------------------------------|----------------------------------|-----------------------------|-----|
| P134 | 壺形土器 | B(16.0)<br>C(23.8) | 器部は肩厚を一定に保ち、球状を呈し、腹部中位に最大径をもつ。肩部からくの字状に外反して大きく開いて口縁部を作っている。 | 胴部内・外方へラナナ形整形。<br>口縁部内・外側輪ナナ形整形。 | 砂質・良石・石<br>黒<br>にぶい褐色<br>普通 | 40% |



第61図 第18号住居跡実測図

### 第18号住居跡（第61図）(十三塚遺跡第3号住居跡)

本跡は、第6号塚の調査中に、調査区のB3d区を中心に確認された住居跡で、第10号住居跡の北北東24.1mのところに位置している。

平面形は、長軸5.0m・短軸4.2mの隅丸長方形を呈し、長軸方向は、N-2°-Wを指している。壁は、締まりのあるロームで、床面から外傾して立ち上がっている。壁高は34~42cmである。床面はロームで、平坦で硬い。炉は、床面の中央から北側に位置し、長径約115cm・短径66cmの南北に長い梢円形を呈している。床面を10cmほど皿状に掘りくぼめ、その縁辺部に石を埋め込んだと思われる小穴が確認されており石囲い炉と考えられる。本跡の施設後に石が抜かれたものと思われるが、北側の約3分1が攪乱を受けており不明瞭である。その他の部所で確認できる石の抜き取り跡は12か所ほどである。炉床は、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。ピットは4か所あり、いずれもコーナー部付近に位置しており、また、その規模からも主柱穴であると思われる。規模は、長径29~38cm・短径25~30cm、深さ48~58cmである。

本跡の覆土は、上層に少量のローム粒子を含む締まりのある極暗褐色土、中層に少量のローム粒子を含むやや締まりのある黒褐色土、下層に少量のローム粒子とロームブロックを含む締まりのある褐色土が、レンズ状に自然堆積している。

遺物は、覆土上層から縄文式・弥生式・土師式土器片約20点が出土している。これらの土器片は、レンズ状の自然堆積土中の上層から出土しており、いずれも周囲からの流れ込みと考えられる。

本跡は、遺構の形態と規模から古墳時代中期のものと考える。

住居跡一覧表

| 住居跡番号 | 位置      | 長軸方向    | 平面形   | 規格         |        | 床面        | ピット数 | 炉      | 覆土 | 備考          |
|-------|---------|---------|-------|------------|--------|-----------|------|--------|----|-------------|
|       |         |         |       | 長軸×短軸(m)   | 壁高(cm) |           |      |        |    |             |
| SI-1  | C 2 b 7 | N-47°-E | 隅丸長方形 | 11.14×9.62 | 26~41  | 平坦        | 12   | 地床炉(2) | 自然 | 壁失火屋<br>壁溝有 |
| 2     | C 2 e 2 | N-50°-E | 隅丸方形  | 6.84×6.6   | 50~73  | 平坦        | 4    | 地床炉    | 自然 | 壁失火屋<br>壁溝有 |
| 3     | C 2 g 2 | N-71°-W | 隅丸長方形 | 4.57×3.86  | 35~45  | 平坦        | 4    | 地床炉    | 自然 | 壁失火屋        |
| 4     | C 2 i 3 | N-45°-W | 隅丸長方形 | 4.35×3.7   | 12~18  | やるい<br>芯灰 | 3    |        | 自然 |             |
| 5     | C 2 f 9 | N-9°-E  | 隅丸方形  | 2.71×2.7   | 30~39  | 平坦        | 13   |        | 自然 | 一部<br>壁溝有   |
| 6     | C 2 g 0 | N-51°-E | 隅丸方形  | 4.32×4.23  | 12~33  | 平坦        | 4    | 地床炉    | 自然 | 壁外柱穴<br>壁溝有 |
| 7     | D 3 s 2 | N-19°-W | 隅丸長方形 | 4.84×3.92  | 32~41  | 平坦        | 5    | 地床炉    | 自然 |             |
| 8     | C 3 i 3 | N-51°-W | 隅丸長方形 | 6.09×5.25  | 51~61  | 平坦        | 6    | 地床炉    | 自然 |             |
| 9     | C 2 f 8 | N-90°-E | 隅丸長方形 | 2.13×1.6   | 27~38  | 平坦        | 6    |        | 自然 | 壁外柱穴<br>壁溝有 |
| 10    | B 3 j 4 | N-23°-W | 隅丸方形  | 11.14×10.9 | 14~38  | 平坦        | 6    | 地床炉(3) | 自然 | 壁失火屋<br>壁溝有 |
| 11    | B 3 h 6 | N-46°-E | 隅丸長方形 | 3.42×3.1   | 8~16   | やるい<br>芯灰 | 8    | 地床炉    | 自然 | 一部<br>壁外柱穴  |
| 12    | C 3 e 0 | N-0°    | 隅丸方形  | 2.45×2.33  | 21~33  | やるい<br>芯灰 | 7    |        | 自然 | 壁外柱穴        |

| 住居跡番号 | 位置     | 反転方向    | 平面形   | 規格        |       | 床面 | ピット数 | 炉   | 覆土         | 備考   |
|-------|--------|---------|-------|-----------|-------|----|------|-----|------------|------|
|       |        |         |       | 長軸×短軸(m)  | 等高線   |    |      |     |            |      |
| SI-13 | C 3 12 | N-45°-W | 隅丸長方形 | 5.59×4.85 | 7~21  | 凹凸 | 6    | 地床炉 | 自然一層<br>擾乱 | 焼失家屋 |
| 14    | D 3 18 | N-54°-W | 隅丸長方形 | 6.33×6.07 | 18~41 | 平坦 | 6    | 地床炉 | 自然         | 焼失家屋 |
| 15    | D 3 16 | N-43°-W | 隅丸長方形 | 4.01×3.37 | 31~51 | 平坦 | 5    | 地床炉 | 自然         |      |
| 16    | B 4 16 | N-49°-W | 隅丸長方形 | 3.85×3.4  | 37~50 | 平坦 | 5    | 地床炉 | 自然         |      |
| 17    | B 4 11 | N-6°-W  | 隅丸長方形 | 4.95×4.0  | 34~47 | 平坦 | 5    | 地床炉 | 自然         |      |
| 18    | B 3 8  | N-2°-W  | 隅丸長方形 | 5.0×4.2   | 34~42 | 平坦 | 4    | 石塊炉 | 自然         |      |

## 第4節 その他の遺構と遺物

### 1 十三塚について

十三塚は、面積1,355m<sup>2</sup>を有し、竜ヶ崎市貝原塚町206番地に所在する。遺跡の形状は、貝原塚町と長峰町を結ぶ旧阿波街道といわれる北西～南東に伸びる小路の北東側に幅約9m、長さ約150mにわたる細長い形をしている。現況は太い枯れた松の木と背の高い篠で一面覆われており、塚の位置さえも観察出来ない原野であった。この原野を清掃したところ、細長い用地のほぼ中央部に土鏡頭状の7号塚が現われた。しかし、それ以外は平坦で塚らしい形跡は見当らなかった。そこで詳細な観察を重ねた結果、その用地内に見られるいくつかの地蔵のうち7号塚を中心にして道路に沿ってほぼ一直線上で等間隔に並ぶ左右6か所の地蔵を確認し、長峰町側から貝原塚町側へ第1・2・3……13号塚と命名して調査を開始した。

塚と思われる1号塚から13号塚まで、東西・南北に土層観察用ベルトを十字に残して、表土からローム層の地山に至るまで埴丘を掘り込んで調査を行った。その結果、7号塚を除く12基の塚と思われた土層は、いずれもほぼ3層から成り、上層は暗褐色を呈する植物纖維を含んだ腐植土、中・下層は暗褐色や褐色をしたローム粒子・ローム小ブロックを微量含んだいわゆる遺物包含層の自然堆積土であった。即ち、調査時において7号塚を除く12基の塚は、塚としての盛土の様相は認められなかった。また、それらの塚とその周辺からは塚に関係する遺物の出土もなく、調査時の時点において12基の塚を塚と判断する資料が得られず、付近の地蔵と同じような自然地形であると考えざるを得なかった。以下に13基の塚の位置と土層断面実測図等を掲載し、7号塚を除く12基の塚については解説等を省略した。

7号塚は、B3 15区を中心に直径9m、塚高1.32mの土鏡頭形を呈する塚である。塚頂部はやや北側寄りに位置し、また、土鏡頭状の塚は、北側がやや急斜面をなし、その他はなだらかな斜面を呈している。

塚を形成する基本的な土層はおおむね4層である。上層は粘性と縮まりのないサラサラした褐色土であり、中層はロームブロックが混じった粘性を帯びた縮まりのある褐色土、下層はローム

ブロックと微量の木炭粒子が混じった粘性を帯びた締まりのある暗褐色土が堆積している。また、最下層はロームと黒色土が混じった粘性を帯びた締まりのある褐色土となり、さらに、中・下層の一部に含有物や色調の若干異なる封土が見られた。

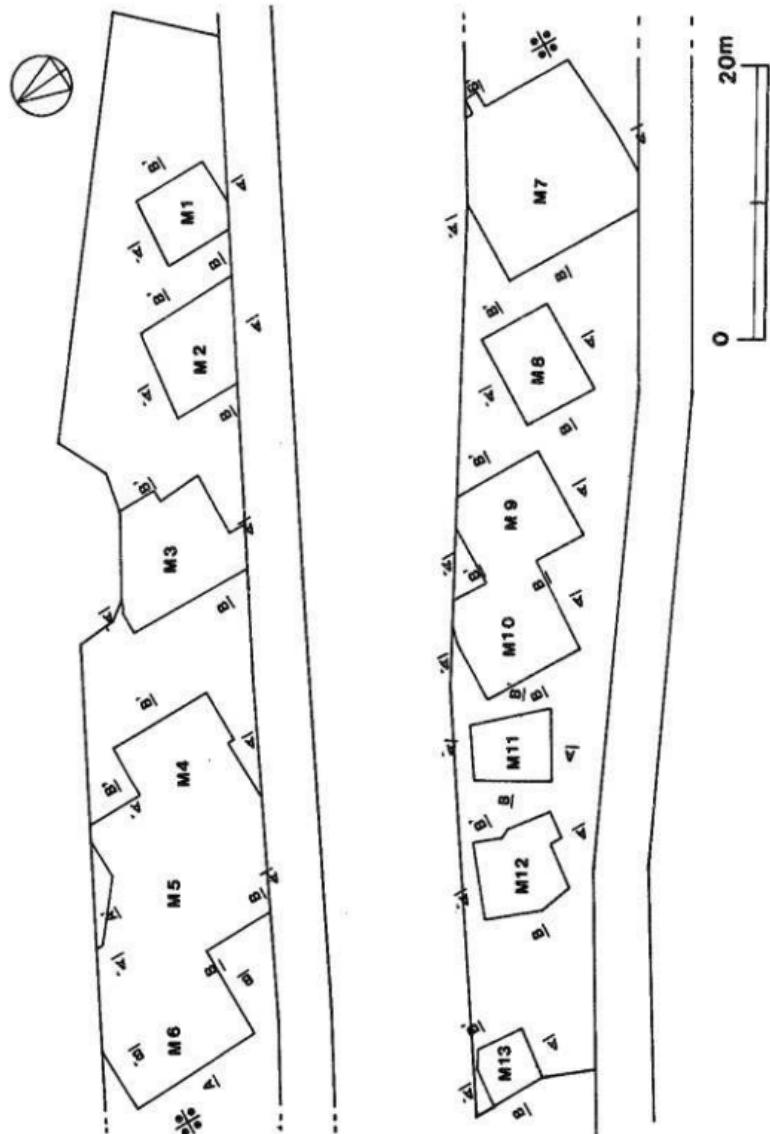
出土遺物は、封土内から弥生時代と古墳時代の無文の底部片がそれぞれ1点ずつ出土しただけで、塚に伴うと思われる遺物は出土しなかった。また、この塚については、「戦国時代において貝原塚城の武士数名が八代方の武士に切り殺され、侍大将がここに葬られた」という伝承がある。また、「昭和13年頃に掘り返し、鍔びた刀、鉢と人骨らしいものを掘り出した」という話も伝えられている。そのため、土層の乱れや遺物採集に十分留意して調査を行ったが、木の根が深く入っているほかは人工的に盛り上げた土層を示すだけで、掘り返しによる人為的擾乱や、戦国時代に伴う遺物は出土しなかった。

塚の周辺には地山を掘り込んだ浅い溝状の掘り込みがあるが、深さや幅が一定せず、古墳のような意図的・計画的に作られたものではなく、盛土の折に掘り込まれた跡と思われる。

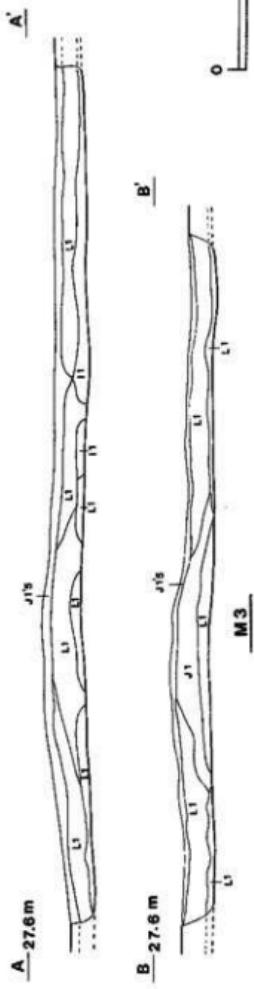
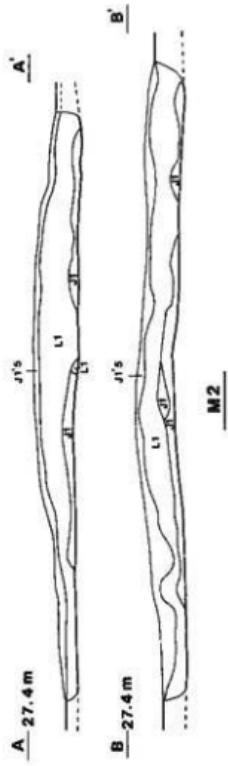
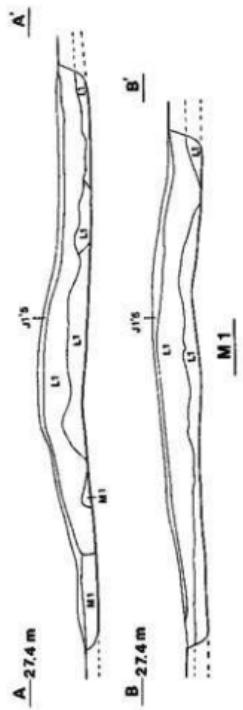
塚上の中央部には、石塔1基が建立されていた。石塔は高さ90cm、最大横幅31.6cm、最大厚さ21.6cmの花崗岩の地蔵尊である。石像は蓮弁の台座と一体になる舟型光背型の石に浮彫された立像の地蔵尊で、縦41cm、横32cm、厚さ18cmの隅丸直方体の台石にのっている。像容は、右手に錫杖、左手に宝珠を棒げ持っている比丘（像）形である。杖頭部の大頭は心葉形で、これに2つの小頭をついている。柄部は地まで続いているが石突はない。像の右側に「享保十八年丑天十月□日造師金剛院」、左側に「奉開眼供養地蔵尊一軒」、中央上部には梵字で貞（カ）、蓮台の中央部に「惣具中」、左側に「貝原塚村」と刻まれている。

銘文にある「金剛院」は、奄美崎市貝原塚町に現存する「天台宗金剛院」のことと考えられる。

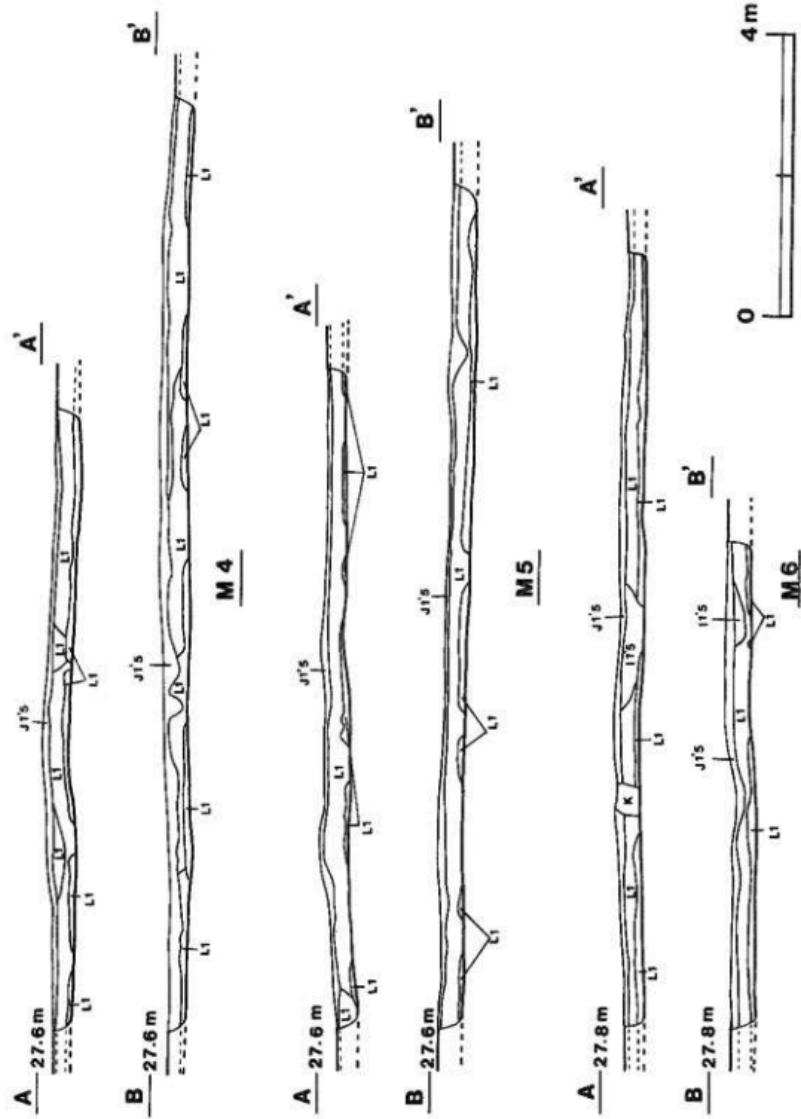
なお、3・6号塚下と4号塚と5号塚の間の表土下から古墳時代和泉期の住居跡が3軒検出され、その調査も行った。その報告は住居跡の項で述べているのでここでは省略する。



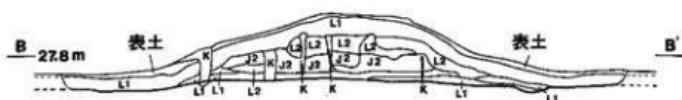
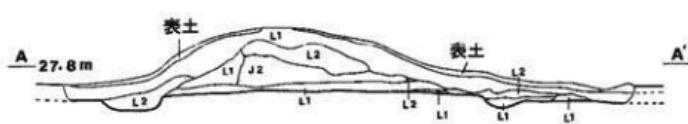
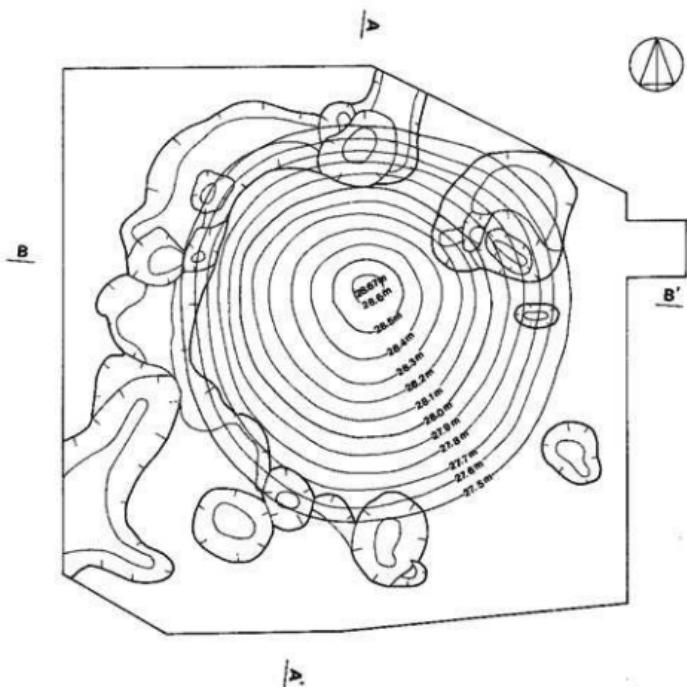
第62図 十三塚遺跡・塚発掘位置図



第63図 十三塚遺跡第1号・2号・3号塚土層断面図



第64図 十三塚遺跡第4号・5号・6号塚土層断面図

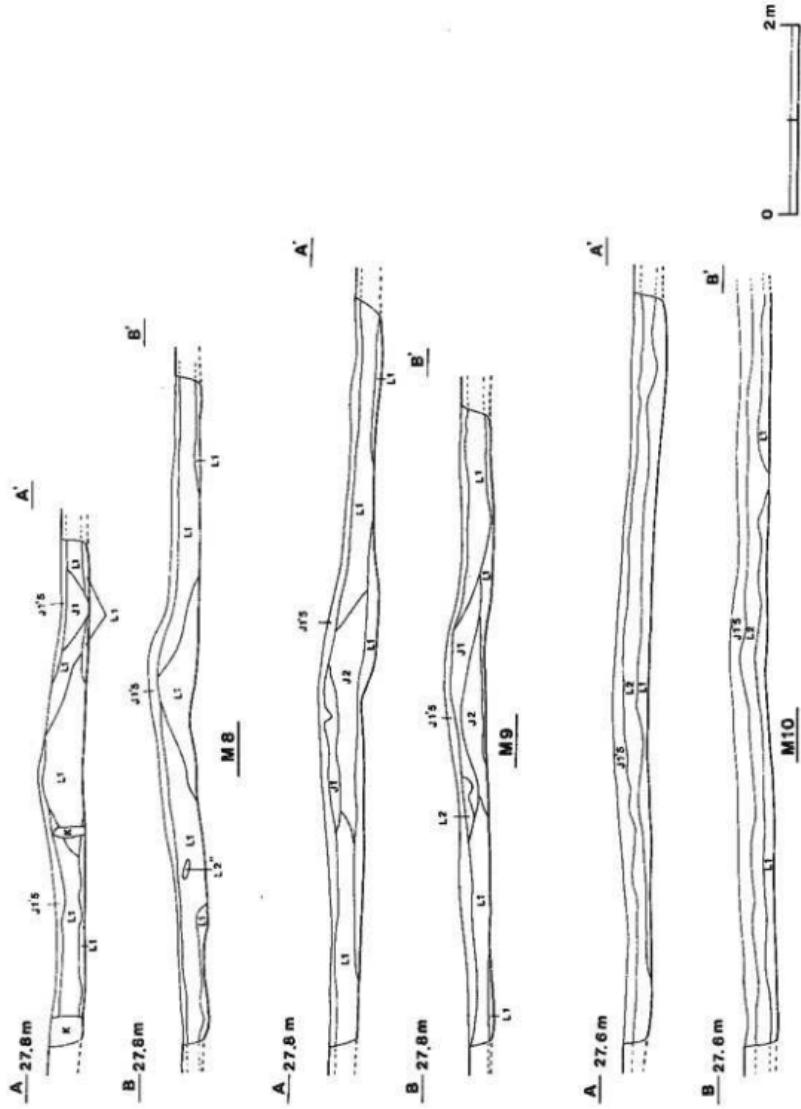


0 4 m

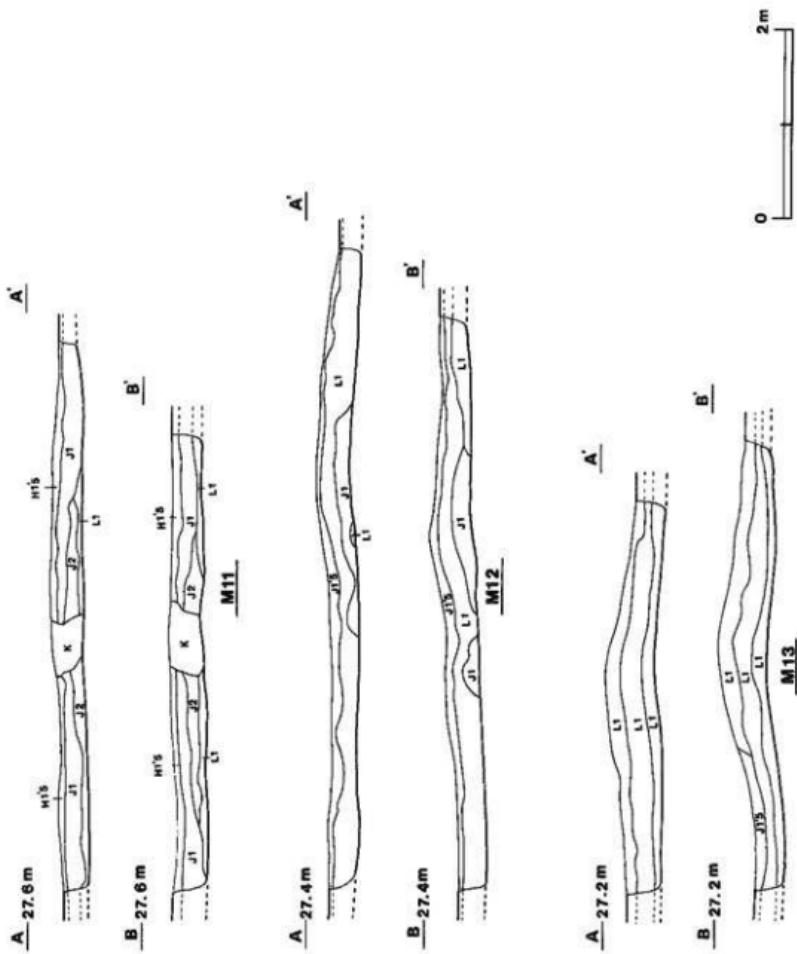
第65図 十三塚遺跡第7号塚平面・土層断面図



第66図 第7号墳位置図と地蔵尊実測図 (西周古墳群第1・第2・第3・第4・第5・第6・第7号墳)



第67图 十三标造路第8号·9号·10号探土层断面图



第68圖 十三塚遺跡第11号・12号・13号塚土層断面図

## 2 土坑について

当遺跡から検出された土坑は59基である。これらの土坑は、大別して4種類に分けることができる。

第1のグループは縄文時代の土坑、第2グループはSD2・3号に並列もしくは延長上に位置している土坑とその付近のもの、第3グループはSD4号と5号に跨まれた第78図中F番地内に属する土坑、第4グループは前記のいずれにも当てはまらない土坑である。

第1グループについてはすでに言及している通り、縄文時代のトラップピットと考えられる土坑（SK20・29・30・32・34・37・38・57・59）9基である。

第2グループは溝の所でも説明を加えるが、溝と深い係りや地境的性格をもつと判断される土坑（SK5・8・9・10・11・12・13・14・15・19・21・22）12基である。これらの第2グループの土坑は遺物が全く検出されず、おそらく道路の両側に掘られた排水溝、もしくは道路を造った時の土取り跡ということができそうである。

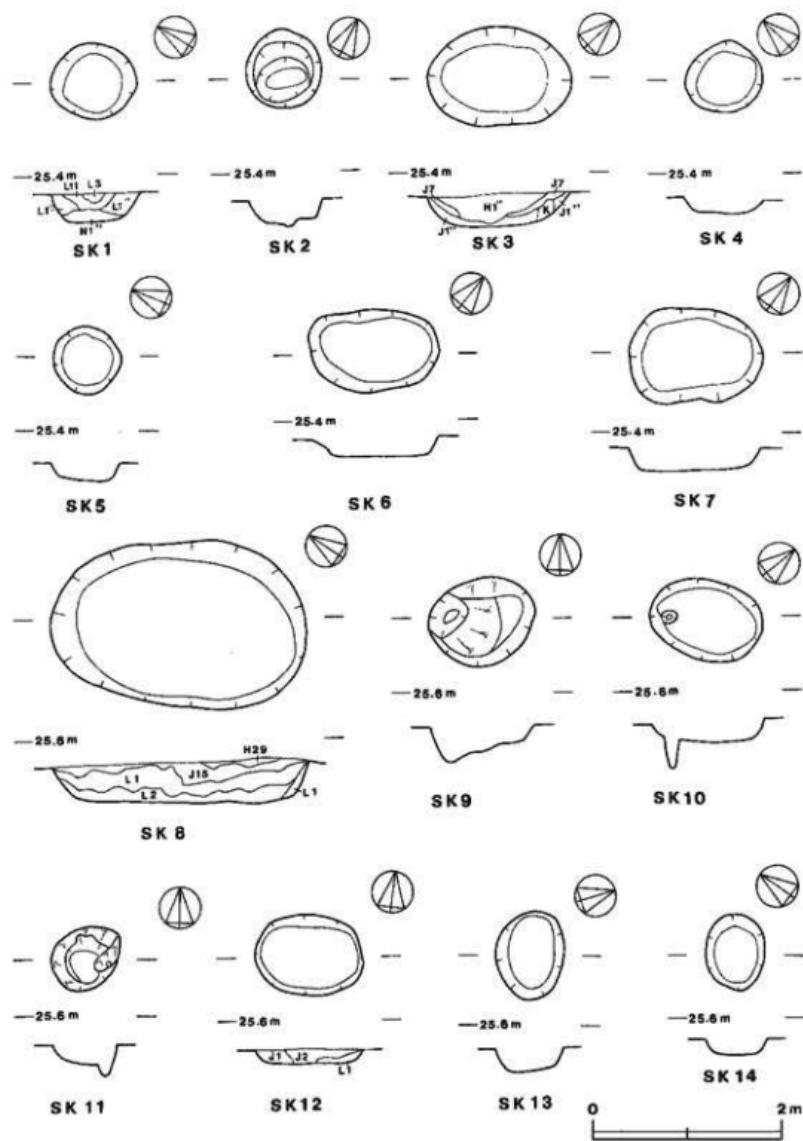
第3のグループは第78図現況地形図、記号F地内に分布する遺物の出土しない土坑（SK33・35・36・42・43・46・48・49・50・54）の10基と弥生式土器片と土師式土器片を覆土上層から出土した土坑（SK39・40・41・44・45・55・56・58）8基で、計18基である。これらの土坑からの出土遺物は、数点の時期の異なる遺物が覆土上層に確認されたが出土状況からみて、擾乱や流れ込みによるものと判断される。また、遺物の出土しない土坑は、いずれも縄文時代や古墳時代の遺構の覆土に類似したものはなく、新しい覆土の様相を示し、古代の遺構ではないと考えられる。

第4のグループは、畠境や山境の地境的な位置にある土坑（SK1・2・3・4・6・7・16・17・18・23・24・25・26・27・28・31・47・51・52・53）の20基である。

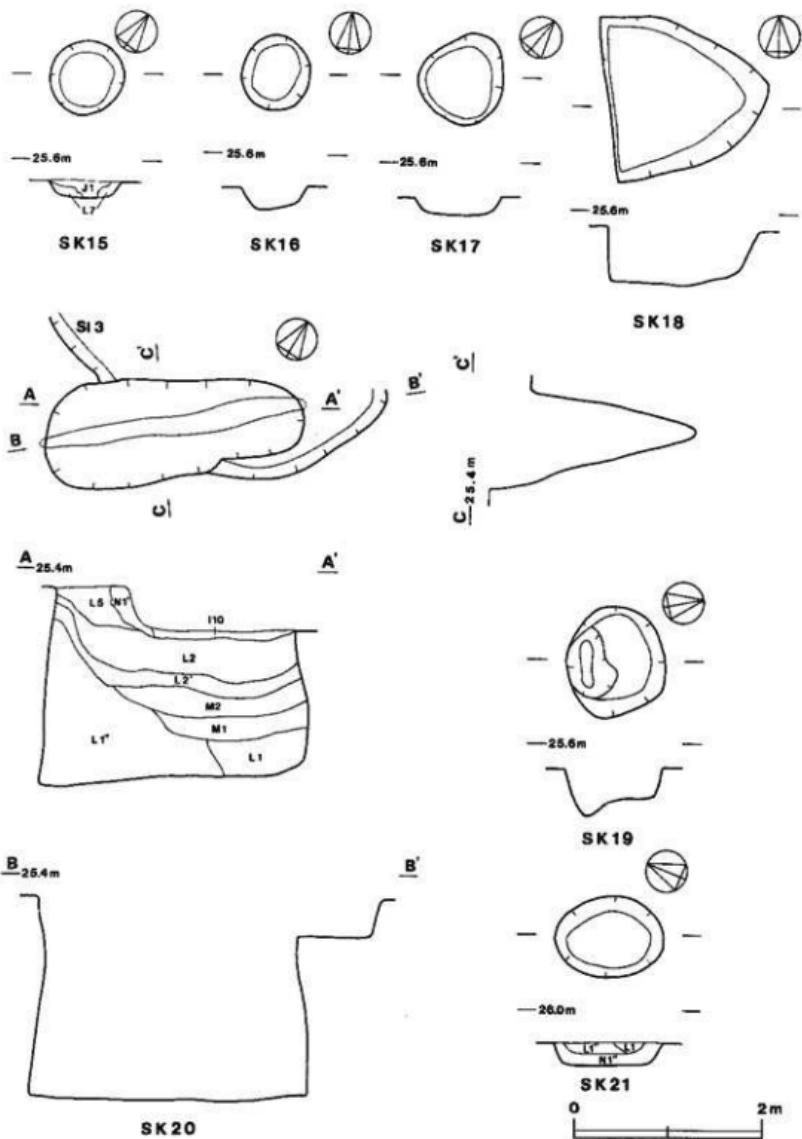
第2～4のグループの土坑について、時期を確定する遺物は出土しておらず、時期は不明といわざるを得ない。しかし、これらの土坑は周辺の状況から判断して、道路が造られた頃、即ち中・近世以降のものといえそうである。

なお、第26号土坑は縄文時代の土坑と類似しているV字形の断面形を呈し、判断に迷う所が多かったが、その他の形態・形状・覆土などを総合的に考えて第4のグループに入れた。第3グループとした第48号土坑は地下式坑の様な掘り方を示しているが地下式坑でなく、浅い土坑が重複している可能性が強い。第3グループとした第41号土坑は形態的には地下式坑の様相を示していた。

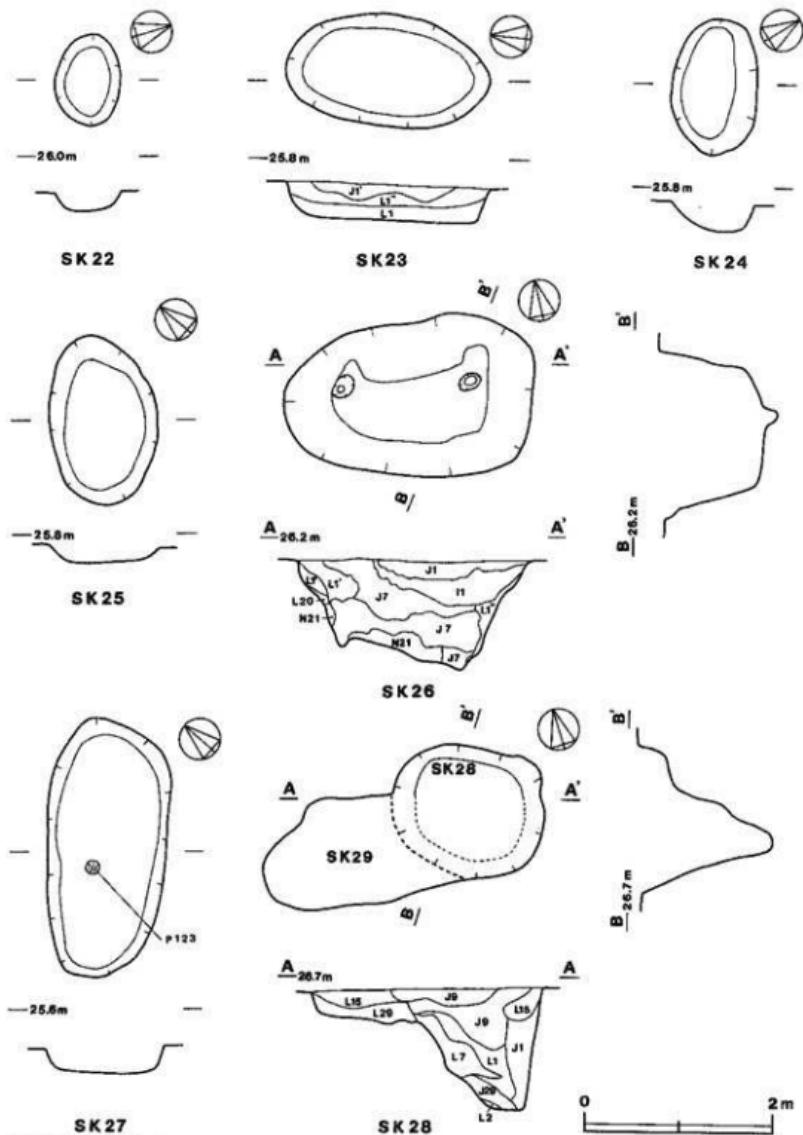
以下に縄文時代の土坑も含め、比較対照する意図で土坑の実測図を土坑番号順に、また、その解説を一覧表にして掲載した。



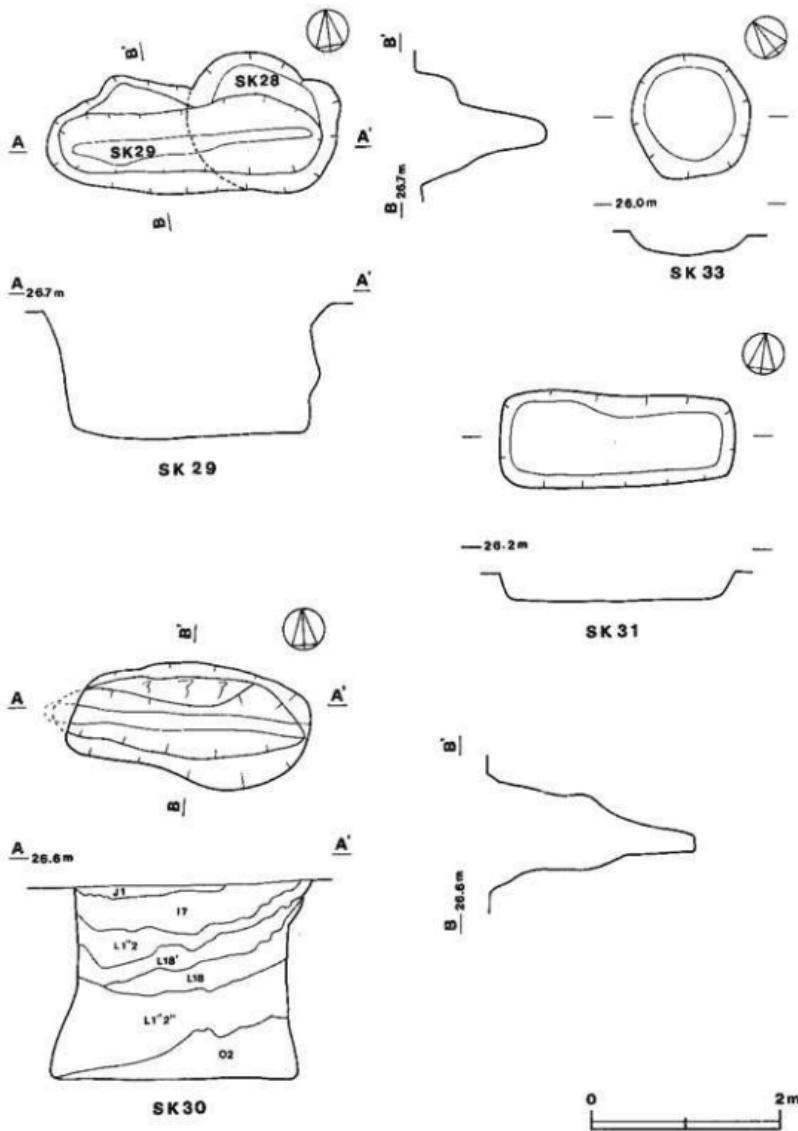
第69図 土坑実測図(1)



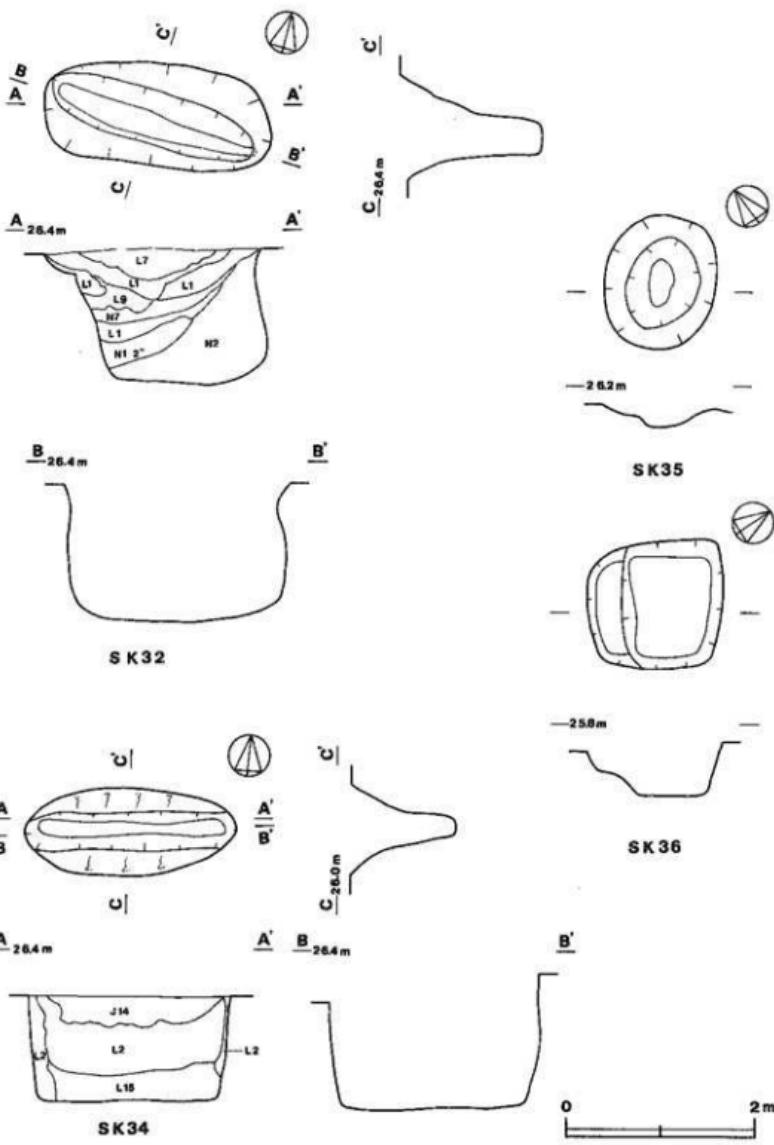
第70図 土坑実測図(2)



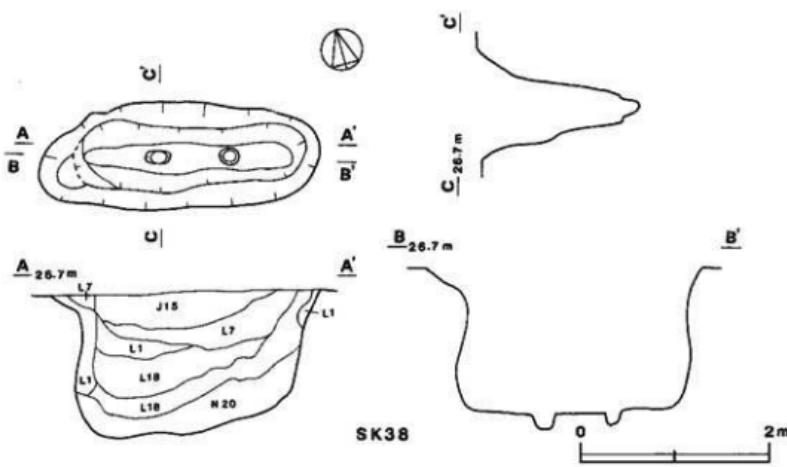
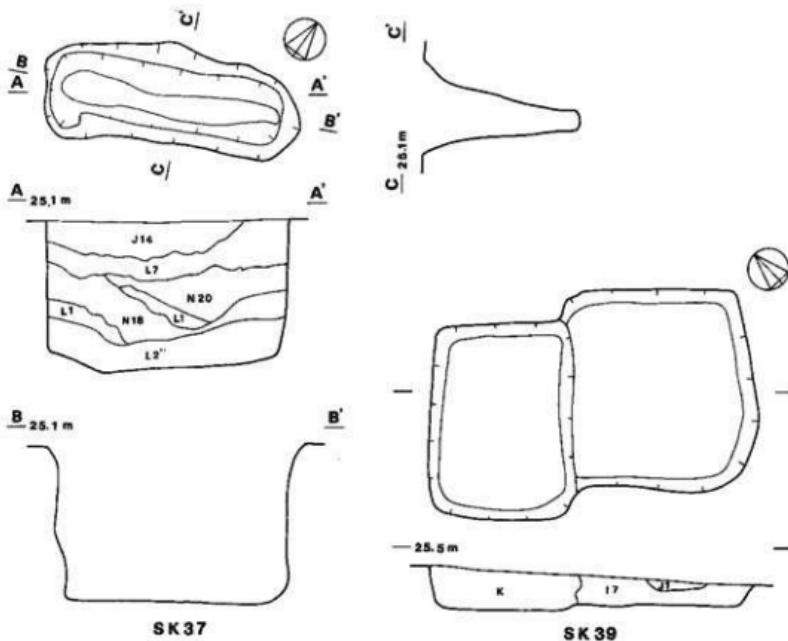
第71図 土坑実測図(3)



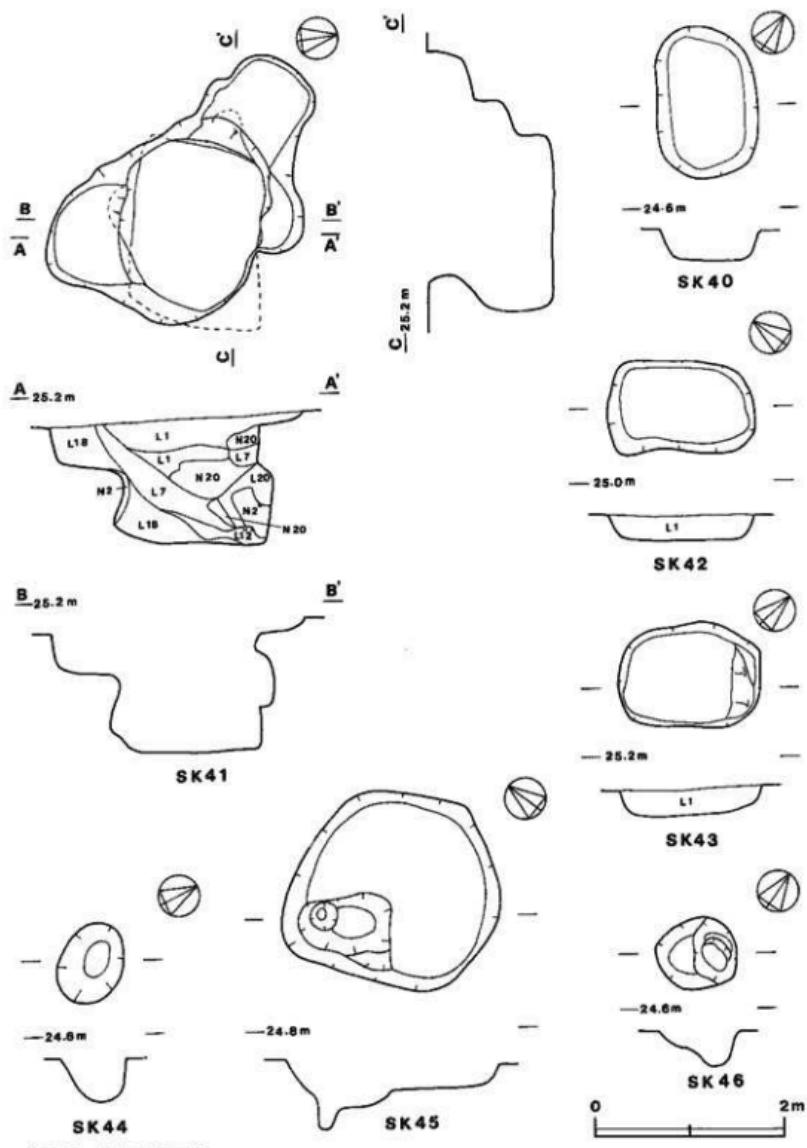
第72図 土坑実測図(4)



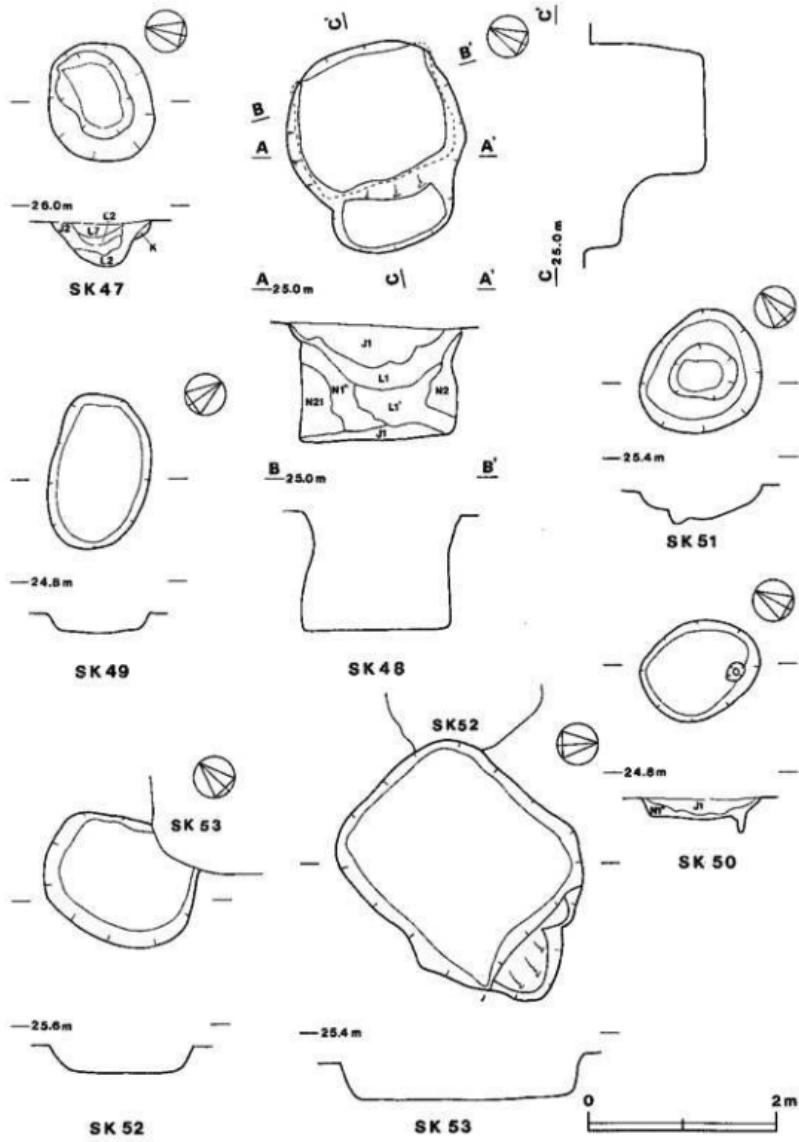
第73図 土坑実測図(5)



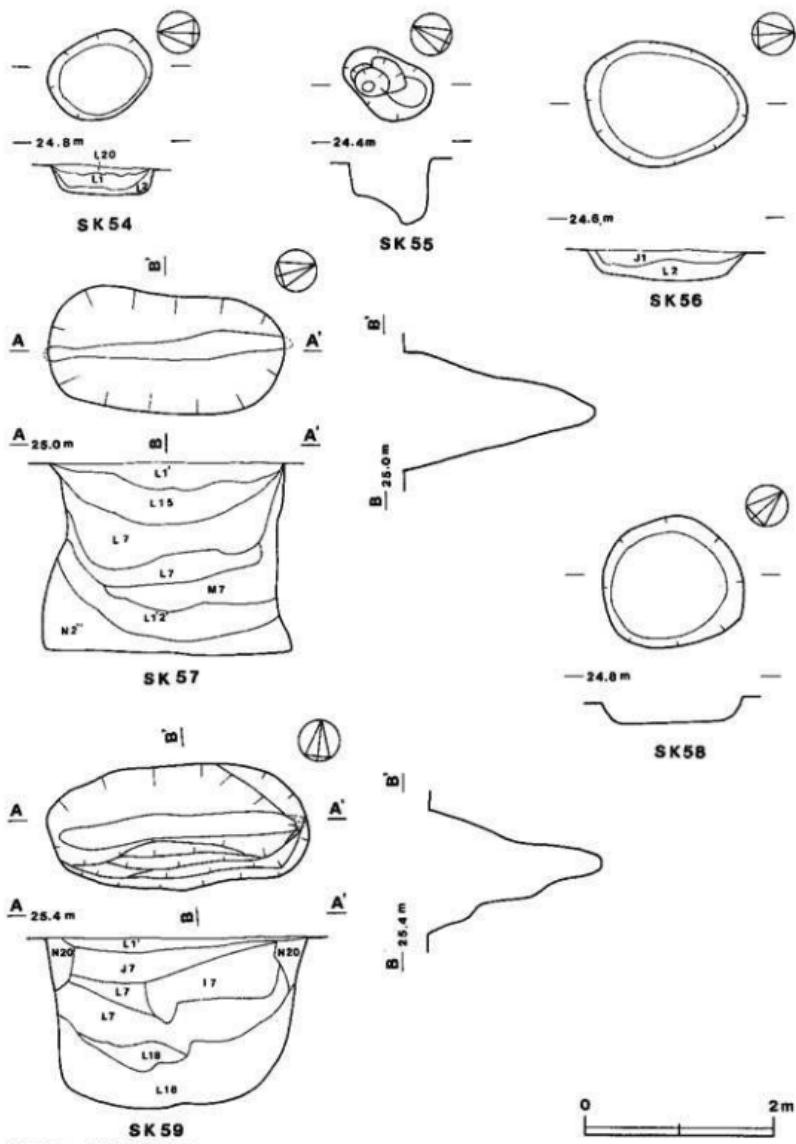
第74図 土坑実測図(6)



第75図 土坑実測図(7)



第76図 土坑実測図(8)



第77図 土坑実測図(8)

土坑一覧表

| 土坑<br>番号 | 深さ<br>m | 長径方向<br>平面形 | 平<br>面<br>積<br>長径×深さ(m)<br>単位m <sup>2</sup> | 地<br>質      |             | 堅<br>度<br>外<br>部<br>状<br>態 | 底<br>面<br>内<br>部<br>状<br>態 | 形<br>態  | 出<br>土<br>看<br>物           | 備<br>考               | 開<br>拓<br>番<br>号 |
|----------|---------|-------------|---------------------------------------------|-------------|-------------|----------------------------|----------------------------|---------|----------------------------|----------------------|------------------|
|          |         |             |                                             | 長<br>径<br>m | 深<br>さ<br>m |                            |                            |         |                            |                      |                  |
| 30       | D 2 a 2 | N-47°-W     | 楕円形                                         | 0.91×0.82   | 34          | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H A 1 + | 陶土上層に朱毛式土器片5。<br>土師式土器片1。  |                      | 第69回             |
| 2        | D 2 a 3 | N-46°-W     | 円形                                          | 0.86×0.82   | 29          | 外縁<br>直状                   | 凹凸<br>自然                   | I A 1 + | 陶土上層に朱毛式土器片1。<br>土師式土器片1。  |                      | 第69回             |
| 3        | D 2 a 4 | N-47°-E     | 楕円形                                         | 1.54×1.04   | 35          | ゆる<br>やか                   | 直状                         | H A 2 + | なし                         |                      | 第69回             |
| 4        | D 2 c 1 | N-44°-W     | 円形                                          | 0.82×0.77   | 16          | 外縁<br>直状                   | 自然                         | I B 1 + | 陶土上層に朱毛式土器片6。<br>土師式土器片3。  |                      | 第69回             |
| 5        | D 2 c 2 |             | 円形                                          | 0.73×0.72   | 20          | 外縁<br>直状                   | 自然                         | I A 1 + | なし                         |                      | 第69回             |
| 6        | D 2 c 4 | N-47°-E     | 楕円形                                         | 1.35×0.89   | 21          | ゆる<br>やか                   | 直状                         | H A 2 + | 陶土上層に朱毛式土器片6。<br>土師式土器片20。 |                      | 第69回             |
| 7        | D 2 c 5 | N-46°-E     | 楕円形                                         | 1.42×0.96   | 25          | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H A 2 + | なし                         |                      | 第69回             |
| 8        | C 2 a 2 | N-33°-W     | 楕円形                                         | 2.72×1.77   | 45          | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H A 3 + | なし                         |                      | 第69回             |
| 9        | C 2 d 1 | N-72°-E     | 楕円形                                         | 1.15×0.92   | 40          | 外縁<br>直状                   | 人為                         | H A 2 + | なし                         | 櫻花穴                  | 第69回             |
| 10       | C 2 c 3 | N-34°-E     | 楕円形                                         | 1.20×0.82   | 46          | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H A 2 + | なし                         |                      | 第69回             |
| 11       | C 2 c 2 | N-54°-E     | 楕円形                                         | 0.79×0.64   | 34          | ゆる<br>やか                   | 凹凸<br>人為                   | H A 1 + | なし                         | 櫻花穴                  | 第69回             |
| 12       | C 2 c 2 | N-87°-E     | 楕円形                                         | 1.14×0.84   | 17          | ゆる<br>やか                   | 直状<br>自然                   | H B 2 + | なし                         |                      | 第69回             |
| 13       | C 2 b 2 | N-67°-W     | 楕円形                                         | 0.95×0.71   | 23          | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H A 1 + | なし                         |                      | 第69回             |
| 14       | C 2 c 2 | N-52°-E     | 楕円形                                         | 0.8×0.64    | 16          | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H A 1 + | なし                         |                      | 第69回             |
| 15       | B 2 i 1 |             | 円形                                          | 0.8×0.76    | 18          | 外縁<br>直状                   | 自然                         | I A 1 + | なし                         |                      | 第70回             |
| 16       | C 1 a 6 | N-25°-W     | 円形                                          | 0.8×0.74    | 30          | 外縁<br>直状                   | 人為                         | I A 1 + | なし                         | 櫻花穴                  | 第70回             |
| 17       | C 1 a 6 | N-7°-W      | 不規則形                                        | 0.95×0.89   | 20          | 外縁<br>直状                   | 人為                         | H A 2 + | なし                         | 櫻花穴                  | 第70回             |
| 18       | C 1 b 8 | N-50°-E     | 複雑円形                                        | 1.74×1.68   | 59          | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H A 2 + | なし                         |                      | 第70回             |
| 19       | B 1 i 1 | N-38°-W     | 不規則形                                        | 1.31×1.09   | 50          | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H A 2 + | なし                         |                      | 第70回             |
| 20       | C 2 b 2 | N-45°-E     | 楕円形                                         | 2.78×1.0    | 223         | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H C 2 + | 陶土上層に十脚式土器片1。<br>圓文時代      |                      | 第70回             |
| 21       | B 1 d 6 | N-25°-W     | 楕円形                                         | 1.15×0.87   | 23          | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H A 2 + | なし                         |                      | 第70回             |
| 22       | B 1 e 6 | N-72°-W     | 楕円形                                         | 0.97×0.7    | 21          | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H A 1 + | なし                         |                      | 第71回             |
| 23       | B 2 i 4 | N-5°-W      | 楕円形                                         | 2.16×1.16   | 39          | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H A 2 + | なし                         |                      | 第71回             |
| 24       | B 2 i 4 | N-57°-W     | 楕円形                                         | 1.43×0.92   | 29          | 外縁<br>直状                   | 人為                         | H A 2 + | なし                         | 一部櫻花                 | 第71回             |
| 25       | B 2 i 5 | N-32°-E     | 楕円形                                         | 1.61×1.1    | 20          | ゆる<br>やか                   | 凹凸<br>自然                   | H B 2 + | なし                         |                      | 第71回             |
| 26       | B 2 g 5 | N-76°-W     | 楕円形                                         | 2.62×1.59   | 123         | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H C 2 + | なし                         |                      | 第71回             |
| 27       | C 2 i 6 | N-52°-E     | 楕円形                                         | 2.70×1.26   | 30          | 外縁<br>直状                   | 人為                         | H A 2 + | 陶土上層に土師式土器片5。<br>球狀土器1。    | 一部櫻花                 | 第71回             |
| 28       | B 2 b 6 | N-35°-W     | 楕円形                                         | 1.62×1.32   | 140         | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H A 2 + | なし                         | 29分内い<br>と素復         | 第71回             |
| 29       | B 2 b 6 | N-87°-W     | 楕円形                                         | 3.07×1.1    | 136         | 外縁<br>直状                   | 自然                         | H C 2 + | なし                         | 28分内い<br>と素復<br>開支時代 | 第72回             |

| 土区<br>番号 | 位 置     | 長横方向   | 平 面 形 | 規 模       |       | 砂質       | 泥炭       | 覆 土 | 形 態       | 地 上 遺 物               | 備 考                        | 特徴番号  |
|----------|---------|--------|-------|-----------|-------|----------|----------|-----|-----------|-----------------------|----------------------------|-------|
|          |         |        |       | 長径×短径(m)  | 高さ(m) |          |          |     |           |                       |                            |       |
| SK30     | B 2 4 6 | N-80-W | 楕円形   | 2.55×1.25 | 220   | 砂状       | 平坦       | 自然  | II C 3 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7206 |
| 31       | B 3 1 2 | N-82-E | 楕円形   | 2.5×0.98  | 32    | 外傾       | 中高<br>やか | 自然  | II A 2 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7207 |
| 32       | C 4 4 2 | N-78-E | 楕円形   | 2.4×1.05  | 148   | 砂状       | 高底       | 自然  | II C 3 +  | 覆土上層に土師式土器片1。         | 複文時代                       | 第7208 |
| 33       | C 3 4 0 | N-35-E | 四 角 形 | 1.3×1.25  | 21    | ゆる<br>やか | 平坦       | 自然  | II B 2 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7209 |
| 34       | C 4 4 3 | N-45-E | 楕円形   | 2.25×0.92 | 111   | 透胿       | 平坦       | 自然  | II C 3 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7210 |
| 35       | C 4 4 4 | N-48-E | 楕円形   | 1.44×1.2  | 11    | ゆる<br>やか | 中高<br>やか | 自然  | II B 2 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7211 |
| 36       | C 4 4 1 | N-32-E | 方 形   | 1.43×1.35 | 56    | 透胿       | 中高<br>やか | 自然  | II A 2 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7212 |
| 37       | C 2 4 5 | N-64-E | 楕円形   | 2.74×1.05 | 157   | 砂状       | 平坦       | 自然  | II C 3 +  | なし                    | E-1774<br>E-1228<br>E-1208 | 第7408 |
| 38       | B 2 4 0 | N-74-W | 楕円形   | 2.94×1.34 | 172   | 砂状       | 西面       | 自然  | II C 3 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7409 |
| 39       | C 3 3 9 | N-45-E | 方 形   | 2.11×1.88 | 31    | 外傾       | 高い<br>やか | 人為  | III A 3 + | 覆土上層に土師式土器片4。         | 複文時代                       | 第7410 |
| 40       | D 4 4 1 | N-37-W | 楕円形   | 1.6×1.06  | 34    | 外傾       | 砂状       | 人為  | II A 2 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7509 |
| 41       | C 4 4 1 | N-15-E | 不整圓形  | 3.10×1.96 | 135   | 砂状       | 平坦       | 自然  | II D 3 +  | 覆土上層に火打式土器片5+土師式土器片2。 | 地下式坑塚                      | 第7510 |
| 42       | C 4 4 1 | N-41-W | 楕円形   | 1.47×0.95 | 30    | 外傾       | 平坦       | 人為  | II A 2 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7511 |
| 43       | C 4 4 1 | N-90-E | 楕円形   | 1.53×1.08 | 27    | 透胿       | 砂状       | 自然  | II A 2 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7512 |
| 44       | D 4 4 1 | N-38-W | 楕円形   | 0.89×0.66 | 48    | 透胿       | 砂状       | 自然  | II A 1 +  | 覆土上層に土師式土器片3。         | 複文時代                       | 第7513 |
| 45       | D 4 4 4 | N-31-W | 不整圓形  | 2.1×2.0   | 75    | 外傾       | 凹凸       | 自然  | II A 3 +  | 覆土上層に火打式土器片4+土師式土器片1。 | 複文時代                       | 第7514 |
| 46       | D 4 4 1 | N-46-E | 円 形   | 0.86×0.76 | 38    | 透胿       | 西面       | 自然  | II A 1 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7515 |
| 47       | C 3 4 5 | N-48-E | 楕円形   | 1.31×1.13 | 53    | ゆる<br>やか | 砂状       | 自然  | II A 2 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7601 |
| 48       | C 3 4 8 | N-48-E | 不整圓形  | 2.18×1.86 | 125   | 砂状       | 平坦       | 自然  | II D 3 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7602 |
| 49       | D 3 4 7 | N-45-W | 楕円形   | 1.65×1.05 | 15    | 外傾       | 砂状       | 自然  | II A 2 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7603 |
| 50       | D 3 4 6 | N-38-W | 楕円形   | 1.31×1.05 | 37    | 外傾       | 凹凸       | 自然  | II A 2 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7604 |
| 51       | C 3 4 2 | N-63-E | 円 形   | 1.35×1.28 | 38    | ゆる<br>やか | 砂状       | 人為  | II B 2 +  | 覆土上・中層に土師式土器。         | 複文時代                       | 第7605 |
| 52       | C 3 4 1 | N-24-W | 楕円形   | 1.56×1.29 | 30    | 透胿       | 砂状       | 人為  | II A 2 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7606 |
| 53       | C 3 4 2 | N-46-E | 長 方 形 | 2.82×1.95 | 45    | 透胿       | 平坦       | 人為  | II A 2 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7607 |
| 54       | D 4 4 4 | N-17-W | 楕円形   | 1.12×0.86 | 31    | 透胿       | 平坦       | 自然  | II A 2 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7608 |
| 55       | D 4 4 3 | N-21-W | 不整圓形  | 1.0×0.66  | 68    | 透胿       | 凹凸       | 人為  | II A 2 +  | 覆土上層に土師式土器片6。         | 複文時代                       | 第7706 |
| 56       | D 3 4 9 | N-17-E | 楕円形   | 1.78×1.31 | 32    | 外傾       | 砂状       | 人為  | II A 2 +  | 覆土上層に火打式土器片2+土師式土器。   | 複文時代                       | 第7707 |
| 57       | D 3 4 3 | N-22-E | 楕円形   | 2.49×1.25 | 205   | 砂状       | 平坦       | 自然  | II C 3 +  | なし                    | 複文時代                       | 第7708 |
| 58       | D 3 4 8 | N-62-E | 円 形   | 1.54×1.4  | 28    | 外傾       | 平坦       | 人為  | II A 1 +  | 覆土上層に土師式土器片15。        | 複文時代                       | 第7709 |
| 59       | C 2 4 7 | N-80-E | 楕円形   | 2.72×1.31 | 185   | 砂状       | 平坦       | 自然  | II C 3 +  | 覆土上層に火打式土器片2+土師式土器片3。 | 複文時代                       | 第7710 |

### 3 溝について

当遺跡から検出された溝は5条で、1号溝は全長11.14m、幅60cm、深さ7cmほどでC1区に、2号溝は全長85m、幅54cm、深さ23cmほどでB2・C2・D2区に、3号溝は全長71.7m、幅70cm、深さ14cmほどでB2・C2・D2区に、4号溝は全長25.94m、幅81cm、深さ22cmほどでC4区に、5号溝は全長9m、幅55cm、深さ10cmほどでC3区にそれぞれ位置している。

溝内に堆積している土層を観察すると、第1号溝は1層でローム粒子を多量に含むサラサラした暗褐色土、第2号溝は6地点で土層の観察を行い、A-D地点が3層、E-F地点が1層であり、いずれの地点でもローム粒子を含む褐色土や暗褐色土である。第3、4、5号溝についてもそれぞれ4、2、1地点で土層観察をした結果、いずれもローム粒子を含む褐色土系の土質であって、第1~5号溝ともほぼ同質の土が埋まっており、時間的にもあまりへだたりがないように思われる。以下に5条の溝の実測図とそれらを一覧表にまとめた。

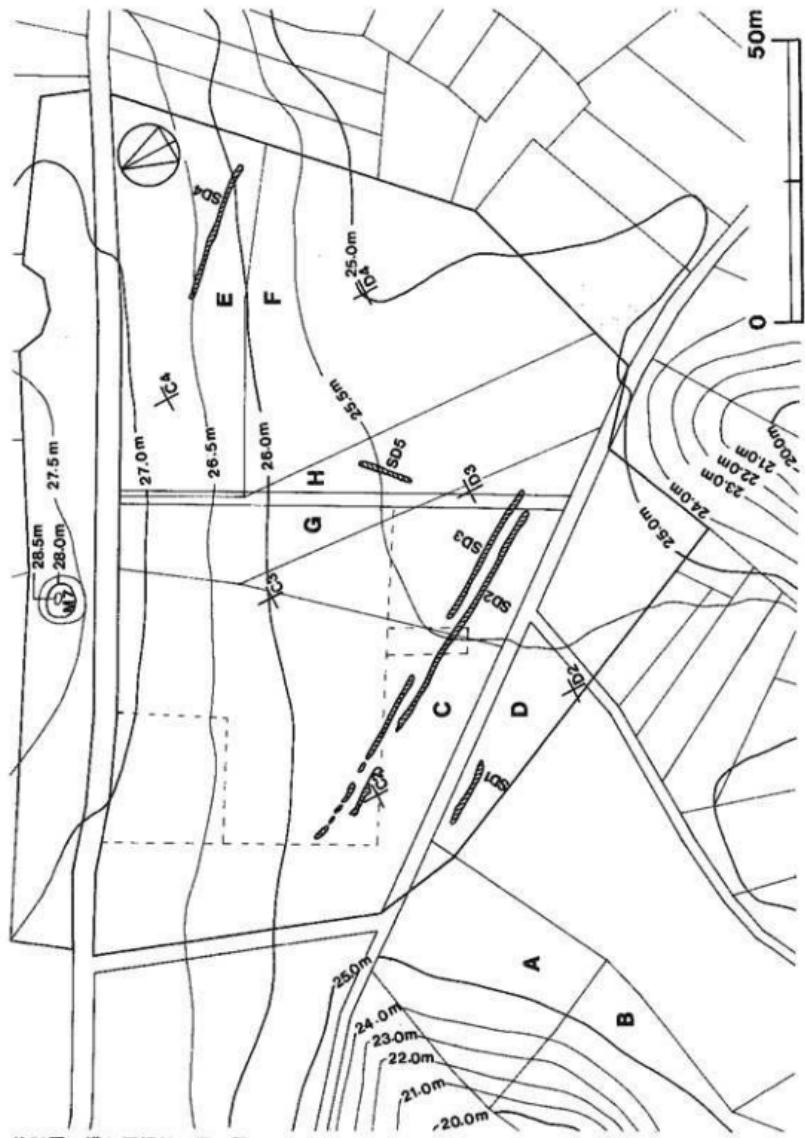
遺物は、1号溝から土師式土器片4点、3号溝から土師式土器片4点、4号溝から弥生式土器片3点が出土しているが、これらはいずれも覆土上層から出土したもので清理没途中での流れ込みと思われ、時期を決定する資料にはならない。

これら5条の溝の方向は当遺跡と付近の地図をよく観察すると比較的付合する要素があるので、溝と現況地形図の関係を示した図面(第78図)を作成して検討を加えた。

道路や地塊は長い年月の間に、さまざまな要素によって移動することもあると考えられる。そのような観点にたって現況地形図を全体的に東方へ約3m程移動して観察すると、図中の記号C・Dに挟まれた遺跡内の西側を通る道路は2・3号溝の間に重なり、溝は道路の排水溝的役割を、あるいは、道路建設の際の盛土として使用された土取跡と想定できる。同じように5号溝は図中の記号G・Hに挟まれた道路の排水溝として、4号溝は図中の記号E・Fに挟まれた地境の溝として、1号溝も図中の記号C・Dの地境に掘られた溝としてとらえられることがあるのである。

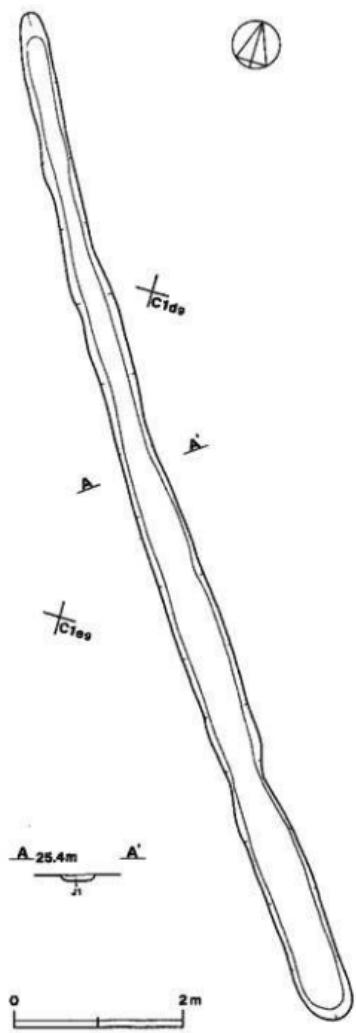
溝一覧表(第78~82図)

| 番号 | 位 置      | 角 度       | 断面形 | 規 模        |        | 壁面 | 底面 | 覆土 |
|----|----------|-----------|-----|------------|--------|----|----|----|
|    |          |           |     | 長さ×幅(m)    | 深さ(cm) |    |    |    |
| 1  | C1       | N-34°-W   | 皿 形 | 11.14×0.6  | 7      | 外傾 | 平坦 | 自然 |
| 2  | B2・C2・D2 | N-34°-W   | 半円形 | 85.0×0.54  | 23     | 外傾 | 平坦 | 自然 |
| 3  | B2・C2・D2 | N-32°-W   | 皿 形 | 71.7×0.7   | 14     | 外傾 | 平坦 | 自然 |
| 4  | C4       | N-46.5°-W | 半円形 | 25.94×0.81 | 22     | 外傾 | 平坦 | 自然 |
| 5  | C3       | N-49°-W   | 皿 形 | 9.0×0.55   | 10     | 外傾 | 平坦 | 自然 |

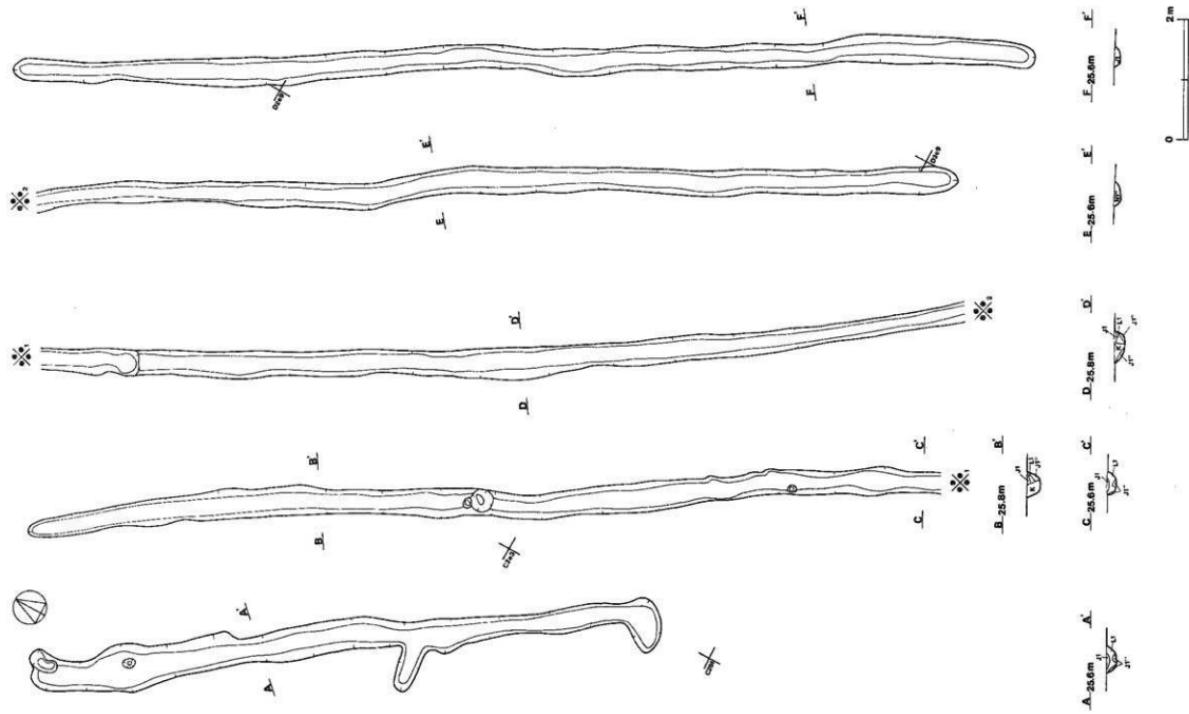


第78図 溝と現況地形図の関係

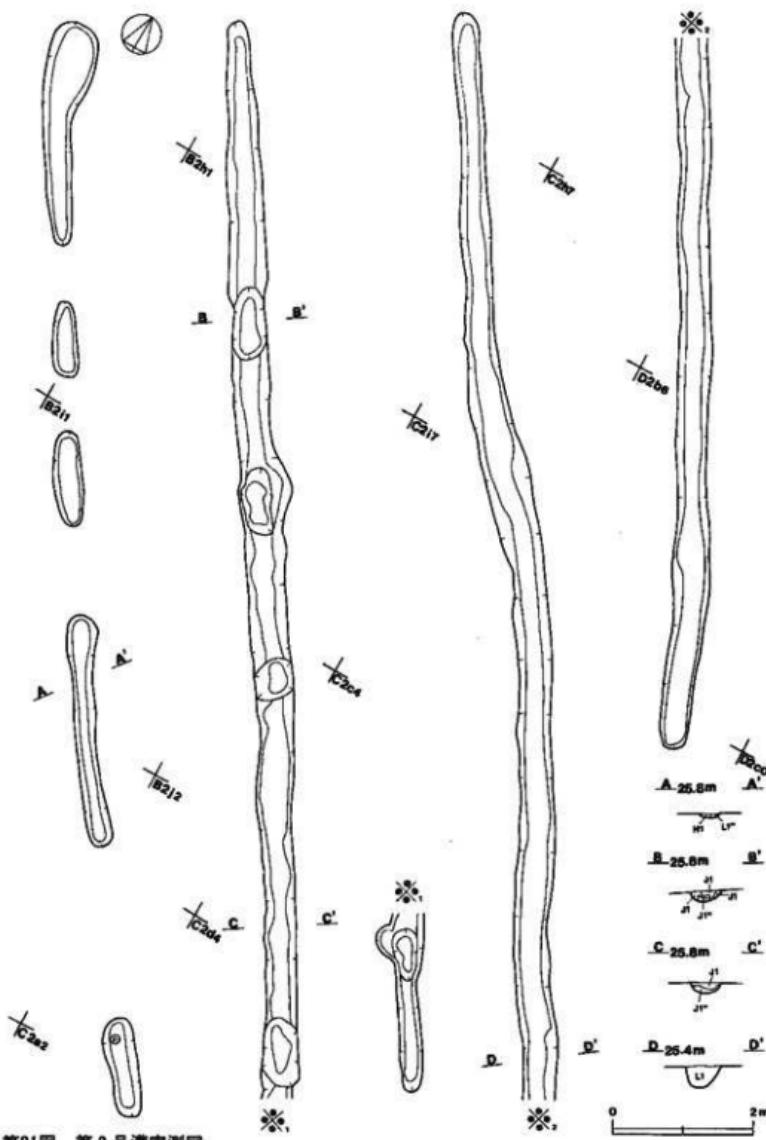
いずれにしても、山深い中の道路や地境を考える時、それらは草木の繁茂やぬかるみなどになることによってしばしば移動することを見聞するし、あるいは、土地所有者の移動などによっても道路や地境の移動が起きたのではないかと考えられるのである。即ち、当遺跡の5条の溝は、道路の側溝的な溝であったものや、地境に掘られた溝であることが想定される。



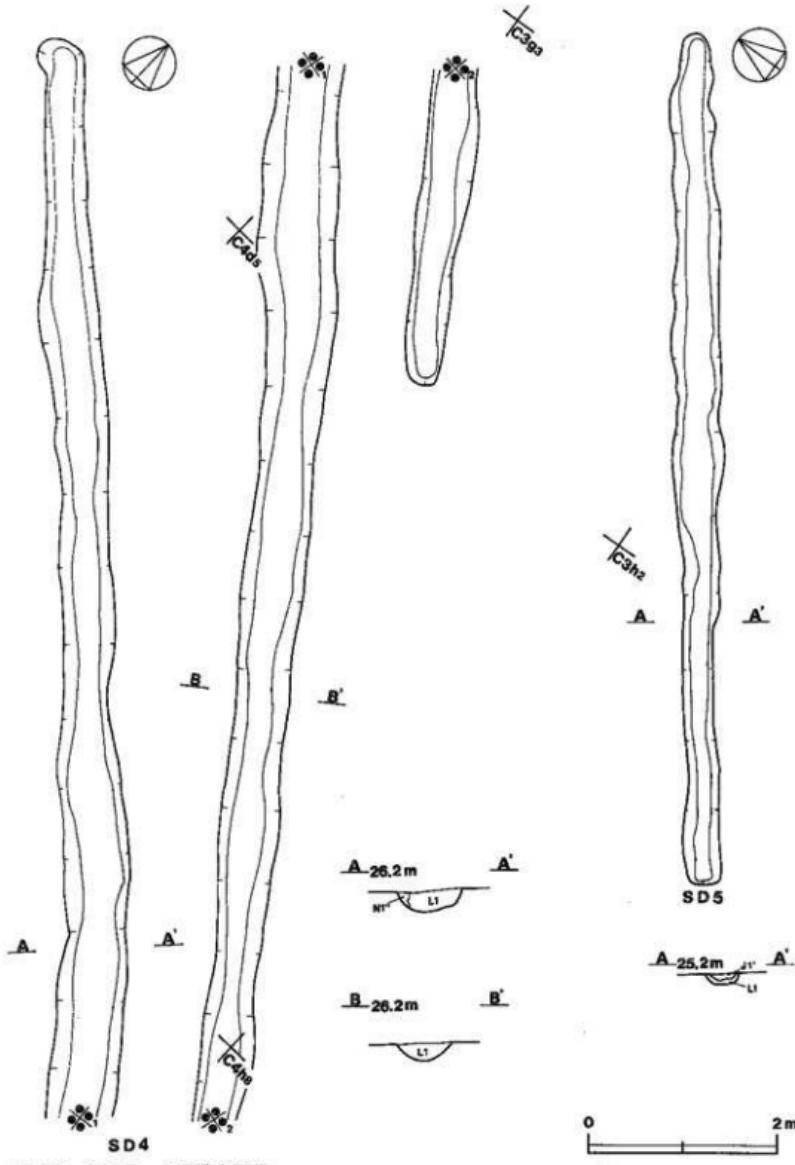
第79図 第1号溝実測図



第80図 第2号溝実測図



第81図 第3号溝実測図



第82図 第4号・5号溝実測図

#### 4 人工遺物について

土器以外の人工遺物は、表と第83~85図にまとめて掲載した。内訳は石器類21点、球状土錐22点である。

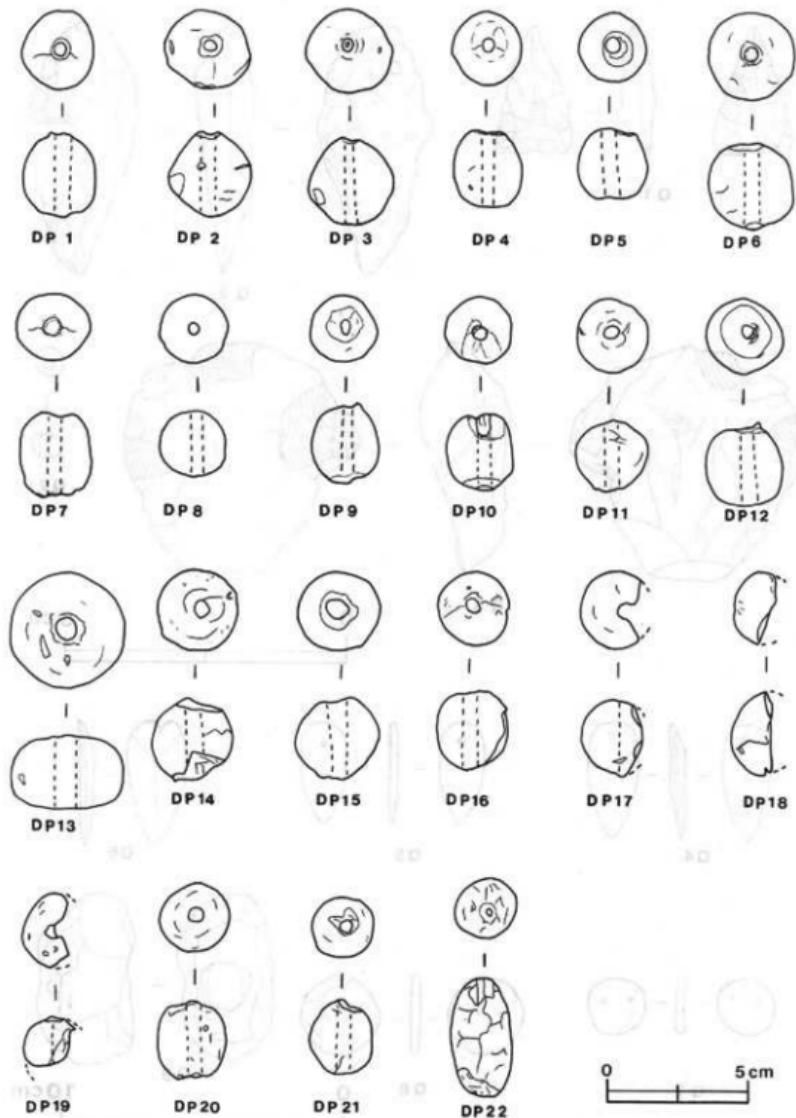
狩猟用の石鎚1点がSI1から、漁撈用の浮子と球状土錐がそれぞれSI3・4から、祭祀用の剣形石製模造品がSI10・13・15から、双孔円板がSI2・13から、石皿がSI12・13から出土している。これらの遺物から当遺跡の人々は農耕生活を主としながらも、そのあい間に狩猟・漁撈も大切な仕事とし、また、日常において敬けんな祭りなどを行っていた事が想定される。さらに、SI16から小玉のような装飾品も出土し、生活にも一種の華やかさもかい間見ることが出来る。

〈石器・石製品一覧表〉

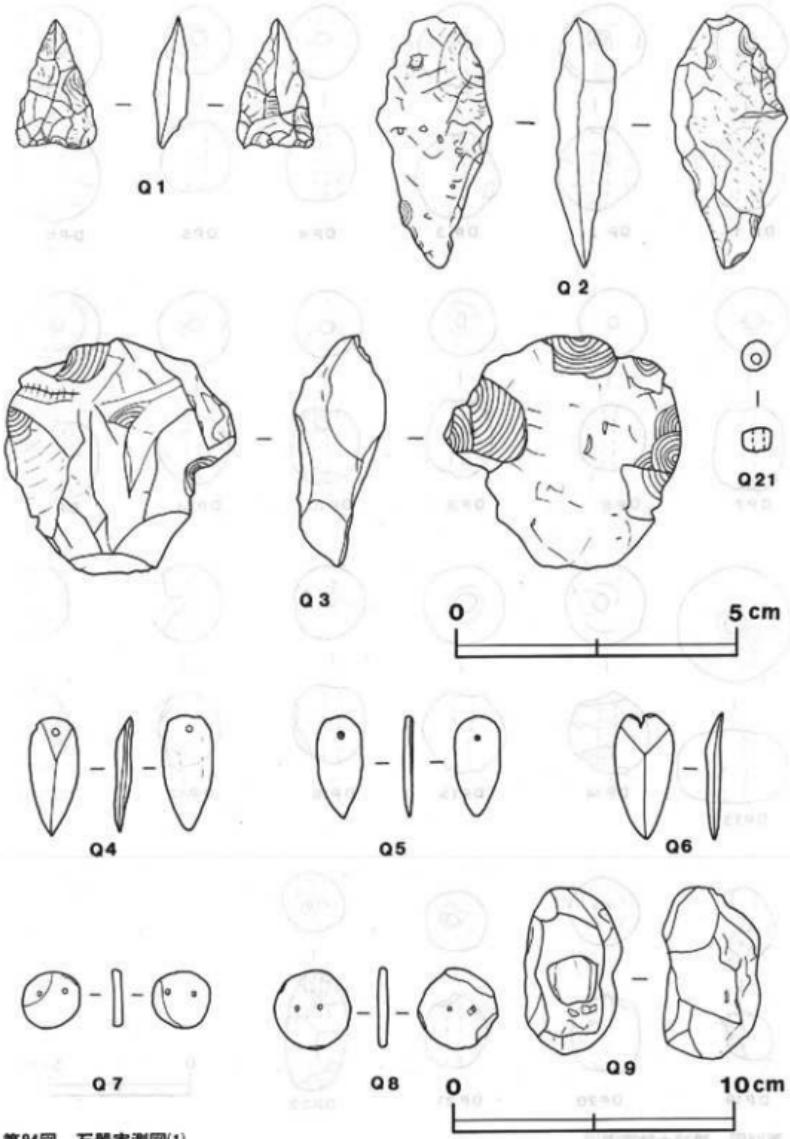
| 番号   | 名称     | 出土地点    | 大きさ(cm) |        |       | 重量(g)    | 石質   |
|------|--------|---------|---------|--------|-------|----------|------|
|      |        |         | 長さ      | 幅      | 厚さ    |          |      |
| Q 1  | 石鎚     | SI 1    | 2.2     | 1.4    | 0.6   | 1.2      | 黒曜石  |
| Q 2  | 剥片     | SI 1    | 4.5     | 2.1    | 1.1   | 7.5      | 黒曜石  |
| Q 3  | 剥片     | SI 13   | 4.2     | 4.2    | 1.6   | 20.0     | 黒曜石  |
| Q 4  | 剣形模造品  | SI 10   | 4.1     | 1.8    | 0.5   | 4.3      | 滑石   |
| Q 5  | 剣形模造品  | SI 13   | 3.6     | 1.7    | 0.3   | 3.4      | 滑石   |
| Q 6  | 剣形模造品  | SI 15   | 4.4     | 2.1    | 0.6   | 6.0      | 滑石   |
| Q 7  | 双孔円板   | SI 2    | 2.0     | 2.0    | 0.3   | 2.4      | 滑石   |
| Q 8  | 双孔円板   | SI 13   | 2.8     | 2.7    | 0.3   | 4.5      | 滑石   |
| Q 9  | 石核     | SI 7    | 6.0     | 3.5    | 3.4   | 98.2     | メノウ  |
| Q 10 | 打製石斧   | C 2 j 8 | 10.6    | 6.3    | 2.1   | 216.5    | 緑泥片岩 |
| Q 11 | 磨石     | SI 1    | 12.1    | 6.1    | 5.9   | 678.0    | 砂岩   |
| Q 12 | 磨石     | SI 2    | 12.0    | (7.4)  | 6.8   | (486.3)  | 砂岩   |
| Q 13 | 磨石     | C 2 h 6 | (9.8)   | 7.0    | (2.1) | (174.0)  | 砂岩   |
| Q 14 | 石皿(門石) | SI 13   | (8.3)   | (8.9)  | (8.9) | (802.2)  | 安山岩  |
| Q 15 | 石皿     | SI 12   | (10.8)  | (10.0) | (7.4) | (1016.5) | 砂岩   |
| Q 16 | 石皿(凹石) | C 2 i 3 | (14.6)  | (9.5)  | 5.4   | (1049.0) | 安山岩  |
| Q 17 | 浮子     | SI 3    | 8.7     | 6.3    | 3.9   | 37.5     | 軽石   |
| Q 18 | 浮子     | SI 4    | 6.3     | 4.1    | 4.4   | 20.5     | 軽石   |
| Q 19 | 砥石     | SI 1    | (8.5)   | 3.2    | 1.5   | 55.6     | 粘板岩  |
| Q 20 | 砥石     | SI 10   | (7.0)   | 5.4    | 1.8   | 85.8     | 粘板岩  |
| Q 21 | 小玉     | SI 16   | 0.4     | 0.5    | 0.2   | 0.1      | ガラス  |

〈球状土錘一覧表〉

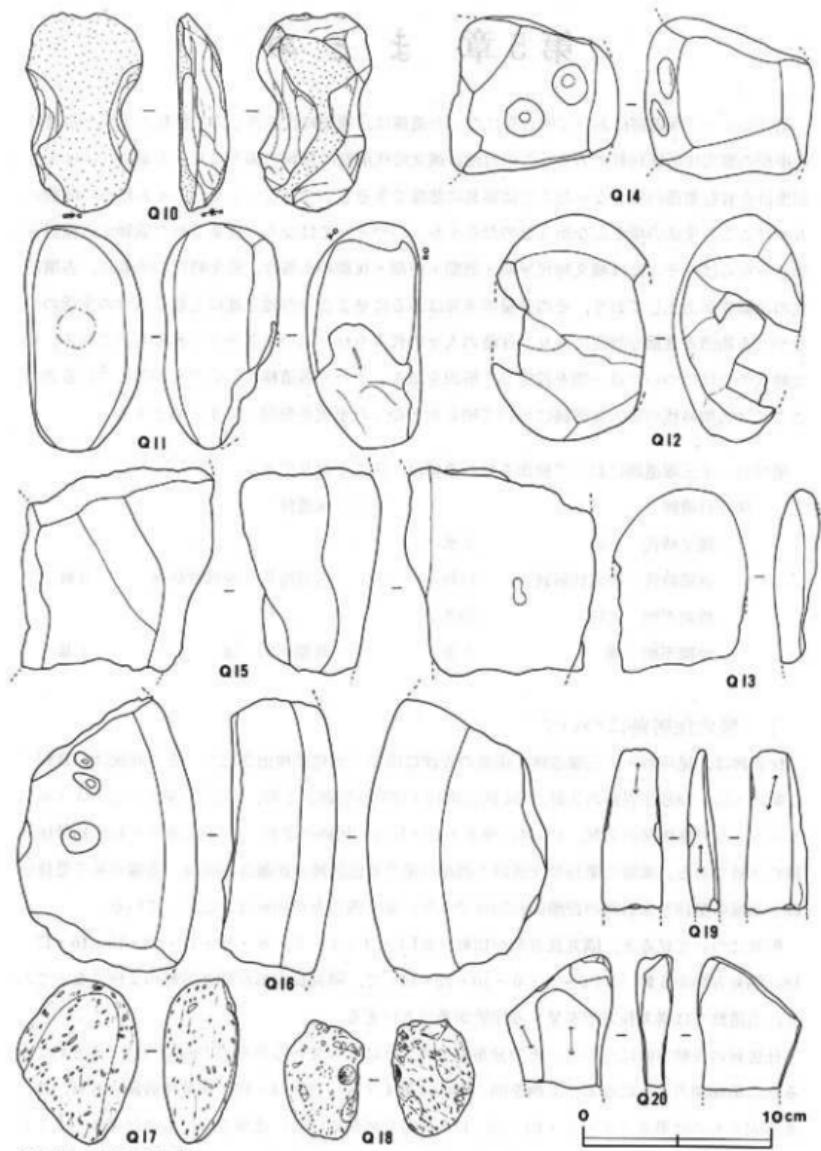
| 番号    | 名 称  | 出土地点    | 長さ(cm) | 幅(cm) | 孔径(cm) | 重さ(g)  | 備 考    |
|-------|------|---------|--------|-------|--------|--------|--------|
| DP 1  | 球状土錘 | SI - 1  | 3.0    | 2.6   | 0.6    | 20.0   | にぶい橙色  |
| DP 2  | 球状土錘 | SI - 1  | 3.0    | 2.9   | 0.5    | 23.2   | 橙 色    |
| DP 3  | 球状土錘 | SI - 1  | 3.1    | 3.0   | 0.3    | 25.5   | 灰褐 色   |
| DP 4  | 球状土錘 | SI - 1  | 2.6    | 2.5   | 0.4    | 17.1   | にぶい橙色  |
| DP 5  | 球状土錘 | SI - 1  | 2.5    | 2.5   | 0.5    | 15.4   | にぶい橙色  |
| DP 6  | 球状土錘 | SI - 1  | 3.1    | 3.0   | 0.6    | 28.2   | 橙 色    |
| DP 7  | 球状土錘 | SI - 1  | 3.1    | 2.6   | 0.5    | 18.5   | にぶい橙色  |
| DP 8  | 球状土錘 | SI - 1  | 2.4    | 2.4   | 0.4    | 13.7   | 橙 色    |
| DP 9  | 球状土錘 | SI - 1  | 2.8    | 2.4   | 0.3    | 16.9   | にぶい橙色  |
| DP 10 | 球状土錘 | SI - 2  | 2.7    | 2.3   | 0.5    | 14.3   | にぶい橙色  |
| DP 11 | 球状土錘 | SI - 2  | 2.6    | 2.5   | 0.4    | 15.3   | にぶい橙色  |
| DP 12 | 球状土錘 | SI - 3  | 2.9    | 2.8   | 0.4    | 22.1   | 橙 色    |
| DP 13 | 球状土錘 | SI - 3  | 2.6    | 4.0   | 0.8    | 47.0   | 灰褐 色   |
| DP 14 | 球状土錘 | SI - 4  | 2.9    | 2.9   | 0.6    | 22.4   | にぶい橙色  |
| DP 15 | 球状土錘 | SI - 4  | 2.9    | 3.0   | 0.8    | 22.9   | 橙 色    |
| DP 16 | 球状土錘 | SI - 10 | 2.8    | 2.6   | 0.6    | 19.6   | にぶい橙色  |
| DP 17 | 球状土錘 | SI - 10 | 2.7    | (2.2) |        | (13.6) | にぶい橙色  |
| DP 18 | 球状土錘 | SI - 10 | 3.0    | (1.4) |        | 8.2    | にぶい橙色  |
| DP 19 | 球状土錘 | SI - 10 | (1.7)  | (1.6) |        | 6.3    | 浅黄 橙 色 |
| DP 20 | 球状土錘 | SI - 13 | 2.7    | 2.5   | 0.5    | 16.6   | 橙 色    |
| DP 21 | 球状土錘 | SK - 27 | 2.8    | 2.2   | 0.5    | 11.5   | にぶい橙色  |
| DP 22 | 球状土錘 | SI - 16 | 4.2    | 2.2   | 0.2    | 17.9   | にぶい橙色  |



第83図 球状土錘実測図



第84図 石器実測図(1)



第85図 石器実測図(2)

## 第5章 まとめ

尾坪台・十三塚遺跡において明らかになった遺構は、縄文時代の落し穴的性格の土坑と古墳時代中期の竪穴住居跡18軒である。この台地は縄文時代前期に狩獵の場となり、古墳時代には人々が生計を営む集落の場となったことは容易に想像できるものである。しかし、それ以外の時期の人々はここを生活の場としなかったのだろうか。いやそうではなく、採集された遺物から検討を加えるならば、そこには縄文時代早期・前期・中期・後期の土器片、弥生時代の土器片、古墳時代の土器片が出土しており、その分量の多寡はあるにせよこの台地と連絡と続く人々の生活のつながりを物語る貴重な物証であり、往時の人々の音みをはうふつとさせてくれるものである。縄文時代の土坑については一項を設定して解説を試み、また、各遺構についても前述しているのでここでは古墳時代の竪穴住居跡について明らかとなつた事実を整理してまとめとする。

尾坪台・十三塚遺跡において検出された遺構は、次のとおりである。

| 尾坪台遺跡 |       | 十三塚遺跡 |               |
|-------|-------|-------|---------------|
| 縄文時代  | 土坑    | 9基    |               |
| 古墳時代  | 竪穴住居跡 | 15軒   | 古墳時代 竪穴住居跡 3軒 |
| 時期不明  | 土坑    | 50基   |               |
| 時期不明  | 溝     | 5条    | 時期不明 墓 1基     |

### 1 竪穴住居跡について

住居跡は、尾坪台・十三塚遺跡の南側の谷津に向かう台地に検出された。その状況は、B3区に第10・11・18号住居跡の3軒、B4区に第16・17号住居跡の2軒、C2区に第1・2・3・4・5・6・9号住居跡の7軒、C3区に第8・12・13号住居跡の3軒、D3区に第7・14・15号住居跡の3軒である。東端の第16号住居跡と西端の第2号住居跡の距離は約80m、南端の第7号住居跡と北端の第18号住居跡の距離は約70mであり、東～西の方が10mほど広がっている。

形状について見ると、隅丸長方形が12軒(S11・3・4・7・8・9・11・13・15・16・17・18)、隅丸方形が6軒(S12・5・6・10・12・14)で、隅丸長方形が隅丸方形の2倍になっており、当遺跡では隅丸長方形を呈する住居が多いといえる。

住居跡の長軸方向について、その分布がどのようにになっているかその方向についてまとめてみると、第86図のようになる。北西を向くものは第4・8・13・14・15・16号住居跡の6軒、ほぼ北を向くものは第5・6・7・10・12・17・18号住居跡の7軒、北東を向くものは第1・2・11号住居跡の3軒、東を向くものは第9号住居跡1軒、西北西を向くものは第3号住居跡1軒にそ

れぞれ分かれる。これらのことから大きく見ると、長軸の向きは北西、北、北東方向の3つのグループにまとまりをもっている。また、N-54°-WとN-50°-Eの間に、18軒中16軒の住居跡が長軸を有しているということができる。

規模を見ると、第1・10号住居跡がそれぞれ長軸で11.14mと短軸で9.62m・10.9mであり当遺跡内で群を抜いて大きい。当教育財団で調査した同時期の住居跡120余軒の中でも最大のものである。(年報・4 昭和59年度・参照) また、長軸が6m以上の比較的大きい住居は、第2・8・14号住居跡の3軒、4~6mの中型のものが第3・4・6・7・13・15・18号住居跡の7軒、4m以下の小型のものが第5・9・11・12・16・17号住居跡の6軒であり、大型のもの5軒、中型のもの7軒、小型のもの6軒という比率になる。

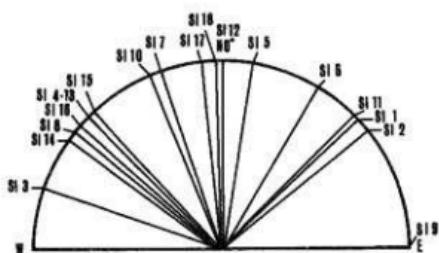
主柱穴の検出状況は、床面に見られる4本のものは6軒(SI2・3・6・10・14・18)で、そのうち隅丸長方形状の住居跡が2軒(SI3・18)である。5本のものは6軒(SI7・8・13・15・16・17)で、全てが隅丸長方形状の住居跡であり、長方形の形状をもつ住居跡は5本の主柱穴をもつ傾向にあることがわかる。また、柱穴の数12本の第1号住居跡、3本の第4号住居跡は特異なものと思われる。さらに、屋外に柱穴をもつ4軒の住居跡(SI5・9・11・12)は屋内床面に柱穴をもつものよりもその本数が多い。

炉跡の位置について見ると、住居跡床面の中央から西側に位置するもの3軒(SI3・6・13)、北側に位置するもの3軒(SI7・17・18)、北西側に位置するもの7軒(SI1・2・8・10・14・15・16)、中央部のもの1軒(SI11)、ないもの4軒となっている。これらのことから、当遺跡の住居跡の地床炉は、床面中央から西側・北側・そしてその中間の北西側方向に構築されているということがわかる。なお、炉跡をもつ住居跡の比率を第86図に示した。

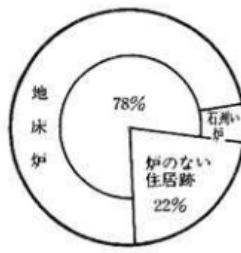
貯蔵穴を持っている住居跡は18軒中4軒(SI1・2・10・14)で、その位置は第1号住居跡が東側コーナー部と南東壁側の2か所、第2号住居跡が南東壁側と北西壁側の2か所、第10号住居跡が床面の中央から南西側、第14号住居跡が東側コーナー部であり、その数と位置についてはさまである。

壁溝は18軒中5軒(SI1・2・5・9・10)が壁下に一部ないし、全周している。なお、焼失家屋については18軒中6軒(SI1・2・3・10・13・14)であった。

以上のことからが当遺跡の住居跡の傾向であるといえるのではないだろうか。



第86図 住居跡の方向図



第87図 炉跡種類別割合図

遺構別出土遺物一覧表

|         | 高 壁  | 塙 | 堺 | 甕  | 壺 | 球状土錐 | 備 考                       |
|---------|------|---|---|----|---|------|---------------------------|
| S I - 1 | 8    | 3 | 3 | 12 | 2 | 10   | 器械不明 6・石鐵 1<br>砥石 1・磨石 1  |
| 2       | 7    | 2 | 5 |    | 4 | 2    | 小型甕 1・磨石 1<br>双孔円板 1      |
| 3       |      |   | 1 | 1  | 4 |      | 浮子 1                      |
| 4       | 2    | 1 | 1 | 3  | 1 | 2    | 浮子 1                      |
| 6       | 脚部 5 |   |   |    | 1 |      |                           |
| 7       |      |   |   | 1  | 1 |      |                           |
| 8       | 2    |   |   | 1  | 5 |      | 台付甕 1・鉢形 1<br>小型鉢 1       |
| 10      | 4    | 5 | 1 | 8  | 1 | 4    | 鉢形 1・砥石 1                 |
| 12      | 4    | 1 |   |    |   |      | 石皿 1                      |
| 13      | 1    |   | 2 | 3  | 2 | 1    | 鉢形 1・双孔円板 1<br>黒曜石 1・凹石 1 |
| 14      | 5    | 1 | 2 |    |   |      | 小型甕 1                     |
| 15      |      |   |   |    |   |      | 鉢形 1                      |
| 16      |      |   |   |    | 1 |      | 小玉 1                      |
| 17      |      |   |   |    | 1 |      |                           |

## 2 遺物と遺構から見た住居跡の時期について

### 遺物から明らかに和泉期の住居跡としたもの

- ・ 大型の第1・10号住居跡と中型の第2・8・14号住居跡は、床面から和泉期の遺物を多数出土した。
- ・ 中型の第13号住居跡は、床面直上と覆土中から和泉期の土器片を多数出土した。
- ・ 中型の第3・4・6号住居跡は、床面もしくは床面直上から和泉期の土器片を多数出土した。
- ・ 小型で屋外柱穴をもつ第5号住居跡は、床面と覆土中から和泉期の土器片を出土した。
- ・ 小型で屋外柱穴をもつ第9・12号住居跡は、覆土中から和泉期の土器片だけを出土した。

### 遺物出土状況と和泉期の住居跡との関連から判断して住居跡の廃絶期を和泉期としたもの

- ・ 中型の第7号住居跡は、覆土中から五領期の高环脚部1点・和泉期の脚部4点、その他の破片5点を出土している。また、遺構は第8号住居跡と形状・柱穴等、第10号住居跡と方向等が類似している。
- ・ 小型の第15号住居跡は、覆土中から和泉期の土器片約37点と第8号住居跡の床面から出土した弥生式の高环脚部と接合出来る口縁部片が出土している。また、第10号住居跡から出土したものとうり二つの劍形石製模造品が床面直上から出土している。
- ・ 中型の第17号住居跡は覆土上層から和泉期の脚部3点とその他の破片約7点が出土している。また、遺構は第12号住居跡と方向が、第7・8・13号住居跡と形状や柱穴等に類似性が見られる。

### 遺構の類似性を考慮し和泉期の住居跡としたもの

- ・ 小型の第16号住居跡は、覆土中から弥生式土器片約50点（土師式土器片と思われるもの2点を含む）と楕円形をした球状土錘1点を出土している。また、遺構は第4・8・14号住居跡と方向が、第15号住居跡と規模・形状・柱穴等が類似している。
- ・ 中型の第18号住居跡は、覆土中から繩文式土器片3点、弥生式土器片16点、土師式土器片1点が出土している。また、遺構は第3・4・7・17号住居跡と規模・形状が、第3号住居跡と柱穴の位置本数が、第12・17号住居跡と方向が類似している。
- ・ 小型の第11号住居跡は、覆土中から土師式土器片3点だけを出土している。また、遺構は、第5・9・12号住居跡と規模が、第1・2号住居跡と方向が類似している。

以上のように住居跡を遺構や遺物等によって検討を加えて整理した。

なお、参考のため住居跡から出土した遺物を器種別・住居跡別にし、一覧表として掲載した。

### 3 塚について

十三塚遺跡の調査は、仏教的・民俗的色彩の濃い塚の調査である。塚の調査は比較的調査例も少なく、遺物等の出土も少ないのでその解明が遅れているのが現状であろう。今回調査した十三塚遺跡も中央の第7号塚を除いては、塚そのものの存在も明確でなく、その上出土遺物もないため、塚の解明などということは困難であるが、竜ヶ崎市内の塚の調査例や、わずかに残る記録や伝承から塚の築造時期やその性格を考察してみたい。

先づ、十三塚という13基の塚が存在したのかという問題である。第7号塚を除く12基の塚といわれるものは、調査時点においてはその姿を見せることなく明確にはとらえることができず、調査員の一部主観的とも考えられる地影れを確認し、調査するものであった。調査の結果は、土層断面図（第68図）を見てもわかるように、付近よりもやや地影れが見られる第13号塚を除いてはほとんど平らであり、自然の土層を示すだけで人工的な盛り土を形成した様子や、戦いに敗れた武士の亡骸を葬ったというような上層の乱れ等を垣間見ることさえも出来なかつたのである。しかし、後に地割図の所でも述べるように、おそらく第7号塚が築造された時期には、その規模等についてはさだかでないが、他の12基の塚も同時に存在していたと思われるのである。それら当時の12基の塚は、周囲の土を寄せ集めた程度のものであり、それを仏教的・民俗的信仰の対象としたものと思われ、長い年月を経る間にはば平らに復してしまつたのであろうとも考えられるのである。

次に、十三塚遺跡の地割図から13基の塚の存在について考えてみると、塚があったとされる地割は、道路に沿って細長い1筆の地割なのである。この地割図は、7号塚を中心にして道路に面し、左右ともほぼ同じ長さと幅をもっており、13基の塚を意識的に考慮して作られた地割図といえないだろうか。現在使用している地割図が作成されたのは近代のことであろうが、それを逆のほって考えてみると、その基本となる台帳はすでに存在し、それをもとに修正・加筆されてより正確な地割図が作成されたのであろう。土地調査は、古くは奈良時代、そして中世には検注といわれる調査、絵図や地割図が認められ常識化する太閤検地などが知られている。少なくとも物証はないが太閤検地以降にはほぼ現在のような地割図が認められたと思われるし、十三塚はそれ以前から存在したと考えられないだろうか。地割図の基本となる絵図、あるいは記録簿的なものがあり、それをもとに地割図が作られるのであつたから、十三塚遺跡の地割は塚の存在を考慮して作られたものであると思われる。即ち、十三塚は確証はないものの太閤検地前後から存在したといえそうである。

伝承では、「戦国時代に貝原塚城の武士數名が八代方の武士に斬り殺されてこれらの塚に葬られ、7号塚は待人将の塚であるとの悲話」が伝えられている。また、昭和13年頃に7号塚を掘り返し、鎧びた刀、鎧と人骨らしいものが出土したといわれているが、調査結果からは中世の武将や家来

の墓所的遺物や土層の乱れは確認されず、その事実を裏づける資料は得られなかった。即ち、伝承は塚を守るための禁忌事項として村人たちが作った話である可能性も十分に伺えるのである。

当教育財団が発掘調査した塚は、昭和52年度調査の松葉遺跡内の4基、昭和54年度調査の仲根台塚群1・2号塚、打越C遺跡内の塚1基、前清水遺跡内の塚1基、稻荷塚10号、昭和56年度調査の仲根台塚群3・4号塚、町田塚群（般若塚）1基、薄倉古墳1基、稻荷峯古墳1基の14基と昭和59年度の十三塚遺跡である。これら調査した塚から出土した遺物は、松葉遺跡の4号塚から出土した7枚の澄明皿だけであり、資料不足のため塚の築造年代や塚が何のために作られたかということは未だ解明されていないのである。

また、塚にまつわる1730年代の事物・事象の記録について（年報1「昭和56年度」・茨城県教育財団、P18～）見ると、羽原町にある「大塚」の塚頂には、享保16年（1731年）に建立されたという石塔に「奉供養湯殿山六十三度大願成就之欽 行者下羽原邑觀音院敬白」と記録されていることから考えれば、2年後に建立された十三塚遺跡の7号墳上の石塔と付合して、第7号塚も仏教色の濃い塚であるといえそうである。さらに、7号塚上の石塔年号の3年後の元文元年（1736年）の「差上申一札の事」という記録が八代町の旧家に残っている。その内容は第3回の21番に当る境塚（仮称）らしいといわれているが、それによると「貞原塚村と八代村の村境付近で稻干し場の帰属をめぐって、度々地境争いがあったので、元文元年下田村という村境の見通しのよい所へ『境塚』を築き、この塚上に苗木を植えた。これによって村境がはっきりして争いがなくなった」とされているという。このことや、茨城県教育財団調査報告I（P112～）の中にも報告されているように、塚の多くは村境の道路に面しているものが実際に多いのである。十三塚の所在する位置も八代村、貞原塚村の村境にあり十三塚の第7号塚等も境塚としての性格も浮び上がってくるのである。

以上の事を整理してみると、十三塚は戦国時代に武将と家来の墓所と成り、太閤検地前後にはこの塚周辺を一筆の地割としたものと考えられる。あるいは、江戸初・中期に境塚としてつくられ、それ以後（享保18年）に地蔵尊が建立され、信仰の対象として現在に至ったことを十分伺わせるものである。しかし、調査の結果からは、墓所的証明は出来なかつたので、この塚は中世以降・1733年以前に造られ、墓所あるいは、境塚としての役割をになっていたものが、地蔵尊の安置に伴つて仏教的信仰の対象と成ったと理解するものである。このような事から、今後の塚の調査の資料によっては築造年代の幅がせばまる事と、資料の増加によってその性格がより明確になっていく事を願うものである。

## 終章 む す び

昭和59年度に発掘調査を実施した竜ヶ崎ニュータウン建設地域内における尾坪台遺跡・十三塚遺跡からは、縄文時代前期の土坑9基と古墳時代中期の住居跡18軒の遺構を検出した。また、時期の不明確な土坑・溝・塚について遺物採集から平面実測等記録保存の措置をした。遺物としては、縄文時代早期から前期・中期・後期、弥生時代の土器片、古墳時代の土師式土器片、埴輪片、石器、土製品などが出土し、貴重な文化財の収録を行った。

この台地には、縄文時代前期の頃にもさまざまな動物が生息し、台地に樹枝状に入り込んでいる谷津はこれらの動物たちのみ水や水浴場として適当な場所であったと思われる。そこで調査結果から何い知ることの出来るのは、当時の人々はこの台地と谷津を行き来する動物をとらえるために、台地の縁辺部に9基の深い落し穴を掘り、動物を捕獲してはそれを食料の一部とした事でしょう。また、古墳時代和泉期の人々は、ここに住まいを構え、台地では畑作のようなことや、谷津においては種作のようなことをして生活したのでしょうか。

これら的事は、断続的にではあるが当時の様相を浮き彫りにしてくれるのである。また、両遺跡から採集された遺物は、縄文時代の違い昔から、この台地を生活のより所として来た人々が残した遺物で、遺構とは直接的に結びつかないものもあるけれどもその主人公としての息吹きを感じさせる物証であり、記録保存されることとなったのです。

南東方向の八代町や、北西側の貝原塚町に延びる台地上には長峰遺跡や南三島遺跡など数多くの遺跡が点在しており、それらの遺跡の調査が進むに従って当遺跡の立地する台地の歴史的経過や集落の変遷等の全貌が徐々に解明されてくるものと思われるのです。

なお、この報告をまとめるにあたり、調査担当者はもとより、調査に参加・協力していただいた地元の方々をはじめ、関係各位に御指導や御協力を賜わったことに対し、文末ながら厚く感謝の意を表するものである。

# 写 真 図 版

遺物番号は、本文中の遺物番号と一致する。



尾坪台遺跡伐開前風景



尾坪台遺跡伐開風景



尾坪台遺跡伐開風景



尾坪台遺跡伐開後風景



尾坪台遺跡トレンチ発掘風景



尾坪台遺跡トレンチ発掘後全景



十三塚遺跡伐開前風景



十三塚遺跡伐開風景



十三塚遺跡伐開風景



十三塚遺跡伐開後風景



十三塚遺跡第7号塚地藏墓供養



十三塚遺跡調査終了後全景



重機による表土除去作業



造構確認調査風景



造構確認状況



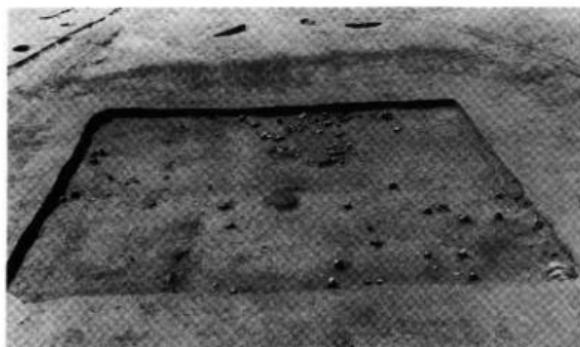
調査風景



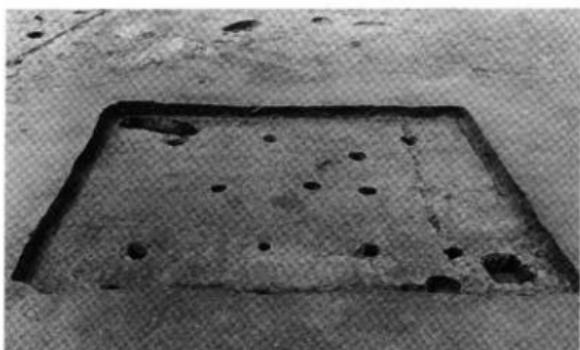
遺跡見学風景



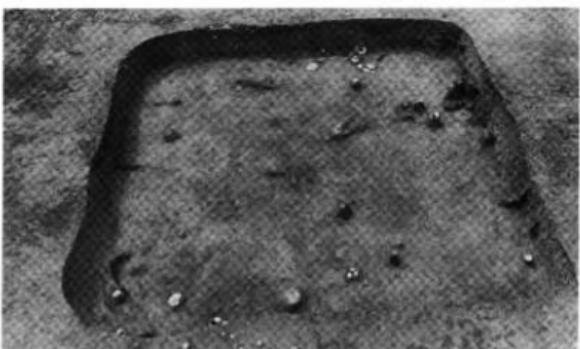
尾坪台遺跡調査終了後全景



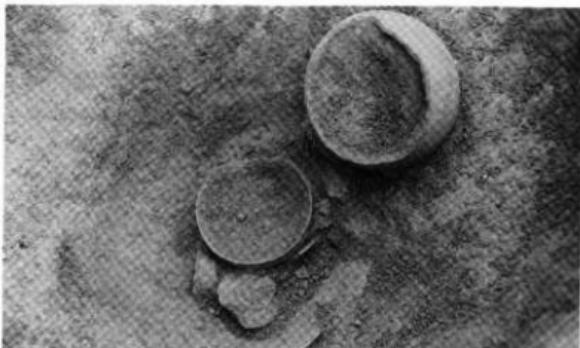
第1号住居跡  
遺物出土状況



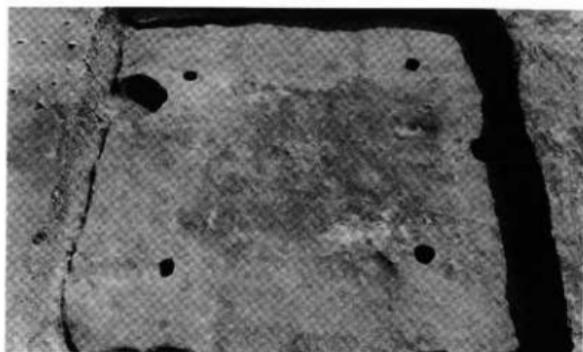
第1号住居跡



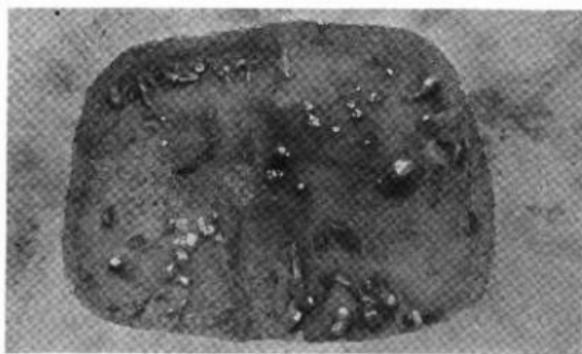
第2号住居跡  
遺物出土状況



第2号住居跡  
遺物出土状況



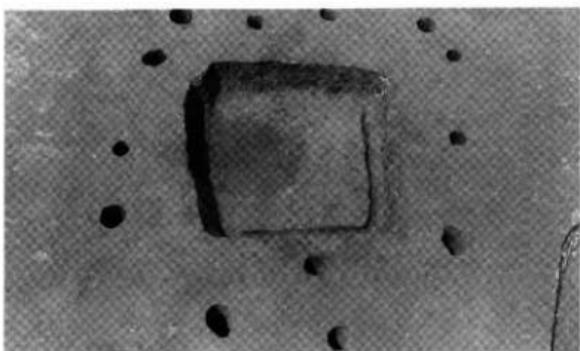
第2号住居跡



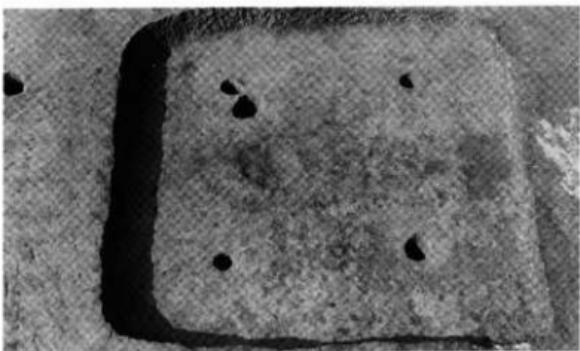
第3号住居跡  
遺物出土状況



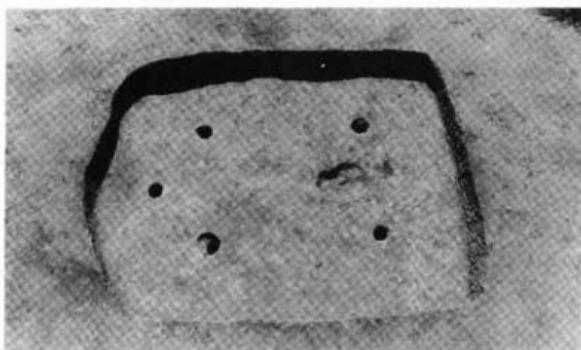
第4号住居跡  
遺物出土状況



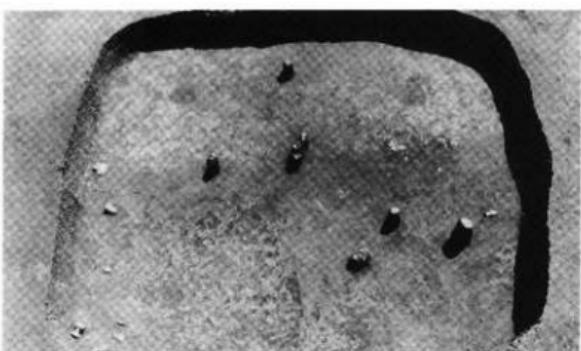
第5号住居跡



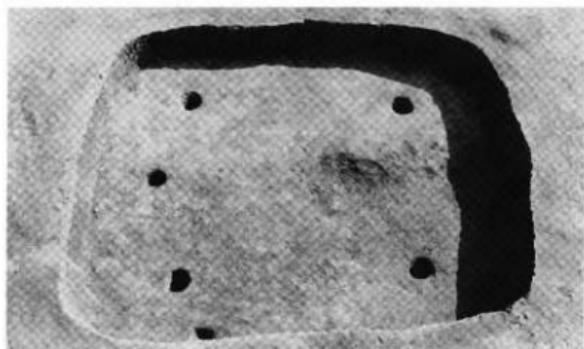
第6号住居跡



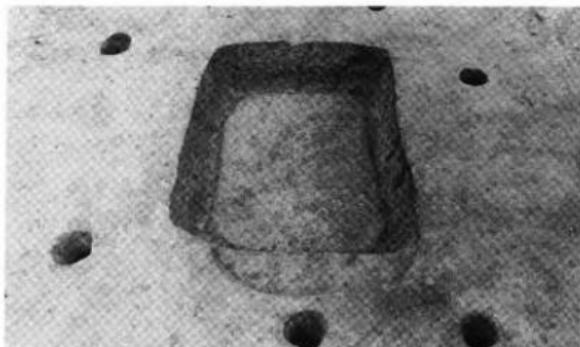
第 7 号住居跡



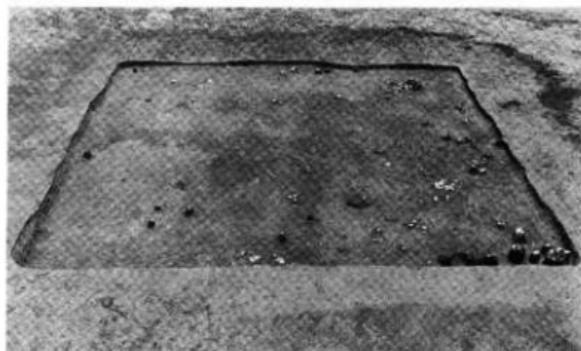
第 8 号住居跡  
遺物出土状況



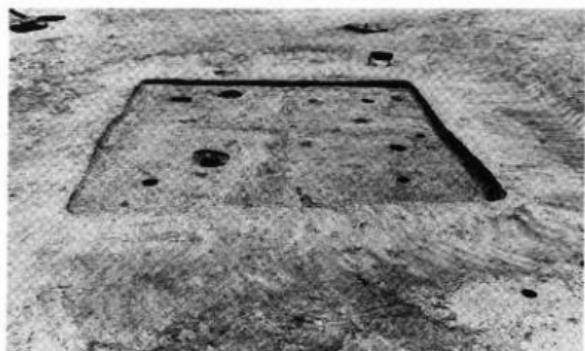
第 8 号住居跡



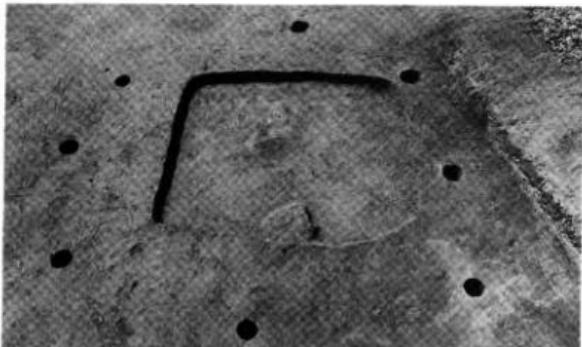
第9号住居跡



第10号住居跡  
遺物出土状況



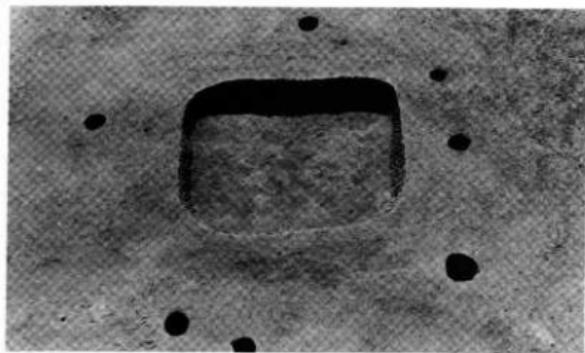
第10号住居跡



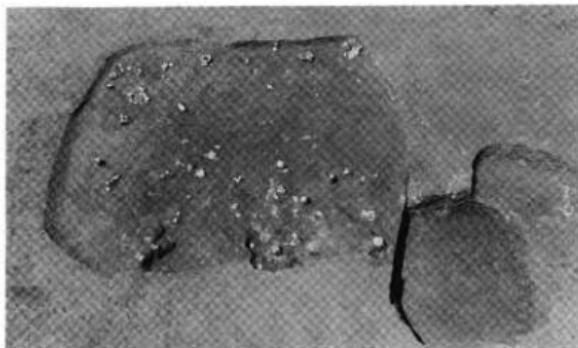
第11号住居跡



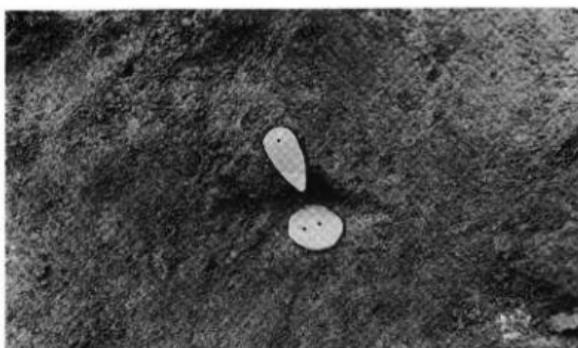
第12号住居跡  
遺物出土状況



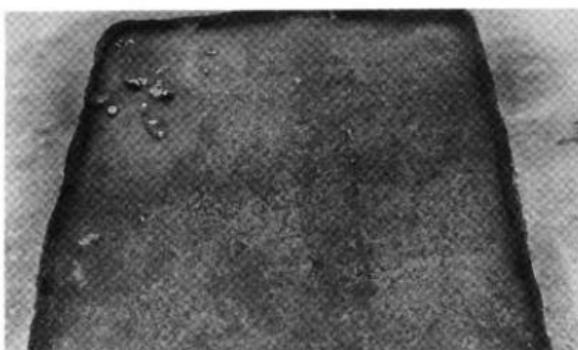
第12号住居跡



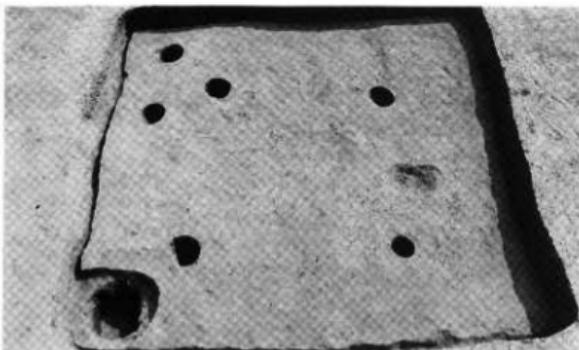
第13号住居跡  
遺物出土状況



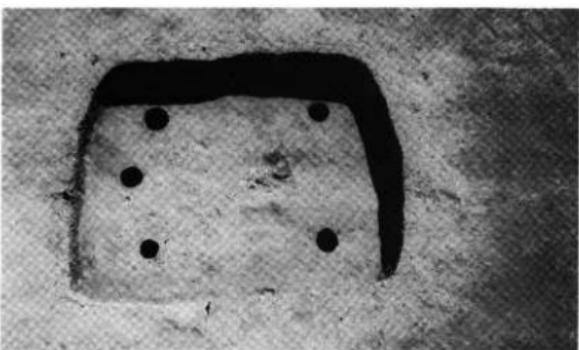
第13号住居跡  
遺物出土状況



第14号住居跡  
遺物出土状況



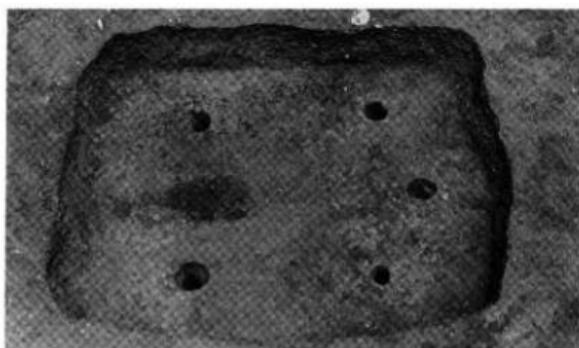
第14号住居跡



第15号住居跡



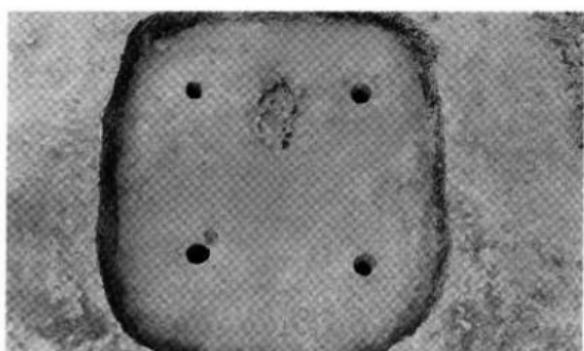
第16号住居跡  
遺物出土状況



第16号住居跡



第17号住居跡



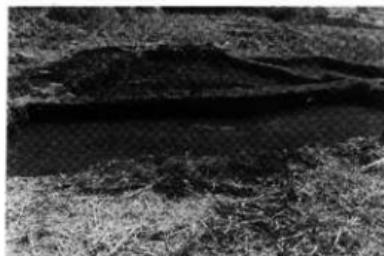
第18号住居跡



第1号塚土層断面



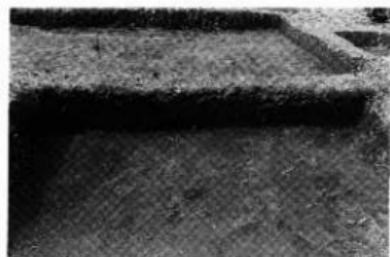
第2号塚土層断面



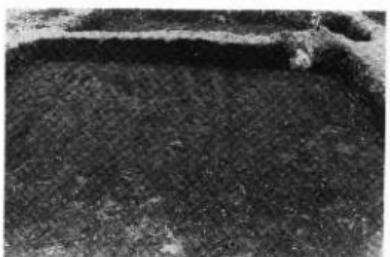
第3号塚土層断面



第4号塚土層断面



第5号塚土層断面



第6号塚土層断面



第7号塚供養



第7号塚地蔵墓



第7号塚と地蔵墓



地蔵墓



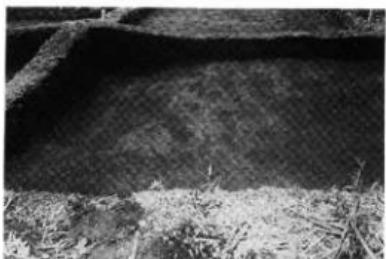
第7号塚土層断面



第7号塚土層断面



第8号塚土層断面



第9号塚土層断面



第10号塚土層断面



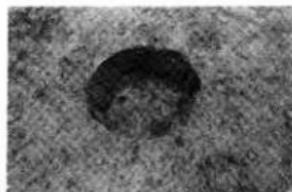
第11号塚土層断面



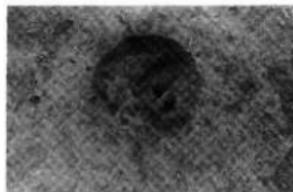
第12号塚土層断面



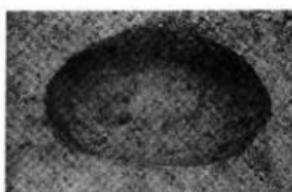
第13号塚土層断面



第1号土坑



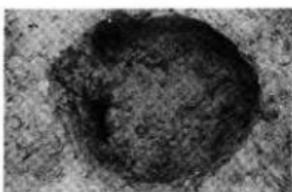
第2号土坑



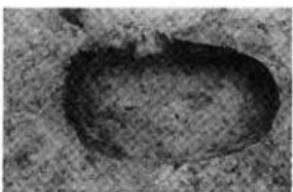
第3号土坑



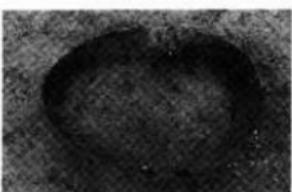
第4号土坑



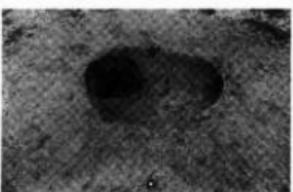
第5号土坑



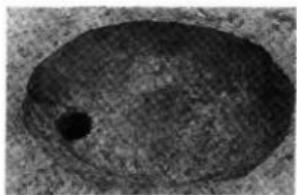
第6号土坑



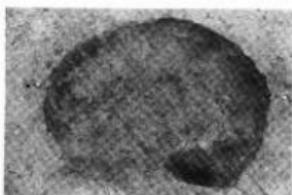
第7号土坑



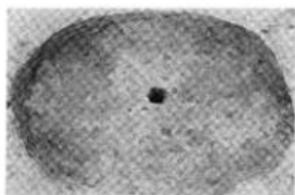
第9号土坑



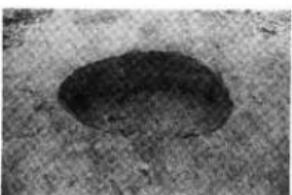
第10号土坑



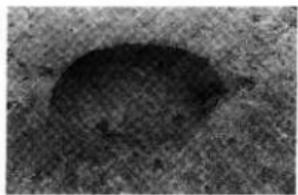
第11号土坑



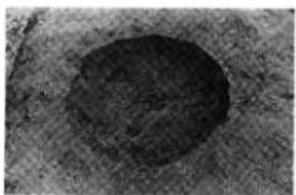
第12号土坑



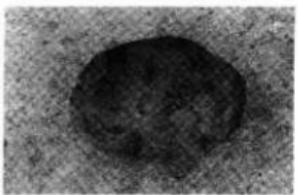
第13号土坑



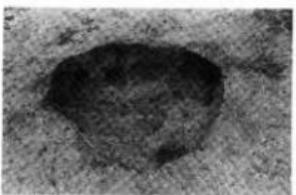
第14号土坑



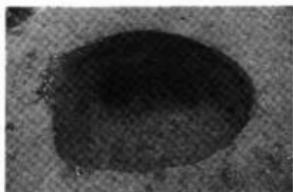
第15号土坑



第16号土坑



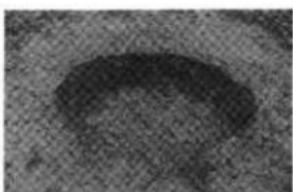
第17号土坑



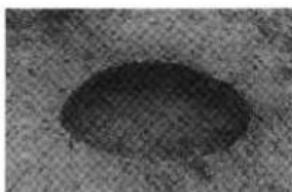
第19号土坑



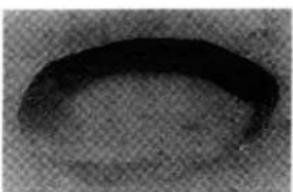
第20号土坑



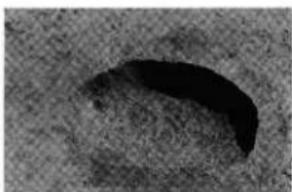
第21号土坑



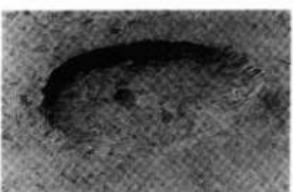
第22号土坑



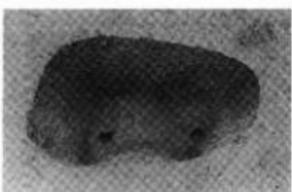
第23号土坑



第24号土坑



第25号土坑



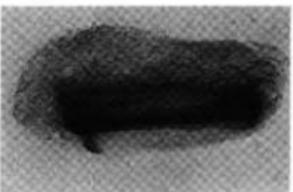
第26号土坑



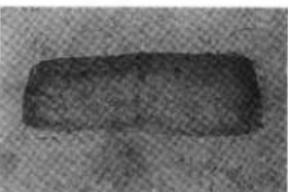
第27号土坑遗物出土状况



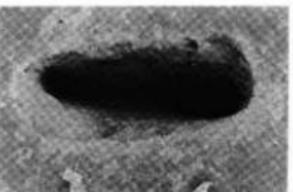
第28·29号土坑



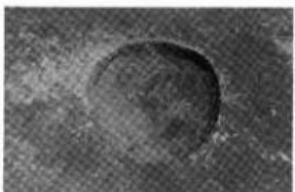
第30号土坑



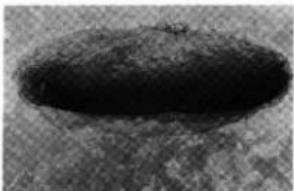
第31号土坑



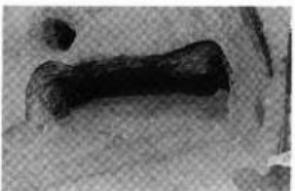
第32号土坑



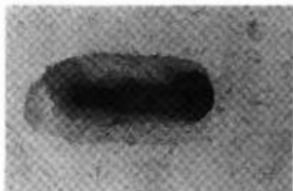
第33号土坑



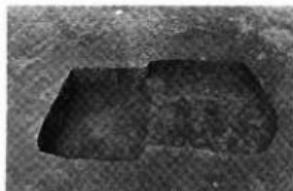
第34号土坑



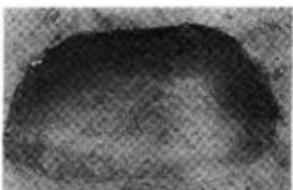
第37号土坑



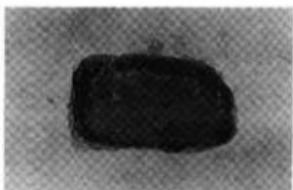
第38号土坑



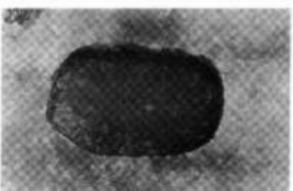
第39号土坑



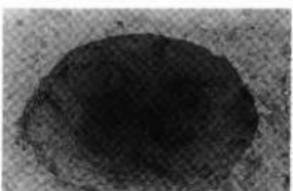
第40号土坑



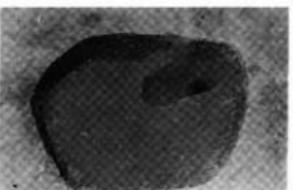
第42号土坑



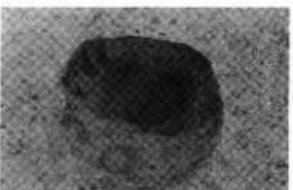
第43号土坑



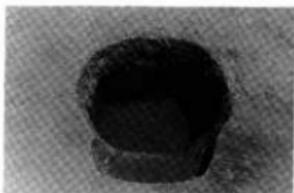
第44号土坑



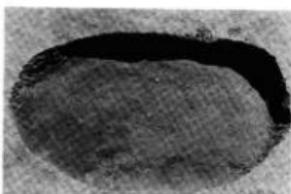
第45号土坑



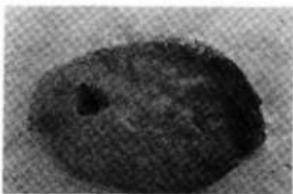
第46号土坑



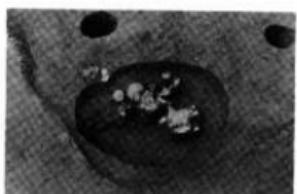
第48号土坑



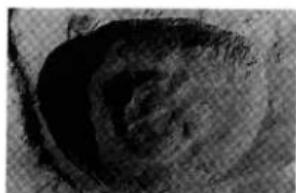
第49号土坑



第50号土坑



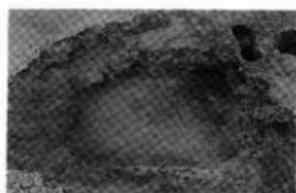
第51号土坑遗物出土状况



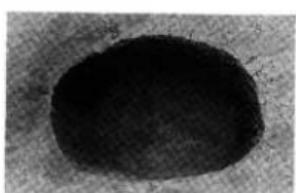
第51号土坑



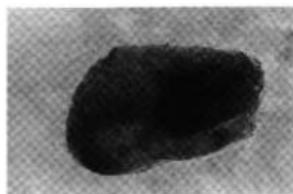
第52号土坑



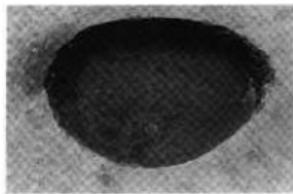
第53号土坑



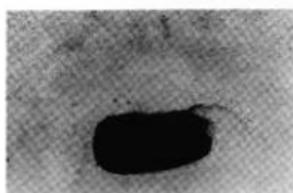
第54号土坑



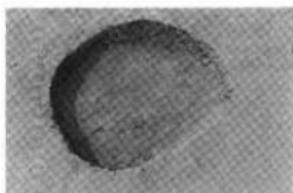
第55号土坑



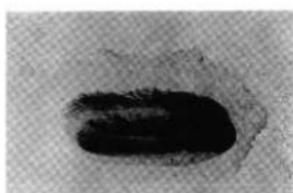
第56号土坑



第57号土坑



第58号土坑



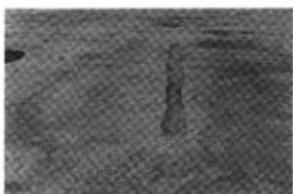
第59号土坑



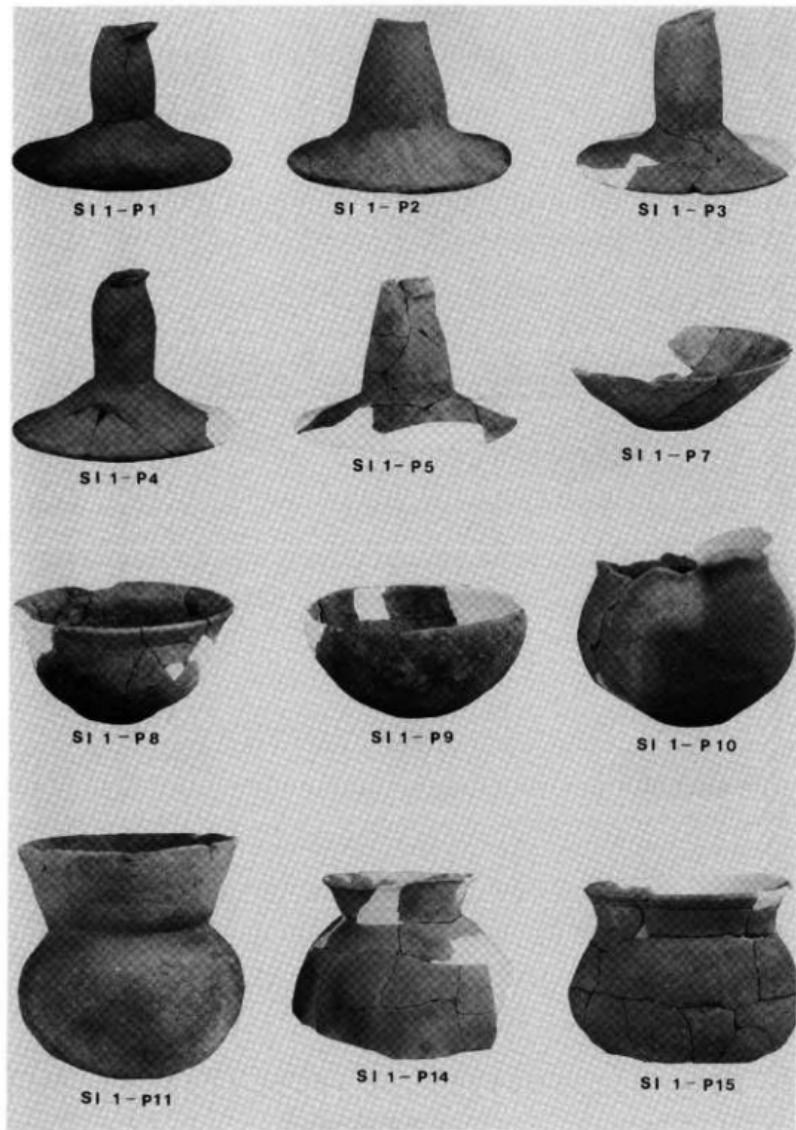
第1号沟



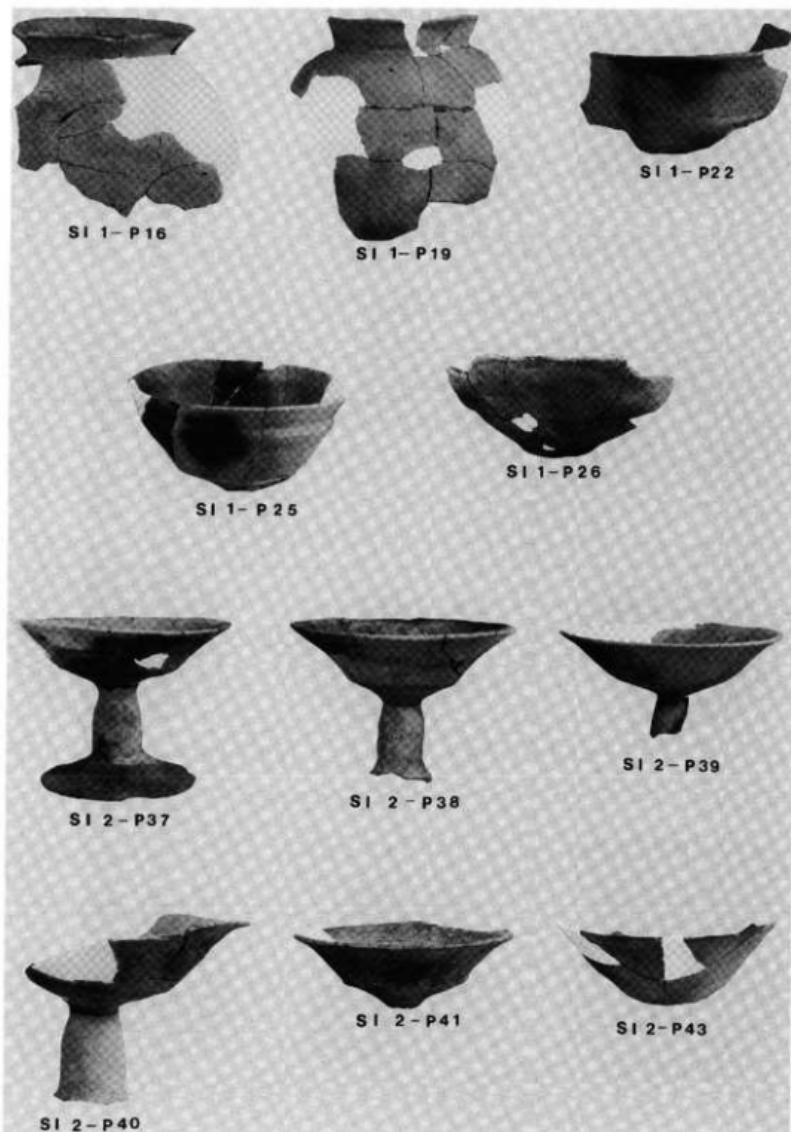
第2·3号沟



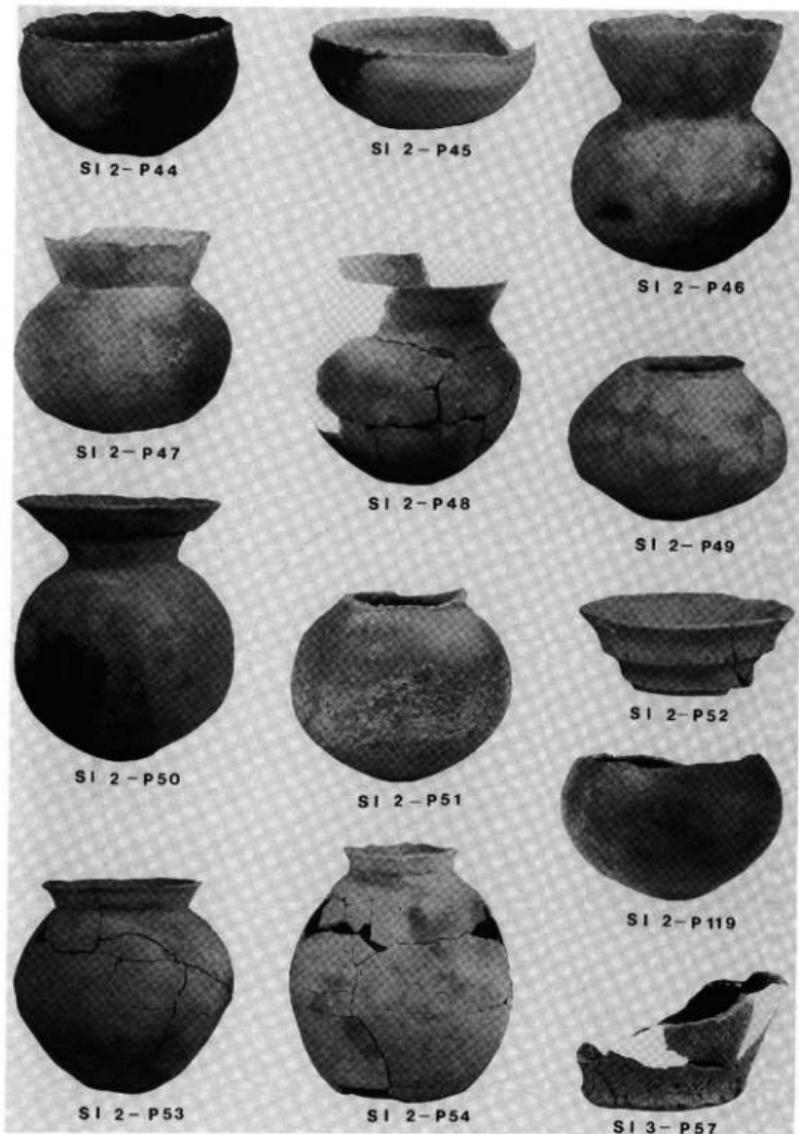
第5号沟



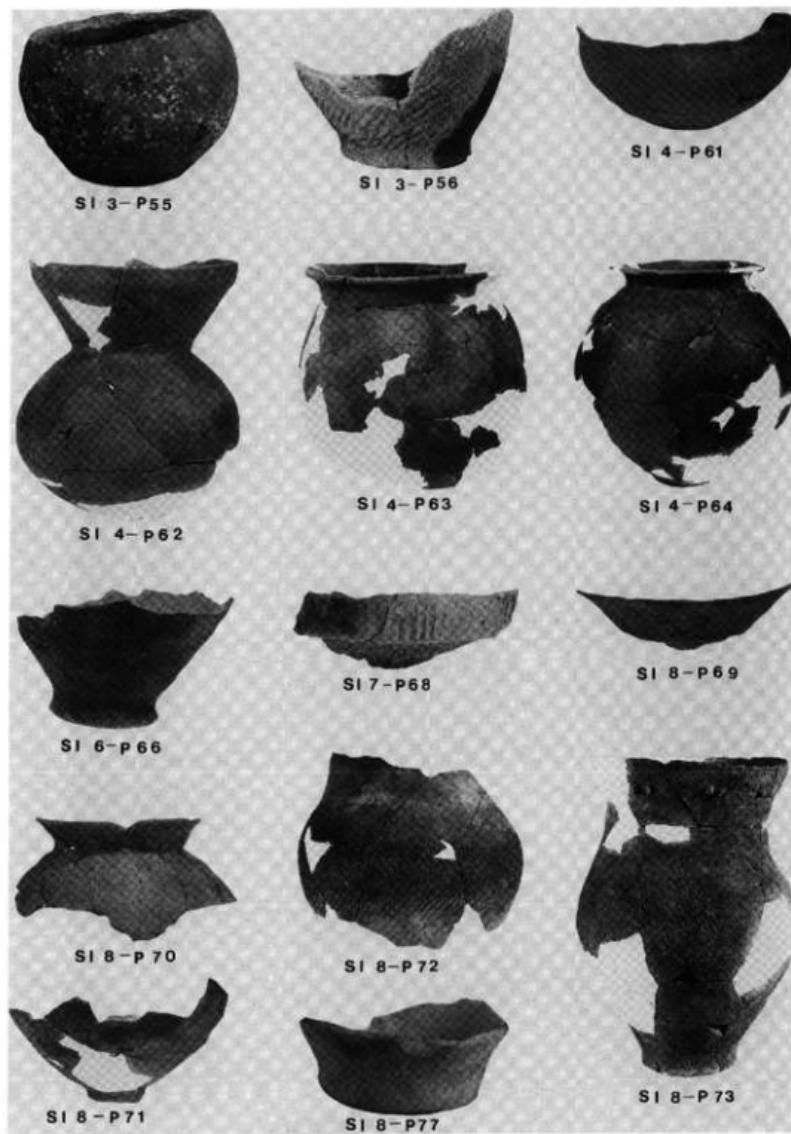
出土土器



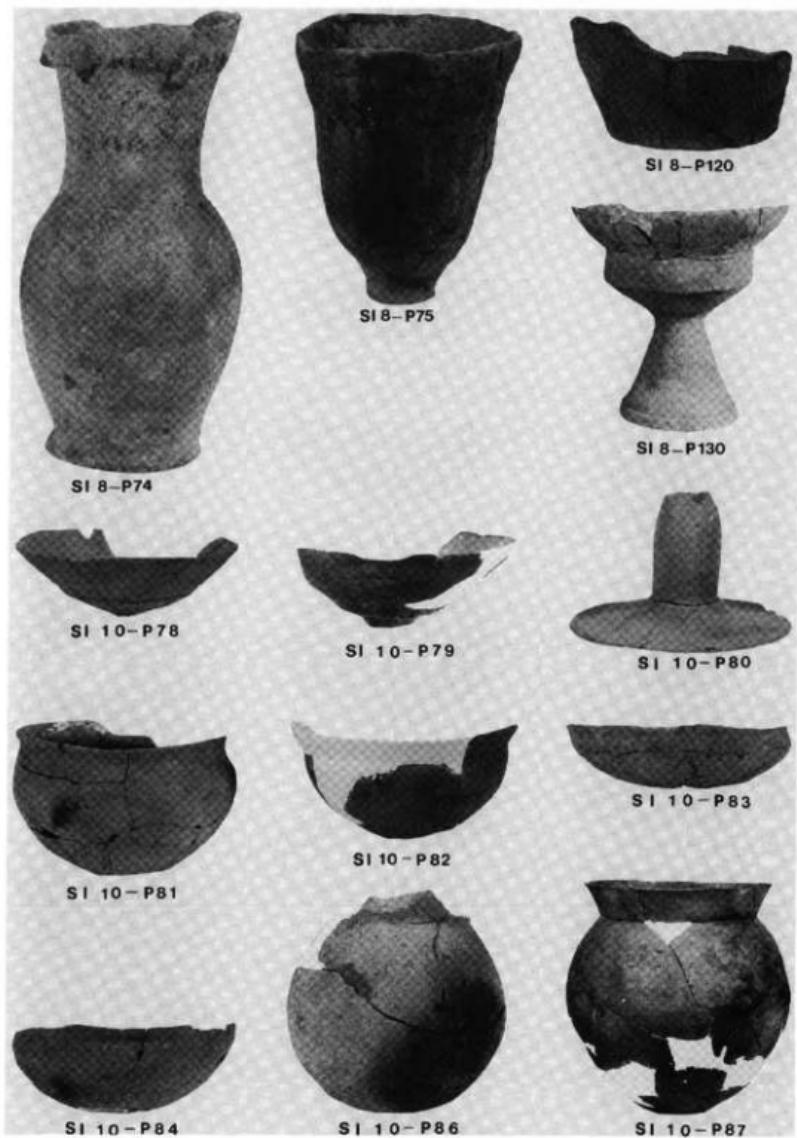
出土土器



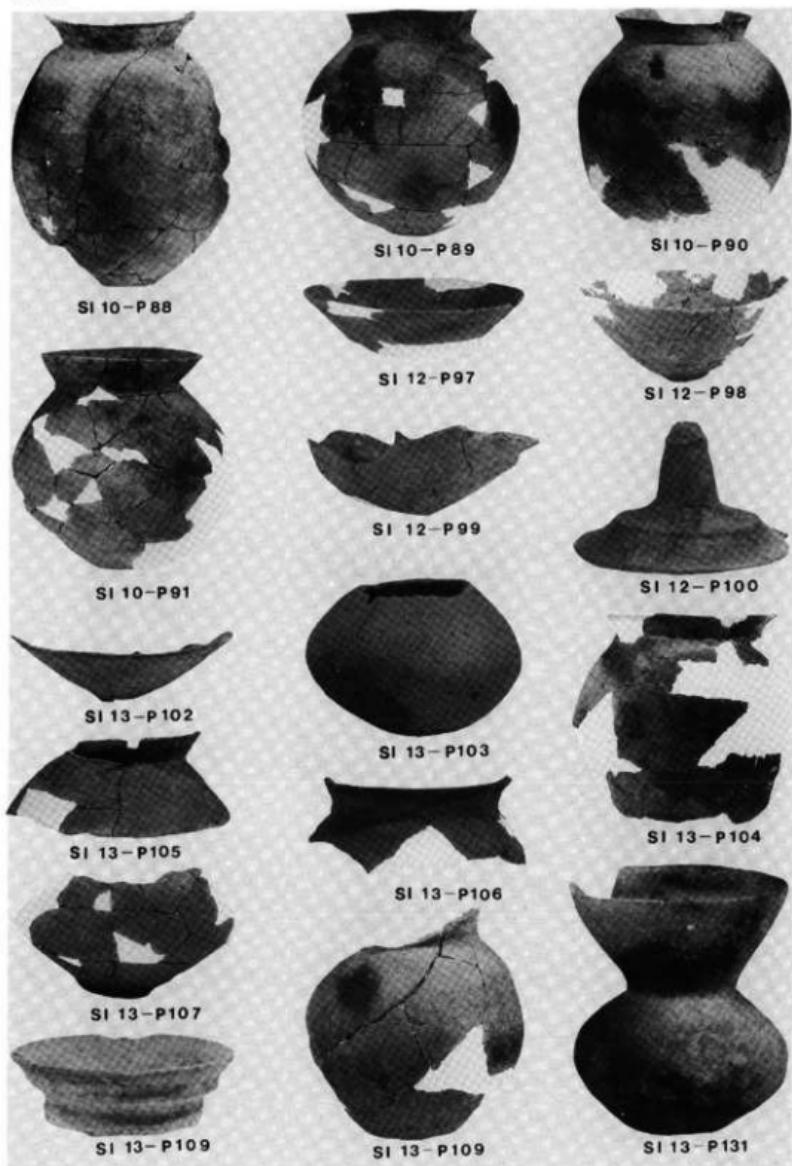
出土土器



出土土器



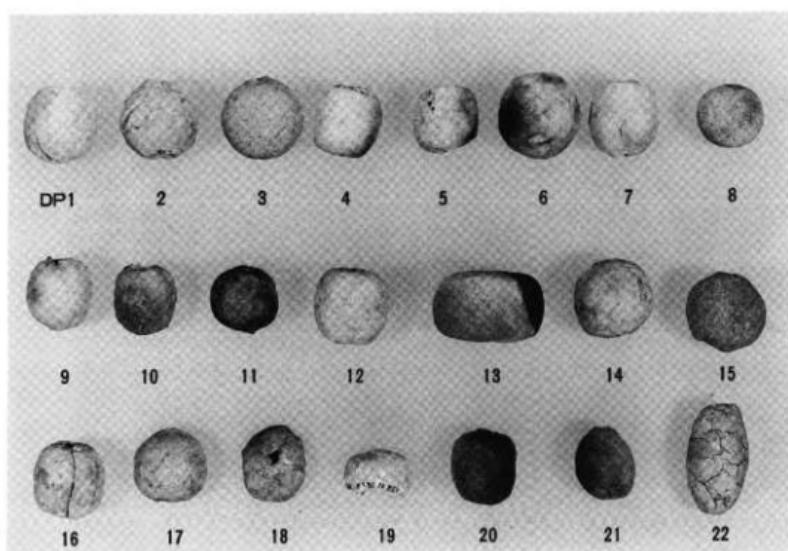
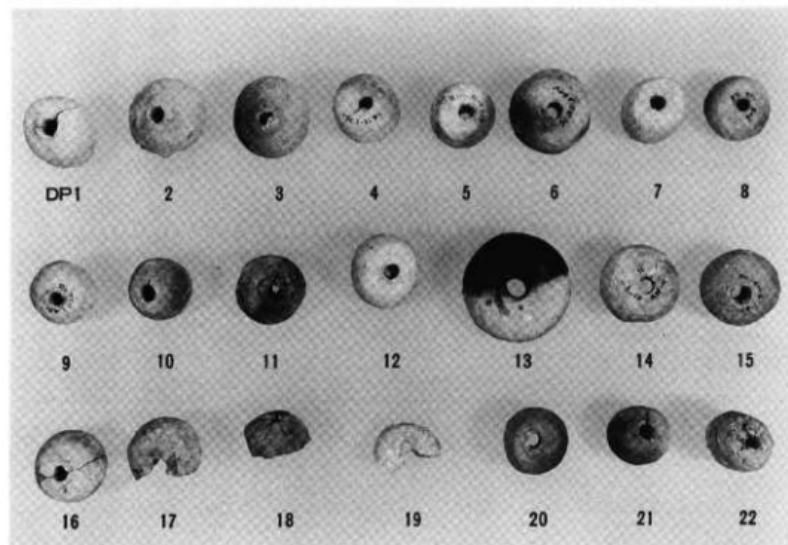
出土土器



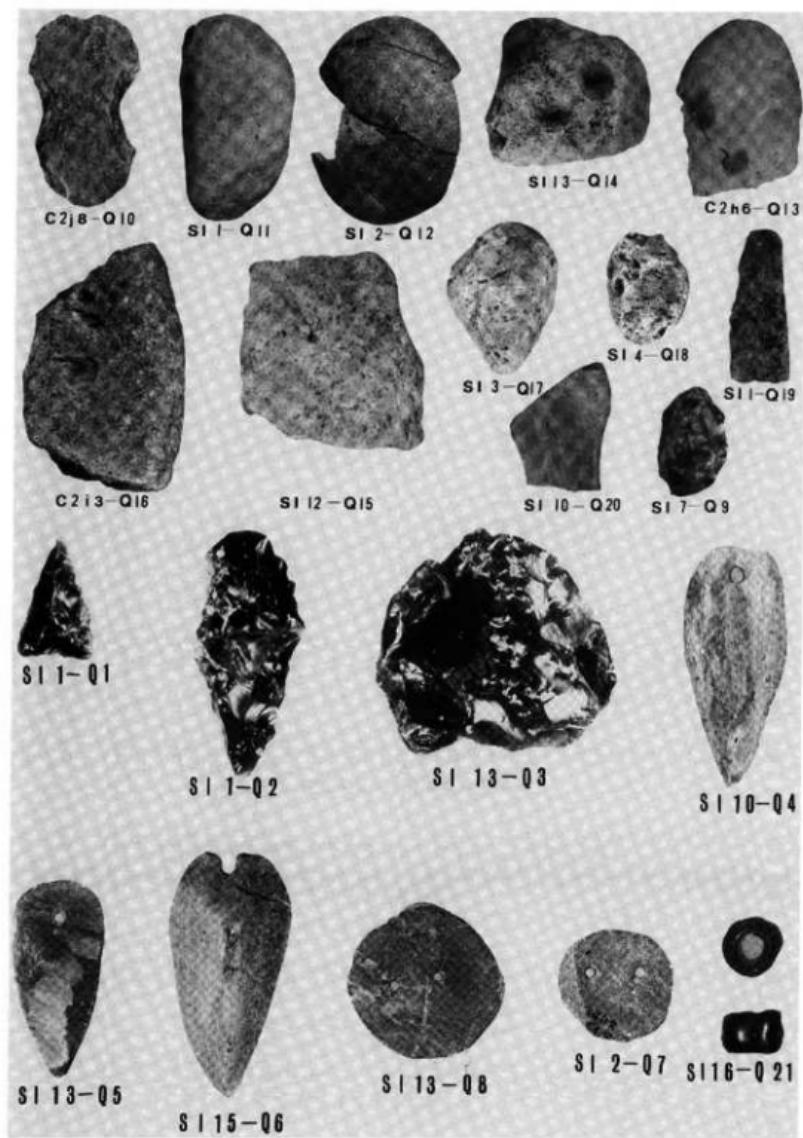
出土土器



出土土器



球状土錘（上 正面から 下 側面から）



石器・石製品等

茨城県教育財団文化財調査報告第39集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書14

尾坪台遺跡  
十三塚遺跡

昭和61年11月12日印刷

昭和61年11月20日発行

発行 財團法人 茨城県教育財團  
水戸市南町3丁目4番57号

印刷 有限会社 三栄印刷  
水戸市赤塚1丁目2010-1